

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第122集

城 山 城 跡

2005

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

カラー図版 1



足助市街地と周辺の山城群（平成12年度、西上空から）



城山城跡調査開始時（平成12年度）の全景（南上空から）



朝日に照らされた城山城跡全景（平成13年度、南東、足助グラウンドから）

カラー図版 2



城山城跡全景と美濃方面（北）へ抜ける道
（平成 13 年度、南東上空から）



城山城跡 01A・B 区と信濃方面（東）へ抜ける
道（西上空から）



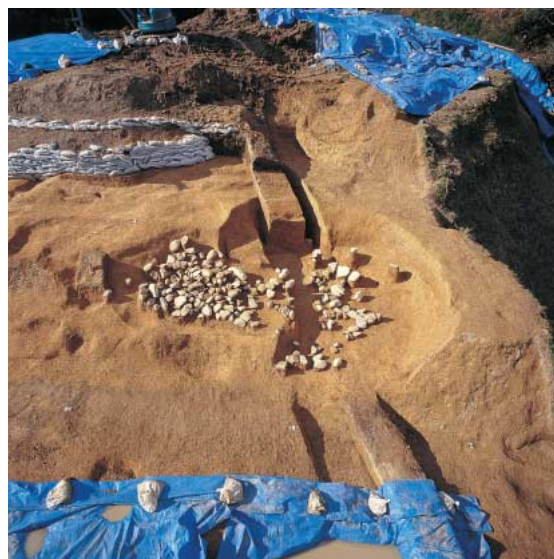
城山城跡 01A 区と飯盛山城跡（北上空から）



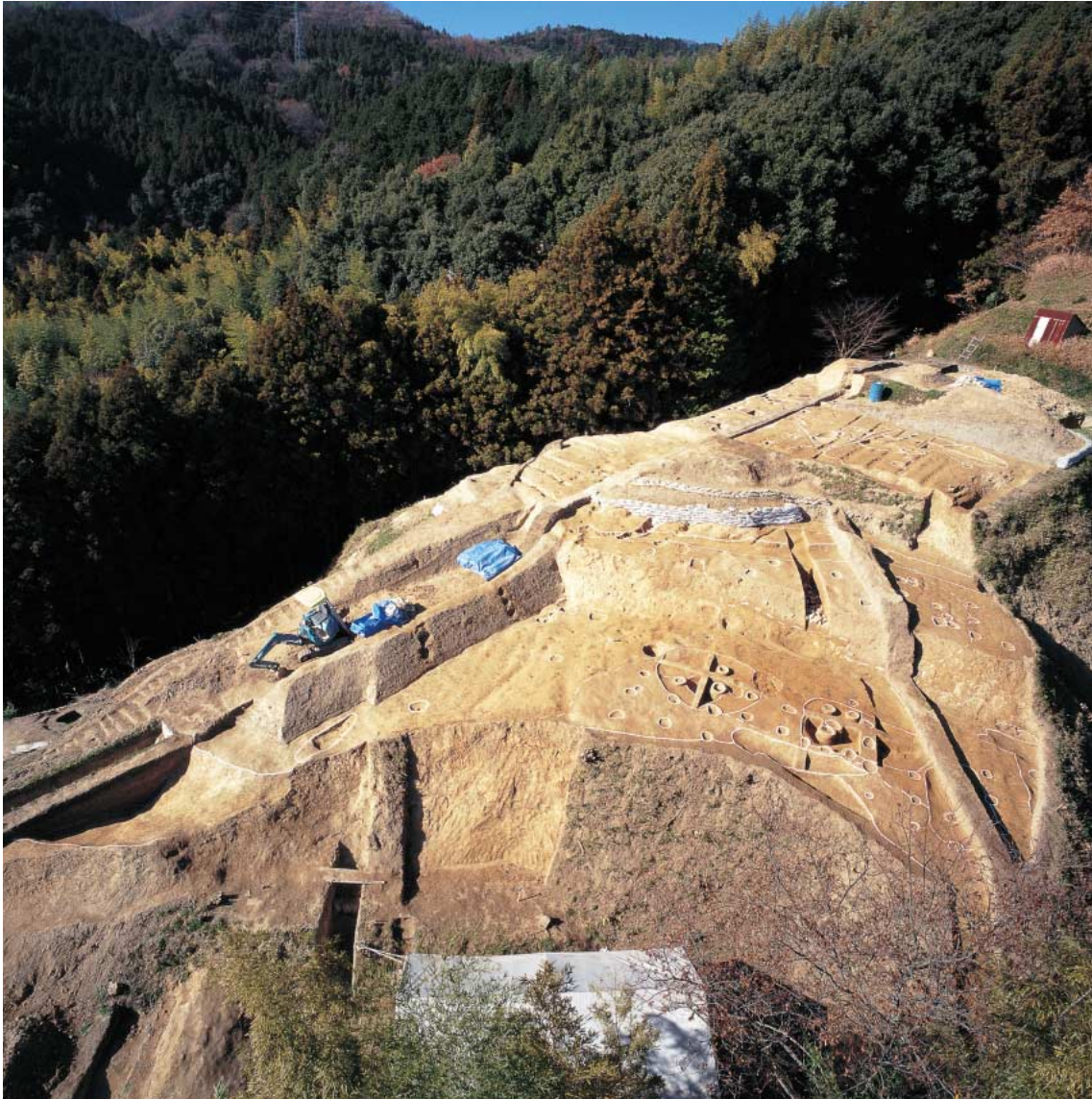
城山城跡 01B 区と大観音城跡（西上空から）



城山城跡 01B 区Ⅰ期全景（南東上空から）



城山城跡 01B 区Ⅰ期通路（SX03）を埋める
円礫群（南から）



城山城跡 01B 区 II 期の平場群（横堀・堀切調査前、南東上空から）

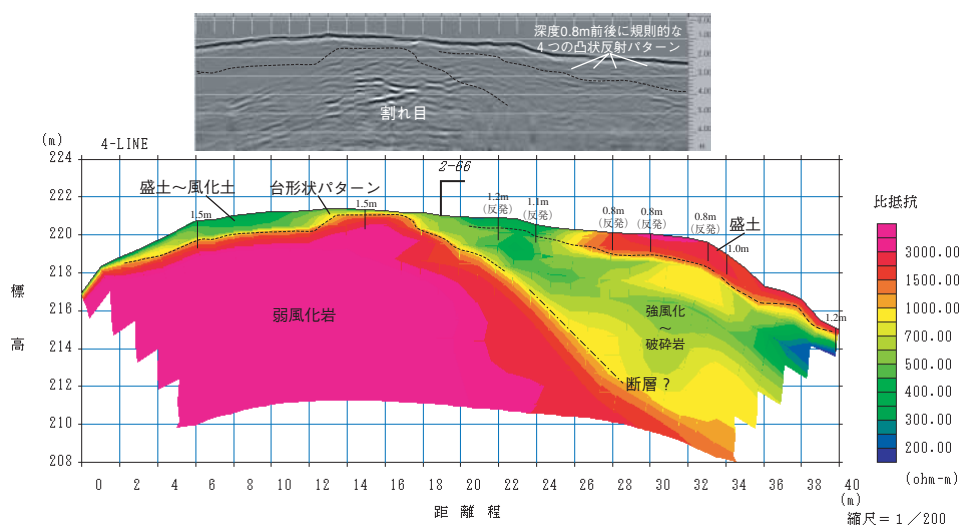
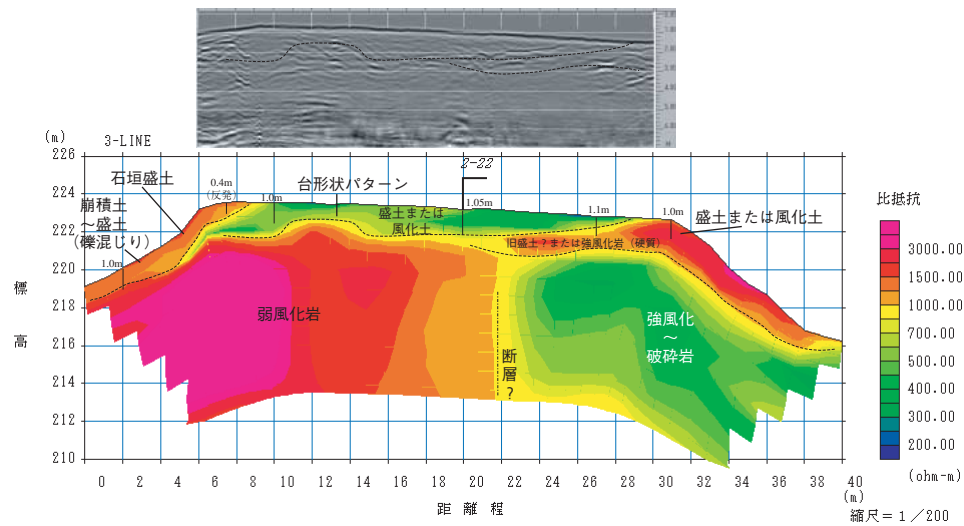
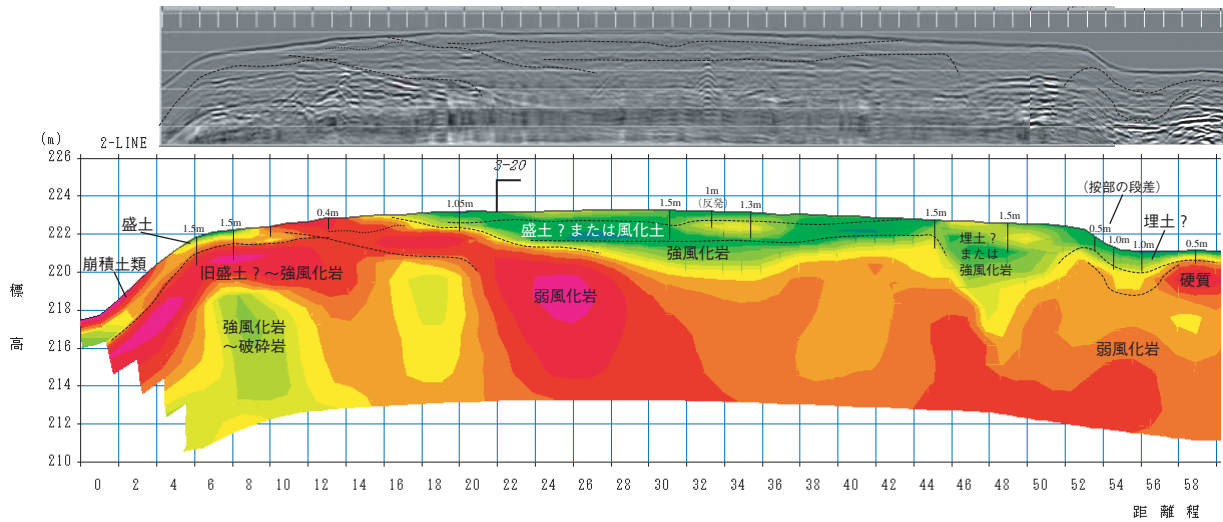


城山城跡 01B 区堀切 SD01（南東上空から）



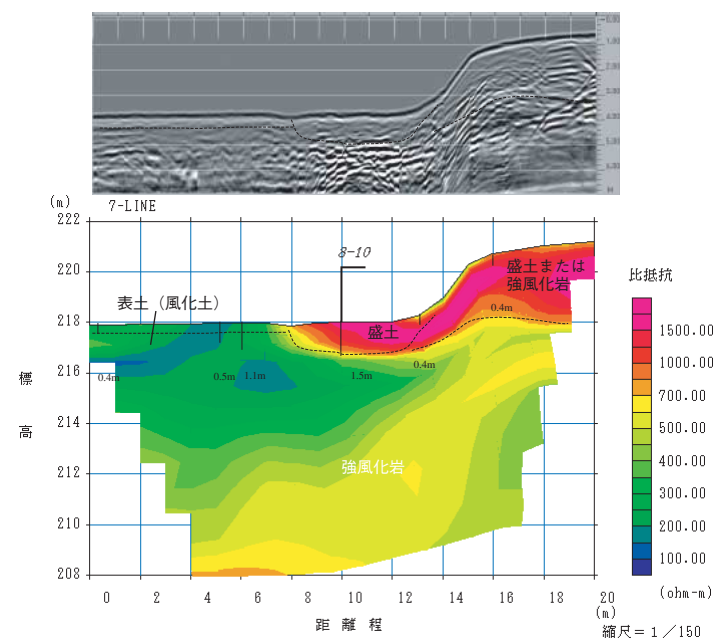
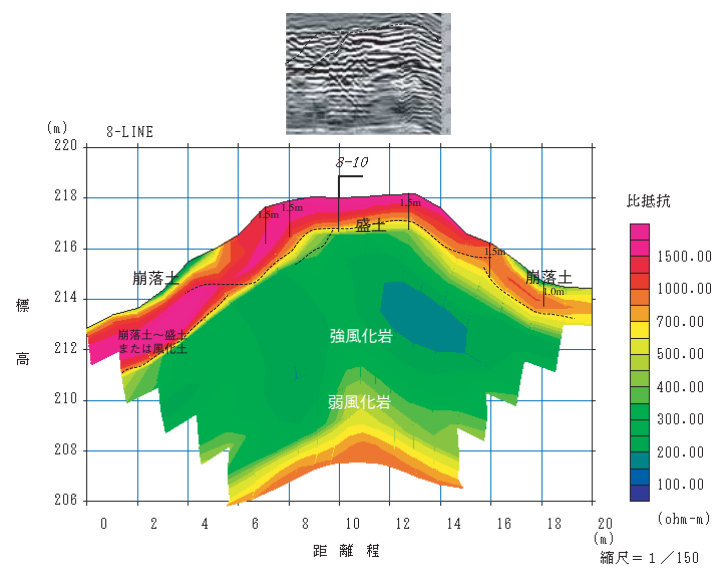
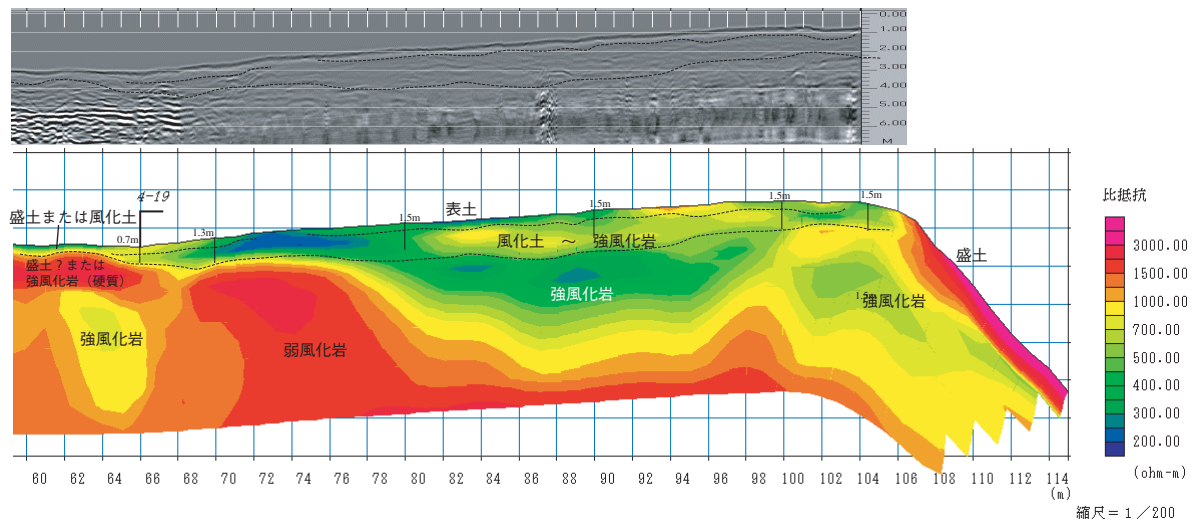
城山城跡 01B 区横堀 SD09（上空から）

カラー図版 4



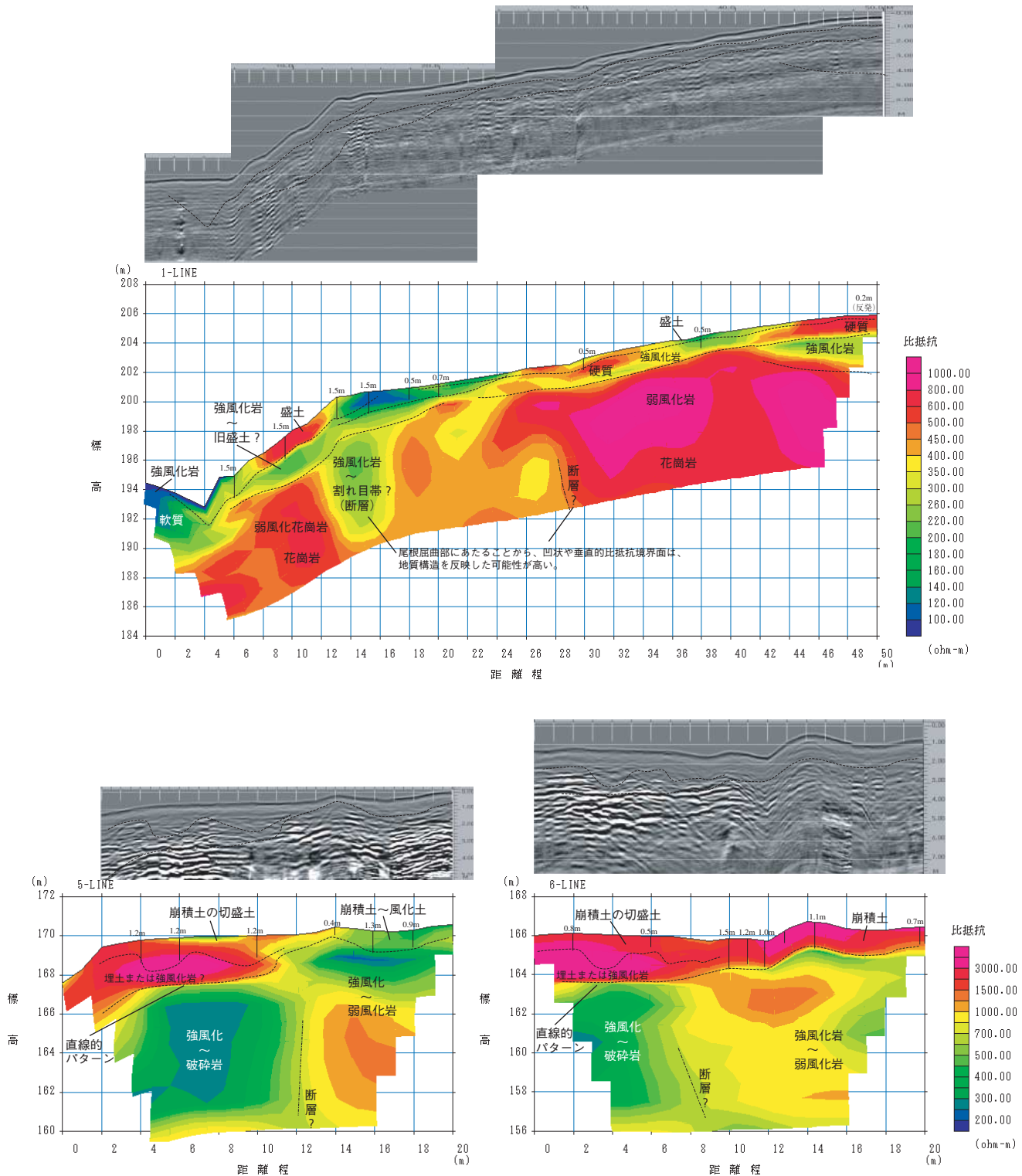
カラー図 1 城山城跡主郭部分の地中レーダーおよび電気比抵抗探査成果図(1)

カラー図版 5



カラー図 2 城山城跡主郭部分の地中レーダーおよび電気比抵抗探査成果図(2)

カラー図版6



カラー図3 城山城跡主郭部分の地中レーダーおよび電気比抵抗探査成果図(3)

序

紅葉の名所である香嵐溪は、今や足助の代名詞であり、その名はもはや全国区といっても過言ではありません。また、マンリン小路をはじめとする足助の古い町並は、かつて三州街道の拠点として、多くの人馬が行き交った名残りでもあります。

一方、それらを見下ろすようにしてたたずむ、真弓山城跡や飯盛山城跡などの中世山城の遺跡は、平和な町並とは対照的に、戦国時代の緊張状態を今に伝えてくれます。

本書はそのような中世山城跡の一つである、城山城跡の発掘調査報告書であります。今回の発掘調査では、城山城跡の縁辺部において、横堀や堀切、切岸などの防御施設を多数確認し、また、それらに囲まれた内側で掘立柱建物などの施設が存在したことが明らかになりました。また、それらの遺構からは、山城跡としては比較的多くの土器や陶器が出土した他、鉄鏃や小札のような戦争に関わる遺物も出土しました。中世山城の規模や構造を考えるうえで重要な成果が挙げたものと考えております。

発掘調査の実施から報告書の作成にいたるまで、地元住民の皆さんをはじめ、関係者ならびに関係する諸機関には多大な御理解と御協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げる次第です。

最後に、本書が地域の歴史を考える素材として活用され、また埋蔵文化財への一層の理解を深めていただく一助となることを願ってやみません。

平成 17 年 8 月

財団法人 愛知県教育サービスセンター

理事長 古池庸男

例 言

1. 本書は、愛知県豊田市足助町（旧東加茂郡足助町大字足助字城山・引陣）に所在する城山城跡（遺跡番号 67-110）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、国道 153 号足助バイパス建設に伴う事前調査として、国土交通省名四国道工事事務所より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが行った。
3. 調査期間および調査面積は、範囲確認調査が平成 11 年 7 月（300 m²）、平成 12 年度分が平成 12 年 11 月～平成 13 年 3 月（1,300 m²）、平成 13 年度分が平成 13 年 10 月～平成 14 年 3 月（3,100 m²）である。
4. 発掘調査は、範囲確認調査を佐藤公保（主査・現愛知県立惟信高等学校）、花井伸（調査研究員・現三好町立三好中学校）、鈴木正貴（調査研究員・原主任）が担当し、平成 12 年度分を花井伸（主査・同上）、成瀬友弘（調査研究員・現愛知県立豊野高等学校）、永井邦仁（調査研究員）が担当し、平成 13 年度分を竹内 睦（主査・現東海市立加木屋小学校）、宮腰健司（専門員・現主査）、武井繁樹（調査研究員・現知立市立知立南中学校）、成瀬友弘（同上）、永井邦仁（同上）が担当した。
5. 調査にあたっては、次の各機関から御指導ならびに御協力をいただいた。
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、国土交通省名四国道工事事務所、足助町教育委員会、足助町建設課
6. 出土した礫および石製品の石材鑑定は堀本真美子（調査研究員）が行った。
7. 報告書作成に関わる作業は永井が担当し、平成 15 年度に実施した。なおこれを大橋早百合、黒川陽子、祖父江久栄、水野多栄、水野留香、横川尚美が補佐した。
8. 遺構写真の撮影は宮腰と鈴木と永井が行い、遺物写真の撮影は金子知久氏（写真工房遊）に委託して行った。
9. 報告書の執筆は宮腰と鈴木と蔭山誠一（調査研究員）と永井が分担した。分担は目次に提示した。なお、第 6 章第 1 節は山形秀樹氏（株式会社パレオ・ラボ）が、同第 3 節は平塚賢二郎氏（株式会社朝日航洋）が執筆したものを永井が再構成した。
10. 本書の編集は永井が行った。
11. 本書で使用する遺構略記号は以下の通りである。
SA：柵・堀、SB：建物、SD：堀・溝、SK：土坑・柱穴、SX：その他・不明遺構
12. 本書で使用する土の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』に依拠した。
13. 今回の調査に使用した方位・座標は国土交通省が定めた平面直角座標第 7 系に基づき、海拔標高は T.P.（東京湾平均海面高度）による。ただし、表記は旧測地系（日本測地系）である。
14. 本書をまとめるにあたり、次の諸氏に御教示ならびに御協力をいただいた。
赤羽一郎、天野卓哉、石川浩治、伊藤秋男、梅本博志、奥田敏春、加藤安信、川合政仁、北村和宏、佐分清親、鈴木昭彦、高田 徹、高橋信明、竹田憲治、中川真文、中野良久、藤澤良祐、間宮克子、水野 茂、山上雅弘、渡津英一郎（財）犬山城白帝文庫（五十音順、敬称略）
15. 調査に関する実測図・写真などの資料は、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが保管している。
16. 調査で出土した遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターが保管している。

目 次

第 1 章 序説

- 第 1 節 調査に至る経緯と調査の概要・・・・・・・・・・ 1（永井）
- 第 2 節 過去の調査・研究について・・・・・・・・・・ 4（永井）
- 第 3 節 範囲確認調査の概要・・・・・・・・・・ 6（鈴木）

第 2 章 遺跡の環境

- 第 1 節 地理・地質・・・・・・・・・・ 8（永井）
- 第 2 節 歴史的環境・・・・・・・・・・ 10（永井）

第 3 章 発掘調査の成果（1） 遺構

- 第 1 節 00A 区・・・・・・・・・・ 13（永井）
- 第 2 節 00B 区・・・・・・・・・・ 19（永井）
- 第 3 節 01A 区・・・・・・・・・・ 25（宮腰）
- 第 4 節 01B 区・・・・・・・・・・ 38（永井）

第 4 章 発掘調査の成果（2） 遺物

- 第 1 節 概観・・・・・・・・・・ 61（永井）
- 第 2 節 山城の遺構から出土した陶磁器・・・・・・・・・・ 61（永井）
- 第 3 節 遺構外出土の土器・陶磁器・・・・・・・・・・ 66（永井）
- 第 4 節 野壺・・・・・・・・・・ 72（永井）
- 第 5 節 玩具・・・・・・・・・・ 74（永井）
- 第 6 節 古代の土器・・・・・・・・・・ 75（永井）
- 第 7 節 金属製品・鍛冶関連遺物・・・・・・・・・・ 76（永井・蔭山）
- 第 8 節 石製品・・・・・・・・・・ 78（永井）
- 第 9 節 ガラス製品・・・・・・・・・・ 80（永井）

第 5 章 発掘調査成果のまとめ

- 第 1 節 山城遺構の変遷・・・・・・・・・・ 81（永井）
- 第 2 節 遺物の組成・・・・・・・・・・ 84（永井）

第 6 章 炭素年代測定と地中電気探査

- 第 1 節 炭素年代測定の成果・・・・・・・・・・ 85（山形秀樹氏）
- 第 2 節 炭化種実の計測・・・・・・・・・・ 87（永井）
- 第 3 節 地中レーダ探査と電気探査・・・・・・・・・・ 88（平塚賢二郎氏）

第 7 章 考察

- 第 1 節 城山城の構造を考える・・・・・・・・・・ 94（永井）
- 第 2 節 城山城と足助の戦国時代・・・・・・・・・・ 98（永井）
- 第 3 節 古城跡の景観・・・・・・・・・・ 102（永井）

参考・引用文献・・・・・・・・・・ 104

写真図版・・・・・・・・・・ 105

抄録・・・・・・・・・・ 145

挿図目次

- 図 1 中世城郭各部の名称
- 図 2 豊田市足助町の位置図
- 図 3 調査前の城山城跡とその周辺図
- 図 4 鱸鑒氏作成の城山城跡縄張図
- 図 5 佐分清親氏作成の城山城跡縄張図
- 図 6 範囲確認調査のトレンチ配置と設定された調査区配置
- 図 7 愛知県三河地方の地質分類図
- 図 8 豊田市足助町市街地字界図
- 図 9 豊田市足助町市街地とその周辺の遺跡分布図
- 図 10 城山城跡近隣で出土した中世土器実測図
- 図 11 00A 区調査前の平場状況図
- 図 12 00A 区土層断面ライン設定図
- 図 13 00A 区調査区全体図
- 図 14 00A 区中央ベルト（A ライン）土層断面図
- 図 15 00A 区南西斜面（B ライン）土層断面図
- 図 16 00A 区 SD01（C ライン）土層断面図
- 図 17 00A 区 SD01（C ライン）甕埋設状況図
- 図 18 00A 区 SD01（D ライン）土層断面図
- 図 19 00A 区 SD01（E ライン）土層断面図
- 図 20 00A 区 SD01（F ライン）土層断面図
- 図 21 00A 区 SD01（G ライン）土層断面図
- 図 22 00B 区調査前の平場状況図
- 図 23 00B 区土層断面ライン設定図
- 図 24 00B 区調査区全体図
- 図 25 00B 区中央ベルト（B ライン）土層断面図
- 図 26 00B 区東西ベルト（C ライン）土層断面図
- 図 27 00B 区 SD01 横堀土層断面図
- 図 28 00B 区横堀想定図
- 図 29 00B 区掘立柱建物・柵平面図
- 図 30 00B 区 SB01 柱穴土層断面図
- 図 31 00B 区 SB02 柱穴土層断面図
- 図 32 01A 区調査前の平場状況図
- 図 33 01A 区土層断面ライン設定図
- 図 34 01A 区調査区全体図
- 図 35 01A 区 SX01 平面図
- 図 36 01A 区 A ライン土層断面図
- 図 37 01A 区 B ライン（平場 2 ～ 3）土層断面図
- 図 38 01A 区 C ライン（平場 3 ～ 4）土層断面図
- 図 39 01A 区 E ライン（平場 2）土層断面図
- 図 40 01A 区 F ライン（平場 3）土層断面図
- 図 41 01A 区 D ライン（平場 1）土層断面図
- 図 42 01A 区 SA02 平面図
- 図 43 01A 区 SA01 平面図
- 図 44 01A 区 SX02・03 平面図
- 図 45 01A 区 SX02・03 土層断面図
- 図 46 01A 区 SD07 土層断面図
- 図 47 01A 区 SA05・SD07 平面図
- 図 48 01A 区 SA06 平面図
- 図 49 01A 区 SD10（H ライン）土層断面図
- 図 50 01A 区 SD10・SX07（I ライン）土層断面図
- 図 51 01B 区調査前の平場状況図
- 図 52 01B 区 I 期土層断面ライン設定図
- 図 53 01B 区 II 期全体図
- 図 54 01B 区 SX03 土層横断面（A ライン）図
- 図 55 01B 区 SX03 土層横断面（B ライン）図
- 図 56 01B 区 SX03 土層横断面（C ライン）図
- 図 57 01B 区 SX03 土層横断面（D ライン）図
- 図 58 01B 区 SX03 土層横断面（D ライン）図
- 図 59 01B 区 SX03 土層横断面（D ライン）図
- 図 60 01B 区 SX03 埋め立て土層中礫出土状況図
- 図 61 01B 区 II 期土層断面ライン設定図
- 図 62 01B 区 II 期全体図
- 図 63 01B 区 SX01 土層断面図
- 図 64 01B 区 SD01 土層断面（A ライン）図
- 図 65 01B 区 SD08 土層横断面（F ライン）図
- 図 66 01B 区 B ライン（上）・H ライン（下）土層断面図
- 図 67 01B 区 D ライン土層断面図
- 図 68 01B 区 N ライン土層断面図
- 図 69 01B 区 SD08 土層断面（E ライン）図
- 図 70 01B 区 SD09 土層断面図
- 図 71 01B 区 SD09 土層断面（J ライン）図
- 図 72 01B 区 SD09 と SD13 の交差部と遺物出土地点図
- 図 73 01B 区 SD11・12・13 土層断面図
- 図 74 01B 区 SX02・08 平面図
- 図 75 01B 区 SX02・08 土層断面図
- 図 76 01B 区 SX05・06・10 平面図および土層断面図
- 図 77 01B 区 SB01・02 平面図
- 図 78 01B 区 SK150・SK45 土層断面図
- 図 79 01B 区 SB03 平面図
- 図 80 01B 区 SB04 ～ 08 平面図
- 図 81 01B 区 SK01 土層横断面図
- 図 82 01B 区 SK156 平面および土層断面図・SK157 平面図
- 図 83 山城遺構（00A・00B・01A 区）出土土器・陶磁器実測図
- 図 84 山城遺構（01A 区）出土土器・陶磁器実測図
- 図 85 山城遺構（01A・01B 区）出土土器・陶磁器実測図
- 図 86 山城遺構（01B 区）出土土器・陶磁器実測図
- 図 87 00A 区 SD01 出土土器・陶磁器実測図
- 図 88 00A 区表土出土土器・陶磁器実測図
- 図 89 00B 区表土出土土器・陶磁器実測図
- 図 90 01A 区表土出土土器・陶磁器実測図（その 1）
- 図 91 01A 区表土出土土器・陶磁器実測図（その 2）
- 図 92 01B 区 SD01・表土出土土器・陶磁器実測図
- 図 93 城山城跡出土の野壺（陶製大甕）実測図（その 1）
- 図 94 城山城跡出土の野壺（陶製大甕）実測図（その 2）

図 95	城山城跡出土の焼物玩具・加工円盤実測図	図 106	地下探査に基づく城山城主郭部の想定図
図 96	城山城跡出土の古代の土器実測図	図 107	発掘調査などの成果に基づく城山城の復元図
図 97	城山城跡出土金属・鍛冶関連遺物実測図	図 108	城山城外郭防御ライン想定図
図 98	城山城跡出土石臼・礎石実測図	図 109	想定される戦国時代足助の町と山城群の配置図
図 99	城山城跡出土砥石・硯・碁石実測図	図 110	旧賀茂郡東部地域を中心とする城郭分布図
図 100	城山城跡出土ガラス製品実測図	図 111	真弓山城縄張図
図 101	00B 区掘立柱建物概略図	図 112	大観音城縄張図
図 102	01A 区主要遺構配置図	図 113	大観音城および周辺の地形測量図
図 103	01B 区主要遺構変遷図	図 114	久木殿屋敷縄張図
図 104	探査測線配置図	図 115	参州足助絵図
図 105	地中レーダ画像のグレー区分表示		

表目次

表 1	瀬戸美濃産陶器の編年と暦年代の対応関係	表 8	01A 区 SX03 出土炭化種実計測一覧
表 2	足助市街地周辺の遺跡一覧	表 9	01B 区 SD09 出土炭化種実計測一覧
表 3	城山城跡出土古銭一覧	表 10	地中レーダ探査実施数量表
表 4	城山城跡出土鉄滓観察一覧	表 11	電気探査実施数量表
表 5	出土遺物の総破片点数	表 12	地中レーダ探査機器一覧
表 6	放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果	表 13	電気探査機器一覧
表 7	放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果	表 14	足助の戦国時代年表

写真図版目次

写真図版 1	00A 区遺構 (1)	写真図版 24	01B 区遺構 (1)
写真図版 2	00A 区遺構 (2)	写真図版 22	01B 区遺構 (2)
写真図版 3	00A 区遺構 (3)	写真図版 23	01B 区遺構 (3)
写真図版 4	00A 区遺構 (4)	写真図版 24	01B 区遺構 (4)
写真図版 5	00A 区遺構 (5)	写真図版 25	01B 区遺構 (5)
写真図版 6	00A 区遺構 (6)	写真図版 26	01B 区遺構 (6)
写真図版 7	00A 区遺構 (7)	写真図版 27	01B 区遺構 (7)
写真図版 8	00A 区遺構 (8)	写真図版 28	01B 区遺構 (8)
写真図版 9	00A 区遺構 (9)	写真図版 29	01B 区遺構 (9)
写真図版 10	00B 区遺構 (1)	写真図版 30	01B 区遺構 (10)
写真図版 11	00B 区遺構 (2)	写真図版 31	01B 区遺構 (11)
写真図版 12	00B 区遺構 (3)	写真図版 32	01B 区遺構 (12)
写真図版 13	00B 区遺構 (4)	写真図版 33	01B 区遺構 (13)
写真図版 14	00B 区遺構 (5)	写真図版 34	01B 区遺構 (14)
写真図版 15	01A 区遺構 (1)	写真図版 35	01B 区遺構 (15)
写真図版 16	01A 区遺構 (2)	写真図版 36	遺物 (1)
写真図版 17	01A 区遺構 (3)	写真図版 37	遺物 (2)
写真図版 18	01A 区遺構 (4)	写真図版 38	遺物 (3)
写真図版 19	01A 区遺構 (5)	写真図版 39	遺物 (4)
写真図版 20	01A 区遺構 (6)		

表1 瀬戸美濃産陶器編年と暦年代の対応

西曆	時 代							
1200	中 世	鎌 倉		古瀬戸 前期	I	a		
					II	b		
						a		
						b		
III								
IV								
1300		南北朝	-----	古瀬戸 中期	I			
					II			
					III			
					IV			
I								
1400					室 町	-----	古瀬戸 後期	II
		III						
		IV	前半					
			後半					
1500		大窯1		前半				
				後半				
				大窯2			前半	
	後半							
1600	大窯3		前半					
			後半					
			大窯4	前半				
				後半				
1700	近 世	江 戸		連房 登窯	第1小期			
					第2小期			
					第3小期			
					第4小期			
					第5小期			
					第6小期			
					第7小期			
					第8小期			
					第9小期			
					1800	第10小期		
第11小期								
1900	近 代	明 治 大 正 昭 和	-----					

(付記)

山城遺構にかかわる名称は右図に示したように、城郭研究の用語をあてる。ただし一般的な平地の遺跡で確認される掘立柱建物や土坑などの遺構にかかわる名称は通常
の考古学的記号・用語をあてる。

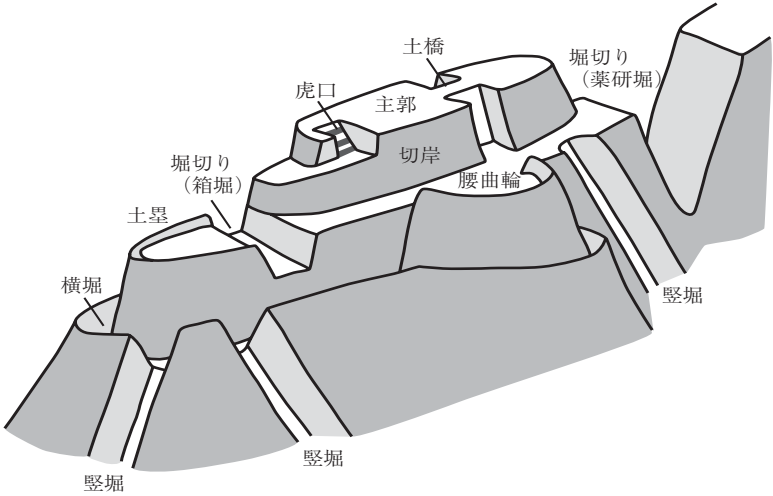


図1 中世城郭各部の名称

第1章 序説

第1節 調査に至る経緯と調査の概要

(1) 調査に至る経緯

愛知県名古屋市から豊田市（旧東加茂郡、北設楽郡を含む）を経由し長野県へとぬける国道153号は、豊田市足助町の市街地を通る。その市街地を迂回するバイパス道路を、足助川の北岸に建設することとなったが、工事予定地内に既に登録されていた城山城跡（遺跡番号 67—110）があり、その一部について発掘調査による記録保存をおこなうこととなった。しかし、城山城跡の範囲については、地表面での調査による縄張図にもとづいた情報（後述）しかなく、あきらかではなかった。そこで確認調査をおこなう必要が生じた。



図2 豊田市足助町の位置図

このため、平成11年度に国土交通省から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが、確認調査を実施した。調査は平成11年7月に実施し、調査面積は300㎡である。その内容については第3節を参照されたいが、結果的に、城山城跡の主郭部分とされる尾根から南～南西方向に分岐して伸びる4つの尾根について、城域の可能性が高いと判断され、本調査の必要が生じた。これを受けて平成12・13年度に本調査を実施した。調査期間および調査面積は、平成12年度分が、平成12年11月～平成13年3月で、調査面積が00 A区 900㎡、00 B区 400㎡である。そして平成13年度分が、平成13年10月～平成14年3月で調査面積が01 A区 1200㎡、01 B区 1900㎡である。なお、本書作成にかかる整理作業は平成15年4月～7月まで実施した。



図3 調査前の城山城跡とその周辺図

（２）調査の方法とその経過

ここでは本調査における発掘調査の方法について記述する。

まず、全調査区において発掘調査開始前に樹木を伐採した。そして00A区、00B区、01A区では、全て人力による表土掘削をおこない、01B区では小型重機をヘリコプターで吊り下げて搬入し、表土掘削、排土の移動作業をおこなった。また、排土の処理は、00A区についてはシューターによって調査区下方に待機するトラックに積み込み、指定された場所へ移動した。他の調査区では、調査区外への移動が不可能であったため、調査区の縁辺部あるいは一部調査完了した場所へ移動させるなどして処置した。調査区が細かく区分されるのはそのためである。調査終了後は国土交通省の指示に従って、崩落防止の処置をおこなった。

発掘調査は、地表面で認められる地形の変化が、地山（後述：第2章）もしくは地山削り出しによって形成された山城の遺構によるものかどうかを調べるために、調査区内に任意に設定したトレンチで地山面まで掘削することから開始した。そして後世の盛土と判断される箇所や、逆に削平によって遺構が失われていると判断される箇所を割り出し、排土置き場もしくは作業用スペースとして確保した。それ以外の箇所については、面的に広げて可能な限り地山の検出をすすめた。堀や切岸などの山城関連の大規模な遺構はそのようにして掘削し、適宜土層観察用のベルトを設定した。一方、溝やピットなどの小規模な遺構は、地山面での検出・確認をおこなった。遺構の測量は、ラジコンヘリによる空中測量を実施した。



重機搬出（01B区）



シューター（00A区）



表土除去（00A区）

写真1 発掘作業風景

城山城跡の発掘調査および整理作業に携わった皆さん

（発掘調査補助員）藤田恵理子

（発掘作業員）甲斐茂夫 尾崎 操 村瀬 功 只野国雄 仲野和毅 加藤徳裕 安藤佐久子 山本薫久 宇塚千春 杉浦綾子 太田庸一 鈴木美智子 深見照美 嵯峨 弘 嵯峨香代子 梶原好美 渡辺昭子 河合八重子 斉藤初恵 原田郁代 衛藤博輝 寺田康生 池野エツ子 井藤孝之 児嶋金光 関塚誠子 石川一三 深尾和秀 生田とも子 小林鉦一 中山行天 平山八千代 永井晃美 岩月好則 坂井 主 成田喜八郎 日比野弘子 福井米子 松井美佐子 高山ヒサ 梅田哲子 加藤六助 石川鎮夫 森岡博子 島田 篤 水野大二郎 藤井鎮信 山田英和 高橋 豊 加藤博雄 柴田智行 藤井 功 安藤久好 大竹峰生 東 学 塚本 稔 加藤マサ子 福島和人 吉田珠子 野場義和 深津祐一

（土木作業員）高山昌大 高山とよ子 増田邦夫 深見トキ子 安藤 享 安藤八千代 松井新一 鈴木 任 鈴木允子 三浦文子 吉川健二 大沢 智 鈴木元美 鈴木成二 大嶽寿男 山本敏郎 鈴木 皋 外狩 茂 手島安雄

（調査研究補助員）水野多栄

（整理補助員）祖父江久江 水野留香 黒川陽子 横川尚見

調査日誌（抄録）

平成 12 年度

20001106 器材搬入。トイレ・物置き設置。登山道を確保。調査区 Aa・Ba 区を設定、トレンチ掘削、地山を確認。
20001107 表土掘削開始。Aa 区：小平場の名称を付す。
20001108 土層の概要を把握。
20001110 Ba 区：横堀(SD01)を確認。
20001113 Aa 区：黒色土（表土）掘削終了。
20001114 Aa 区：灰褐色土層にトレンチを設定。地山の傾斜を確認する。
20001116 Aa 区：地山の傾斜に所々犬走状の細い平場がみえる。
20001127 Aa 区：堀切(SD01)の底が試掘で想定したものよりはるかに深いことが判明。上層は明治時代までの遺物が出土。
20001128 Aa 区：SD01 土層断面観察（C ライン）。
20001129 Aa 区：SD01 より上方の地山検出。平場 A—7 は盛り土だけでつくられていることが判明。
20001201 Ba 区：横堀の掘削。最下層の上面から 15～20cm の円礫が出土。
20001205 Ba 区：横堀東端を確認。谷方向へ落とす構造。
20001206 Aa 区：A—4 平場で浅い窪み状の土坑を確認。尾根先端部で幅 15cm の深い溝？を検出。
20001208 航空測量。
20001211 Ba 区：セクション図作成。
20001212 Aa 区：尾根先端の溝は地割れと判明。Ba 区終了部分埋め戻し。
20001215 Bb 区：表土除去開始。
20001220 Ab 区：表土除去開始。土砂搬出用シューターを設置することに。
20001225 シューター設置工事。
20010109 Aa 区：排土搬出開始。
20010111 Bb 区：SD01 の続き確認。
20010116 Aa 区：排土搬出完了（2t ダンプ 21 台分）。
20010129 Bb 区：SD01 西端部で円礫の集中出土がある。
20010130 Bb 区：SD01 がおよそ 3 層に区分され、円礫は上層の下部から出土していることを確認。下層は粘質強い。
20010131 Bb 区：航空測量。全景写真撮影。
20010207 Bc 区：表土除去開始。
20010213 Ab 区：SD01 下層掘削。堀底の凹みを確認。
20010215 Ab 区：SD01 底より瀬戸美濃産播鉢が出土。
20010305 Bc 区：平場上で多数のピット・土坑を確認。掘立柱建物を想定。
20010308 Ab 区：SD01 北端を掘削。堅堀となって落ちていくもよう。
20010314 A・Bc 区：航空測量。全景写真撮影。
20010321 A 区：SD01 南端をトレンチ調査。堅堀で落ちていくもよう。
20010322 A 区：全景写真撮影。シューター解体。
20010323 器材撤収。切岸面シート保護。作業員に遺跡解説。

平成 13 年度

20011009 B 区：作業開始。器材搬入、テント設営。トレンチ設定。
20011012 B 区：堀状遺構 SX01 を確認。
20011015 B 区：調査区東・南端で横堀(SD08・09)を確認。排土置き場として使えないことが判明。
20011022 B 区：平場 2 表土から鉄鏝が出土。
20011024 B 区：ヘリコプターによる小型重機の搬入。平場 2・3 で表土除去開始。
20011029 B 区：平場 3 西半部は最近の削平によると判断、土置き場とする。
20011109 B 区：平場 4 の中・西部も遺構し。最近の削平による

と判断、写真記録後、埋め戻す。

20011115 A 区：トレンチ設定。B 区：平場 4 下方表土除去。
20011116 A 区：トレンチを平場 3 まで延長。
20011127 A 区：トレンチ延長部南端で溝状の落ち込みを確認。
20011129 A 区：平場 4 にさ r にトレンチを設定、横堀(SD10)を確認、戦国時代の遺物が出土したため、城域として調査の必要ありと判断。各方面に連絡。協議の結果、調査区の範囲内として調査。B 区：堅穴状遺構(SX02)を確認。SK01 は深く、溜め井か。
20011207 B 区：平場 3 SX03 をトレンチ掘削、密集する礫群を検出。
20011211 A 区：平場 1 の表土除去開始。
20011212 B 区：航空測量。全景写真撮影。
20011218 B 区：平場 4 西半部を表土除去。SX01 の延長以外顕著な遺構なく、最近の削平と判断し写真記録ののち SX01 以外は埋め戻し。
20011219 A 区：平場 1 南東下方の表土から遺物が多く出土する。
20020107 A 区：昨年度同様のシューターを設置して、排土を下方に送ることにした。
20020110 A 区：平場南西下方にて人頭大の礫が出土、石臼も含まれる。B 区：SX03 の礫より上の堆積状況確認。赤褐色の粘土による整地を確認。
20020125 B 区：SX03 が平場 3 だけでなく上方や下方に広がり、大規模な整地によって平場が形成されたことが想定された。調査工程の見直し。
20020131 A 区：平場 1 航空測量。全景写真撮影。
20020204 A 区：平場 2 遺構検出。ベルト際に階段状遺構あり。
20020205 A 区：遺物多く出る黒色土遺構(SX02)を確認。
20020212 A 区：SD07 に沿ってピット列確認。柵の可能性。
20020220 B 区：SX03 北端で階段状遺構を確認。
20020222 A 区：平場 3 で比較的多く獣骨が出土する。B 区：赤物埋甕の下から桶の底板が埋置された状態で出土(SK156)。
20020301 A 区：航空測量。全景写真撮影。B 区：SD01 東端の土橋に続く通路とピット列を確認。航空測量。
20020304 B 区：SX03 半ばほどに板状の遮蔽物を建てたとみられる溝を確認。
20020313 A 区：航空測量。全景写真撮影。B 区：SD08 掘削、屈曲して谷へ落とす構造を確認、SD09 とは連続しないことを確認。
20020315 遺跡現地説明会を実施。約 150 人が参加。
20020318 B 区：SX03 は SD09 に切られることが判明。
20020320 B 区：SD09 の中部に溝の交差を確認(SD11)。横堀から堅堀が分岐する構造であることが判明。また、交差部の下層に炭化物層と遺物の出土。
20020325 B 区：SD09 から分岐する堅堀 3 本を確認。しかし現時点での斜面部分の調査は困難であると判断し、堅堀の調査は断念した。
20030326 B 区：航空測量。全景写真撮影。
20030327 (株)朝日航洋による地中探査の実施。
20030329 調査終了。器材撤収。B 区埋め戻し作業開始。

第2節 過去の城山城跡の調査・研究について

城山城跡という遺跡名はそれが立地する小字に由来し、文献史料などで城名や城主を知ることとはできない。城山城跡を含む豊田市足助地区の中世城館跡については、『愛知県中世城館調査報告』作成を目的とした愛知中世城郭研究会の調査と、鱸鑒氏の調査が主なもので、縄張図も刊行物として公表されている（愛知県教育委員会 1994、鱸 2001）。言い換えると、発掘調査以前の城山城跡の遺構に関わる情報はこれらのみであった。したがって、これら縄張図は、発掘調査範囲を確定するうえで重要な指針となった。ここでは、少々長くなるが両者の見解を引用する。

鱸氏「（前略）曲輪Ⅰが主郭と考えられ、面積は約290㎡。北側には石積みが残っており、長く続いている。約1.5m下に曲輪Ⅱがあり、面積は約450㎡。南側の中央より西に、虎口と見られるところがあり、ここにも高さ約0.5～2mの石積みがある。この曲輪の約10m下には、足助の市街地から通称「フカスケ」を通して、大字白山へ通じる旧道がある。この旧道に沿っては、腰曲輪と見られる平地もある。曲輪Ⅱの北方約6m下には、はっきりとしないが、尾根の鞍部を利用した堀切Aがあり、幅約2m、長さ約4mの土橋かと見られるところがある。曲輪Ⅰの南方斜面の尾根上にはいくつかの削平地があるが、曲輪か農耕地かははっきりしない。しかし堀切Bまでは城域と考えてよさそうである。また曲輪Ⅰの西南方下には、通称「馬場」と呼ばれる細長い長方形の曲輪Ⅲがある。この西方下にはおせん川が流れる谷になっており、この川に沿う形で旧道がある。この旧道を押さえるためのものであろうか。なお、城山城跡の南方山麓には居館跡かと思われる平地があり、現在は農耕地となっている。地名は、「引陣」である。」

佐分氏「（前略）ピーク上の曲輪Ⅰが主郭と考えられ、一段下って曲輪Ⅱがある。この曲輪に虎口らしき凹地があるが、これは後世の改変によるものと思われる。尾根続きの部分には明確な堀切は存在せず、尾根上の鞍部をそのまま堀切として利用した可能性がある。こうした形態は足助の城によくみられ、真弓山城でも尾根続きの鞍部を堀切として利用している。主郭から南へ伸びる尾根上にも削平地が段々に続くが、畑地として削平されたものと考えられる。Aの部分は現在畑地となっているが、堀切であったと推定でき、ここまですべてを城域として考えることができる。主郭から西南に伸びる尾根上に、細長い曲輪がある。削平も甘く曲輪として疑問もあるが、西の谷を通る町道が中世まで遡る可能性があり、街道を押さえる城としての機能を考えると、曲輪として使用されていたと思われる。このように、城山城は曲輪Ⅰ・Ⅱを中心に、南北に堀切（？）を設け、西に舌状に伸びる曲輪で西の守りを固めた城で、谷あいを通る街道押さえる機能を持ったと思われる。また、元来は、単郭の城であった可能性も高いが、城域として考えられる範囲を図化した。」

両者とも、尾根のピークとなる広い平場が主郭であると考え、その背後の鞍部が城域の北限（搦手）とみている。また、南方へ伸びる尾根に堀切を想定している点も共通している。主郭想定平場西方の通称「馬場」平場に対する評価も、おせん川に沿う旧道を押さえる目的をもった城域であると考えている。注目されるのは、鱸氏が南方山麓の平地（足助キリスト教会とその周辺一帯）に城山城の城主と目される人物の居館を想定したことである。この地点は唯一まとまった平場が形成されており一見居館にふさわしいふさわしい場所にみえる。ただこの平場は南側と北側へ近代以降拡張されているらしく、原形についてはうかがいしれない。遺物については平場西方の貯水池がある辺りで古代～戦国時代の遺物が採集されており、実測図を第2章第2節に提示した（引陣遺跡、図10）。

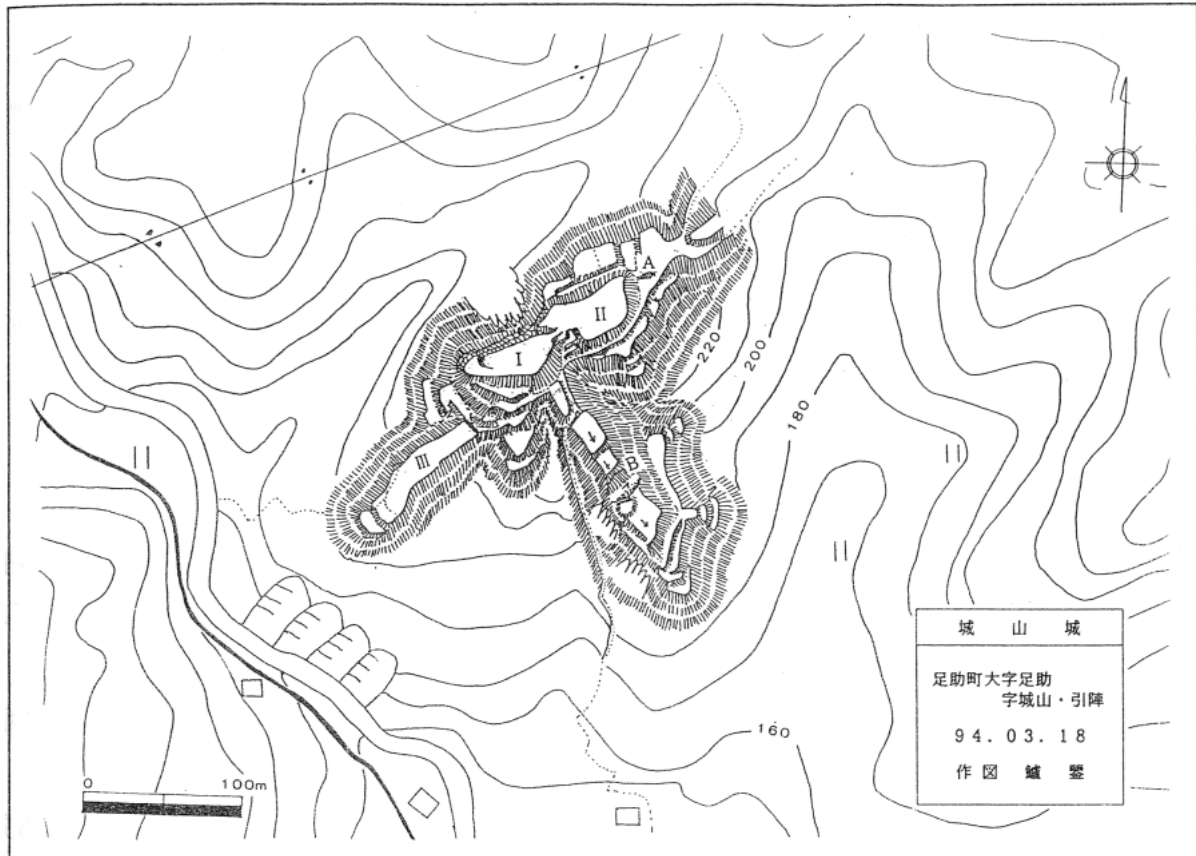


図4 鱸鑒氏作成の城山城縄張図（鱸2000より転載）

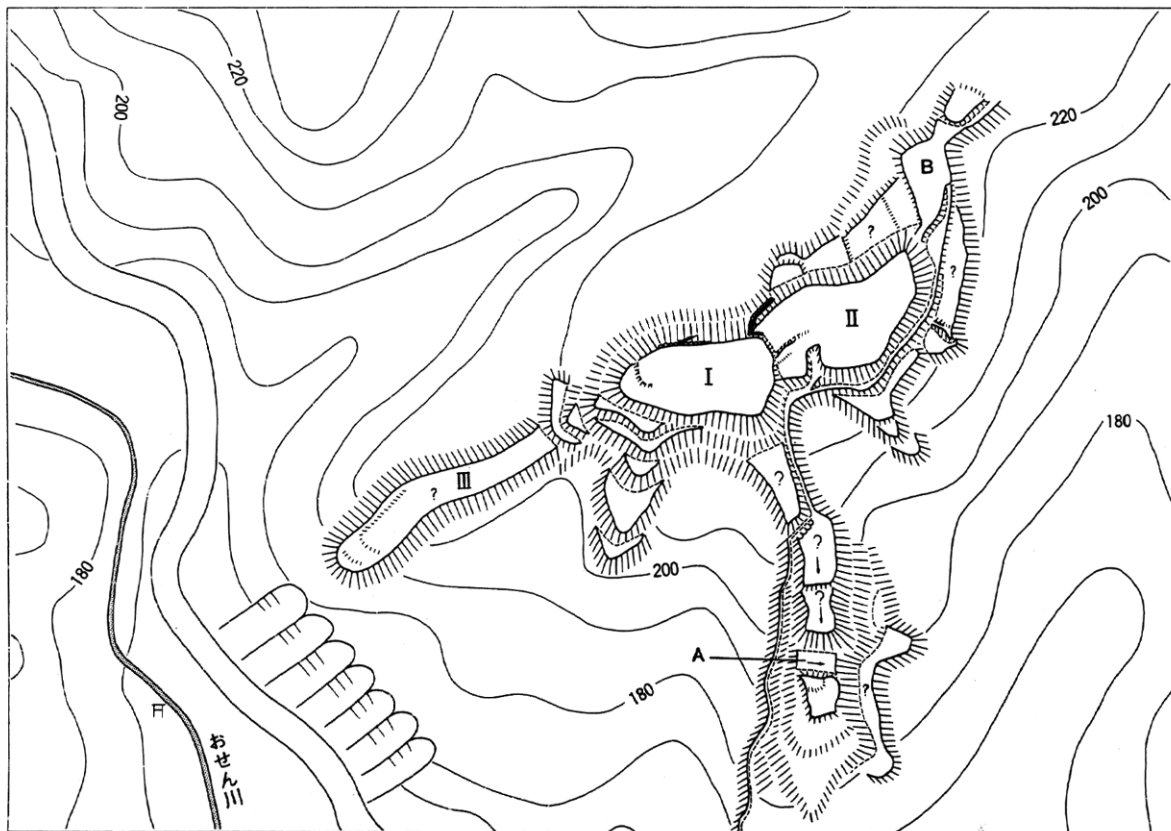


図5 佐分清親氏作成の城山城縄張図（愛知県教育委員会1994より転載）

第3節 範囲確認調査の概要

(1) 調査の目的と経過

城山城跡の本調査に先立ち埋蔵文化財包蔵地の範囲確認を行う調査を実施した。調査は平成11年7月12日から7月26日までの期間で、300 m²を掘った。道路建設予定地内にある4つの尾根を対象とし、城山城に関連する遺構の広がりを確認することを主な目的とした。この尾根は山頂部から山裾まで連続して人為的な平坦面が確認され、多くが太平洋戦争前後の食料増産のために開墾された平場である可能性が考えられた。このため、試掘調査により堀や切岸などの防御施設や建物遺構および遺物を確認することを主眼においた。地形等を考慮して23ヶ所に試掘トレンチを設定し、尾根毎に西からA～D地区に大別し、各々「A-TT-1」等と命名した。

(2) 調査結果

A地区 A地区は調査区域で最も西の尾根に所在する。道路建設予定地直上の平坦地が主郭から延びる曲輪と評価されていた。その平坦地の崖下部分にA-TT-1、崖下の平坦面にA-TT-2、さらに下がる平坦地にA-TT-3を設定した。結果、A-TT-1では堀切状の遺構と戦国時代の遺物などが確認された。A-TT-2では遺構が発見されず、A-TT-3では時期不明の土坑があるものの西側では防御施設は確認されなかった。これより下位に遺構が展開するような平坦面がないことから、遺跡の範囲はA-TT-3のある平坦面までと判断される。

B地区 B地区は西から2番目の尾根に存在する。道路建設予定地最上位の平坦面にB-TT-1その下位の平坦面にB-TT-2、さらにその下位の緩斜面となった平坦部にB-TT-3を設定した。結果、B-TT-1とB-TT-2北東部で土坑などが検出され、江戸時代の遺物が出土したが、B-TT-2南西部とB-TT-3では全く遺

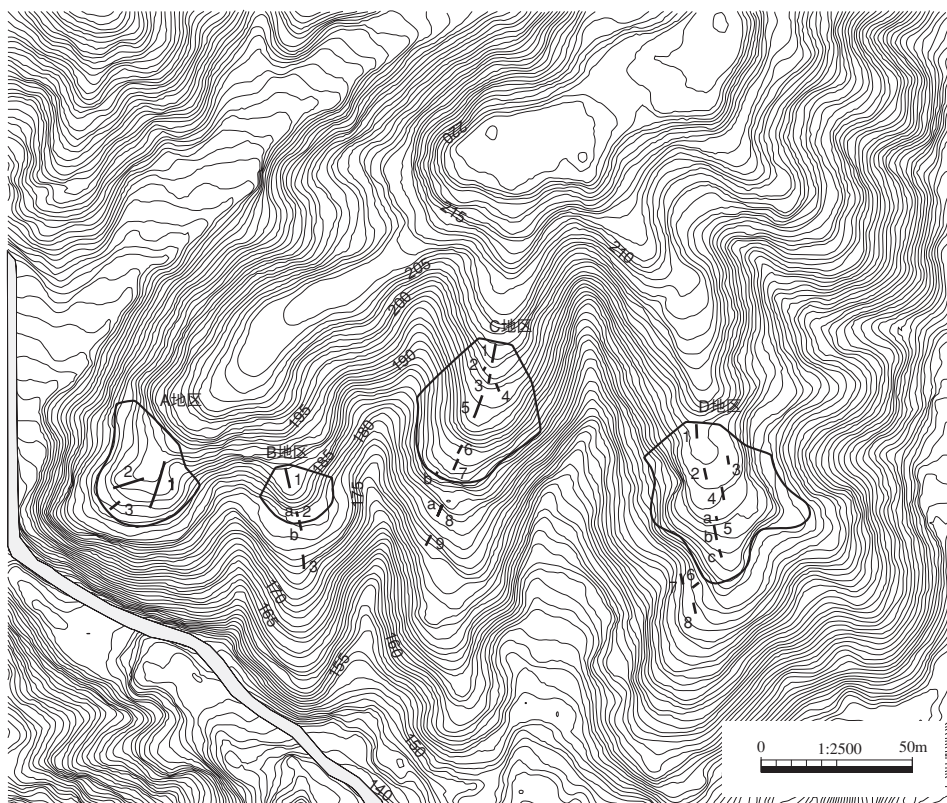


図6 範囲確認調査のトレンチ配置と設定された調査区配置図

構や遺物が認められなかった。特にB-TT-3では人為的な開削も認められないことから、B-TT-2北東部付近までが遺跡範囲と判断される。

C地区 C地区は西から3番目の尾根に所在する。道路建設予定地最上位の平坦面にC-TT-1、この平坦面脇のある狭い平場にC-TT-2、C-TT-1の下位の平坦面にC-TT-3、その平坦面脇のある狭い平場にC-TT-4を設定した。また、C-TT-3の下位に連なる各々の平坦面にC-TT-5～C-TT-9を設定した。結果、C-TT-1～C-TT-6で土坑などの遺構が確認され、戦国時代の遺物が出土した。C-TT-7とC-TT-8では遺構や遺物が全く確認されず、C-TT-9では近代の土坑が1基確認された。C-TT-6までは確実に遺跡が展開するが、他地区の状況からみて、標高180～185mに位置するC-TT-7の平坦面までが遺跡の範囲と判断される。

D地区 D地区は最も東の尾根にあり、以前から堀切の存在が指摘されていた部分が道路建設予定地の最上位となっている。この堀切推定地にD-TT-1、DTT-1の南に広がる平坦面にD-TT-2とD-TT-3を設定した。また、D-TT-2の下位に連なる各々の平坦面にD-TT-4～D-TT-8を設定した。なお、D-TT-7とD-TT-8は同じ平坦面に所在する。結果、遺構や遺物がまとまった形で確認されたのはD-TT-1～D-TT-5である。D-TT-6とD-TT-7では不定形な落ち込みが発見されたが、遺物が出土しなかった。また、D-TT-8では溝や19世紀代の遺物がわずかに確認された。D-TT-6以下では江戸時代末期以降の遺構の存在が予測されるが、D-TT-5とD-TT-6の間は地形的に落差が大きくその斜面に遺構の存在が認められないことなども含めて考えると、遺跡の範囲はD-TT-5のある平坦面までと判断される。

まとめ 各地区で土坑などの遺構や戦国時代などの遺物が確認され、全ての尾根で遺跡が広がることが判明した。C地区を除き、標高180～185m地点まで山城に関わる遺構が広がることからみて、遺跡は全体として標高180～185mの範囲まで広がっていたことが予測された。こうした所見から本調査の範囲を図6のように設定した。(鈴木正貴)



写真2 B-TT-1 トレンチ全景



写真3 C-TT-5 トレンチ作業風景

第2章 遺跡の環境

第1節 地理・地質

(1) 足助町市街地の地勢

豊田市足助地区を含む旧東加茂郡域は、豊田市の東部、丘陵部から山間部へと移る一帯にある。足助は、一般には山間部という印象が強いが、豊田市中心部が標高約100mであるのに対し、旧足助町市街地は標高約125mと、市街地どうしでの高低差はさほど顕著ではない。それは旧足助町の市街地が、矢作川の支流である巴川と、それからさらに分かれる足助川がつくり出した谷地形に位置しているからである。市街地は三州街道（飯田街道、国道153号）に沿って東西方向に細長く伸び、その西端は足助町追分、東端は今朝平橋付近である。その間約2.5kmである。またその中心は、足助町役場の所在する巴川と足助川の合流地点で、足助八幡宮もここにある。旧足助町の人口は約9850人（平成12年現在）であるが、そのうち市街地である中部地区には670世帯2074人が住んでいる（同上）。その人口密度は390.6人/㎢で、それ以外の地区の32.5～68.6人/㎢と比較すると圧倒的であり、まさに都市的景観を形成しているといえよう。

市街地の周辺は標高250～300mの連続する山地である。市街地からみると、この山地がちょうど壁となって、周辺地域からの進入路を限定させる役割をはたしている。したがって市街地の北側からはおせん川に沿ったルート、南側からは巴川に沿ったルートしかない。そして山地のところどころのピーク

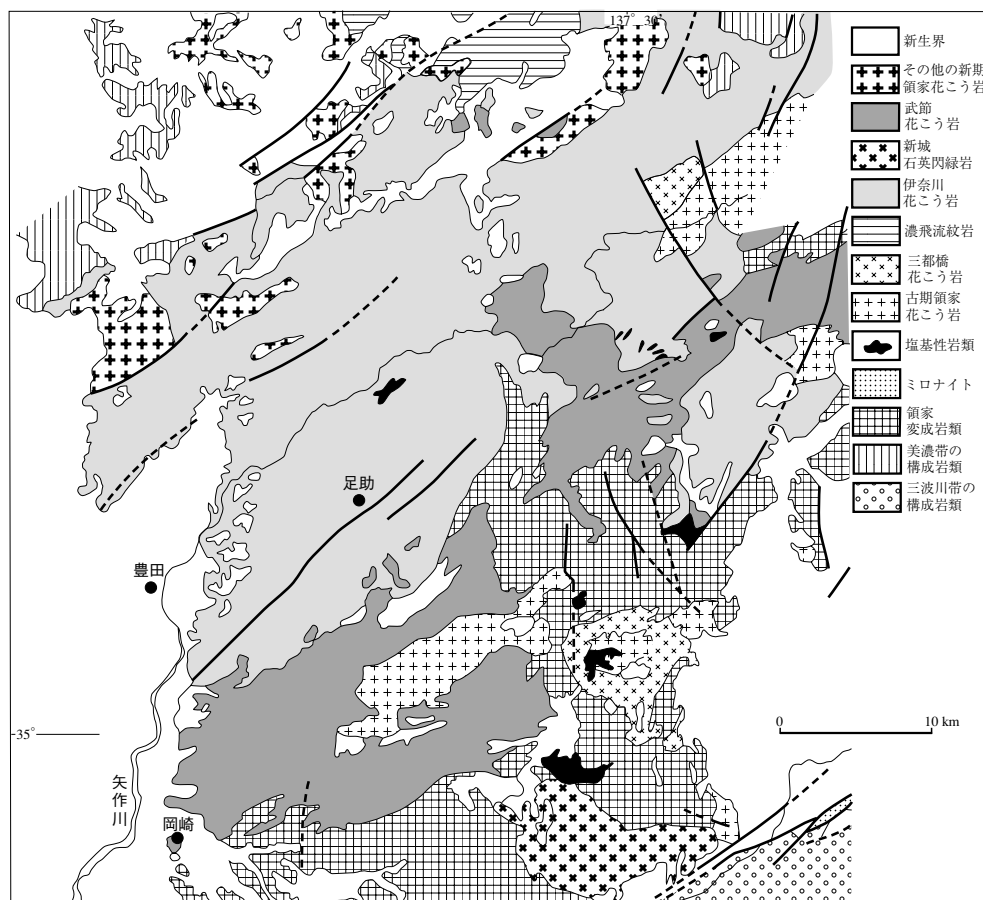


図7 愛知県三河地方の地質分類図（仲井1988をトレース、地名を追加）

ところで図8において、真弓山城跡は「真弓」、飯盛山城跡は「飯盛」、大観音城跡は「岩崎」「蛇石」である。城跡「真弓」は足助・今朝平・中ノ御所の各村に跨がる。

次に市街地の字をみる。「町」がつく字は「田町」「本町」「新町」「西町」である。これらが江戸時代からの都市的な空間の範囲を示していると考えられる。その西方の「宮ノ後」「宮平」は足助八幡宮である。これが飯盛山城跡と合わせて都市的空間の西端の位置にあり、東端は城山城跡や大観音城跡、真弓山城跡の位置になる。つまり都市的空間の範囲と山城の立地が密接な関わりをもっていたことをうかがわせるのである。

第2節 歴史的環境

(1) 豊田市足助町市街地の遺跡について

本節では、城山城跡の所在する豊田市足助町の市街地（以下、足助市街地）を中心に、遺跡をとりまく歴史的環境について時代別に概観する。なお、中世城館跡については後論にて述べる。

縄文時代 豊田市足助町を含む旧東加茂郡域では、縄文時代を通じて山間部の各所に遺跡が点在する。市街地で著名な遺跡は、今朝平遺跡（34）で、縄文時代後期の土偶がほぼ完全な形で出土した。

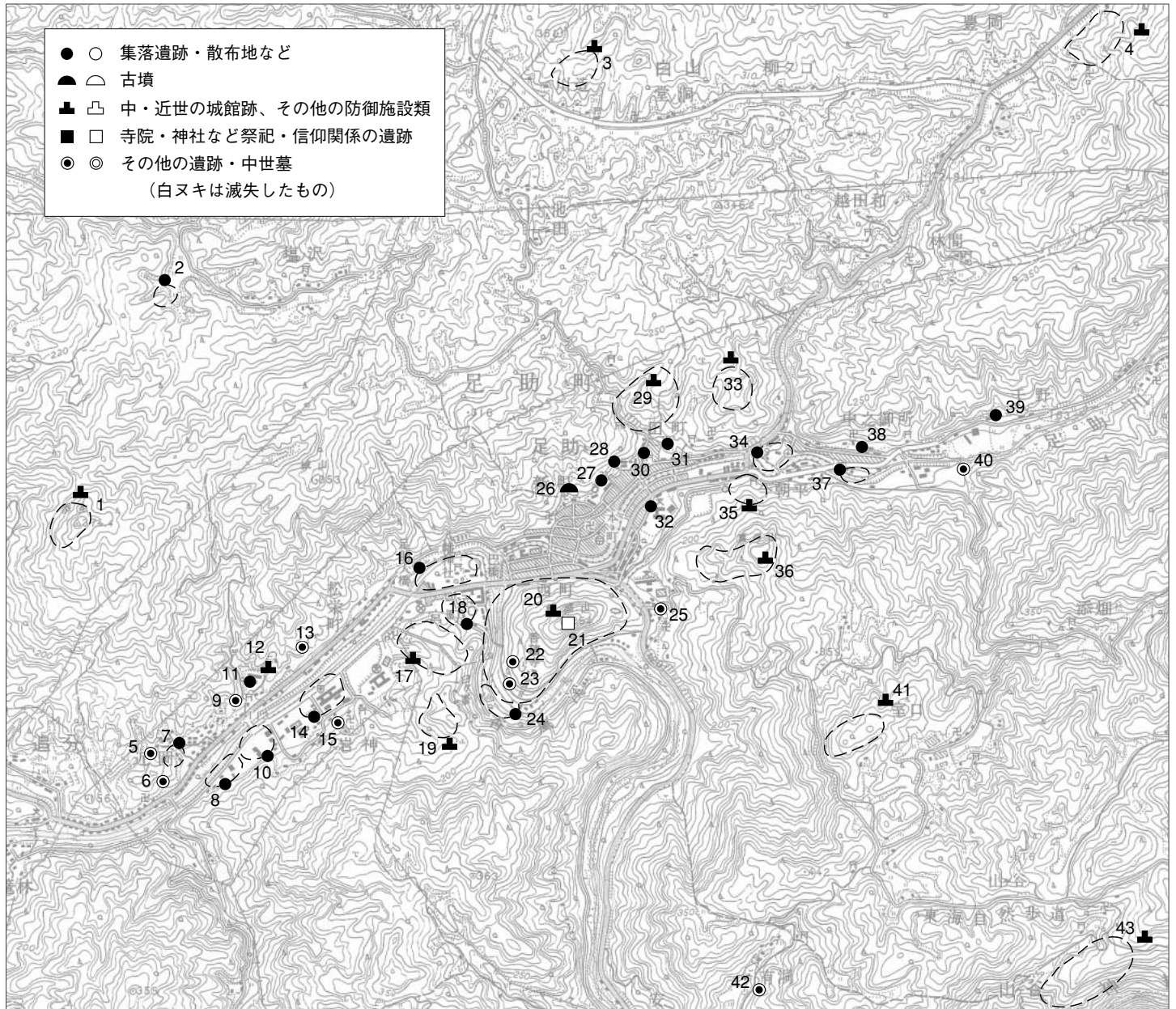
弥生時代 遺跡数は激減する。確認されているものでも、遠賀川系土器が出土する前期のものが中心である。足助市街地では弥生時代末の土器が宮の後遺跡（16）で出土している。

古墳時代 古墳時代も、弥生時代に引き続き遺跡数は低調である。しかし古墳時代中期あたりから河川に沿って集落が営まれ始めたと考えられる。市街地から北へ離れた阿摺川流域の大貝津遺跡では、古墳時代中期の土師器や須恵器がまとまって出土した。そして古墳時代終末期には、町内でも横穴式石室の古墳が造られた。陣屋跡古墳（26）は、その規模や副葬品についての情報はないが、市街地で唯一確認されている古墳である。

奈良・平安時代 陣屋跡古墳が造られて以降、現在市街地となっている場所に人々の集住が進行したとみられる。後述する田町遺跡（28）、石橋遺跡（30）では、7世紀～9世紀の須恵器が市街地でもとくに多く出土する遺跡として注目される。田町遺跡では柱材（柱根部分）が出土しており、この頃のものと考えられている（鈴木1975）。町内では、9世紀以降の灰釉陶器が出土する遺跡が、田町遺跡や石橋遺跡の他に山間部にも広がっており、平安時代以降、山間部の開発が進んだものと思われる。

鎌倉・室町時代 足助が文献史料として初めて登場するのが、応長元（1311）年の知立市遍照院所蔵大般若経識語である。ここで「足助庄」という荘園名が登場するが、これは現市街地域を含むかなり広範囲を指すものと考えられている（鈴木1975）。その荘官としてこの地に赴き定着したのが足助氏である。足助氏は五代続いたが、足助重範が南北朝時代に南朝方に組みして敗れ、足助氏は途絶えた。飯盛山南麓の応永34（1427）年創建と伝える香積寺は、足助氏の居館があった場所と考えられている。その背後の飯盛山城跡（20）は足助氏による築城とも考えられている。また、飯盛山山頂経塚（21）は、大正13（1924）年の公園造成工事中に発見され、出土した和鏡と刀子は足助資料館に保管されている（鈴木1975）。平安時代末～鎌倉時代にこの山が足助氏の聖地となっていたのであろう。

足助氏が去ったのちの当地は、鈴木氏によって支配された。その始まりは定かではないが、15世紀半ばにはその支配権を確立していたとされる（鈴木1975）。飯盛山の南西方向に位置する足助八幡宮の本殿には文正元（1466）年にこれが再建されたことを記す棟札がある（註1）ほか、応永27（1420）年に



番号	遺跡名	遺跡の時代	遺跡の分類	番号	遺跡名	遺跡の時代	遺跡の分類
1	黍生城跡	鎌倉、室町	山城	23	鈴木五代の墓	室町	墓
2	沢尻遺跡	縄文（早・中・晩）	集落など	24	飯盛遺跡	縄文（晩）、鎌倉～室町	集落など
3	白山葉座場城跡	室町	山城	25	月ノ入古墓	室町	墓
4	安代城跡	室町	山城	26	陣屋跡古墳	古墳（後期）	横穴式石室墳
5	吉田古墓	室町	墓	27	陣屋跡遺跡	縄文（早）、室町	集落など
6	小原古墓	室町	墓	28	田町遺跡	縄文、奈良	集落など
7	吉田遺跡	縄文（後）	集落など	29	城山城跡	鎌倉～室町	山城
8	野林本郷遺跡	平安、鎌倉	集落など	30	石橋遺跡	縄文（晩）～平安	集落など
9	藤ノ木古墓	室町	墓	31	引陣遺跡	平安～鎌倉	集落など
10	築瀬遺跡	縄文（晩）	集落など	32	今岡遺跡	古墳	集落など
11	皿坂遺跡	縄文	集落など	33	大観音城跡	鎌倉～室町	山城
12	成瀬城跡	室町	山城	34	今朝平遺跡	縄文（後・晩）	集落など
13	成瀬古墓	室町	墓	35	今朝平村古屋敷跡	室町	山城
14	仲田遺跡	平安、鎌倉	集落など	36	真弓山城跡	鎌倉、室町	山城
15	仲田古墓	室町	墓	37	久井度遺跡	縄文（晩）、弥生、鎌倉～室町	集落など
16	宮ノ後遺跡	縄文、弥生、平安～室町	集落など	38	植田遺跡	鎌倉～室町	集落など
17	白木ヶ峯城跡	鎌倉	山城	39	豊ヶ入遺跡	縄文（早）・室町	集落など
18	宮平遺跡	鎌倉、室町	集落など	40	平治洞古墓	室町	墓
19	岩神城跡	室町	山城	41	山ヶ谷鶏足城跡	室町	山城
20	飯盛山城跡	鎌倉～室町	山城	42	向洞古墓	室町	墓
21	飯盛山経塚	平安	経塚	43	浅谷城跡	室町	山城
22	装束塚	室町	墓				

図9 豊田市足助町市街地とその周辺の遺跡分布図（国土地理院発行 1:25,000 地図を改変）

奉納された大般若経を所蔵する。鈴木氏による支配はその江戸への転出まで続くことになる。

中世の遺跡は足助八幡宮周辺宮ノ後遺跡（16）がある。平成14年度の発掘調査では、大量の鉄滓や土師器皿、中世瓦が出土した。市街地で初出土となる中世の軒丸瓦は、町内の塩狭間古窯で生産されたものという（註2）。そして八幡宮より西方の仲田遺跡（14）は、古代末～中世の遺物とその主体を占める。一方八幡宮から東側では、石橋遺跡で中世の遺物が採集されているほか、今朝平村古屋敷（35）の付近でも灰釉系陶器が採集されているという（註3）。さらに東方の植田遺跡（38）では、多数の青磁碗がまとまって出土しており注目される。

戦国時代 15～16世紀、市街地周辺に山城が次々と造られる時代である。宮ノ後遺跡ではこの時期の遺物は希薄で、そこが神社域として清浄さが保たれていたと考えられる（註4）。仲田遺跡・石橋遺跡では、中世～戦国時代の遺物が採集されている。それ以外での顕著な出土例は知られていないが、現在の市街地のすぐ下に遺跡が埋蔵されている可能性を考慮する必要がある。

江戸時代および近代 鈴木氏が徳川家康に従って江戸へ去った後、現市街地域の一带は旗本（松平氏5000石、のち本多氏10000石）によって統治された。そして足助陣屋（27）が設置された。寛永年間には足助の市街地には200軒の家があったと記録されている。江戸時代を通じて足助は中馬街道、すなわち尾張・三河と信濃を結ぶ交通路の拠点であった。それに伴って一層の集住が進行し、現在の市街地景観とさほど変わらないものとなっていたと考えられる。明治時代以降も引き続き街道の中継地点であったが、20世紀に入ると輸送手段が馬から自動車へと変化し、その役割は徐々に薄れていった。

（2）城山城跡付近の遺跡について

城山城跡の付近には、おせん川を挟んで西側に田町遺跡（28）、城山城跡南麓に引陣遺跡（31）と石橋遺跡（30）がある。田町遺跡と石橋遺跡の出土遺物は県立足助高等学校と足助資料館で所蔵されている。関連資料として中世土器・陶器の一部を実測図で提示する（註5）。引陣遺跡は、鱸鑒氏によって城山城跡に関わる居館跡と想定された地点で、現在足助キリスト教会がある場所の西側一帯である。採集遺物はわずかながら須恵器が中心で、灰釉系陶器と戦国時代の土師器内耳鍋がある。石橋遺跡はそこから高低差約8m下ったところに所在する。出土地点により石橋A・B遺跡に区分される。古代の須恵器・灰釉陶器を中心として中世～戦国時代の遺物も含まれる。石橋A遺跡では、中世の非ロクロ土師器皿が目立つのが注目される。

（註1）本殿の建築史的検討がなされていないため、本殿がその当時のものかどうかは不明である。

（註2）鈴木昭彦氏（足助町教育委員会）の御教示による。

（註3）註2に同じ。

（註4）註2に同じ。

（註5）資料調査にあたっては、鈴木氏（同上）・足助資料館の御協力をいただいた。

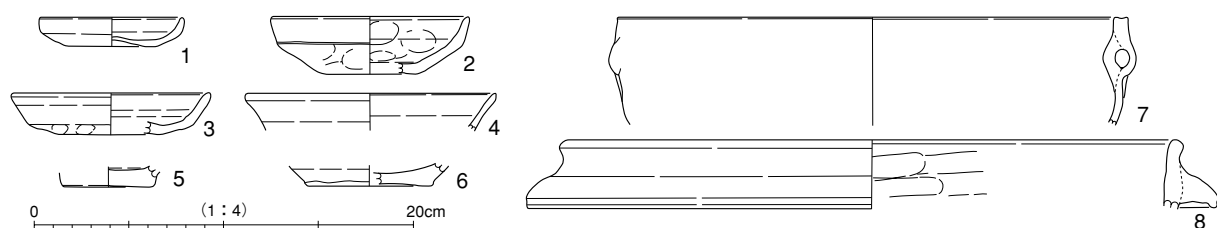


図10 城山城跡近隣で出土した中世土器実測図（7は引陣遺跡、他は石橋遺跡 永井2005より転載）

第3章 発掘調査の成果（1） 遺構

第1節 00A区

（1）調査区概観

調査前の状況 00A区を設定した、城山城跡の西端と想定される箇所は、主郭部のある尾根からほぼ西方へ約137mの位置にある。通称「馬場」平場から落ちる高低差8.0m、角度 48° 急斜面があり、斜面下に約 240m^2 の平場があった。平場の周辺には小さな階段状の平場が取り巻くようにしてあり、さらにその周辺は南～西～北方向に急斜面となっていて、西～北方向は斜面下におせん川が流れ、それに沿って町道が通っていた。いずれの場所も杉の植林がなされていた。調査区は「馬場」平場下の斜面から階段状の小平場群までを範囲とし、尾根筋にあたる東西方向に土層ベルト（中央ベルト）を設定し、小平場群に対しては適宜土層ベルトを設定した。

土層と平場群 SD01の土層断面（Fライン）でみると、「馬場」平場下の斜面途中にあった平場A-7は、盛り土による全く新しいものであることがわかる。調査区のほぼ全域で共通する層は、黒褐色土層（表土層）とその下の灰褐色土層である。灰褐色土層は最大で厚さが約130cmあり、いくつかに分層が可能であるが、概ね短期間に堆積したものと考えられる。灰褐色土層からは、戦国時代～明治時代の陶磁器が出土する。風化による崩落土とみるよりは、人為的な削平とそれによって生じた土砂による盛り土と考えられる。また、一部表土層の直下で地山があらわれる平場があるが、きわめて新しい時期に削平を受けていることを示している。したがって、調査前に認識された平場群のほとんど（平場A-1～4）は、山城の施設とは何ら関係な

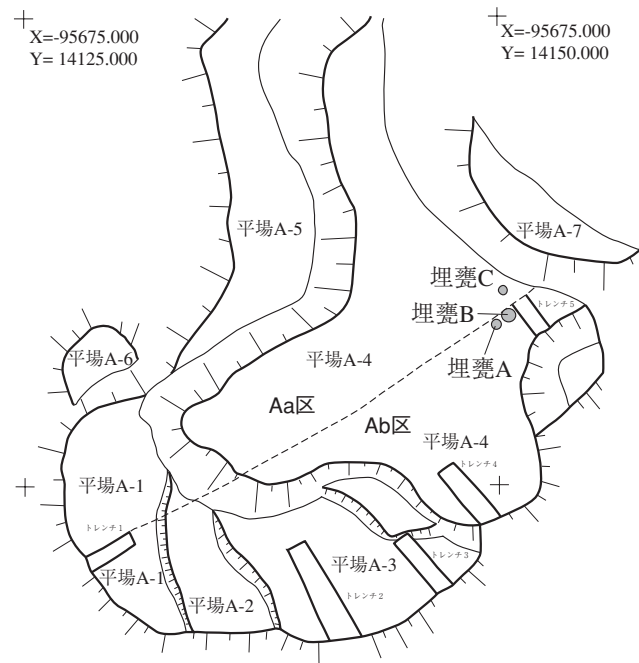


図11 調査前の00A区配置図

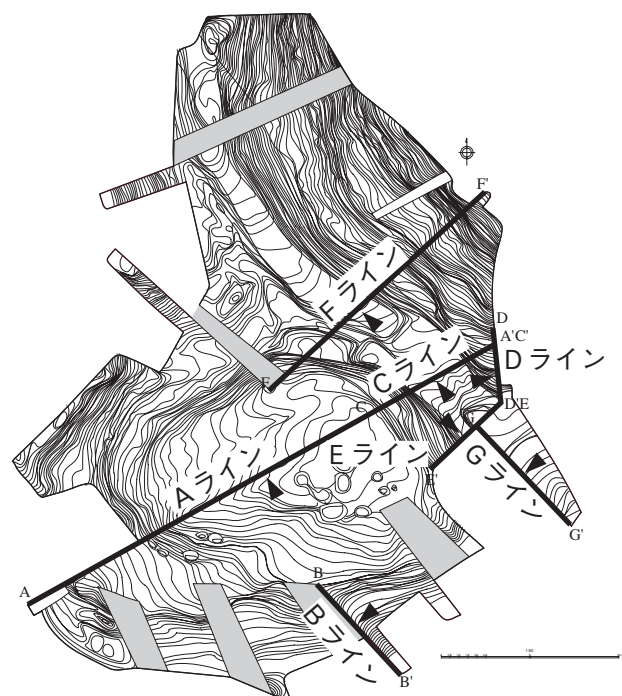


図12 土層断面ライン設定図

く、この地点で耕作あるいは植林が開始された頃に造成されたものと判断される。

(2) 堀切 (SD01)

位置と形状 「馬場」平場の斜面直下に位置する。調査区内を北西方向から南東方向へと若干カーブしながら抜ける。調査区内ではほぼ全体が確認でき、全長32mである。断面形は場所によって少しずつ変化するが、概ね底面がある点では変化がない。Cラインでの断面形はほぼ逆台形で、底面が幅3.5mであるが、Fラインでは底部中央が幅約1mにわたってさらに凹んでいる。この凹みはFラインの南3.2m

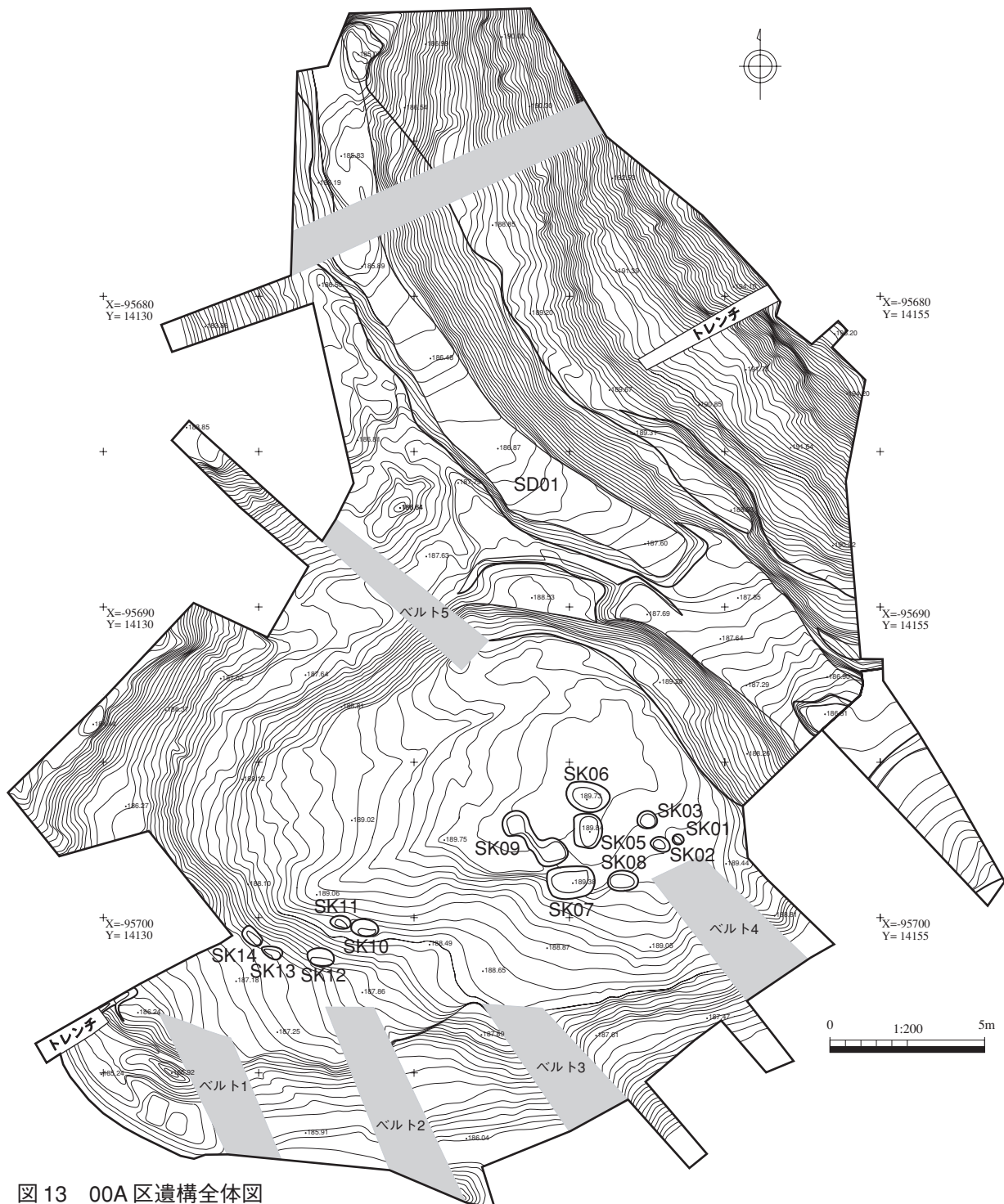


図 13 00A 区遺構全体図

のところから発している。そしてFラインの北側ではこの凹みの底面幅がそのまま堀切底幅となっている。凹みの両脇は幅0.8mの平坦面ができ、通路の可能性もあるが、そこからどのように延びるのかは不明である。

前述のとおり堀切の外側が大きく削平を受けており、元の形状を知ることができない。したがって堀切の幅や深さは残存部分からの計測になる。最大幅は6.2m、残存部分から「馬場」平場肩部との高低差は5.0m、「馬場」平場肩部と堀切底との高低差は7.5mである。また、堀切によって生じた山側（「馬場」平場下）の切岸は下半部で35°、上半部で50°である。斜面の直線距離は6.0mである。しかし後世の削平により原形からはほど遠いと考えられる。

土層 土層は大きく4層あり、表土層、灰褐色土層、風化花崗岩主体層、最下層である。灰褐色土層は、単一層の上部と、比較的薄い土層がいくつも重なる下部からなる。灰褐色土層下部が一時期地表面であったと考えられ、その上に斜面や堀切外側を削って発生した土砂をならすように盛ったと考えられる。

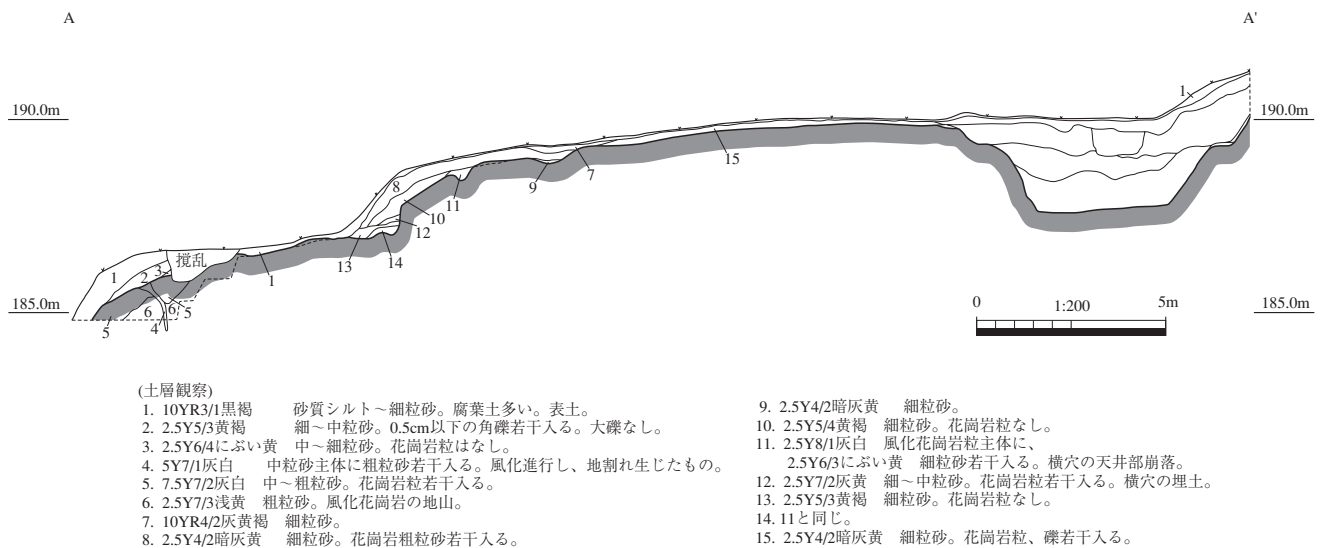


図 14 Aライン土層断面図

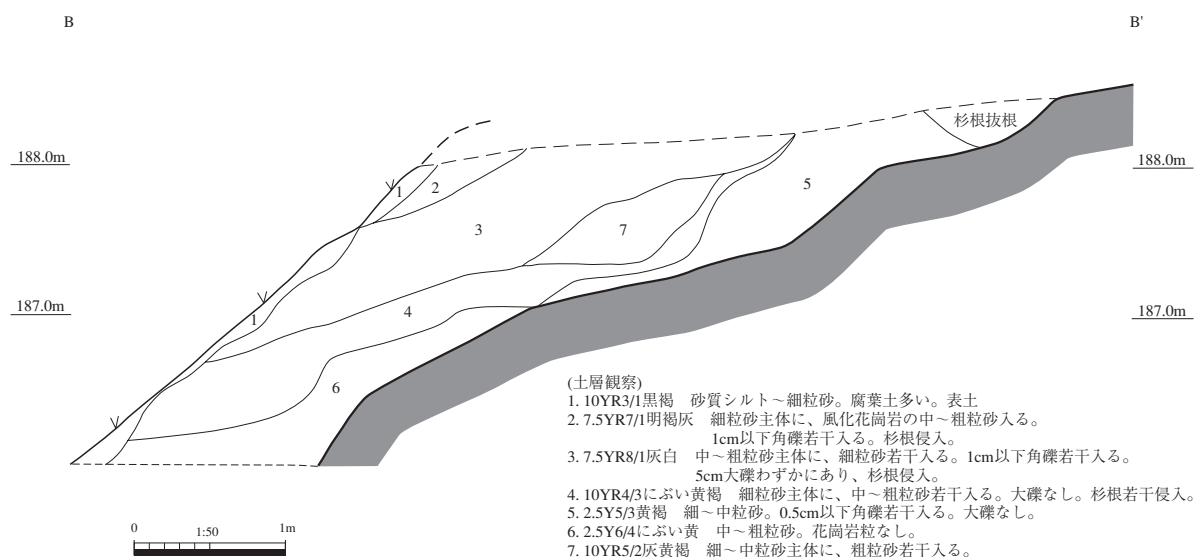
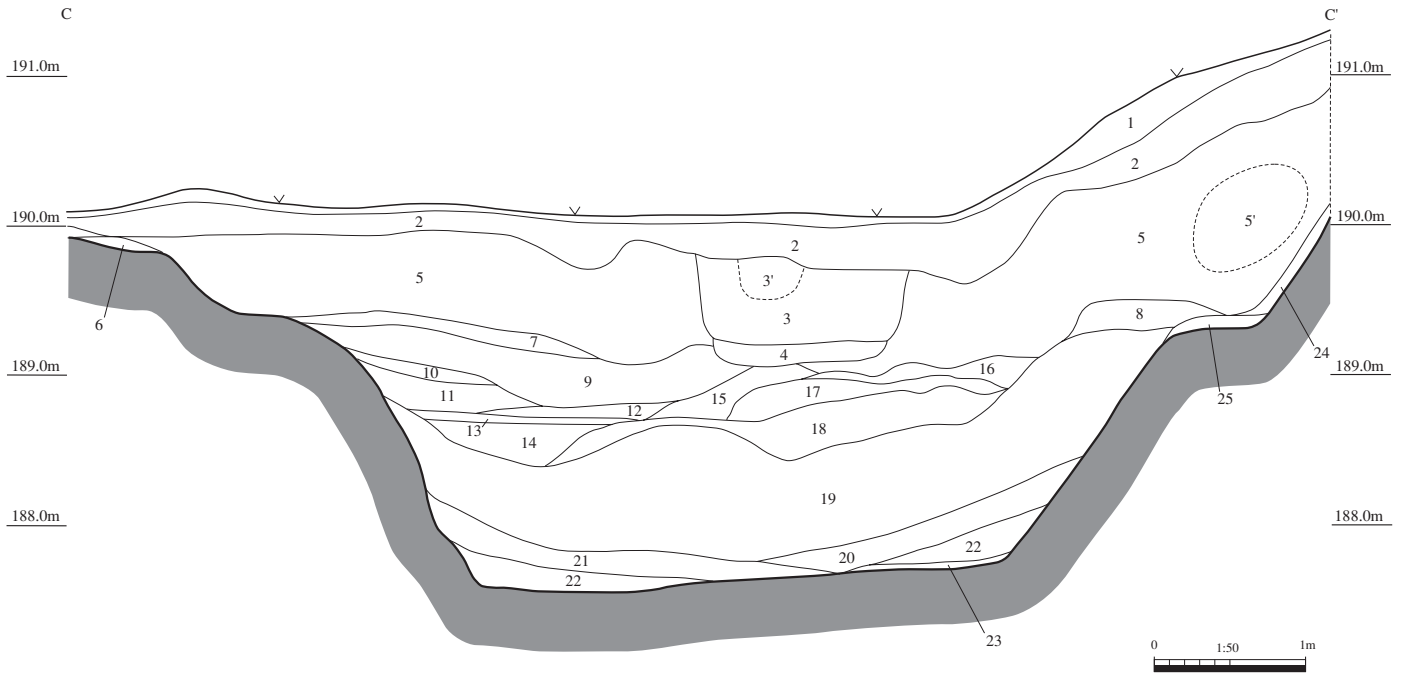


図 15 Bライン土層断面図



(土層観察)

1. 10YR3/1黒褐 砂質シルト～細粒砂。腐葉土多い。表土。
2. 2.5Y4/2暗灰黄 細粒砂主体に中～粗粒砂若干入る。花崗岩粒はない。
3. 7.5Y6/6橙 粘質シルト。粘性あり、強くしまる。埋壺片入る。
3'は埋壺の跡、2.5Y6/2灰黄 細粒砂入りこむ。
4. 2.5Y4/2暗灰黄 細粒砂主体に中粒砂若干入る。花崗岩粒なし。
5. 2.5Y5/2暗灰黄 細～中粒砂主体に粗粒砂若干入る。
6. 風化花崗岩粒主体。
7. 2.5Y7/2灰黄 粗粒砂、小礫と5が混合。
8. 5に2.5Y7/2灰黄 粗粒砂入る。
9. 2.5Y5/2暗灰黄 細～中粒砂主体に、粗粒砂混入量やや増。
10. 7に花崗岩粒増える。黒雲母みえる。
11. 5と同じ。
12. 5に2.5Y4/2暗灰黄 細粒砂入る。

13. 10に花崗岩粒さらに増える。花崗岩礫入る。黒雲母みえる。
14. 5に2.5Y4/3オリーブ褐 細粒砂、花崗岩礫若干入る。
15. 7に2.5Y4/3オリーブ褐 細粒砂若干入る。
16. 10YR4/3にぶい黄褐 細粒砂。花崗岩粒なし。
17. 2.5Y2/2黒褐 細粒砂。花崗岩粒なし。
18. 10YR6/6明黄褐 花崗岩粗粒砂・礫に、2.5Y4/3オリーブ褐 細粒砂入る。
19. 2.5Y6/2灰黄 中～粗粒砂主体に20cm以下の花崗岩礫多く入る。
20. 2.5Y6/3にぶい黄 細～中粒砂。花崗岩少ない。
21. 5Y6/3オリーブ黄 細～中粒砂主体。花崗岩少ない。
22. 19に同じ。
23. 5Y7/3浅黄と2.5Y4/2暗灰黄 細～中粒砂がラミナ状に堆積。
24. 風化花崗岩礫と5の混合。
25. 風化花崗岩主体に5が若干入る。

図 16 C ライン土層断面図

例えばCラインの2・5・7層がそれである。この層からは戦国時代～江戸時代末の土器や陶器が出土した。風化花崗岩主体層もほぼ単一層である。山側から一気に地山を崩して堆積させたと考えられる。この層と最下層との間にほとんど土壌化した層が見出せないことから、堆積時期は山城が機能停止してからさほど時間はたっていないと思われる。遺物は出土しなかった。最下層は厚さ12～50cmである。上位の層に比べて粘質やしまりが強い。山城機能時の堆積であろう。遺物はFライン近くで最下層の上面から1点だけ瀬戸美濃産播鉢が出土した。

(3) 野壺（埋壺）

甕の出土状況 堀切りの位置の地表面には、埋設された2つの甕の口縁があらわれていた。その設置状況は土層セクション図（図17）に提示したが、さらに表土の掘削をすすめるとその下から1個体に相当する甕の胴下半部～底部が据え置かれた状態で出土した。また、出土した甕の破片からは、もう1個体分の甕があったことが確認でき、同地点で4個体分の甕が出土した。地表面で確認できたものを甕A・Bとし、その下方で設置状態で出土したものを甕C、さらに破片で確認したものを甕D・Eとする。甕Aは口縁上端に「三河高濱間宮製造」の刻印がある。甕Bは本来井戸筒であるが、モルタルで底面を作

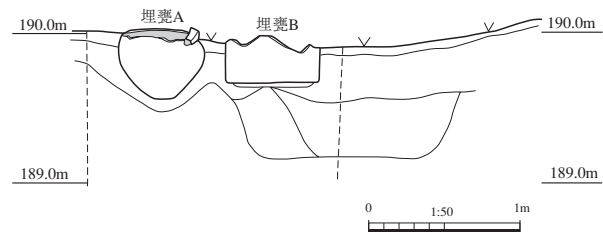


図 17 C ライン 00ASD01 甕埋設状況図

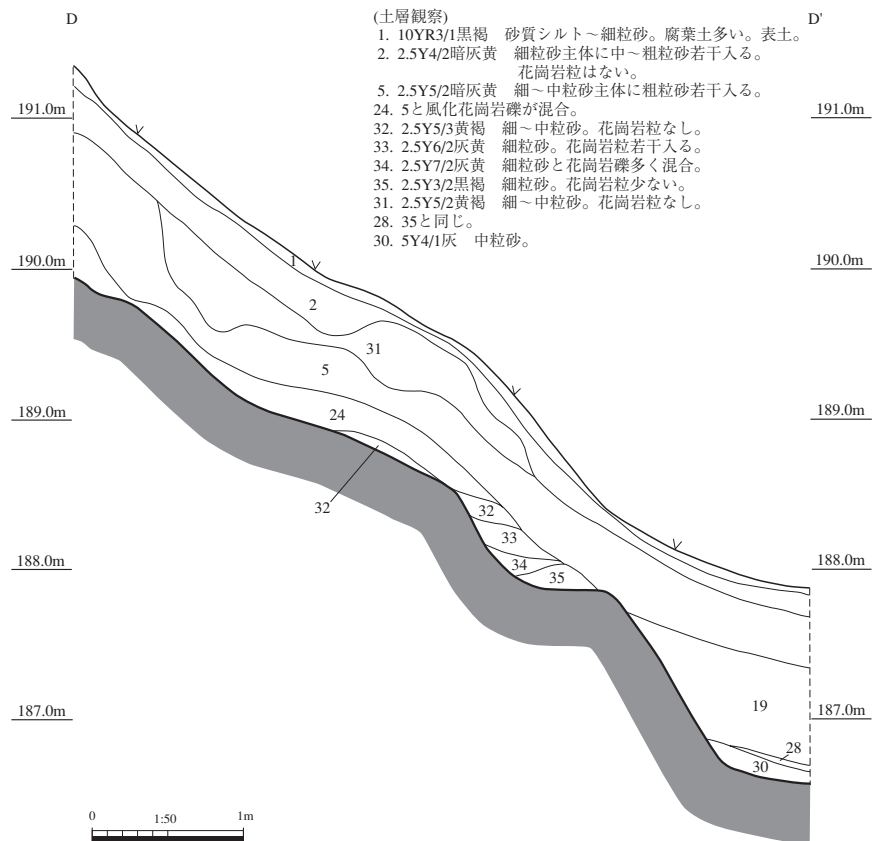


図 18 Dライン土層断面図

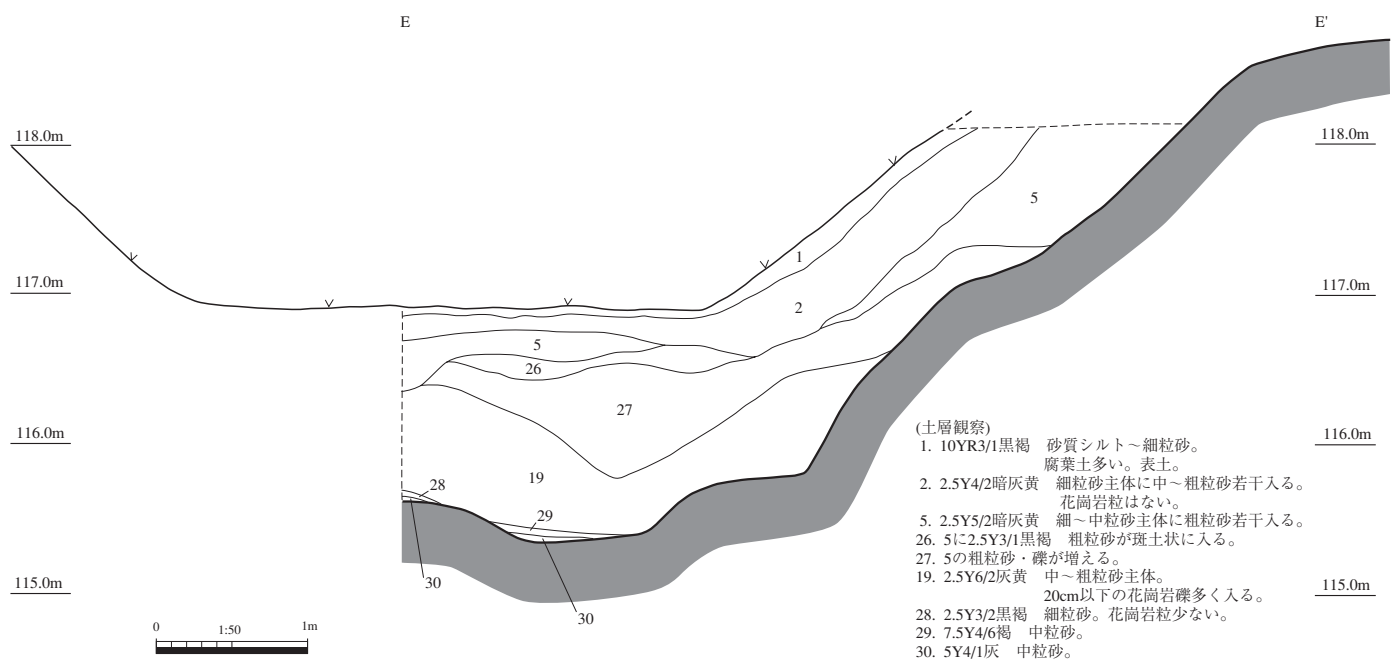


図 19 Eライン土層断面図

り、容器としたものである。甕Aは内面にカルシウム分が付着しており、これに糞尿を溜め、甕B・Cは内面付着物がないので水溜とみられる。甕Cの底からは少量の瓦片と文久永宝が出土した。状況から甕Cがあったところに甕A・Bを新たに据えたようである。なお、甕D・Eが甕Cよりさらに遡るものであるかどうかは不明である。

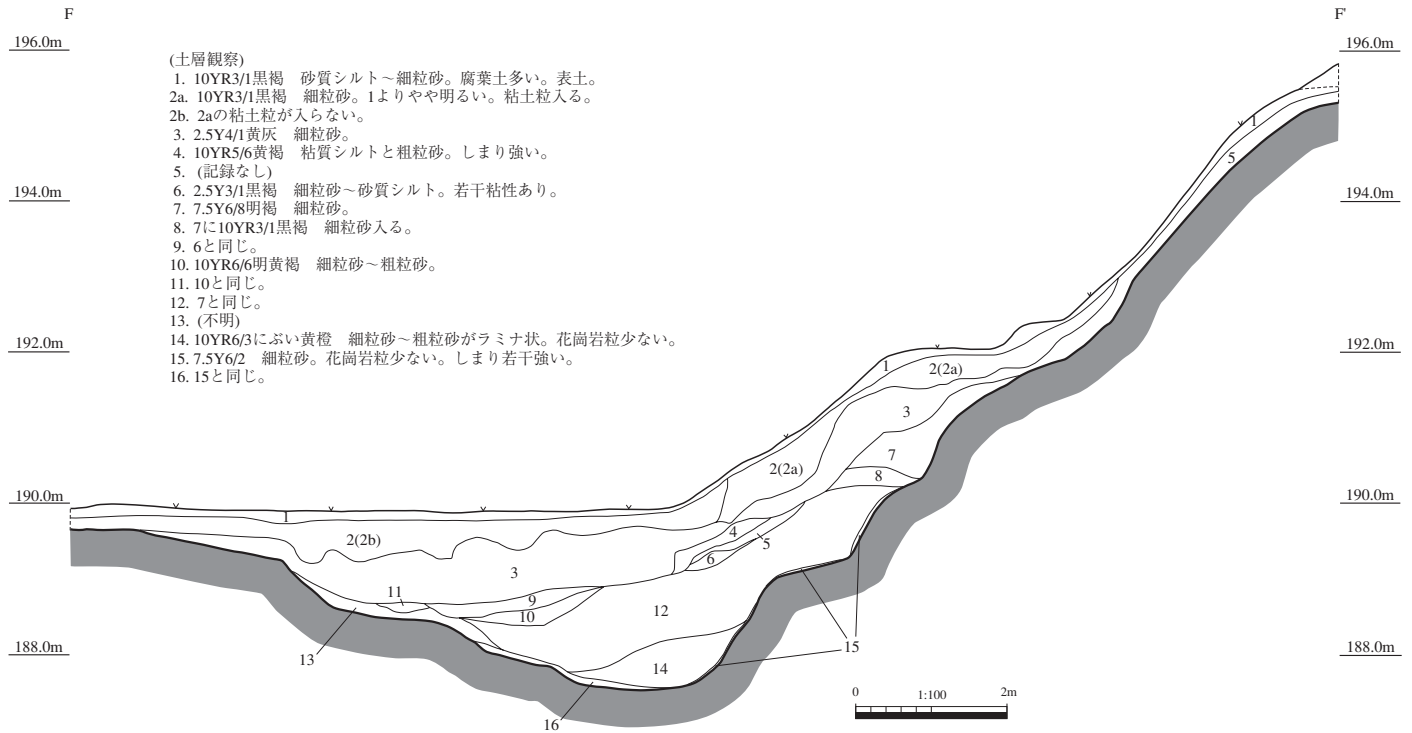


図 20 Fライン土層断面図

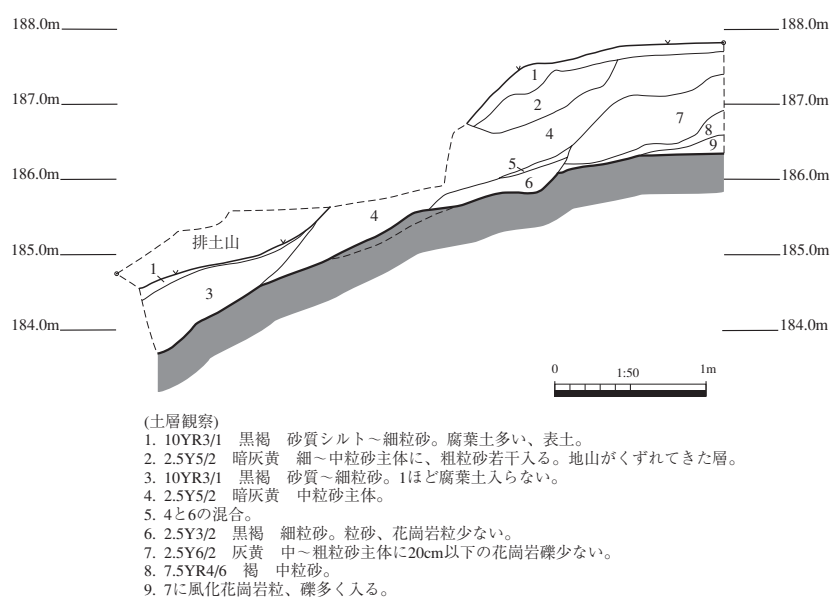


図 21 Gライン土層断面図

第2節 00B区

(1) 調査区概観

調査前の状況 00B区は、「馬場」平場の尾根から南方に別れる小尾根に位置する。「馬場」平場からは高低差約15mの急斜面があり、その斜面下に約80㎡の平場があった。この平場はごく最近まで畑として耕作されていた。さらにその平場を丸く取り巻くかたちで高低差約7mの急斜面があり、その下に三日月形の平場が上下2段に別れて存在した。三日月形の平場には植林がなされていた。調査区は、畑だった平場をBc区、その下方の斜面と三日月形の平場2つを中央で分割し、東側をBa区、西側をBb区とした。00A区と同様に尾根筋に土層ベルト（中央ベルト：Aライン）を設定した。

土層と遺構概観 中央ベルトでの土層観察の結果、黒褐色の表土層とその下の灰褐色土層がほぼ全域で認められた。灰褐色土層の直下が地山というところがほとんどである。灰褐色土層からは近代までの遺物が出土しており、近代に削平を受けた箇所が多いことがわかる。特に平場B-2では地山の上が表土層で、比較的新しい時期の削平であることが考えられる。当該箇所は、横堀のすぐ外側にあたり、この平場を底辺とする断面三角形の地山削り出しによる土塁があったかもしれない（図28）。

遺構は、Bc区では掘立柱建物と柵、その斜面（切岸）下となるBa・Bb区では横堀が確認された。結果的に小規模な曲輪のほぼ全域を確認したことになる。

(2) 曲輪の概観

曲輪は、横堀（SD01）と切岸に囲まれた平坦面で構成される山城の防御施設である。

SD01 調査区のほぼ中央を東西方向に伸びる横堀である。全長は22.7mで、西端から南東方向へ約9.1m延び、そこで大きくカーブを描きながら90°近くまで屈曲した後、北東方向へ緩くカーブしながら約13.6m延びる。東西両端部ともに調査区縁辺と重なり、後世の削平を受けているため、不明瞭なところが多いが、直接縦堀にはならず、ほぼ水平方向へ抜けるような形状である。ただし中央土層ベルト付近から東端へは、全体的に下りとなっている。

上端残存部での幅は2.2～2.6mで、底幅は15cmである。

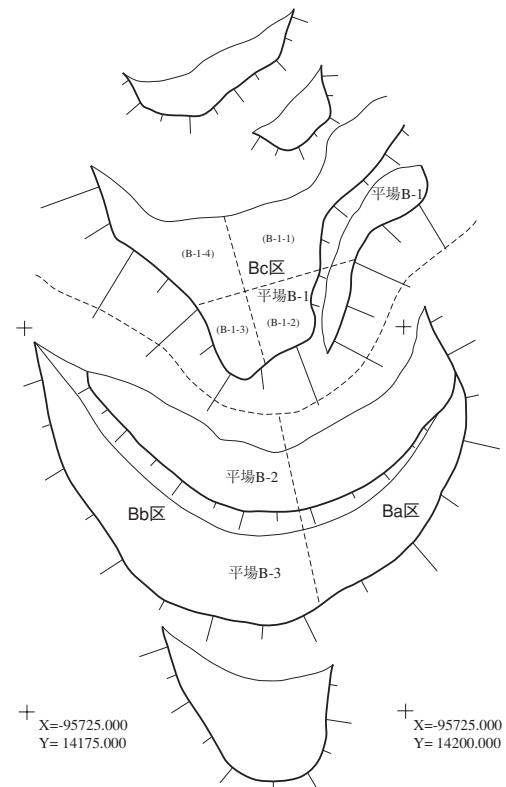


図22 調査前の00B区平場配置図

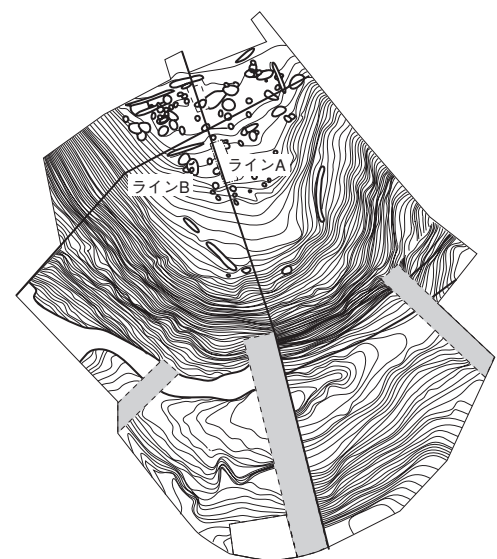


図23 土層断面ライン配置図

深さは0.9～1.1mを測る。わずかに底面をつくっているが、概ね断面形はV字形（薬研掘）である。先述したように横堀外側での削平を考慮すると、幅、深さともに約2倍の規模であった可能性もある。土層は、灰褐色土層に近い風化花崗岩粒を含む上層（Aラインの18～20層）と、ラミナが認められる層（同21層）や粘質土主体（同22層）の下層で構成される。なお、粘質土層直下に風化花崗岩粒の堆積（同23・24層）があり、最後の掘削からやや間があって粘質土の堆積があったことが確認された。遺物

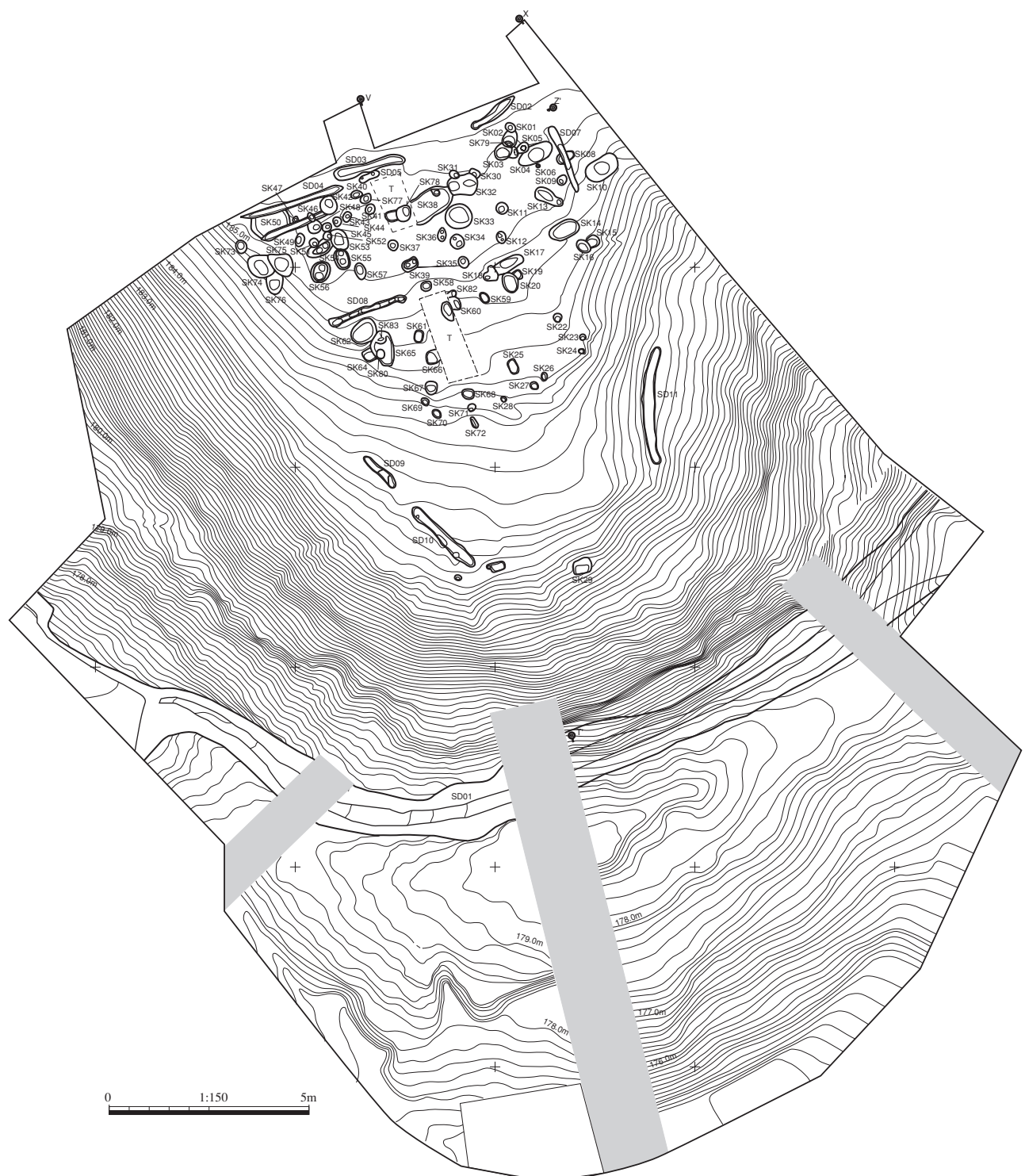
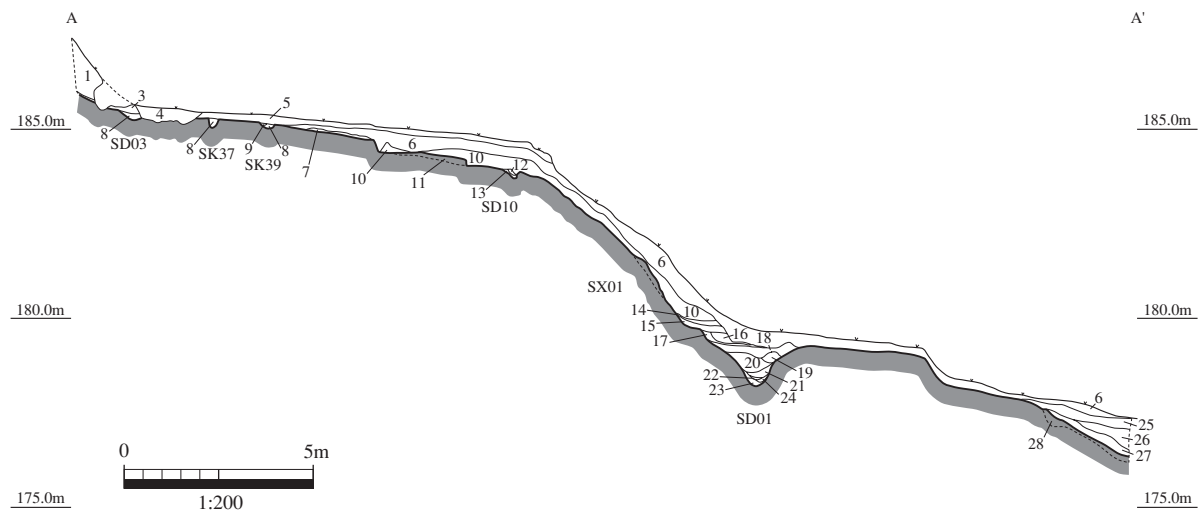


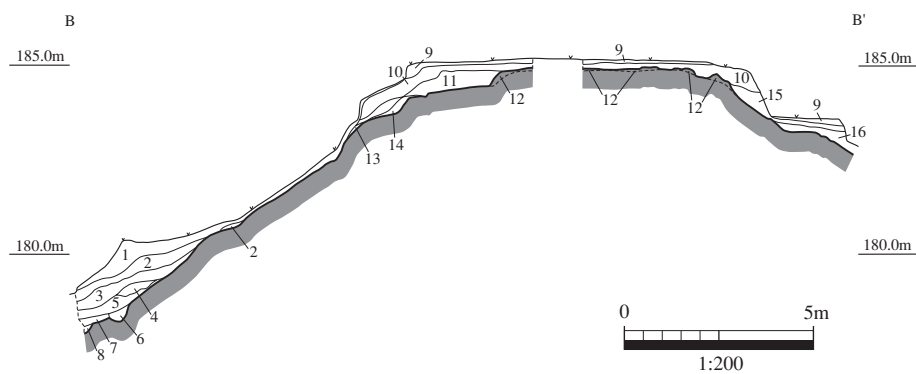
図 24 00B 区遺構配置図



(土層観察)

1. 10YR5/4にぶい黄褐 細粒砂～シルト。
2. 10YR6/6明黄褐 細粒砂。
3. 10YR4/2灰黄褐 細粒砂。腐葉土を含む表土。
4. 10YR4/2灰黄褐 細粒砂、10YR3/2黒褐 細粒砂、10YR5/4にぶい黄褐 細粒砂 が斑状に混じる。炭化物、風化花崗岩粒あり。
5. 10YR3/1黒褐 細粒砂。炭化物含む耕作土。
6. 10YR4/2灰黄褐 細粒砂。炭化物若干含む。
7. 10YR6/3にぶい黄橙 細粒砂、10YR7/3にぶい黄橙 細粒砂 が斑状に混合。風化花崗岩粒多く含む。
8. 10YR4/3にぶい黄褐 細粒砂 炭化物を若干含む。→SK37,38,SD03
9. 10YR4/2灰黄褐 細粒砂、10YR5/4にぶい黄褐 細粒砂が混合。耕作時にできた溝。
10. 10YR5/4にぶい黄褐 細粒砂。風化花崗岩を含む。
11. 10YR6/4にぶい黄橙 細粒砂。風化花崗岩を多く含む。地山。
12. 10YR7/3にぶい黄橙 細粒砂。風化花崗岩を多く含む。→SD10
13. 10YR6/4にぶい黄橙 細粒砂。→SD10
14. 10YR6/4にぶい黄橙 細粒砂。風化花崗岩粒若干含む。(白っぽい)
15. 10YR5/4にぶい黄褐 細粒砂。風化花崗岩粒若干含む。(黒っぽい)
16. 10YR6/4にぶい黄橙 中～粗粒砂。風化花崗岩粒主体の層 (白っぽい)
17. 10YR6/3にぶい黄橙 細粒砂。風化花崗岩粒若干含む。
18. 10YR4/3にぶい黄褐 細粒砂。風化花崗岩粒若干含む。
19. 10YR6/3にぶい黄橙 細粒砂。
20. 10YR5/4にぶい黄褐 細粒砂。風化花崗岩粒含む。
21. 10YR6/4にぶい黄橙 細粒砂と 10YR7/3にぶい黄橙 中粒砂のラミナ。
22. 7.5YR5/4にぶい褐 粘質ある細粒砂～シルト。風化花崗岩粒若干含む。この上面より志野皿が出土。
23. 10YR7/3にぶい黄橙 中粒砂。風化花崗岩粒主体の層。
24. 10YR6/3にぶい黄橙 粗粒砂。風化花崗岩粒を含む。
25. 10YR4/3にぶい黄褐 細粒砂。風化花崗岩粒を若干含む。
26. 10YR6/4にぶい黄橙 細粒砂。風化花崗岩粒を若干含む。
27. 10YR5/6黄褐 細粒砂。風化花崗岩粒を若干含む。
28. 10YR6/4にぶい黄橙 細粒砂～粗粒砂。花崗岩地山の風化がきわめて進んだ部分。

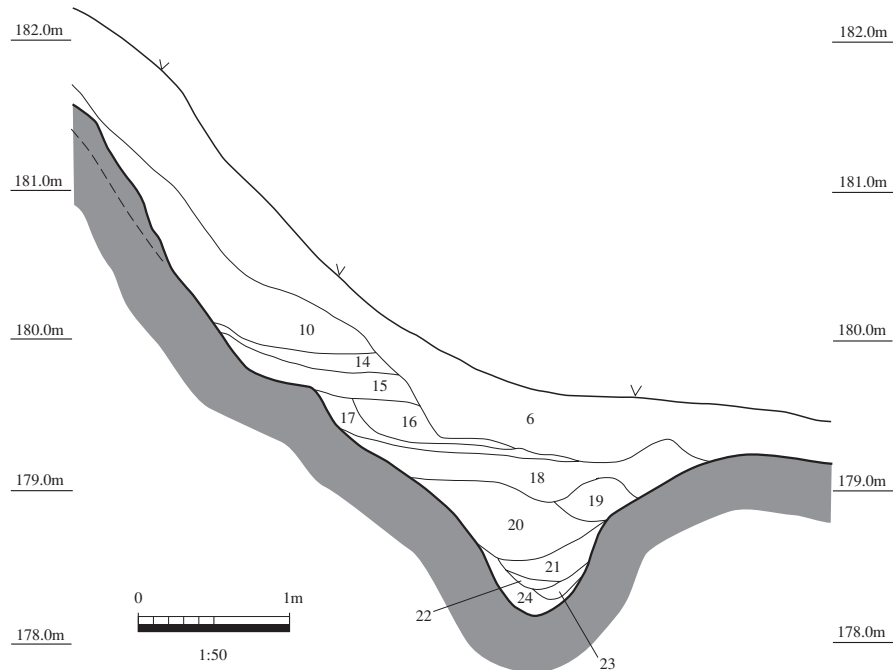
図 25 00B 区 A ライン土層断面図



(土層観察)

1. 10YR3/1黒褐 細粒砂～シルト。腐葉土多く含む表土。
2. 10YR4/3にぶい黄褐 細粒砂。風化花崗岩粒若干含む。
3. 10YR5/4にぶい黄褐 細粒砂。風化花崗岩粒若干含む。
4. 10YR6/4にぶい黄橙 細粒砂。風化花崗岩粒を含む。
5. 10YR5/3にぶい黄褐 細粒砂。
6. 10YR5/4にぶい黄褐 細粒砂 と 10YR6/4にぶい黄橙 極粗粒砂 のラミナ。
7. 10YR5/4にぶい黄褐 細粒砂。風化花崗岩粒含む。
8. 10YR7/3にぶい黄橙 粗粒砂。
9. 10YR3/1黒褐 細粒砂。炭化物多い。耕作土。
10. 10YR4/2灰黄褐 細粒砂。炭化物若干含む。
11. 10YR5/4にぶい黄褐 細粒砂 に 10YR4/2灰黄褐 細粒砂 がブロック状に入る。
12. 10YR6/3にぶい黄褐 細粒砂 と 10YR7/3にぶい黄橙 細粒砂 が斑状に混じる。風化花崗岩粒が主体となる《地山》
13. 10YR7/6明黄褐 細粒砂。風化花崗岩粒含む。
14. 10YR6/6明黄褐 細粒砂 と 10YR7/6明黄褐 細粒砂 が斑状に混合。風化花崗岩粒含む。
15. 10YR4/3にぶい黄褐 細粒砂 と 10YR4/2灰黄褐 細粒砂 が 斑状に混合。
16. 10YR5/3にぶい黄褐 細粒砂。風化花崗岩粒、炭化物含む。

図 26 00B 区 B ライン土層断面図



(土層観察)

- | | |
|------------------|--------------------------------------|
| 6. 10YR4/2灰黄褐 | 細粒砂。炭化物若干含む。 |
| 10. 10YR5/4にぶい黄褐 | 細粒砂。風化花崗岩を含む。 |
| 14. 10YR6/4にぶい黄橙 | 細粒砂。風化花崗岩粒若干含む。(白っぽい) |
| 15. 10YR5/4にぶい黄褐 | 細粒砂。風化花崗岩粒若干含む。(黒っぽい) |
| 16. 10YR6/4にぶい黄橙 | 中～粗粒砂。風化花崗岩粒主体の層(白っぽい) |
| 17. 10YR6/3にぶい黄橙 | 細粒砂。風化花崗岩粒若干含む。 |
| 18. 10YR4/3にぶい黄褐 | 細粒砂。風化花崗岩粒若干含む。 |
| 19. 10YR6/3にぶい黄橙 | 細粒砂。 |
| 20. 10YR5/4にぶい黄褐 | 細粒砂。風化花崗岩粒含む。 |
| 21. 10YR6/4にぶい黄橙 | 細粒砂と 10YR7/3にぶい黄橙 中粒砂のラミナ。 |
| 22. 7.5YR5/4にぶい褐 | 粘質ある細粒砂～シルト。風化花崗岩粒若干含む。この上面より志野皿が出土。 |
| 23. 10YR7/3にぶい黄橙 | 中粒砂。風化花崗岩粒主体の層。 |
| 24. 10YR6/3にぶい黄橙 | 粗粒砂。風化花崗岩粒を含む。 |

図 27 00B 区 SD01 横堀土層断面図

は上層からはほとんど出土せず、東端近くで下層の上面で美濃産の志野皿が出土した。およそ江戸時代初め頃には横堀の機能がほとんど停止していたことを示している。

切岸 横堀とともに平坦面周囲の急斜面を構成する。切岸の角度は 42° で、横堀底と肩部の高低差は5.4mである。また、SD01外側の上端残存部から肩部までの直線距離は約8mである。

切岸は、後世の削平などによって特にその下半部が改変を受けており、横堀との間に犬走り状の平場がみられる箇所もある。しかし概ね山城が機能した時期の形状を保っていると思われる。遺物は表面を覆う灰褐色土層から戦国時代～近世の土器・陶器などが出土した。

平坦面 平坦面は、北西から南東方向へ長軸をとる。その縁辺は緩いカーブとなっているが、概ね外側に上辺をとる台形といってよい。規模は長軸が11.4m、上辺となる縁辺の長さが2.9m、最奥部の縁辺(調査区北縁)が約9.5mである。なお調査区外ではあるが、この台形平場に東接する幅約2m長さ約4m以

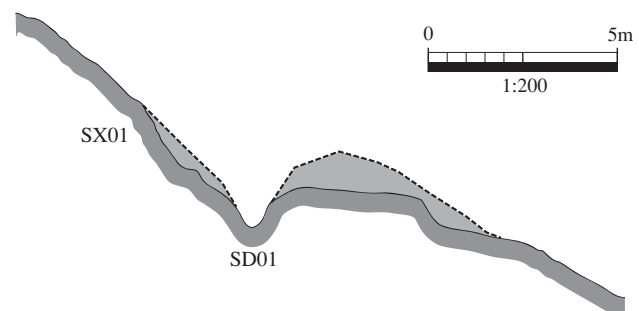


図 28 00B 区横堀想定図

上の方形の平場があって、帯曲輪状に北東方向へのびる。立地が南面しているので後世の削平という可能性もあるが、上方の曲輪への通路とも考えられよう。

ところで、台形平場は柵(SA01・02)付近に約30cmの段差があって、ここから南東の下段部分(約9.6m²)ではピットなどが全く確認されず、掘立柱建物(SB01～04)などは上段部分のみで展開していることがあきらかとなった。

(3) 掘立柱建物・柵

SB01 梁行1間×桁行4間の平場横断方向に長軸をとる掘立柱建物である。平面規模は梁行2.7m桁行7.1mで桁行柱間隔は北辺で1.5m・2.2m・1.8m・1.6mである。建物長軸はグリッド北から東へ62°振れる。柱穴は直径30～75cm深さ40～55cmである。

SB01の柱穴のうち北東隅のSK06からは土師器鍋、南辺にあるSK20からは大窯1期の天目茶碗のそれぞれ小片が出土した。図30によるとSB01の柱穴土層は全て柱を抜き取った状態にあったことを示しており、建物解体の時期に関わる可能性が高い。

SB02 梁行1間×桁行3間の概ね東西方向に長軸をとる掘立柱建物である。構成する柱穴の重複関係からSB01より後出と判明する。平面規模は梁行2.4m桁行5.8mで桁行柱間隔は2.5m・1.7m・1.6mである。建物長軸はグリッド北から東へ50°振れる。柱穴は直径30～90cm深さ20～47cmである。

SB03 梁行1間×桁行3間の概ね東西方向に長軸をとる掘立柱建物である。構成する柱穴の重複関係からSB02に後出することが判明する。平面規模は梁行2.3m桁行4.0mで桁行柱間隔は1.1m・1.1m・1.8mである。建物長軸はグリッド北から東へ57°振れる。柱穴は直径20～25cm深さ20～40cmである。

SB04 梁行1間×桁行2間の概ね東西方向に長軸をとる掘立柱建物である。構成する柱穴の重複関係からSB01に先行することが判明する。平面規模は梁行1.8m桁行3.1mで桁行柱間隔は1.4m・1.7mである。建物長軸はグリッド北から東へ60°振れる。柱穴は直径20～35cm深さ20～40cmである。

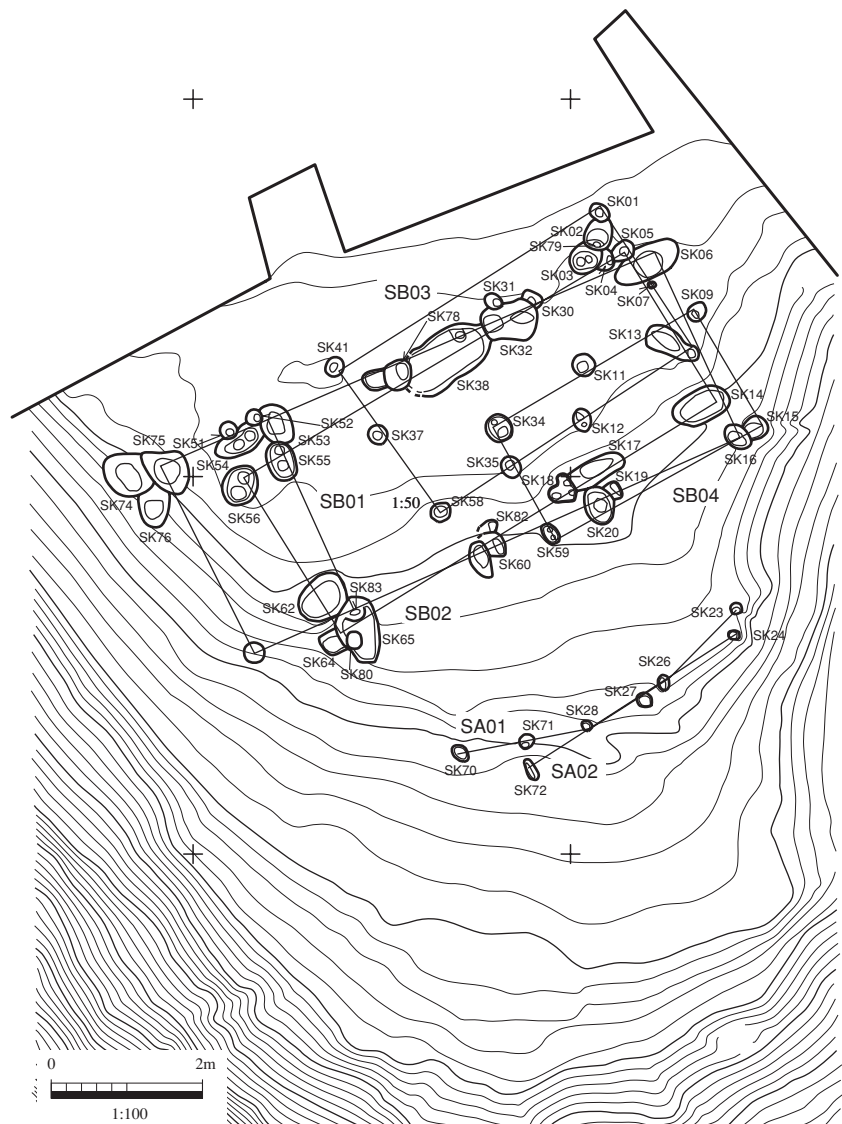


図29 00B区掘立柱建物・柵平面図(1:100)

SA01・02 掘立柱建物群から南東2.7mの地点にある。重複する2列の掘立柱柵で、緩く屈曲しながらのびるものをSA01とし、直線のをSA02とした。SA01は4間分確認された。全長4.2mである。一方SA02は2間で全長3.2mである。両者ともに掘立柱建物群とほぼ同じ方向にのびており、柱穴からは出土遺物がなかったものの建物と同時に存在した可能性が高いと判断される。

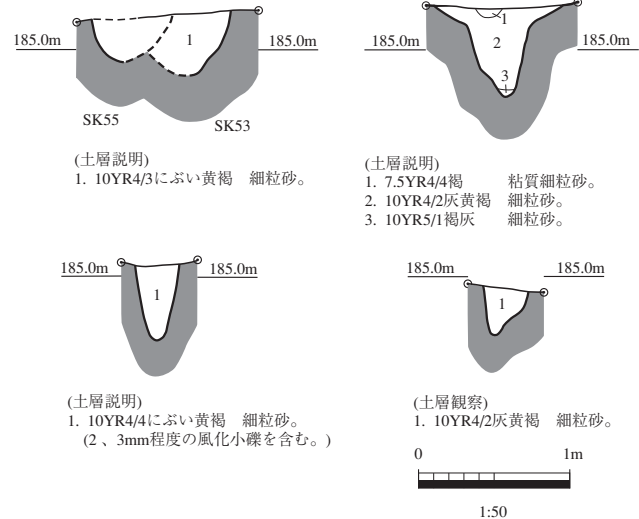


図 30 00B 区 SB01 柱穴土層断面図

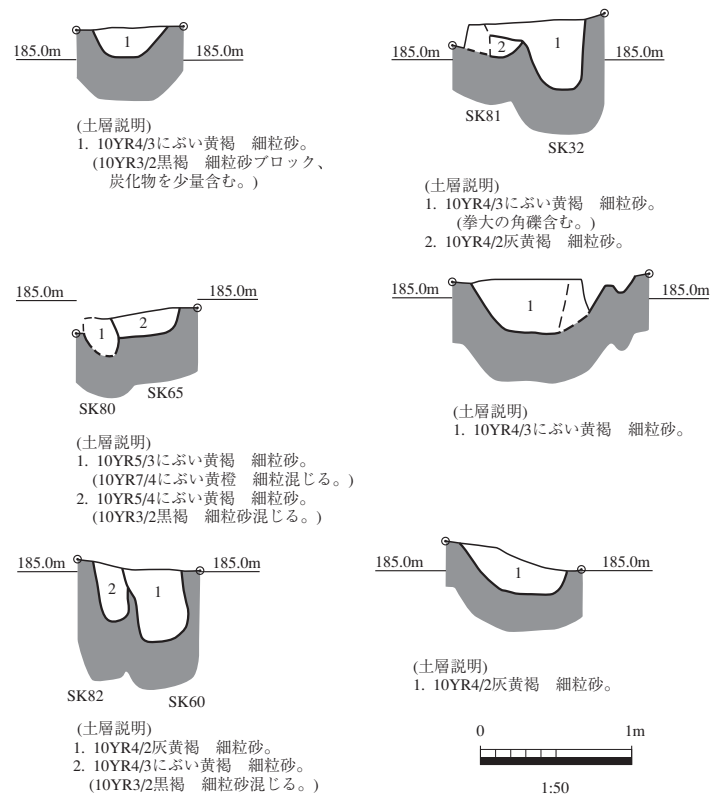


図 31 00B 区 SB02 柱穴土層断面図



写真 4 00Bc 区調査開始時の状況
(北東から)



写真 5 00Bc 区遺構確認状況
(北東から)



写真 6 切岸 SX01、横堀 SD01 と人物の比較
(南東から)

第3節 01A区

(1) 調査区概観

調査前の状況 01A区は、主郭部のある尾根から分かれ、北北東から南南西に延びる舌状の尾根上に位置する。調査前の状況は、全域が竹林となっており、植林された形跡はなかった。人家近くになる下位まで大小の平場がみられ、近年まで農作業に使用されていたと思われる小規模な横穴が斜面腹に散見された。調査区の範囲は南北約57m、東西の最大幅が約25m、標高は最も高い北側で203m、最も低い南側で180mを測る。調査区内には、尾根中央に沿って広がる大規模な平坦部分が4カ所あり、上位より平場1～4と呼称した。遺物は、平坦部とその下の斜面部を合わせた部分で区切り、それぞれ平場1～4としてとり上げた。そのため本文も、平坦部とその下位の斜面部を合わせて、平場1～平場4として記述する。

土層 尾根筋に南北方向の土層ベルト（中央ベルト）を設定し、各平場ごとに中央ベルトに直交する東西方向のベルトを設定した。基本層序は、平坦部は腐食土と竹根を多く含む黒褐色砂や部分的に灰黄褐色砂が20～40cm程堆積し、すぐに地山である花崗岩の岩盤やその崩壊土である浅黄橙色砂になる。斜面部は、崩落を起こしている肩部とそれが落下した下辺部分に複雑な堆積がみられ、1～1.5m程の厚さをなしている。また崖下の所々には、崩落で溜った土によって形成された狭小な平坦面が幾段かみられる。

調査は、排土処理の関係で北側の高い部分から南側に低い部分に向かって進め、平場4を除き地山面で遺構を検出している。平場4では、SD10の南西肩を黄褐色砂中と地山面で検出し、黄褐色砂を除去した後下層遺構を地山面で検出した。

(2) 平場1

平場1は、北東側が調査区外となる。平坦部は、

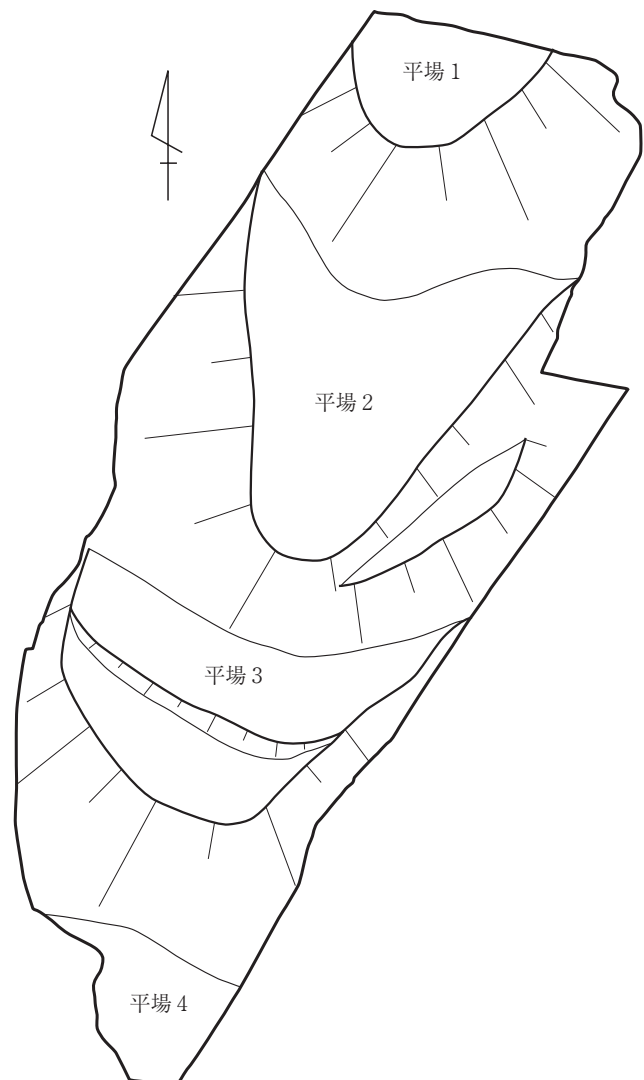


図32 01A区調査前状況概略図



写真7 01A区調査開始時の状況（北から）

南北約 6 m・東西最大幅約 12 mを測り、南側を頂点とする三角形を呈している。斜面部は、南西側は平坦面が一段あって、やや急斜面となっており、南東側は幾段かの平坦面をもち階段状をなす。両斜面部とも、北側に向うと目立った平坦面もなくそのまま丘陵斜面に続いていく。高低差は、南西側・南東側とも約 4.5 mを測る。平坦部・斜面部とも、西側には遺構はなく、東側に集中している。ただこの東側の遺構には、いくつかの江戸期以降の改変が含まれていると考えられる。また SX01 の上位では、斜面に平行する 20 個の小型の土坑群が検出された。この土坑群は、ほぼ同一レベル上に展開し、柵の柱穴列の可能性があると考えられたが、連続的には並ばず、ひとつの遺構としての認定はできなかった。時期も不明である。

SA01 SA01 は遺構が集中している平場 1 の、南西辺に沿って走る柵である。柱穴は長径 20 ～ 30cm、深さ 5 ～ 20cm を測る小規模なもので、北東—南西方向に 5 本分並ぶ。柱通りはあまり直線的ではないが、柱間は 70 ～ 80cm を測る。また直下では、SA01 に沿って幅 20cm の浅い溝 SD02 が 2 m 程にわたり検出され、柵の付属施設である可能性も考えられたが、さらにその下の大型攪乱土坑に伴うものかもしれない。

SD01 平場 2 から南東側斜面部の SX01 の西を通り、南西側斜面部にある平坦面に至る、長さ約 4.8 m・最大幅約 1.5 m・深さ約 60cm の溝で、北西に向かうに従い浅くなり収束する。

SX01 平場 1 の南東側斜面部の下位にある平坦面で検出された、隅丸方形を呈する竪穴状の遺構である。遺構検出時には斜面の途中にある平坦面の一部であるとの認識で掘削していたため、埋土上部を除去した時点でようやく確認している。遺構は、南東側が削り取られたように斜面となって急激に落ち込んでいるが、現状では東西 3.7 m・南北 1.5 m・深さ 40 ～ 50cm を測る。北辺の下端に沿った部分で、幅 30cm・深さ 10 ～ 20cm の周溝状の溝が検出され、底面からやや浮いた状態で播鉢を主とした土器群が出土している。

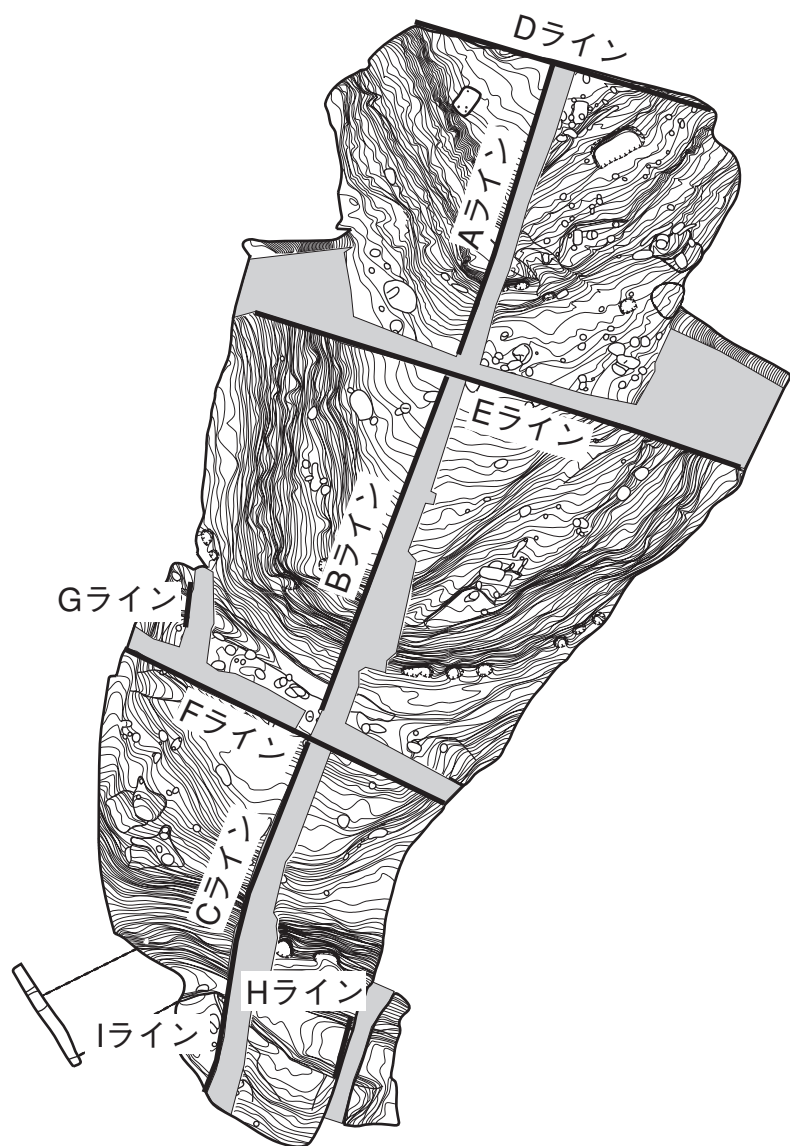


図 33 01A 区土層断面ライン配置図

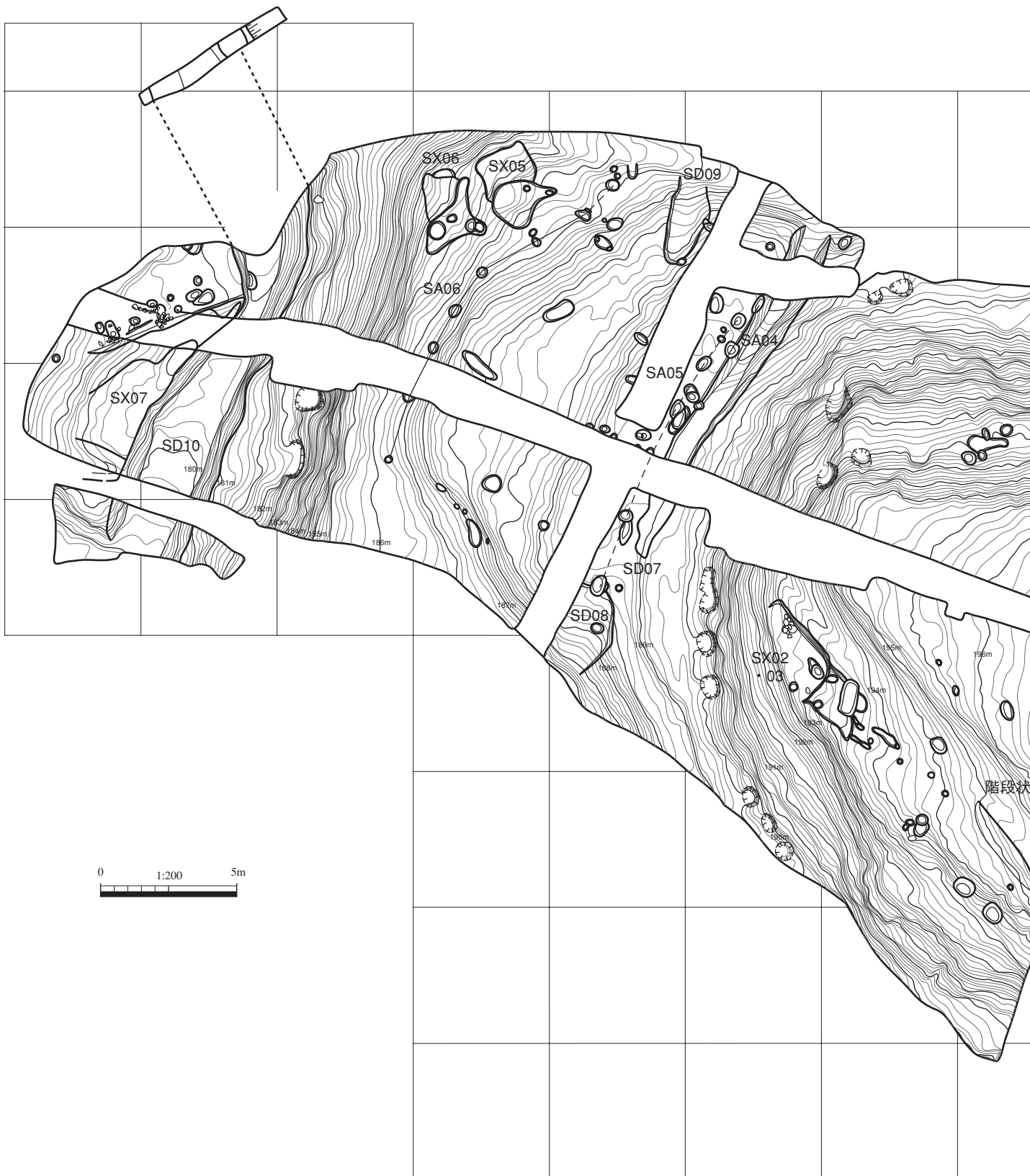
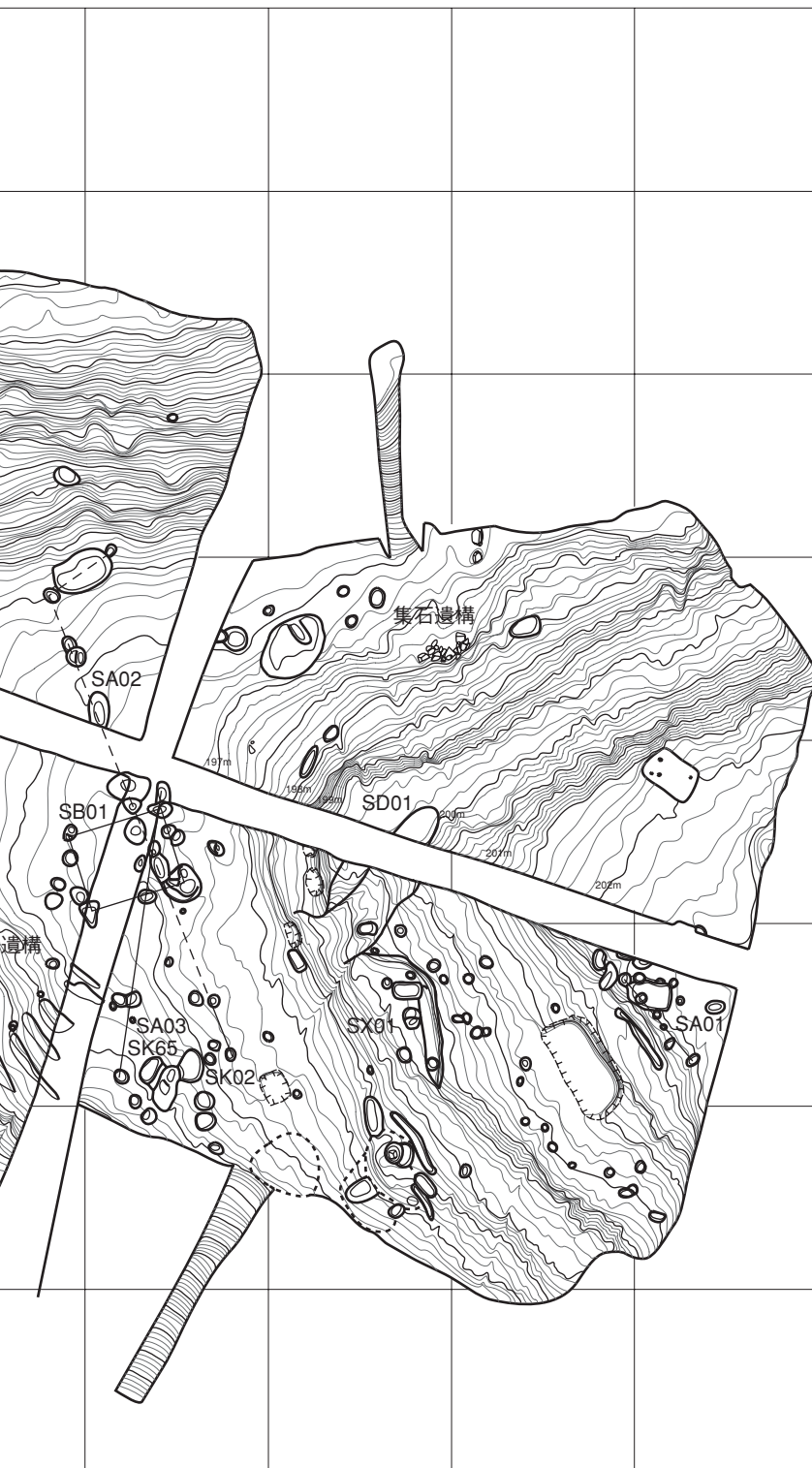


図 34 01A 区遺構全体図 (1:200)



(2) 平場 2

平場 2 の平坦部は、南北約 14 m・北側約 17 m・南側 4 m を測り、平場 1 の斜面部が南西に突出している分、北側が凹み、南を指す矢印状の形状をなす。平坦部は北から南にかけて約 2 m の高低差を有する。西側斜面部は、平坦部から調査時まで通路として使われていた狭小な平坦面まで約 6 m の高低差があり、わずかな一段の平坦面以外は、崖様の急勾配をなしている。さらに通路より下では、斜面はそのまま丘陵斜面に続いていく。南東側斜面部には、SX03 が位置する比較的広い平坦面やいくつかの狭小な平坦面がある。この

SX03 が造られる平坦面はそのまま、平坦部の南端を廻り、西側斜面部の狭小な平坦面に続いていくようである。またこの平坦面の途中の平坦部南端付近には、西側に折れながら南へ降下する幅の狭い通路がある。この通路は最近まで使用されていたもので、側面には横穴が穿たれている。平坦面より下位の南東側斜面部は急勾配となり、丘陵斜面に続いていく。

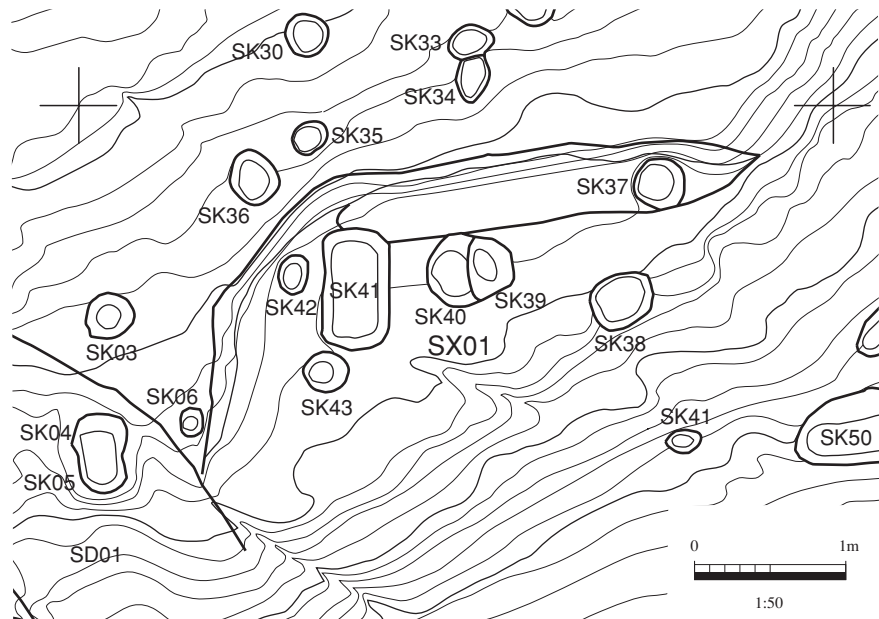


図 35 01A 区 SX01 平面図

SA02 平坦部の北東にあ

り、平場 1 の南西側斜面部の下辺に沿うように東北東—西南西方向に並ぶ柵である。柱穴は長軸 50～100cm・深さ 10～60cm を測り、5 本分が確認されている。柱間は 1.7～1.8m を測る。SA02 はさらに、階段状遺構から続く通路と想定される部分を挟み、SK68・SK76 まで延伸する可能性がある。また南西端の SK100 から、長軸 150cm・短軸 105cm・深さ 40cm を測る大型の土坑 SK101 を挟み、SK136 まで直角に折れ曲がることも考えられる。さらに、SK99→98、SK97・96、SK111→110、SK58→58 と、各々近接した 2 個の土坑があり、造り替えが想定される。

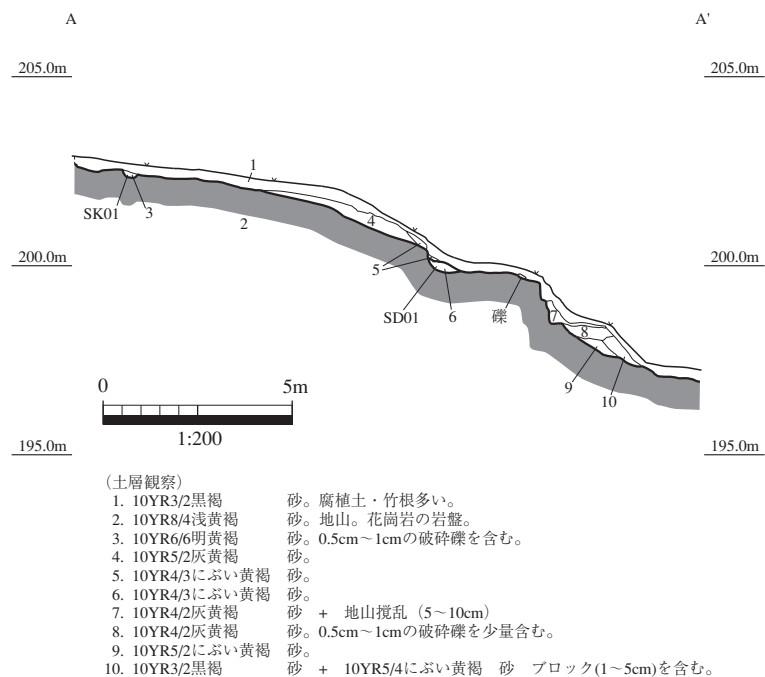


図 36 01A 区 A ライン土層断面図

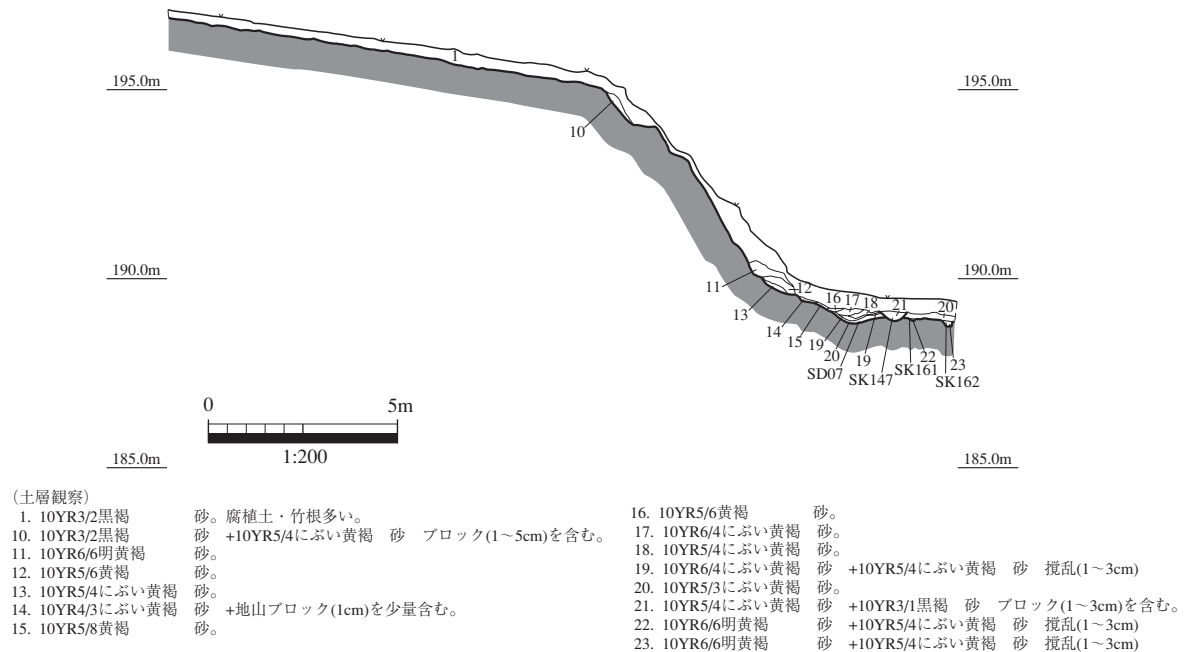


図 37 01A区Bライン（平場2～3）土層断面図

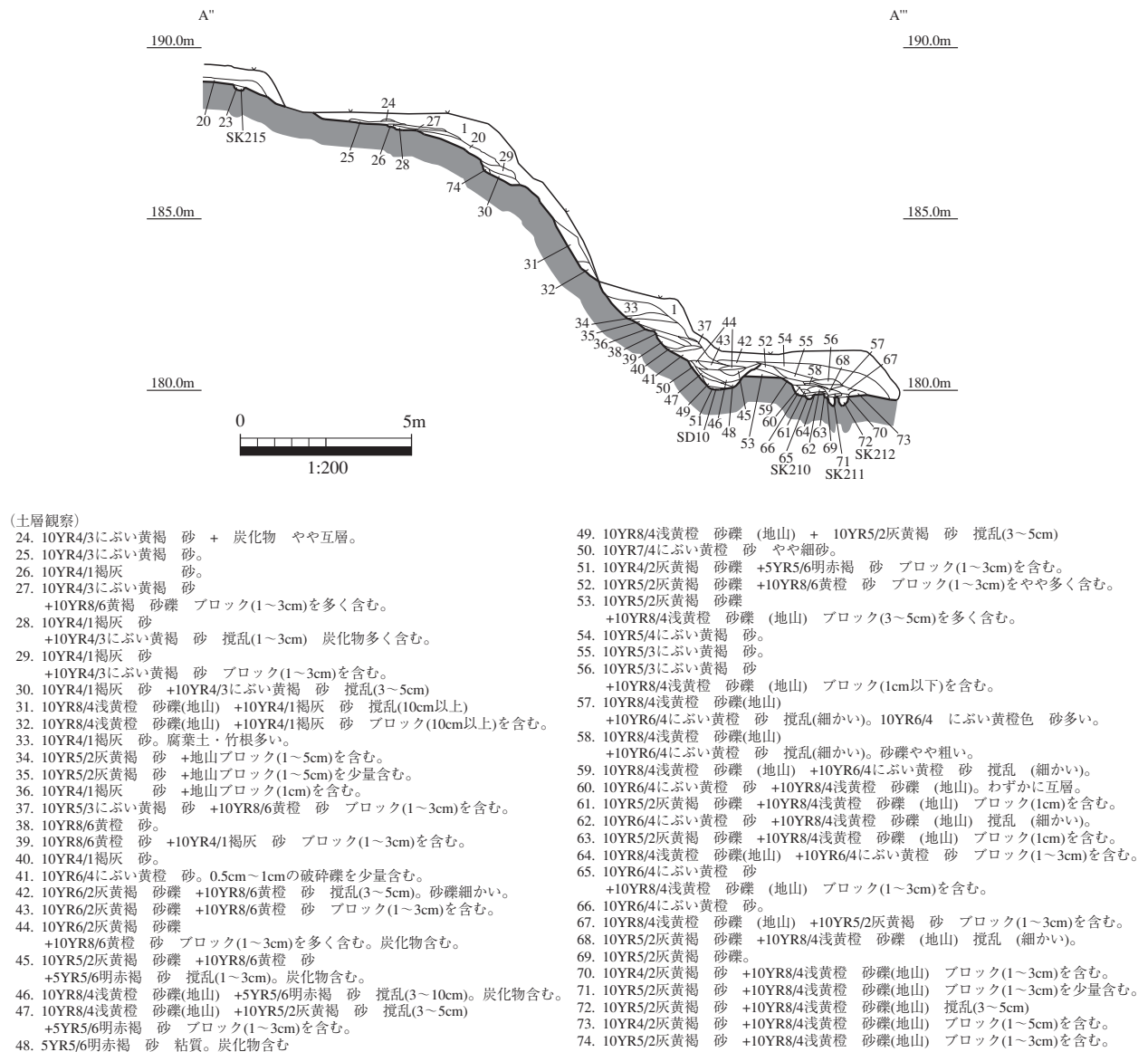


図 38 01A区Cライン（平場3～4）土層断面図

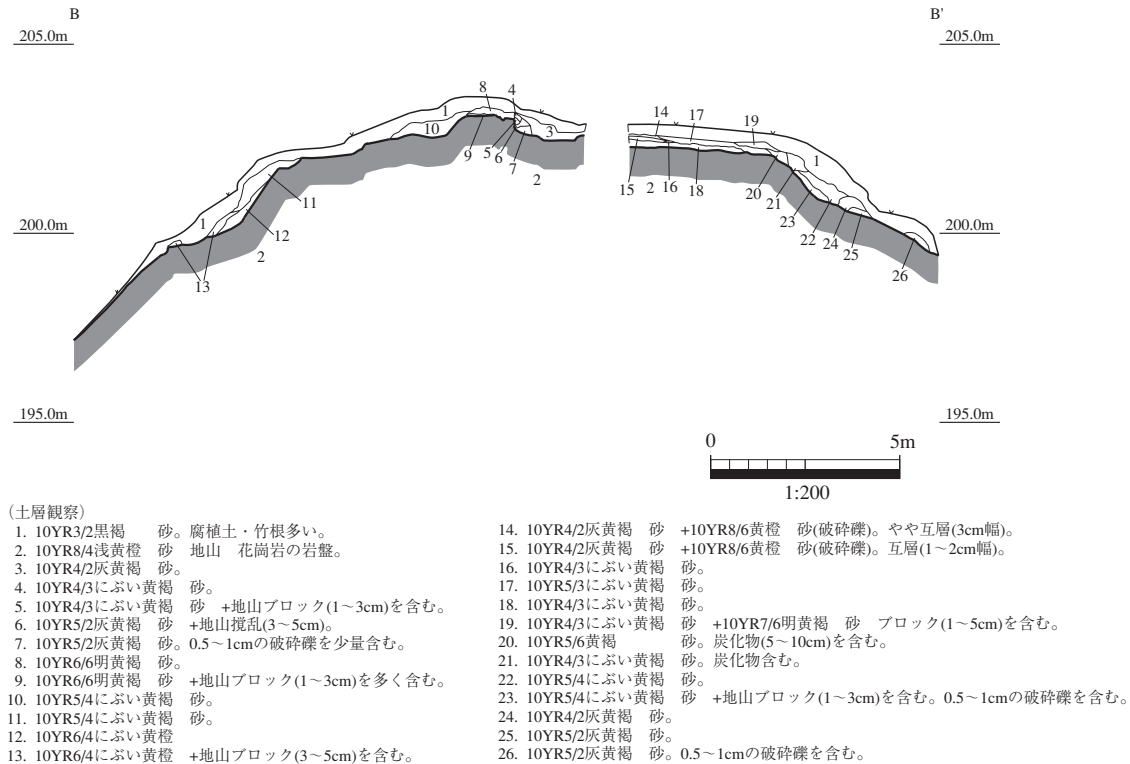


図 39 01A 区 E ライン (平場 2) 土層断面図

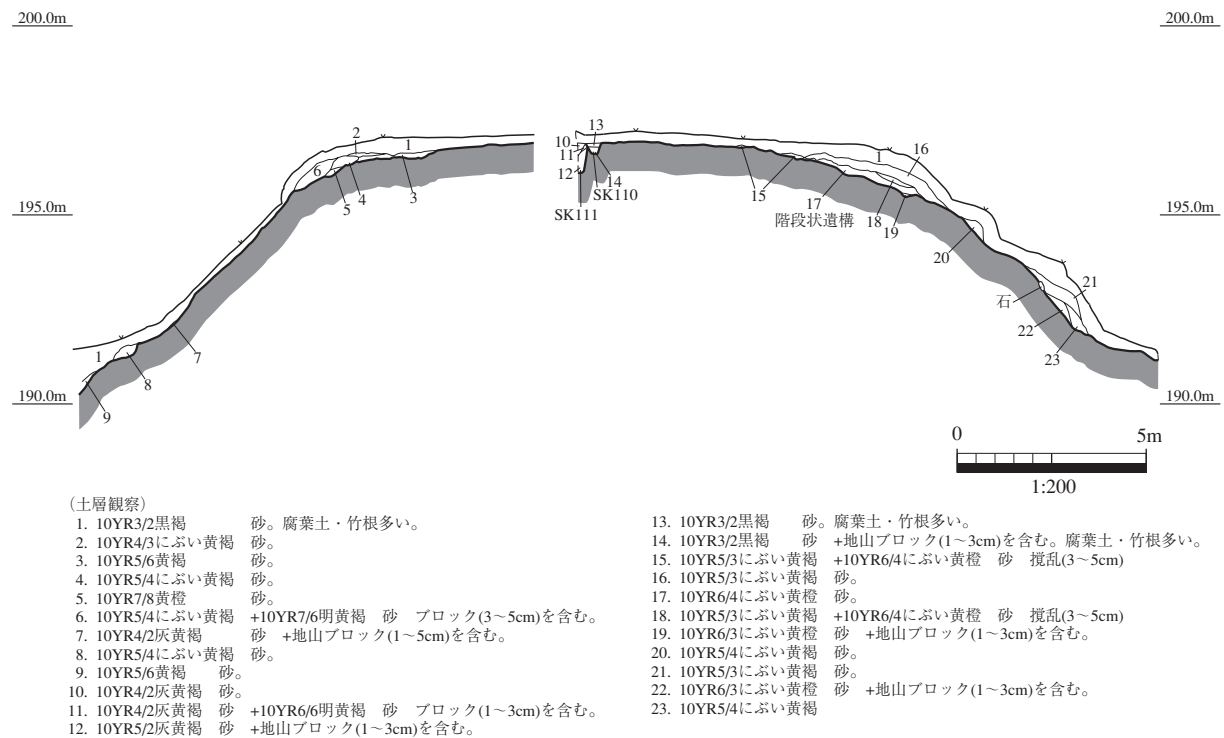


図 40 01A 区 F ライン (平場 3) 土層断面図

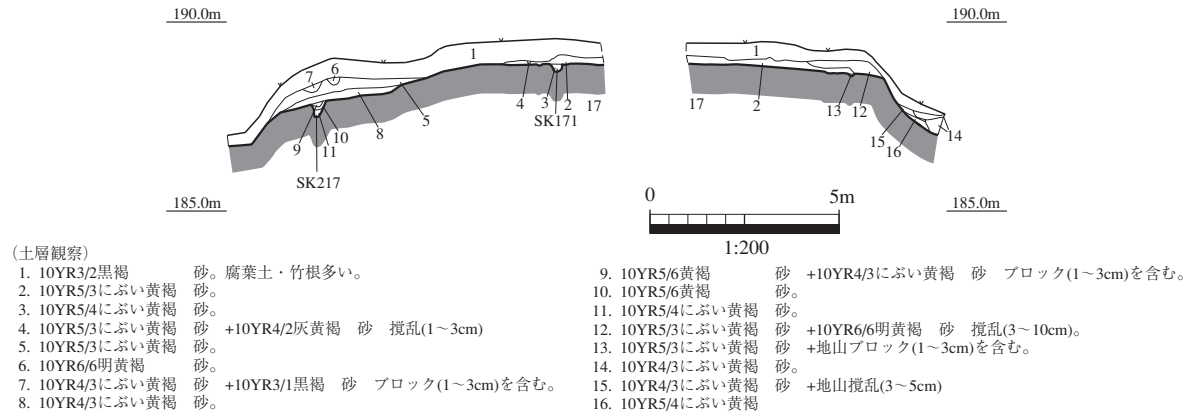


図 41 01A区 Dライン(平場1) 土層断面図

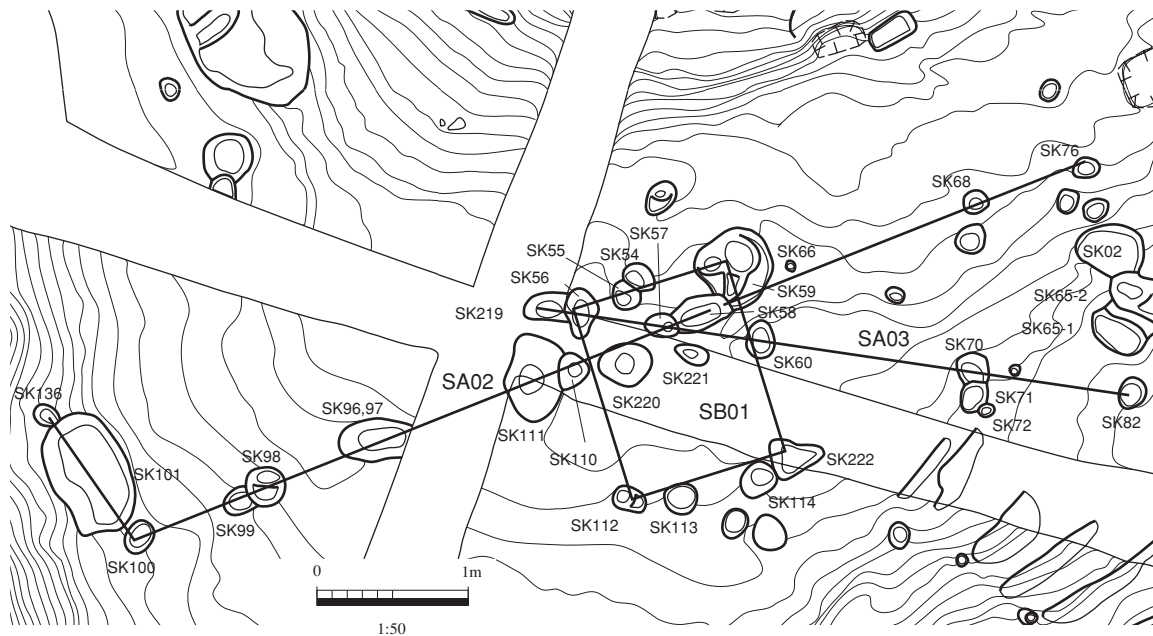


図 42 01A区 SA02 平面図

SA03 SA02と交差するような柵で、4本分の柱穴が確認されている。柱穴は長径30~50cm・深さ10~40cmを測る。柱間はSK219・60・70間が2.8m、SK70・82間が2.2mを測り、SA03もSA02と同様、通路を挟んで延びている。

SB01 SA02と平行するように検出された柱穴群で、柱間が南北2.6m・東西2.1mを測る、1間×1間の建物になる。柱穴は、大きき45~100cm・深さ30~50cmを測る。

SX02・03 平坦部より一段下位の、南東側

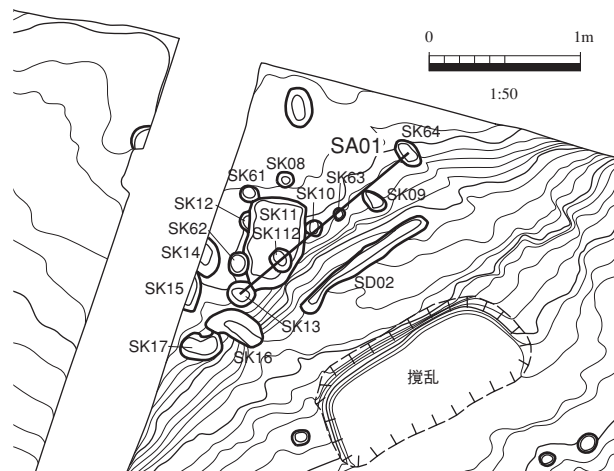


図 43 01A区 SA01 平面図

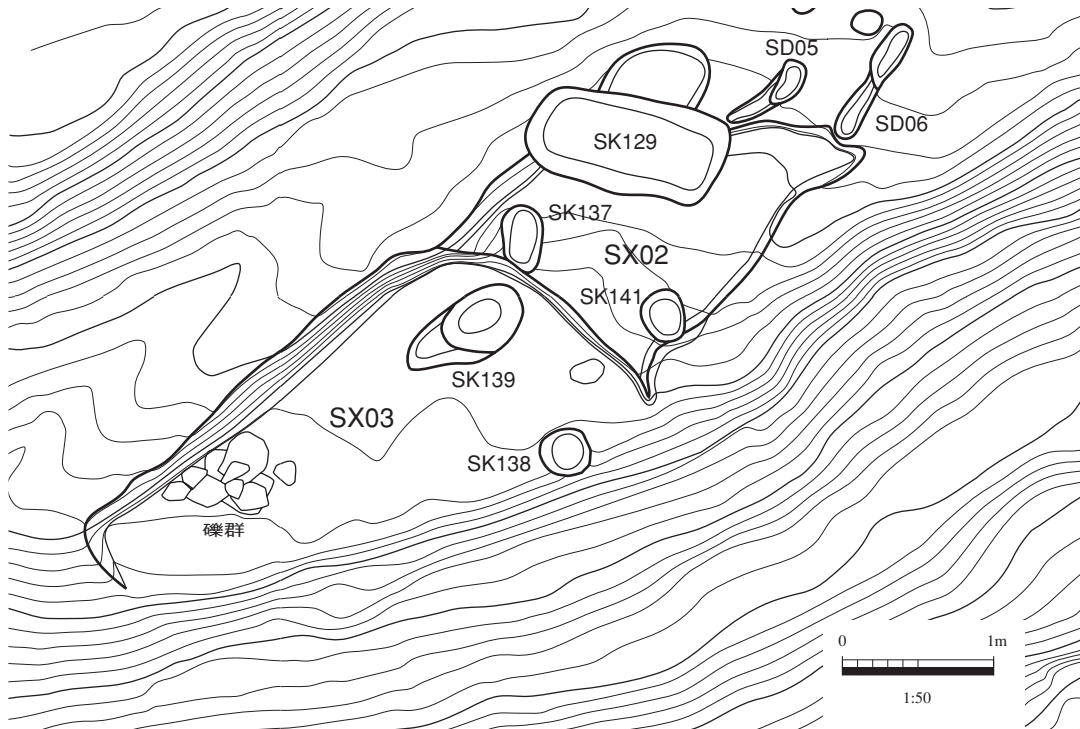
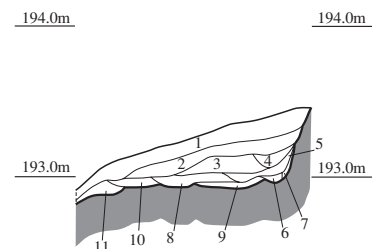


図 44 01A 区 SX02・03 平面図

斜面部にある広い平坦面で検出された、方形及び隅丸方形を呈する竪穴状遺構である。南東側は削り取られたような急斜面になっているが、現状で北東―南西3.5m・北西―南東1.8m・深さ50～70cmを測る。北東辺側には底面より一段高くなった不定形な落ち込みが、2m程の長さで続いていく。SX03の埋土上部には、にぶい明黄褐色砂・明黄褐色砂を埋土とするSX02があり、SX03上から斜面にかけて落ち込むように続いていた。SX03の埋土には2層の炭化物を多く含む層があり、間層を挟んで上層と下層に分かれる。上層は山側から流れこむように堆積しており、下層は北東側2/3程の範囲に堆積していた。この下層の炭化物を多く含む層より、青磁碗や壺・播鉢が出土している。また南西にややよった位置に、底面からやや浮いた状態で10個の10～40cmの花崗岩の角礫・円礫が検出されている。また同様の角礫が1個、北東で出土している。

階段状遺構 SA02・03、SB01の南東側で検出された遺構で、長径幅1～4m・高低差10～30cmの段が6段続く。段は斜面に沿って平坦部より下に向かって降りていくが、最下段の幅が長いものは南に斜行し、SX03のある平坦面へと続いていく。階段のステップとなる部分の幅は20～80cmと不規則で、谷側の肩は磨滅して丸くなっている。またステップの山側端には、長径方向に細い溝が走っている。さらに、主に遺構の右辺に沿うように4個の小土坑がみついている。

集石遺構 平坦部の北西で、平場1の南西側斜面に挟り込まれたような部分で検出された集石群である。



(土層観察)

1. 10YR7/6明黄褐色 砂 (やや細砂)。
2. 10YR4/3にぶい黄褐色 砂。炭化物(1cm以下)多く含む。
3. 10YR8/6黄褐色 砂。破碎礫(0.5cm以下)を含む。
4. 10YR7/4にぶい黄褐色 砂。
5. 10YR2/1黒 砂(炭化物層)
- +10YR7/4黄褐色 砂ブロック(1～3cm)を含む。
6. 10YR2/1黒 砂(炭化物層)。
7. 10YR4/1褐灰 砂。
8. 10YR8/6黄褐色 砂
- +10YR2/1黒 砂(炭化物層)攪乱(3～5cm)。
9. 10YR7/4にぶい黄褐色 砂。
10. 10YR5/3にぶい黄褐色 砂
- +10YR2/1黒 砂(炭化物層)ブロック(1cm)を含む。
12. 10YR7/4にぶい黄褐色 砂
- +10YR2/1黒 砂(炭化物層)ブロック(1cm以下)を少量含む。

図 45 01A 区 SX02・03 土層断面図

集石遺構は、15～40cmの大きさの、18個の花崗岩類の角礫及び円礫で構成されており、その中より1点石臼が出土している。出土状況は、斜面に沿うように、地山面上～30cm程浮いた状態で出土する。また谷側でも同様の石が2個検出されている。

SK65・SK02 平坦部の南東部で検出された土坑で、周囲では炭化物が検出されている。SK65は炭化物を多く含む褐灰色砂を埋土としており、長径75cm・短径50cm・深さ8cmを測るSK65-1と長軸120cm・短軸50cm・深さ25cmを測るSK65-2の2つの長方形または楕円形の土坑からなっている。SK65-2の北辺に接するように、常滑甕の底部が正立した状態で出土している。両遺構の先後関係は、ごく一部分のみでの観察であるので、確認できなかった。

盛土1・2 盛土1は、平坦部の北東で平場1の南東斜面下端に、盛土2はそのすぐ南に位置する。当初は盛土をされた何らかの遺構であると考えたが、調査の結果、地山が削り残されて風化し脆くなったものと結論づけた。盛土1は約2×2.5mの範囲で、高さ約1.5mの部分が斜面からやや突出して残っており、付近に土坑・溝が集中する。また上部にあるSK49の上層から、30cm程の花崗岩の角礫が出土している。盛土2は、盛土1の基部のみが残存したものと考えられ、約1.8×1.5mの範囲で検出されている。

(3) 平場3

平坦部は、北東側が幅17m、南西側が幅11m、北東—南西幅が10mを測り、台形を呈している。中央には平坦部の長軸に平行するような50～60cmの段差があり、南側に落ちている。斜面部は、南側斜面部は上端部がゆるやかな勾配で、それ以下は約7mの高低差をもって平場4の平坦部まで急激に落ちていく。この斜面部は、現状では北西—南東方向に直線的に約18m延びており、人為的な改変を伴う切岸であると考えられた。西側斜面部は、調査時までの通路と平坦部が約1mの高低差をもっており、さらに西側は丘陵斜面に

続く。東側斜面部は、途中にゆるやかな勾配をもつ平坦部があり、それより下位は丘陵斜面になる。

SD07 平坦部北東部の平場2の斜面下端を、北西—南東方向に直線的に走る溝で、幅1～1.5m・最大深が60cmを測り、断面はU字もしくは逆台形を呈する。溝は東に向うに従い次第に浅くなり、調査区中央よりやや東で収束して途切れる。北西側は、現在の通路となり、途切れるかさらに延びていくのかは不明であった

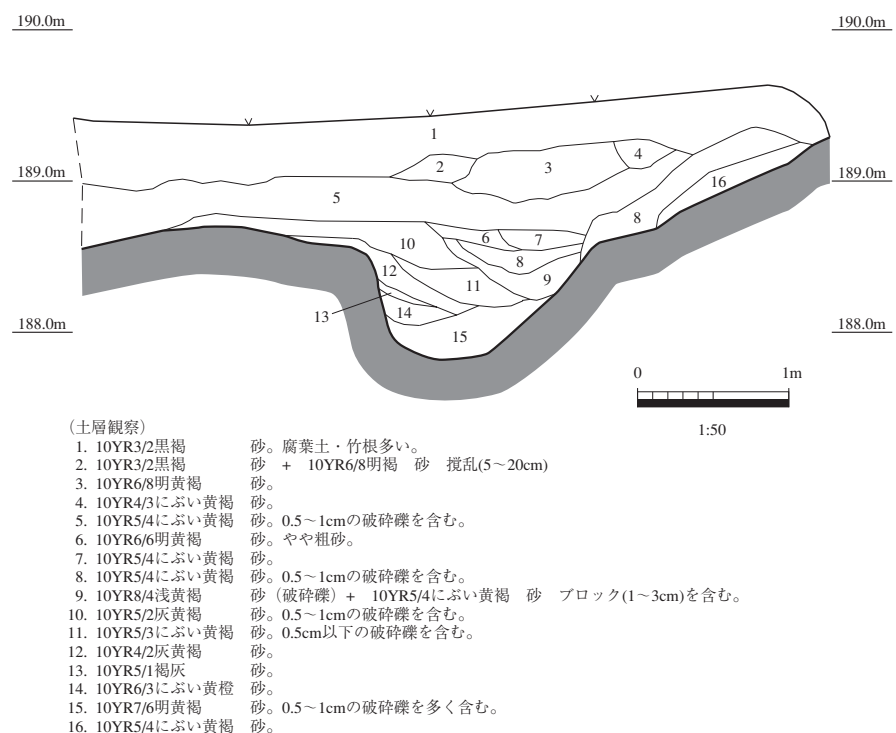


図46 01A区SD07土層断面図

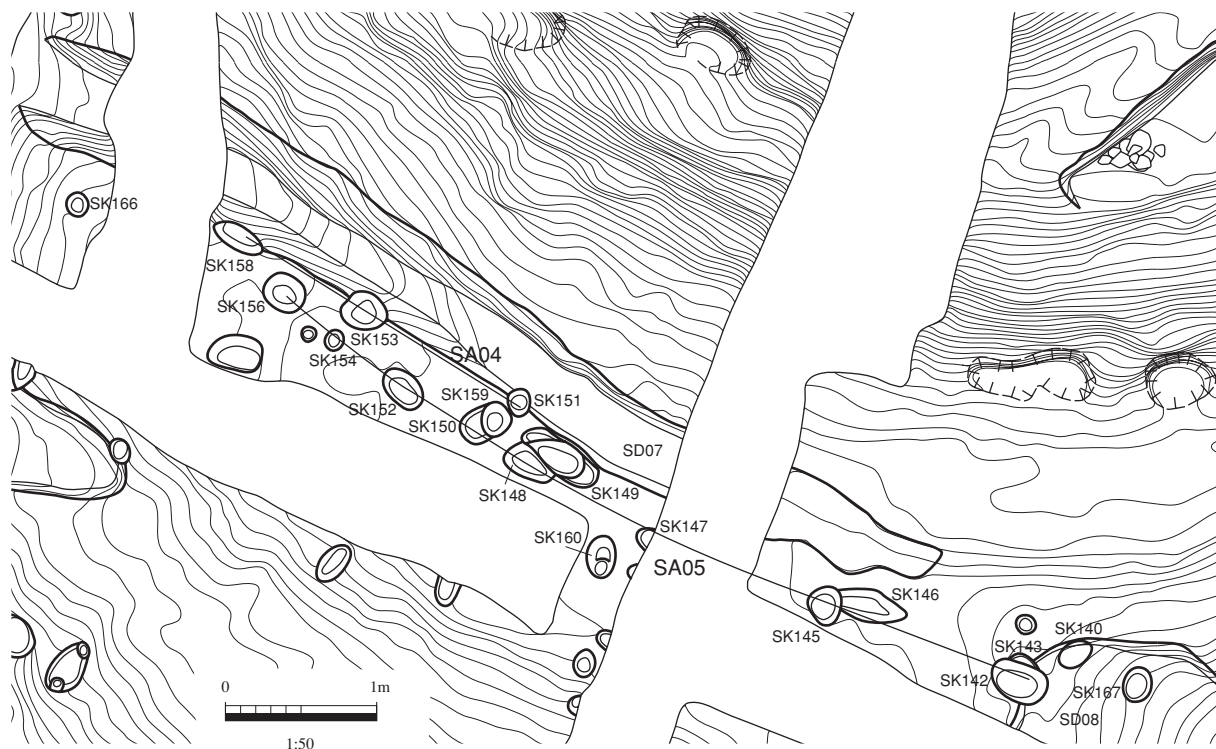


図 47 01A 区 SA05・SD07 平面図

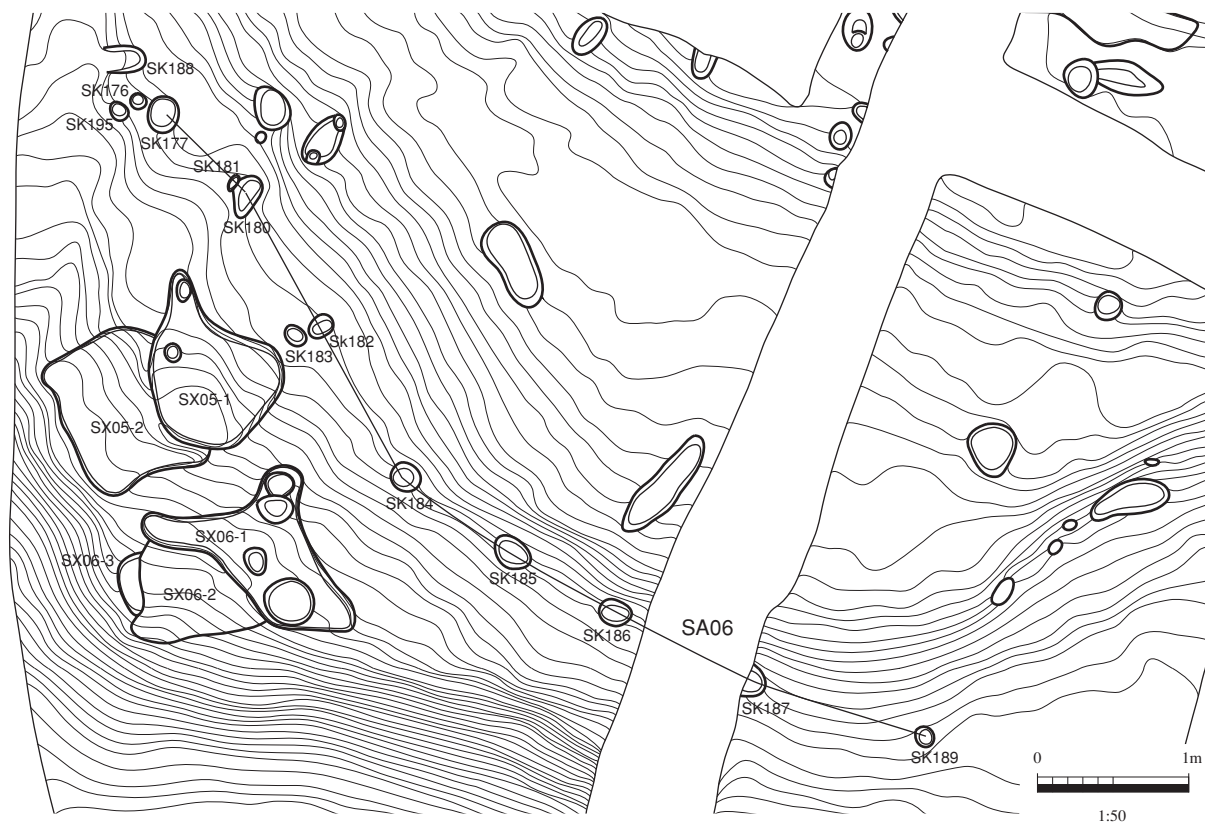


図 48 01A 区 SA06 平面図

ため、平場2の西側斜面のトレンチを下方に10m程延長して確認したが、その部分には延伸しないようである。北西の最も深くなるあたりで、溝上層より土器・花崗岩角礫が出土している。調査時点では溝として捉えたが、登降坂するための通路の役目を果たしていた可能性も考えられる。

SD08 SD07の収束地点より2m南東に位置する、幅約3m・深さ30～60cmの土坑状の溝で、北西—南東方向を向く。南東側は斜面下方になり不明瞭で、全体で3m程が確認できただけである。上層では、牛骨や陶磁器がまとまって出土したSX04が確認されている。

SD09 平坦部下段の西部を、東西に走る幅1.5m。深さ20～40cmの土坑状の溝で、3m程確認されただけで収束する。西側は現在の通路で不明瞭になる。この遺構もSD07と同様に、平坦部への通路としての機能も考えられる。

SA04・SA05 SD07の南肩に沿って検出された柵である。SA04は肩部上にあり、長径30～70cm・深さ20～40cmの柱穴が、2～2.2m間隔で3本分並ぶ。SA05は、SA04の南側を平行して、わずかに湾曲しながらのびる柵で、長径30～60cm・深さ20～40cmの柱穴の柱穴が5本分並ぶ。柱間は2～2.2mを測るSA04は、SD07と08の途切れ部分を越え、SK142まで延びる可能性があるが、この部分の柱間は2.6～2.8mとやや広くなる。

SA06 南側斜面部の、平坦部から急激に落ちる切岸状の落ち込みまでの緩やかな勾配のところで検出された柵である。柱穴は平坦部の形状に沿うように、ゆるやかに弧を描きながら7本分並ぶ。柱穴は長軸20～50cm・深さ15～30cmを測り、柱間は1.6～2.2cmとややばらつく。また北西端のSK180から、やや屈曲しながらSK177に続いていく可能性もある。

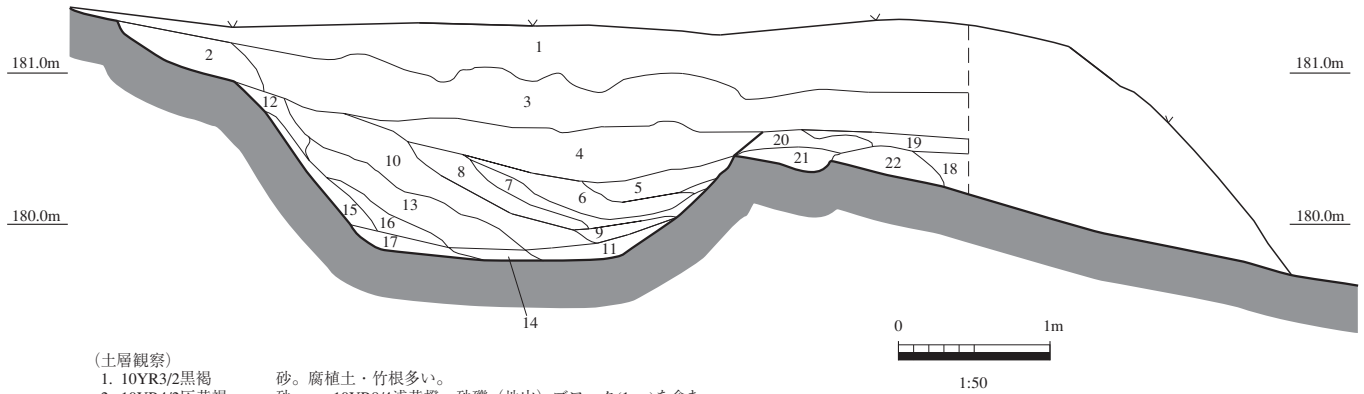
SX05・06 SA06の南西側で、と同じ緩斜面上で検出された長径3m程・深さ10～20cmの不定形な土坑である。埋土は、地山土に類似するしまりのない堆積土で、このため風倒木の痕跡であると考えられた。

(4) 平場4

調査区西側に不明落ち込みのSX07があり、その埋没後に平場3南側斜面部下端に沿ってSD10が掘削される。SD10の南は2m程の平坦部があるのみで、さらにその南は急激に落ち込み、丘陵斜面に続く。平坦部の東側は幅1.5m程の溝状の挟り込みがみられ、それより東は丘陵斜面となって急激に落ちていく。

SD10 幅3.2m・深さ90cmを測り、断面形が逆台形の溝である。前述のしたように平場3南側斜面部下端に沿って延びる。ただ調査区西側では、幅が1.2m・深さ40cmと狭く浅くなり、さらに西では幅は広くなるが、南西方向に屈曲していく。このSD10の方向を確認するために、6m程南西にトレンチを設けたところ、その位置までは継続していくことが判明した。また、北側は急に落ち込んでいく。さらにSD10を切って、常滑甕が据えられた土坑が検出された。溝底面からやや浮いた状態で掘り鉢や内耳鍋が出土している。

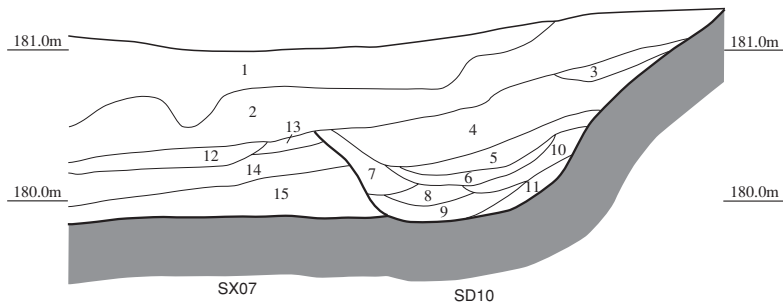
SX07 平坦部西側で検出された深さ30～50cmの落ち込みである。埋土はにぶい黄褐色砂が堆積し、部分的に炭化物・焼土片が出土している。また東側の壁面沿いに、10～30cmの花崗岩と思われる円礫・角礫がまとまって出土している。



(土層観察)

1. 10YR3/2黒褐
2. 10YR4/2灰黄褐
3. 10YR4/2灰黄褐
4. 10YR5/2灰黄褐
5. 10YR5/2灰黄褐
6. 10YR5/2灰黄褐
7. 10YR5/2灰黄褐
8. 10YR5/2灰黄褐
9. 10YR5/2灰黄褐
10. 10YR5/2灰黄褐
11. 10YR8/4浅黄橙
12. 10YR6/4にぶい黄橙
13. 10YR8/4浅黄橙
14. 10YR5/2灰黄褐
15. 10YR5/3にぶい黄褐
16. 10YR8/4浅黄橙
17. 10YR5/3にぶい黄褐
18. 10YR8/3浅黄橙
19. 10YR4/3にぶい黄褐
20. 10YR5/4にぶい黄褐
21. 10YR5/4にぶい黄褐
22. 10YR5/4にぶい黄褐
23. 10YR5/4にぶい黄褐

図 49 01A 区 SD10（H ライン）土層断面図



(土層観察)

1. 10YR3/2黒
2. 10YR6/4にぶい黄橙
3. 10YR6/4にぶい黄橙
4. 10YR5/4にぶい黄褐
5. 10YR6/3にぶい黄橙
6. 10YR4/3にぶい黄褐
7. 10YR4/3にぶい黄褐
8. 10YR4/3にぶい黄褐
9. 5YR6/8橙
10. 10YR7/3にぶい黄橙
11. 10YR6/3にぶい黄橙
12. 10YR5/3にぶい黄褐
13. 10YR5/3にぶい黄褐
14. 10YR5/2灰黄褐
15. 10YR5/3にぶい黄褐
16. 5YR8/1灰白

図 50 01A 区 SD10・SX07（I ライン）土層断面図



写真 8 01ASD10（H ライン、図 49）
土層断面（西から）



写真 9 01ASD10（I ラインベルトの反
対側面）土層断面（西から）

第4節 01B区

(1) 調査区概観

調査前の状況 01B区は、主郭部から南方へ延びる尾根に設定した。この尾根の東側には大観音城跡との間に大きな谷が入っている。尾根筋は末端近くが急傾斜となる以外は全体的に緩やかで、調査区の範囲はほぼ全域が畑であった。調査区の東縁から南縁にかけて、帯曲輪状の平場があり、高低差約4～6mの急斜面で隔てられた上部に平場群があった。下方の市街地から上ってくる里道は、調査区内では上部平場群の中央を直進し、調査区北西隅に至る。里道はそこから主郭部の真下を通り、その背後から山中へと抜ける。上部平場群については、尾根筋になる調査区内のほぼ中央に土層

土層 表土層は黒色の耕作土と灰褐色砂層からなり、調査区全域で地山を覆っている。しかし調査当初全て地山と判断していた各平場で、地山の風化花崗岩と異なる粘質の強い土層が帯状にしかも大規模に展開しているのが確認され、トレンチ調査をおこなったところ、層中から遺物が出土した。この強粘質土層が人為的な埋土であることが判明したのである。したがって埋土による平場造成以前に遡る施設があったことになり、これをⅠ期として区分し、平場の上に施設がつくられた時期をⅡ期として報告する。

遺構概観 Ⅰ期は埋土下の通路状の遺構である。

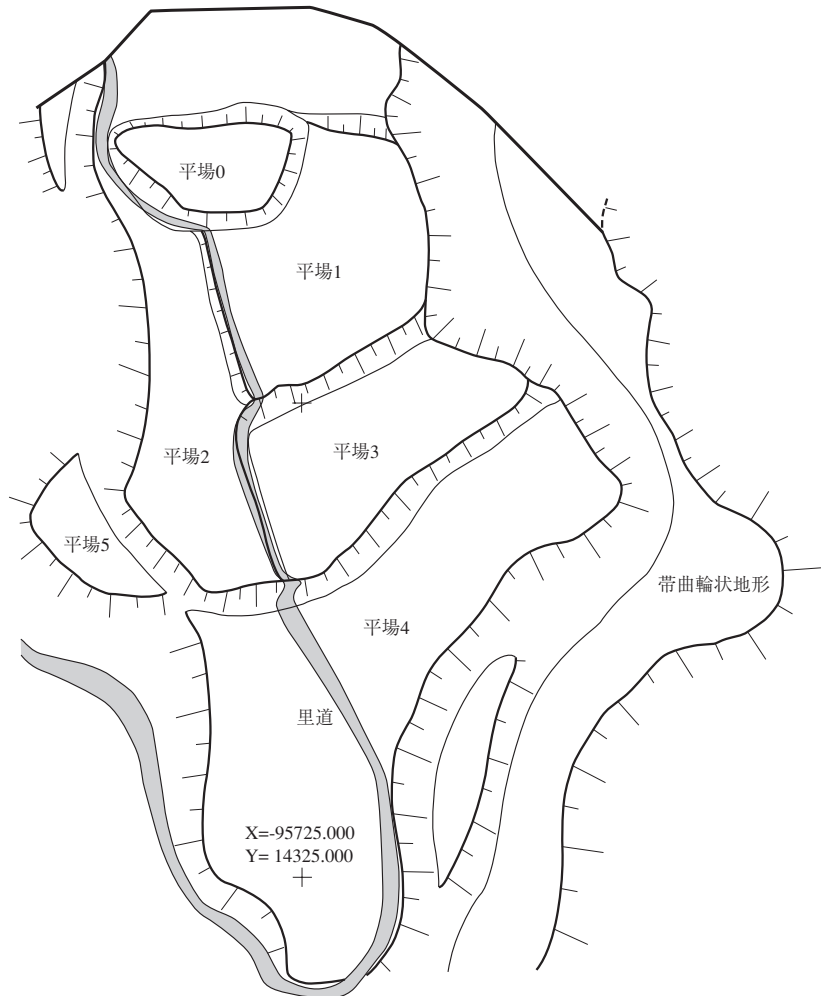


図51 01B区調査前概況図

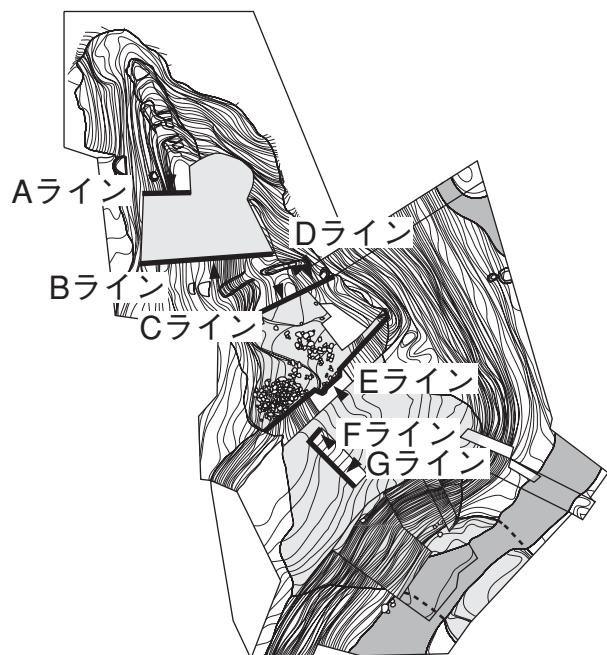


図52 01BⅠ期土層ライン設定図

Ⅱ期はⅠ期通路状遺構との重複関係から平場上の掘立柱建物や竪穴建物などの遺構や横堀が該当するが、通路状遺構との重複関係が確認できない遺構（SD01 堀切など）については遺構の形状などからⅡ期に含めた。

（２）Ⅰ期掘割り状の通路

SX03 地山を大きく掘削してつくられた掘割り状の遺構である。調査区内では尾根筋にそってその北端から逆「く」の字に屈曲しながら調査区南端を経て下方へと抜ける約35m分が確認された。地山確認面での幅5.5～12.3m、底辺1～3m、深さ3～4mで、断面形が概ね逆台形をしている。その北端に階段

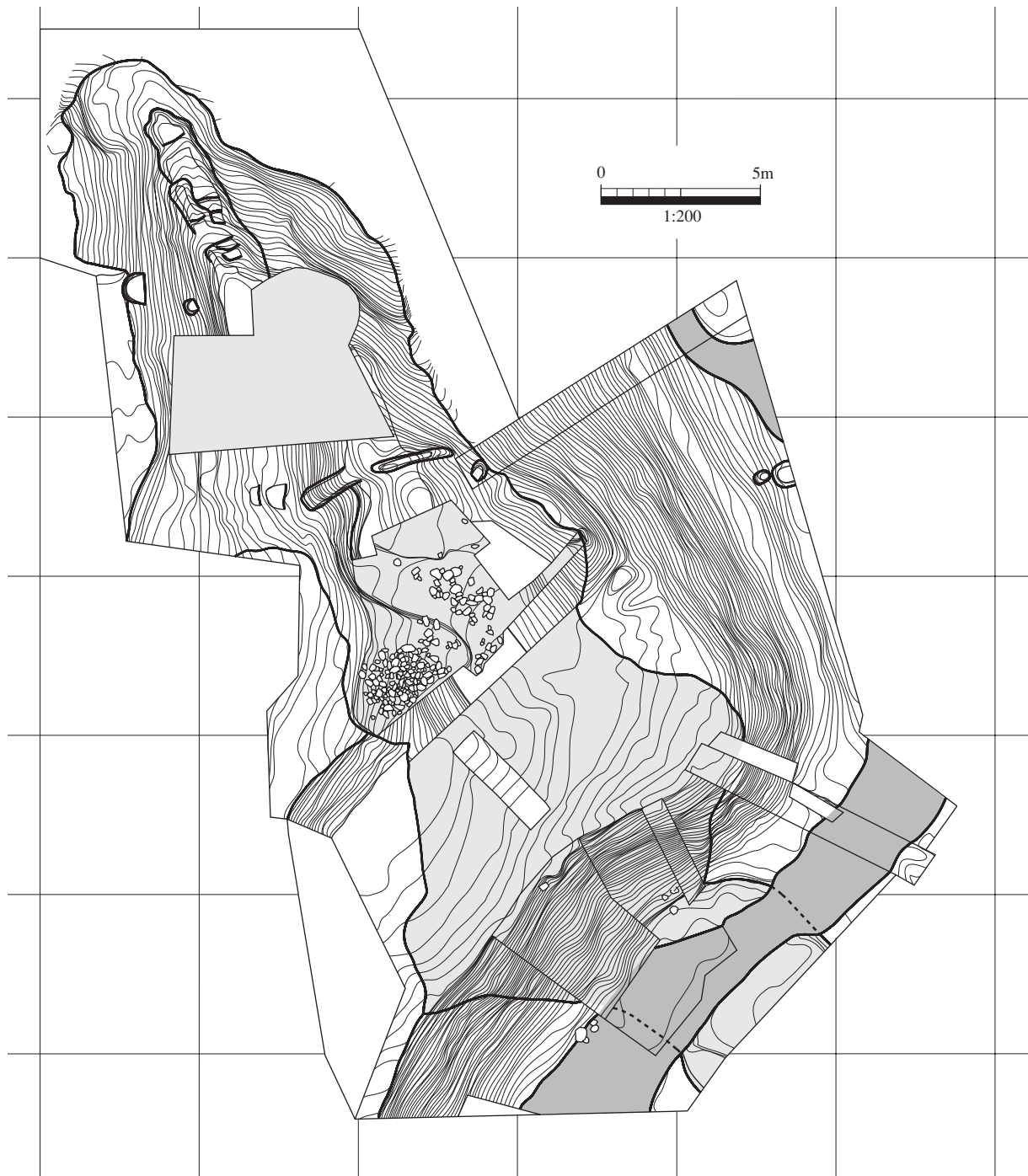


図 53 01B 区Ⅰ期遺構全体図

部分、次いで出入口に関わる底面が平坦な部分がある。以上は平場 1 の下層になる。ここから南へ下るのだが、平場 3・4 の下層にあたる部分は排土量と時間の制約があって完掘することができず、平場 4 でトレンチ調査をするにとどめた。したがってその底部の状況についてはほとんど不明である。

遺構の性格として尾根筋にのびる形状から山城以前の山道の可能性も考えられたが、階段や出入口関連施設の存在から山城の施設として構築されたとみるべきであろう。以下その詳細を解説する。

階段 SX03 の北端部は高低差 4m を上る長さ 6.7m、角度 40° の階段である。階段は地山を削り出してつくられ、やや不明瞭な箇所もあるが 9 段で構成される。幅は 60～80cm で、一段の高さ 30cm である。階段脇には幅 15cm 深さ 10cm の側溝があるが、掘削したものか雨水によって自然に形成されたものかはわからない。そして階段の上端はその北にある堀切 SD01 と接しているがその重複関係は表土層によってかき消されており不明

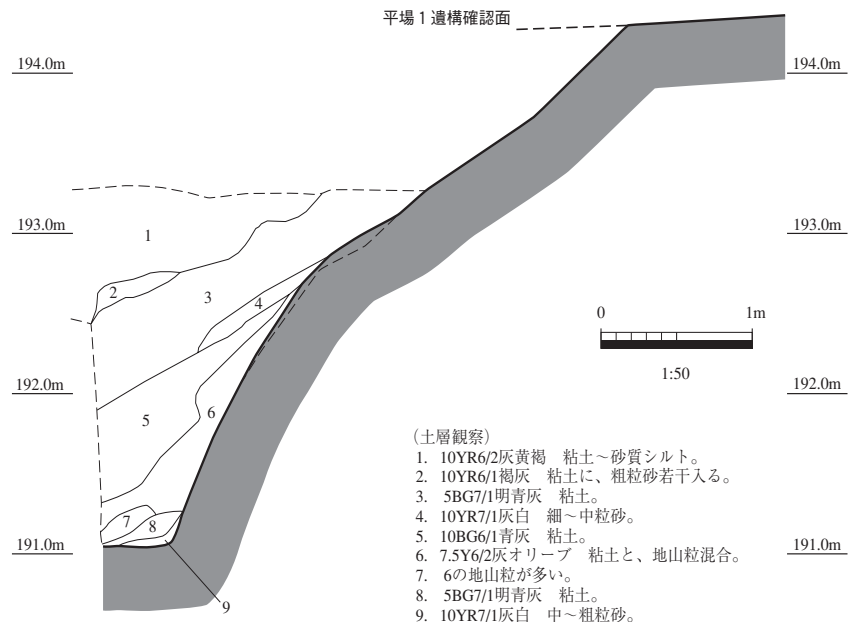


図 54 01B 区 SX03A ライン土層断面図(1:50)

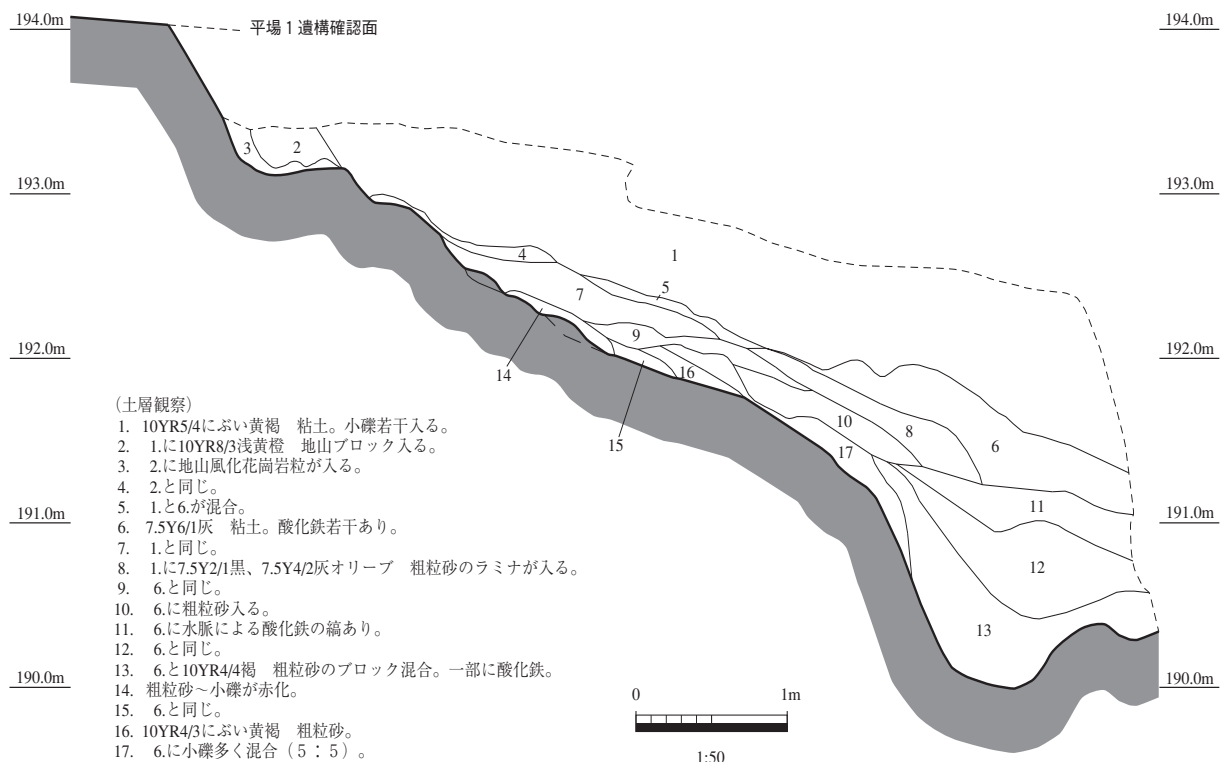


図 55 01B 区 SX03B ライン土層断面図(1:50)

である。

出入口関連遺構 通路の上端平面形は平場 1 下層では階段部分を含めてやや崩れた方形となっている。その規模は上端で東西 9m 以上南北 12m 以上である。その北西隅に上方への階段があり、対角となる位置に下方への出入口がある。一方底面は上端平面形に対応せず、幅 2～4m 幅の帯が階段と出入口の間を屈曲する。

出入口には幅 15cm 深さ 25～30cm と幅 40cm 深さ 10～30cm の溝がそれぞれ通路の東西両側壁を断ち割るようにしてのびる。壁面断ち割り部分でも底のレベルはほぼ平行でその両端は垂直に立ち上がる。溝の覆土（図 56）は底に 10cm あるだけでその上は SX03 覆土と共通である。以上のことからこの溝に木材を底辺とする門扉あるいは塀が設けられていた可能性が考えられる。

その出入口脇の西壁では階段の上部が確認された。この階段は先述の階段ほど明瞭ではなく、その下部が元々設けられていなかったのかどうかは不明である。ただこの階段を上った所には掘立柱建物 SB01（Ⅱ期の遺構として後述）があり、先述の門扉に関わる施設だったかもしれない。そしてこの階段から北へ 6m の西側壁には幅 25cm 奥行き 20cm の断ち割りがある。底面から 2.3m の位置にある。覆土の状況は出入口の溝と同じであり、通路機能時にはここに角材のようなものがはまっていたと考えられる。また東壁の同じレベル位置に同様の断ち割りがあるが、これら東西の断ち割りどうしは向きが対応していない。

ところで上端平面形は出入口で一旦狭まるがそこから下方へは再び

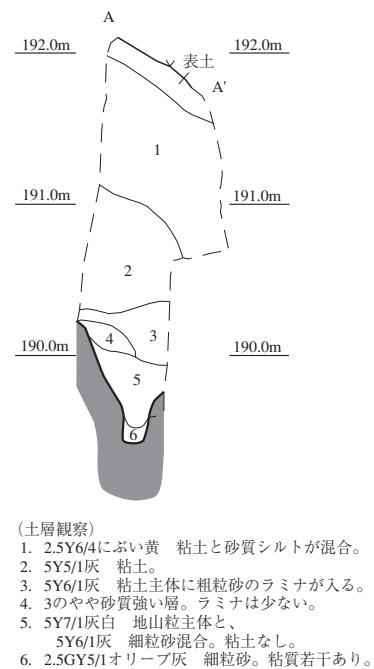


図 56 01B 区 SX03D ライン
土層断面図

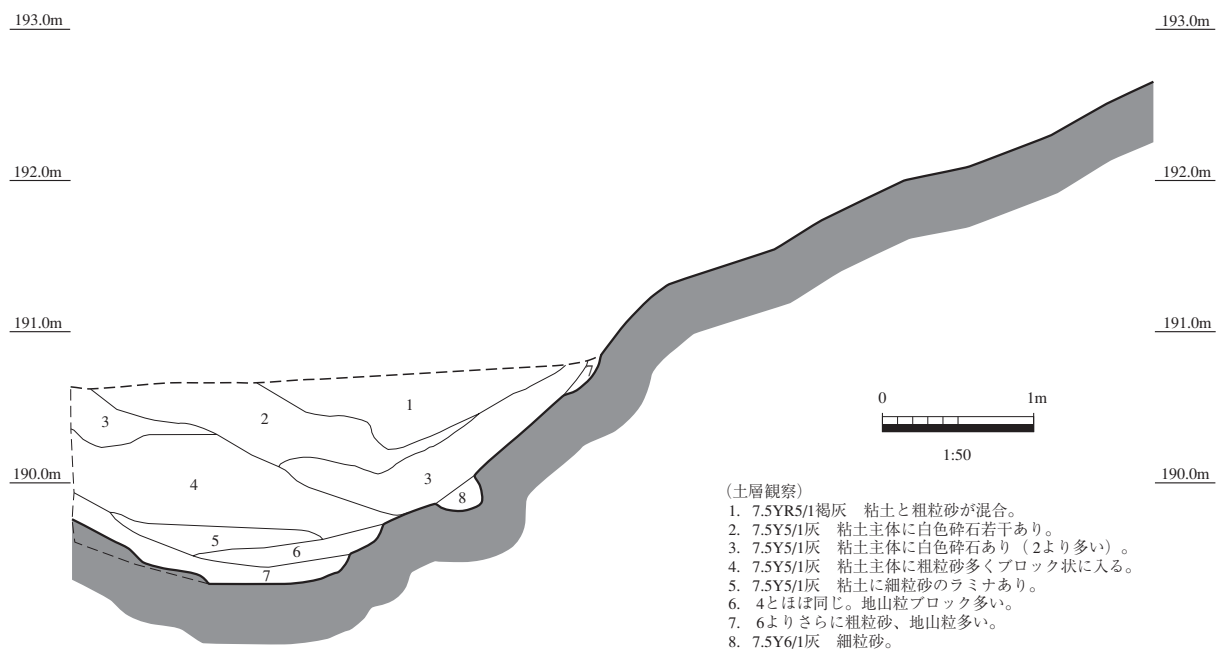


図 57 01B 区 SX03 C ライン土層断面図

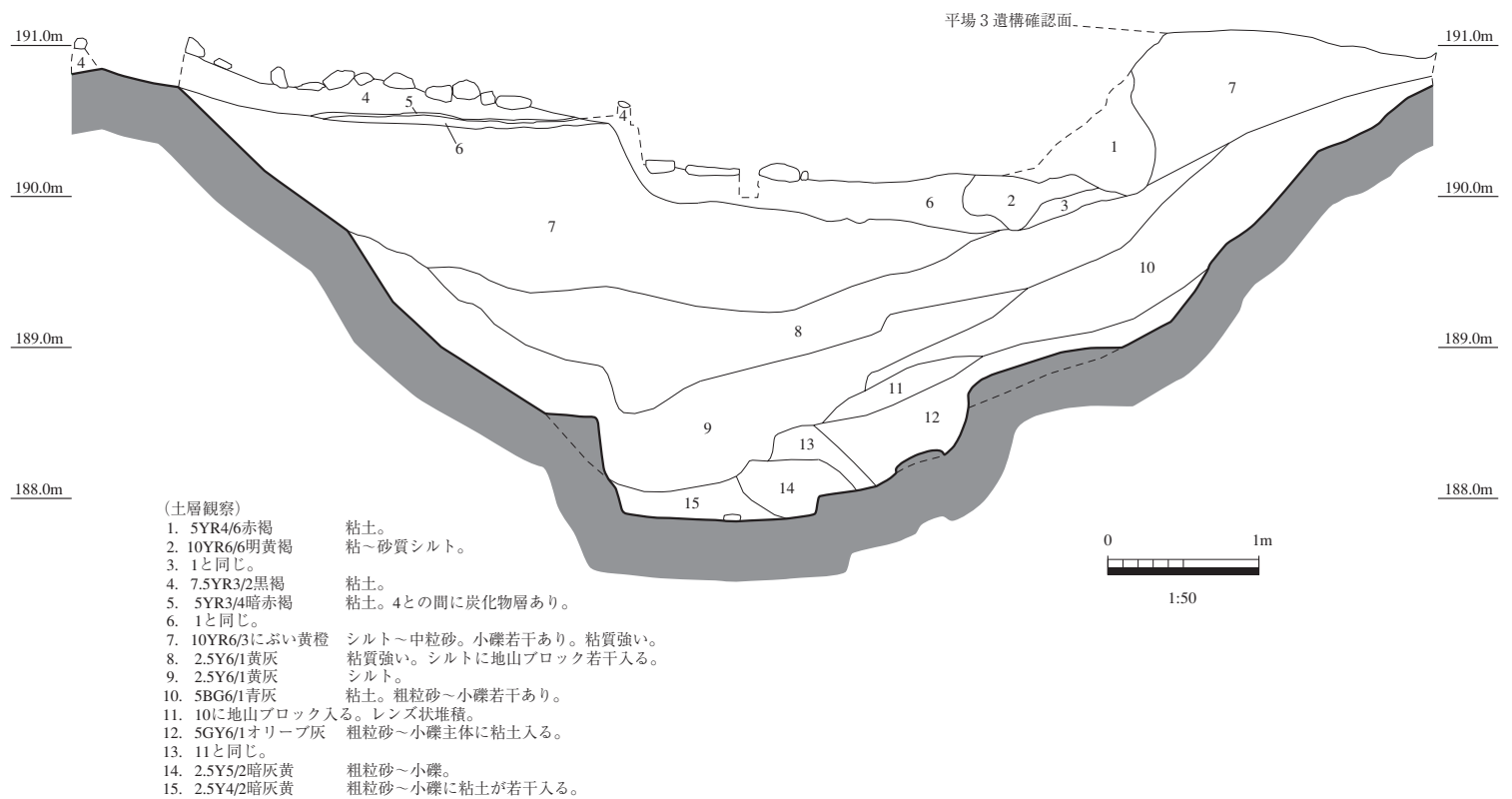


図 58 01B 区 SX03E ライン土層断面図

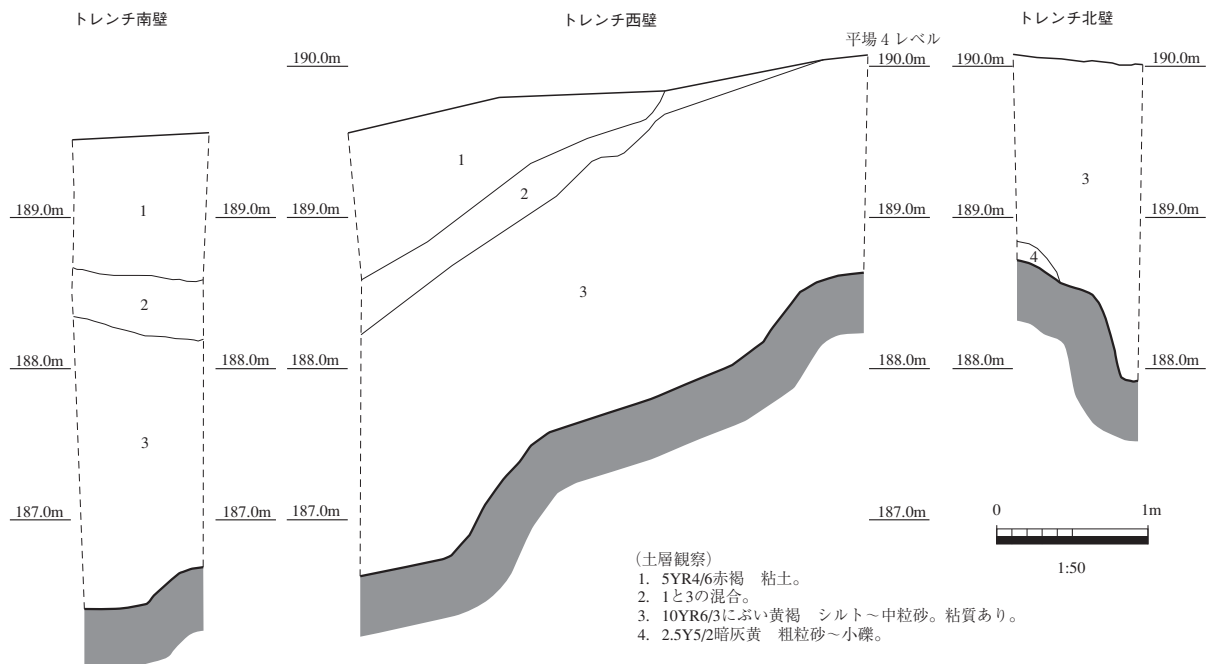


図 59 01B 区 SX03 トレンチ (F・G ライン) 土層断面図

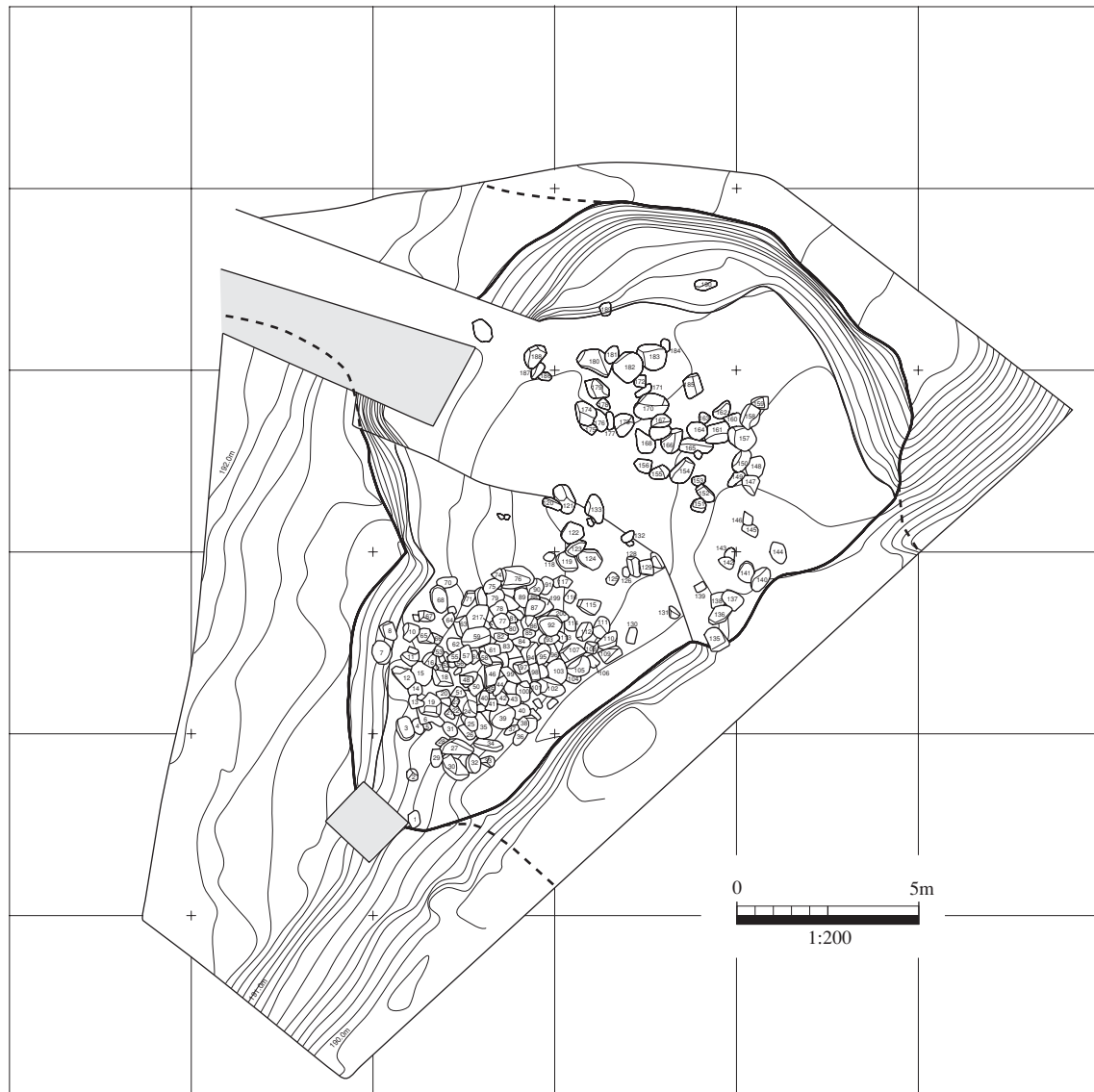


図60 01B区 SX03 埋め立て土層中礫出土状況図(1:200)

広がる。平場4トレンチ（図59）では西壁が西方へ屈曲するのが確認された。平場4南側の切岸では「V」字形の断面が露出し、それは上幅12m下幅5m深さ4mであった。そしてその下方Ⅱ期横堀SD09は通路埋土を掘削しており、通路→通路埋め立て→切岸造作→横堀掘削の順に展開したことが判明した。

通路埋め立てから平場の整地 通路が機能していた時間はさほどの長さではなかったと考えられる。それは通路機能中に自然に堆積したであろう通路底面直上の黒褐色土層が数cmと薄く、壁面から風化で流下したであろう花崗岩粒の堆積もほとんどなかったことによる。SX03のいずれの土層断面においてもそのほとんどが埋め立てによると考えられる強粘質土に花崗岩ブロックが混入する土層である。埋土はいくつかの単位が認められ東西両側からの流し込みとみられる。なお通路を埋めるだけの強粘質土は今回のいずれの調査区でも存在しない。城山城跡とその周辺でまとまった粘質土が採れる場所は特定できていないが、埋め立ては、多くの人員を投入しての運搬を伴う作業であったと考えられる。ただ、平場1下層部分のほとんどを掘削したものの、遺物は全く出土しなかった。遺物が出土したのは平場3下

層のみであった。

平場3下層となる出入口南側では、埋土層中に80点以上の礫がおよそ14m×8mの範囲に広がるのが確認された。この礫群は埋め立て途中のある段階で西壁寄りに敷き詰められるようにして置かれたものである。礫を置く理由として2つ考えられる。ひとつは、平場3とその上に礎石立ちの可能性がある建物SB03をつくるにあたってその安定を目的としたためと考えられる。もうひとつは、近年戦国時代城館が廃城される際に出入口を多数の礫や土砂で埋める事例がいくつも報告されているが、そういった呪術的ともいえる目的があったと考えられる。どちらとも決しがたいが、埋め立て作業の途中とはいえ出入口すぐ南側のみでこのような行為が確認された点はより後者の視点に近いものである。礫群のすぐ直下からは土師器鍋や瀬戸美濃産灰釉陶器が出土した。また礫群を覆っていた粘質土層からも

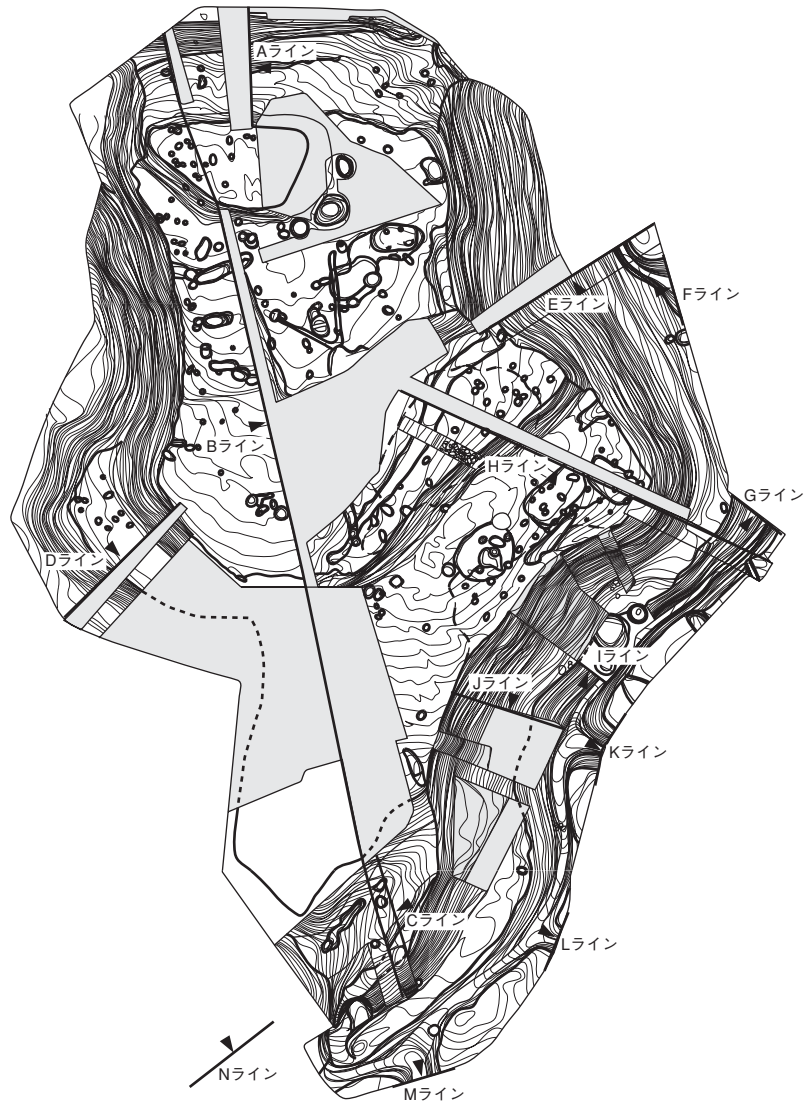


図61 01B区Ⅱ期土層ライン設定図

ほぼ同時期とみられる土器・陶器が出土した。これらの時期は大窯2期である。礫を置いたのが通路埋め立ての最終段階に近いことから、Ⅱ期の施設がのる平場が完成した時期に関わる資料である。そして礫については、その全てについて形状と重量、岩質について確認作業を実施した（添付CD内一覧表参照）。そのほとんどが角礫で占められ、平均長軸が21.6cm、平均重量4.6kgである。注目されるのは岩質で、全て花崗岩なのだが、武節花崗岩と伊奈川花崗岩に分類され、前者が47点ある。足助市街地とその近隣では伊奈川花崗岩が産出し、武節花崗岩は稲武町域や岡崎市域で産出することが判明している（図7）。すなわちここで出土した武節花崗岩がどのようにしてもたらされたのかが問題となる。

（3）Ⅱ期の遺構（通路）

SX01 平場4南西端で確認された、掘割り状の遺構である。西から東へカーブしながら約10°の上り傾斜になっている。確認された長さは7m、Bラインとの交差部にて最大幅5.0m、深さ135cmである。完掘状態で船底状の底部である。Cラインでの土層断面（図63）によると、大きく表土層（1・2層）、灰褐色砂層（3～6層）、通路面と直上の炭化物層（9～11層）、路面下整地層（12～13層）に別れる。整地層によってできた通路面は幅3mである。炭化物層は路面全体に広がらず、20cm四方にとどまる。

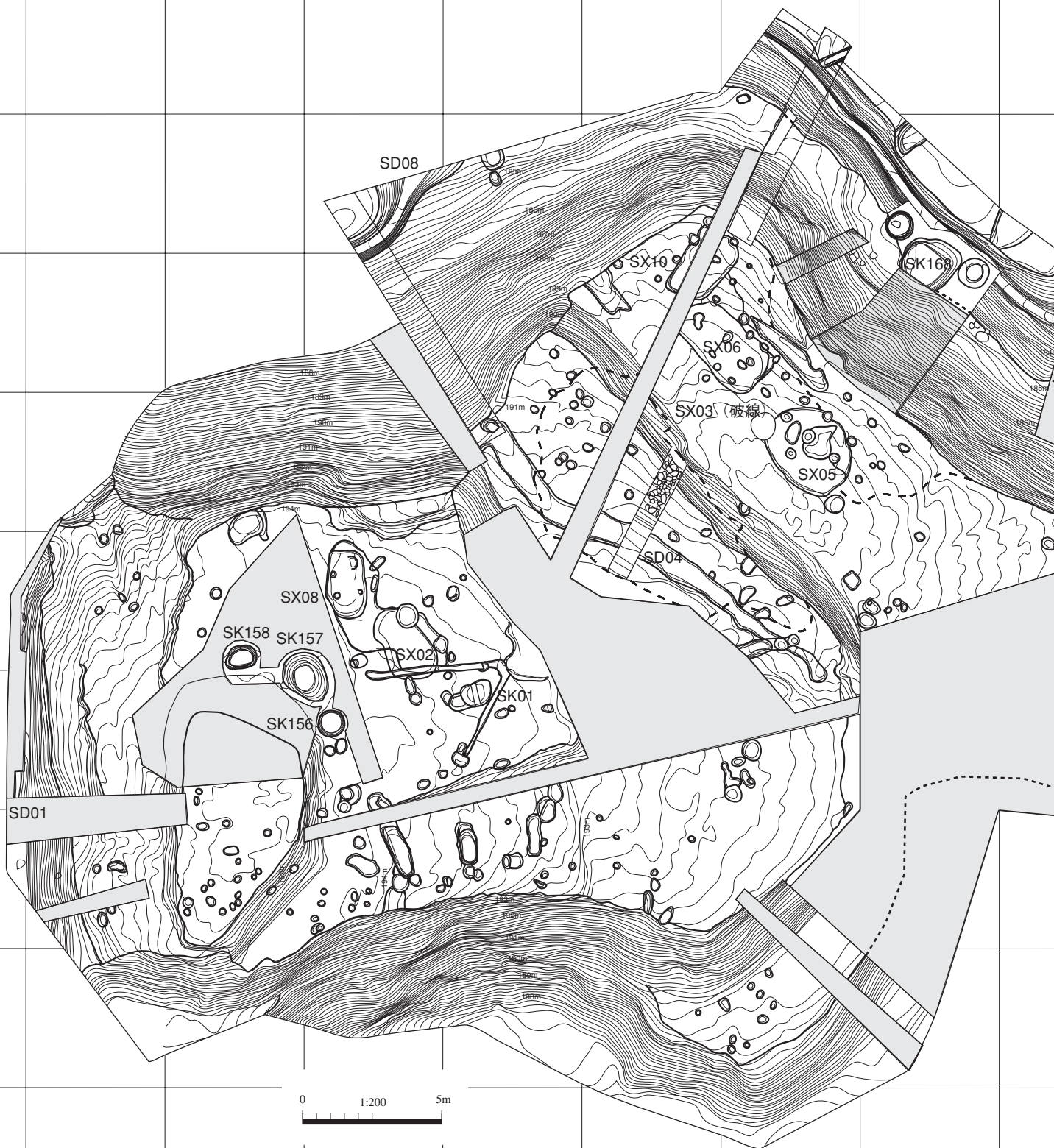
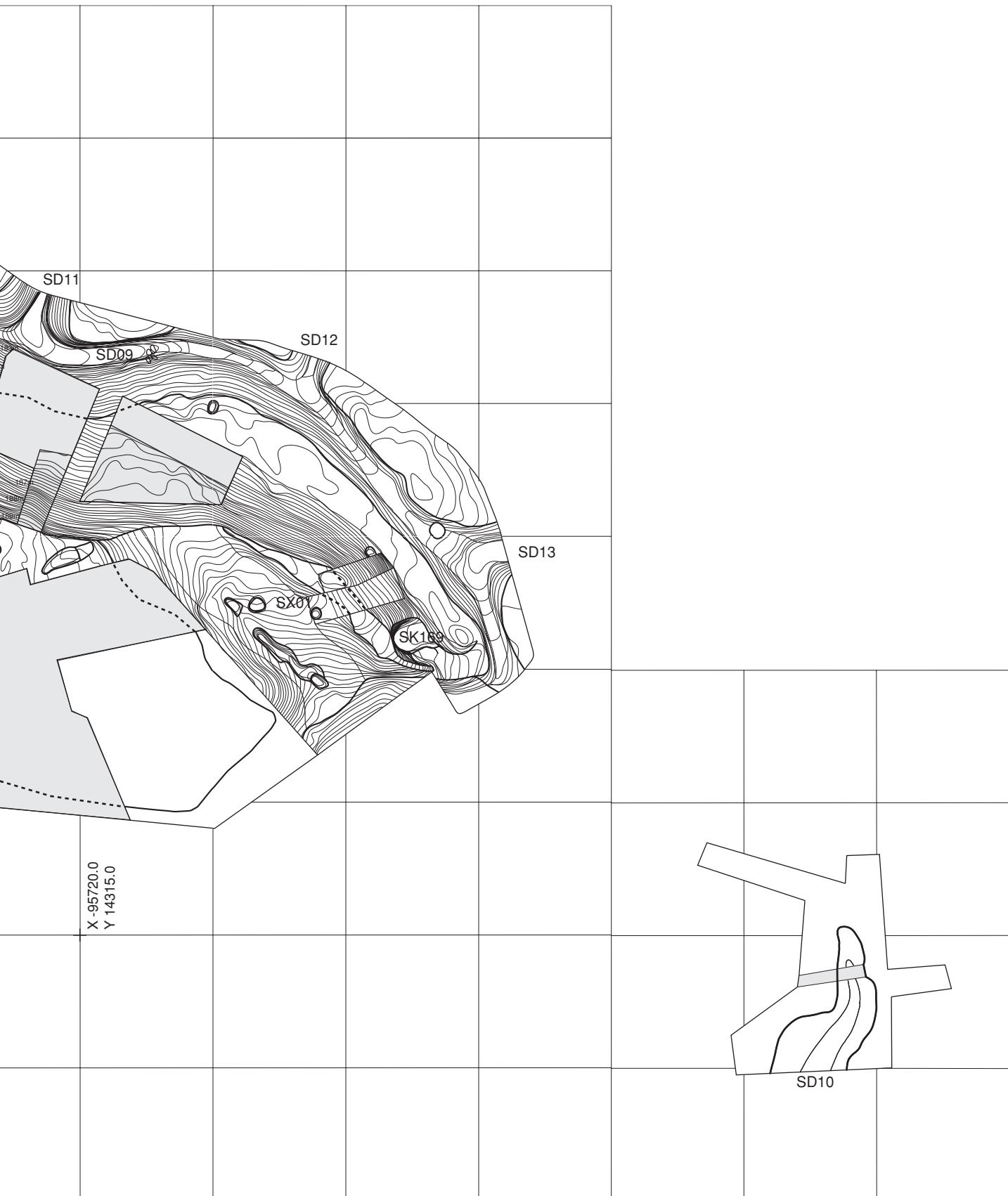
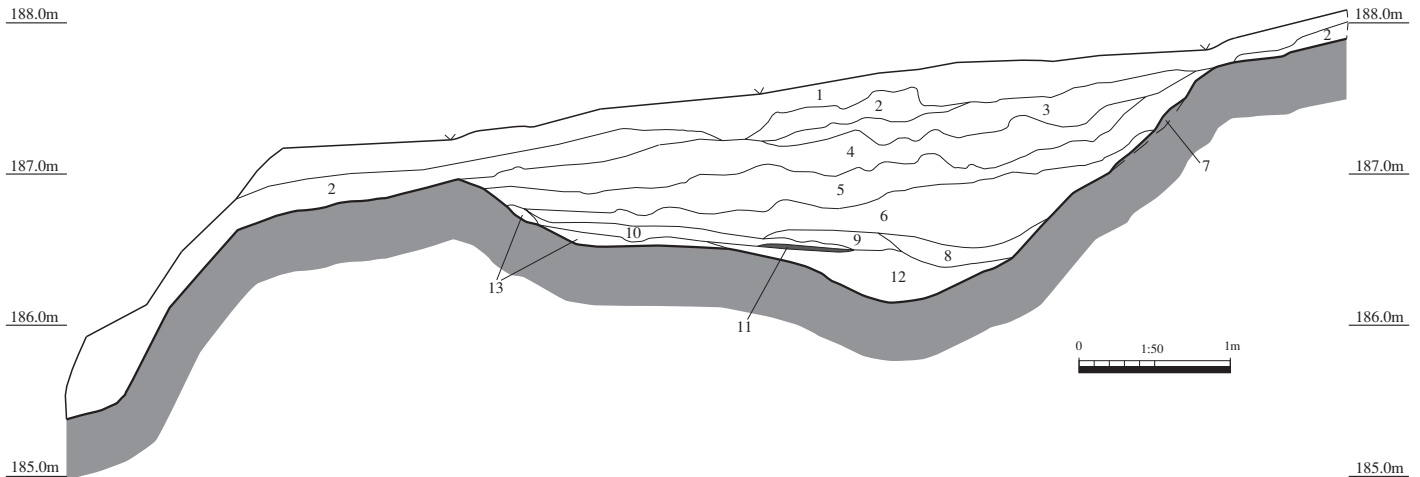


図 62 01B 区 II 期遺構全体図





(土層観察)

1. 10YR3/1黒褐 シルト。表土（耕作土）。
2. 10YR3/2黒褐 シルト～中粒砂。表土。
3. 10YR5/2灰黄褐 シルト～細粒砂。地山ブロック無し。
4. 3に10YR8/2灰白 地山花崗岩粒と、10YR8/6黄橙 粘土ブロック（径8cm以下）混入する。
5. 10YR4/2灰黄褐 シルト～中粒砂。地山ブロック若干あり。
6. 10YR5/2灰黄褐 シルト～細粒砂に、10YR8/6黄橙 粘土ブロック、10YR5/6黄褐 粘土ブロック（径5cm以下）が混入するが、4ほどではない。
7. 地山（風化花崗岩）
8. 2.5Y4/1黄灰 シルトに、10YR5/6黄褐 粘土ブロック（径5cm以下）と炭化物粒が多く入る。
9. 7.5Y3/1黒褐 シルトに、炭化物粒、焼土粒（径1cm）が混入。地山はほとんどない。
10. 7.5Y8/2灰 粘土粒主体。炭化物ほとんどない。
11. 炭化物層。
12. 2.5Y4/3オリーブ褐 粘土に、若干細粒砂あり。炭化物粒あり。地山との境は凹凸あり。
13. 10YR7/2にぶい黄橙 地山粒主体。

図 63 01B 区 SX01 土層断面図

遺物はなかったが、炭素年代測定の結果、西暦 1425 年に対応する年代値が得られた。また灰褐色砂層からは播鉢片が出土した。

（４）Ⅱ期の遺構（堀切）

SD01 調査区北端では、調査以前から堀状の地形が認められ、堀切と推定されていた。ここでは東西方向にのびる堀切の南半分が確認できた。堀切は全長約 14m あり、両端は撥状に開く。堀底は幅 35cm しかなく、主郭部側の壁面は調査区外ながらも断面形は鋭角な逆三角形と判断され、いわゆる薬研堀である。深さは 3.6m、幅 6.5m で、実効堀幅は約 13m である。山上側と堀底の高低差は約 0m である。

土層は耕作に関わる表土層（1～4 層）、風化花崗岩粒主体の黄褐色砂層（5～13・15 層）、灰色粘質土層（14・16 層）に大別される。表土層に対応する SD01 上部は平坦地化されており改変の度合いが強い。ここからは戦国時代～江戸時代末期の土器・陶器が出土した。灰褐色砂層は埋め戻しによる堆積と考えられ、遺物は出土しない。堀切機能時に堆積したとみられる最下層部（16 層）は約 40cm の厚さである。灰色粘質土層は側壁に貼り付く程度に堆積するものやそこから流出した 14 層や最下層部でみられる。この土は粘質が強く、Ⅰ期の通路 SX03 を埋め立てた土層と共通する。最下層部以外では風化花崗岩粒がほとんど入らないので堀切が埋まる過程で入り込んだ土ではないと判断される。したがって灰色粘質土層が堆積する部分は、可能性としてⅠ期段階で機能していた堀または通路に関わるとみられる。

土橋と通路 SD01 の東端では、地山を掘り残した土橋遺構が確認できた。確認できた長さは 0.6m である。上面は幅 35cm あり、人ひとりがようやく通れる程度の幅である。土橋の両側面は約 60° の斜面である。そして土橋が SD01 の南壁に取り付く箇所から SD01 と平行に西方に延びる通路遺構が確認された。通路の幅は 1.2m で、約 5° の角度で西方へ上る。先述したように SD01 の上部は削平を受けており、こ

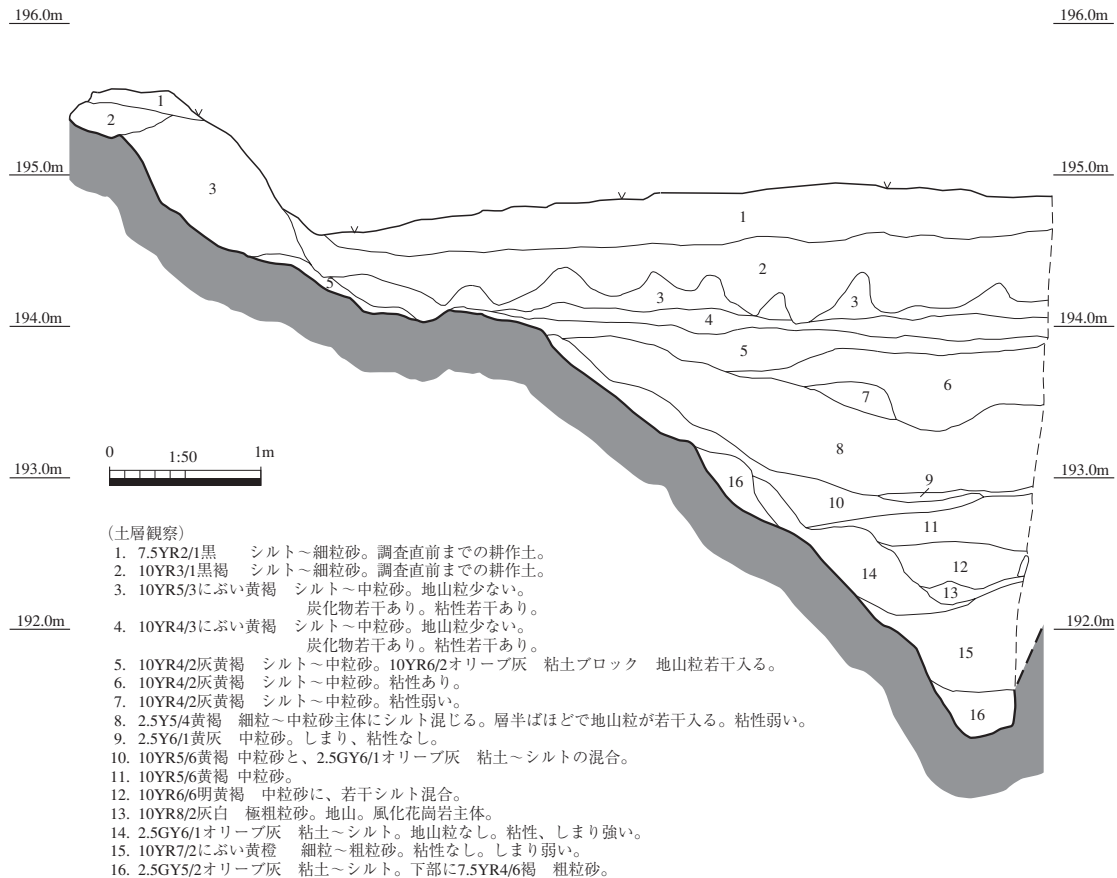


図 64 01B 区 SD01 (A ライン) 土層断面図

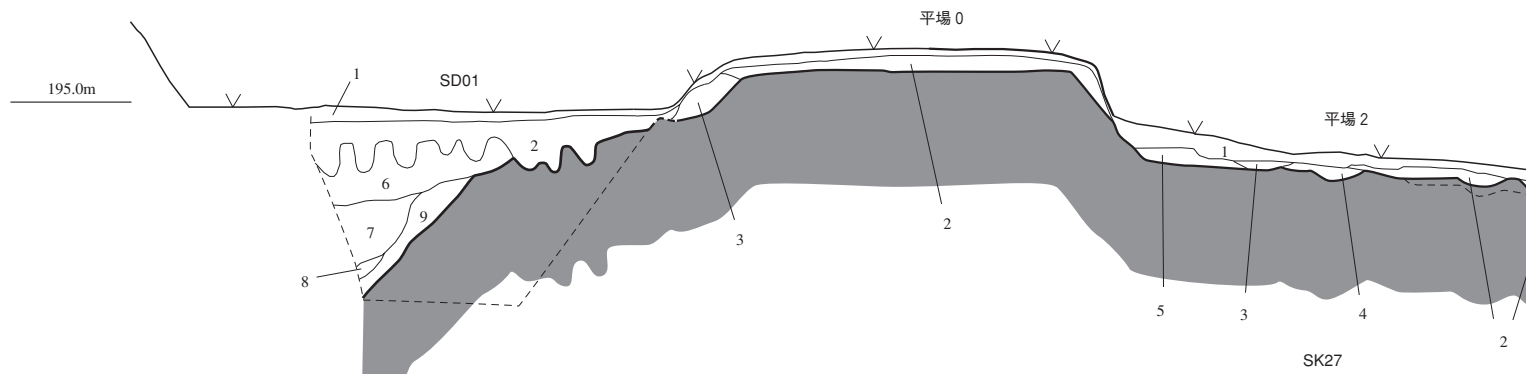
の通路も途中までしか確認できず、その延長は8mである。通路に沿って直径10～14cm、深さ5～15cmのピット群がある。このピットはほぼ2mの間隔で確認され、通路の両側にみられることから、手すりまたは低い柵のような構造物があったと想定される。

(5) II期の遺構(切岸)

横堀 SD08・09(後述)に対応して平場群の東～南側に切岸がつくられる。東側では高低差4.2～5.5m傾斜角43°、南側では高低差3.5～4m傾斜角55°である。堆積しにくい状況であり表土層はほとんどない。南側の一部を除き原形に近い状態



図 65 01B 区 SD08 (F ライン) 土層断面図



(土層観察)

1. 10YR2/1黒 シルト～細粒砂。炭化物片多い。表土（調査直前までの耕作土）
2. 10YR3/1黒褐 シルト中粒砂。炭化物入る。表土（耕作に関わる土）
3. 10YR3/1黒褐 シルト～中粒砂。炭化物・焼土塊多い。やや固化している。現代のたき火跡。
4. 10YR3/1黒褐 シルト～中粒砂に、地山ブロック（5cm大が多く入る。）炭化物入る。ビニルひも出土。現代の攪乱。
5. 10YR8/3浅黄橙 風化花崗岩主体の地山主体に、10YR3/1黒褐 シルト 若干入る。粘質若干あり。
6. 10YR4/3にぶい黄褐 シルト～中粒砂。地山粒少ない。炭化物若干あり。粘性若干あり。
7. 10YR4/2灰黄褐 シルト～中粒砂。粘性あり。
8. 2.5YR6/1黄灰 中粒砂。しまり、粘性なし。
9. 10YR5/6黄褐 中粒砂と、2.5GY6/1オリーブ灰 粘土～シルトの混合。

194.0m

192.0m

190.0m

188.0m

186.0m

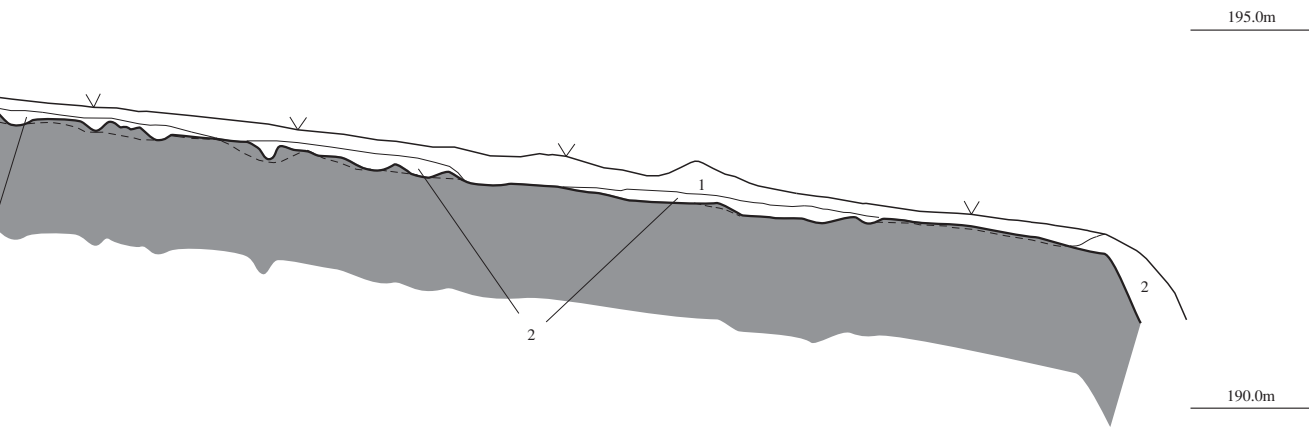
184.0m

182.0m

(土層観察)

1. 10YR2/1黒 シルト。表土（耕作土）。
2. 10YR3/1黒褐 シルト～細粒砂。表土。
3. 10YR3/1黒褐 シルト～中粒砂に、6・7のブロック混入。
4. 10YR4/4褐 粘土。
5. 10YR5/4にぶい黄褐 粘土。
6. 10YR6/4にぶい黄橙 粘土。炭化物若干あり。
7. 10YR4/6褐 粘土。炭化物ほとんどなし。
8. 10YR4/4褐 粘土。
9. 10YR4/4褐 粘土。8とほぼ同じだがやや明るい色調。
10. 10YR4/2灰黄褐 粘土。炭化物粒あり。
11. 10YR4/2灰黄褐 粘土。
12. 10YR7/3にぶい黄橙 粘土。混入物なし。
13. 10YR4/2灰黄褐 粘土。
14. 7.5YR3/3淡黄 粘土 混入物なし。
15. 7.5YR5/6明褐 粘土。炭化物なし。
16. 7.5YR3/3淡黄 粘土。混入物なし。
17. 10YR3/2黒褐 粘土。炭化物多い。
18. 7.5YR5/6明褐 粘土。
19. 10YR3/3暗褐 粘土～シルト。炭化物あり。しまり、粘性強い。
20. 10YR3/1黒褐 シルト。
21. 10YR3/2黒褐 粘土に、10YR4/4褐 粘土 若干入る。炭化物あり。焼土粒若干あり。
22. 10YR3/2黒褐 粘土に、10YR4/4褐 粘土 ブロック(3～5cm)混入。炭化物なし。しまり、粘性強い。白色小破石若干あり。
23. 18と同じ。
24. 7.5YR4/6褐 粘土。
25. 10YR4/2灰黄褐 シルトと、7.5YR4/6褐 粘土の混合。
26. 10YR4/2灰黄褐 シルト。
27. 7.5YR4/6褐 粘土～シルト。白色小破石入る。
28. 29と同様だが、2.5Y4/2暗灰黄 シルトのほうがやや多い。
29. 7.5YR4/6褐 粘土～シルトと、2.5Y4/2暗灰黄 シルトの混合。
30. 2.5Y4/2暗灰黄 シルト～細粒砂。
31. 地山。風化花崗岩粒主体。
32. 地山。風化花崗岩。
33. 2と、地山粒の混合。

図 66 01B 区 B ライン（上）・H ライン（下）土層断面図



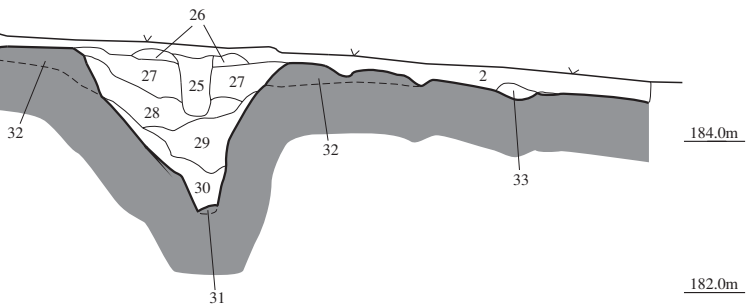
194.0m

192.0m

190.0m

188.0m

186.0m



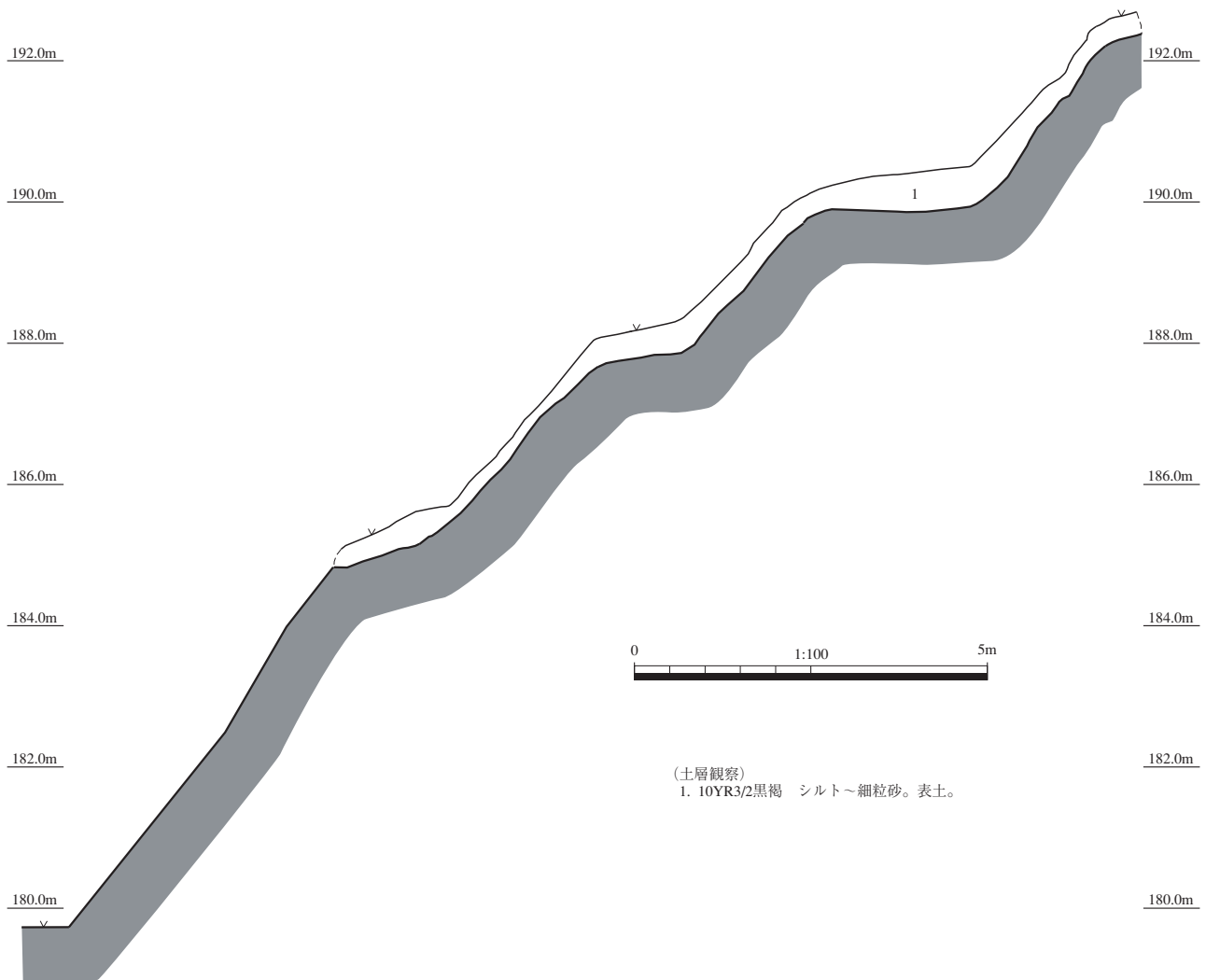


図 67 01B 区 D ライン土層断面図

と考えられる。一方尾根西斜面には横堀がなく、どこまで切岸として造作を加えたかどうかは判然としない。平場 2 西側斜面は高低差 10～12m 傾斜角 50°である（図 67）。地山の上に黒色土が直接のっており、小さな平場についても比較的新しい削平と考えるべきであろう。また、調査区南西方向で設定した試掘トレンチ（N ライン）でも、地山の直接上に 20 世紀以降の磁器が出土する層があり、地山面では横堀の続きなどの遺構は確認できなかった。山城の時期にはほとんど手が加わらず、耕作地化にともなって削られたものと判断される。

（6）II 期の遺構（横堀）

SD08 調査区東縁の帯曲輪状の地形で確認された。調査区内では屈曲部が確認され、その東端は尾根東側の谷に向かって抜ける。確認できた長さは 3m で、幅 0.9m、底幅 20cm、深さ 1.1m の断面が逆三角形の薬研堀である。なお帯曲輪状地形は、調査区の北東方向へ尾根の東斜面に沿って続いており、SD08

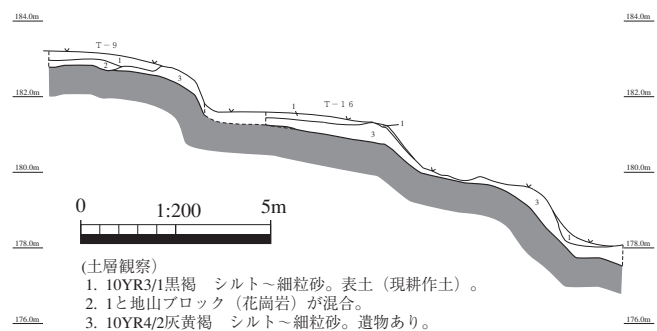
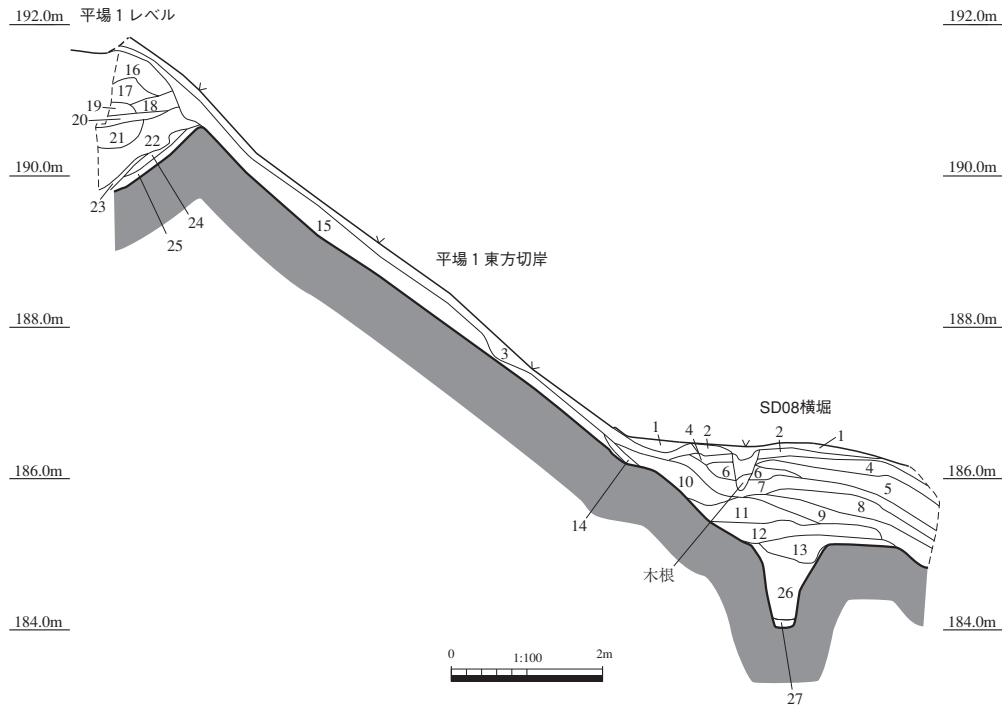


図 68 01B 区 N ライン土層断面図

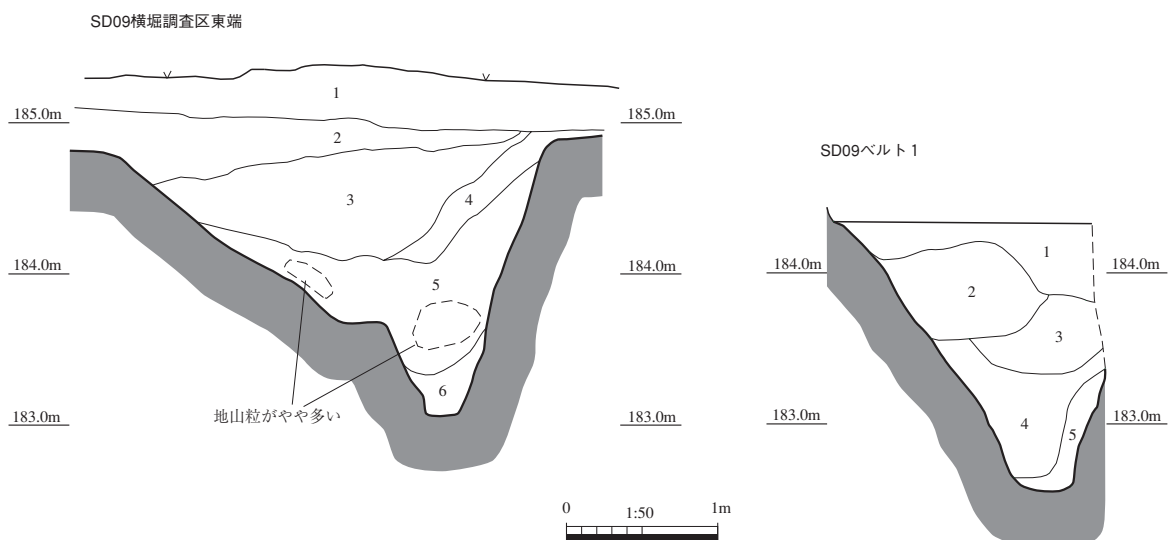


(土層観察)

1. 10YR2/1黒 シルト。表土（耕作土）。
2. 10YR3/2黒褐 シルト。表土（床土）。
3. 10YR3/2黒褐 シルト。表土。
4. 10YR6/2灰黄褐 シルト～細粒砂に、10YR8/4浅黄橙 粘土 ブロック(径5cm)が混入。
5. 10YR6/2灰黄褐 細粒砂。
6. 10YR8/4浅黄橙 粘土～シルト。
7. 10YR4/1褐灰 シルト～細粒砂。
8. 10YR4/3にぶい黄褐 シルト～中粒砂。
9. 10YR6/4にぶい黄橙 粘土～細粒砂と、10YR5/1褐灰 細粒砂が混合。
10. 9と同じ。
11. 10YR4/4褐 粘土。
12. 2.5Y4/2暗灰黄 シルト～粗粒砂。
13. 10YR4/2灰黄褐 粘土～シルト。

14. 10に、地山粒が混入。
15. 10YR8/1灰白 地山粒と、10YR5/6黄褐 シルトが混合。
16. 2.5Y6/4にぶい黄 粘土～細粒砂。
16～25は全て白色小破砕石が入る。
17. 16と同様だが、粘土主体。
18. 2.5Y6/2灰黄 粘土主体に、若干細粒砂あり。
19. 2.5Y6/2灰黄 粘土～細粒砂。
20. 2.5Y5/2暗灰黄 粘土主体。
21. 2.5Y6/4にぶい黄 粘土～粗粒砂。
22. 5Y5/1灰 粘土と、2.5Y5/4黄褐 粗粒砂のラミナ。
23. 5Y6/1灰 粘土に、地山粒入る。
24. 5Y5/1灰 粘土に、地山粒わずかに入る。
25. 10YR8/1灰白 地山粒の流れ込み主体に、5Y5/1灰 粘土 若干あり。
26. 2.5Y7/2灰黄 細～粗粒砂。
27. 26の地山粒が増える。

図 69 01B 区 SD08 (E ライン) 土層断面図



(土層観察)

1. 10YR2/1黒 シルト～粗粒砂。表土（耕作土）及び調査時排土。
2. 10YR6/2灰褐 シルト～中粒砂。
3. 7.5YR5/8明褐 粘土～シルトに10～20cm大の地山ブロック入る。
4. 10YR4/2灰黄褐 シルト～中粒砂。
5. 10YR5/2灰黄褐 シルト～中粒砂と地山粒がほぼ交互に堆積。ただし水平堆積ではない。
6. 10YR6/1褐灰 中～粗粒砂。ラミナではない。

(土層観察)

1. 10YR3/2黒褐 粘土～シルト。地山粒なし。炭化物あり。
2. 5YR4/6赤褐 粘土～シルト。
3. 10YR4/2灰黄褐 粘土ブロックと地山ブロックが5：5で混合。
4. 10YR4/2灰黄褐 粘土と地山粒混合。
5. 5YR4/8赤褐 粘土と粗粒砂混合。

図 70 01B 区 SD09 (左：G ライン、右：I ライン) 土層断面図

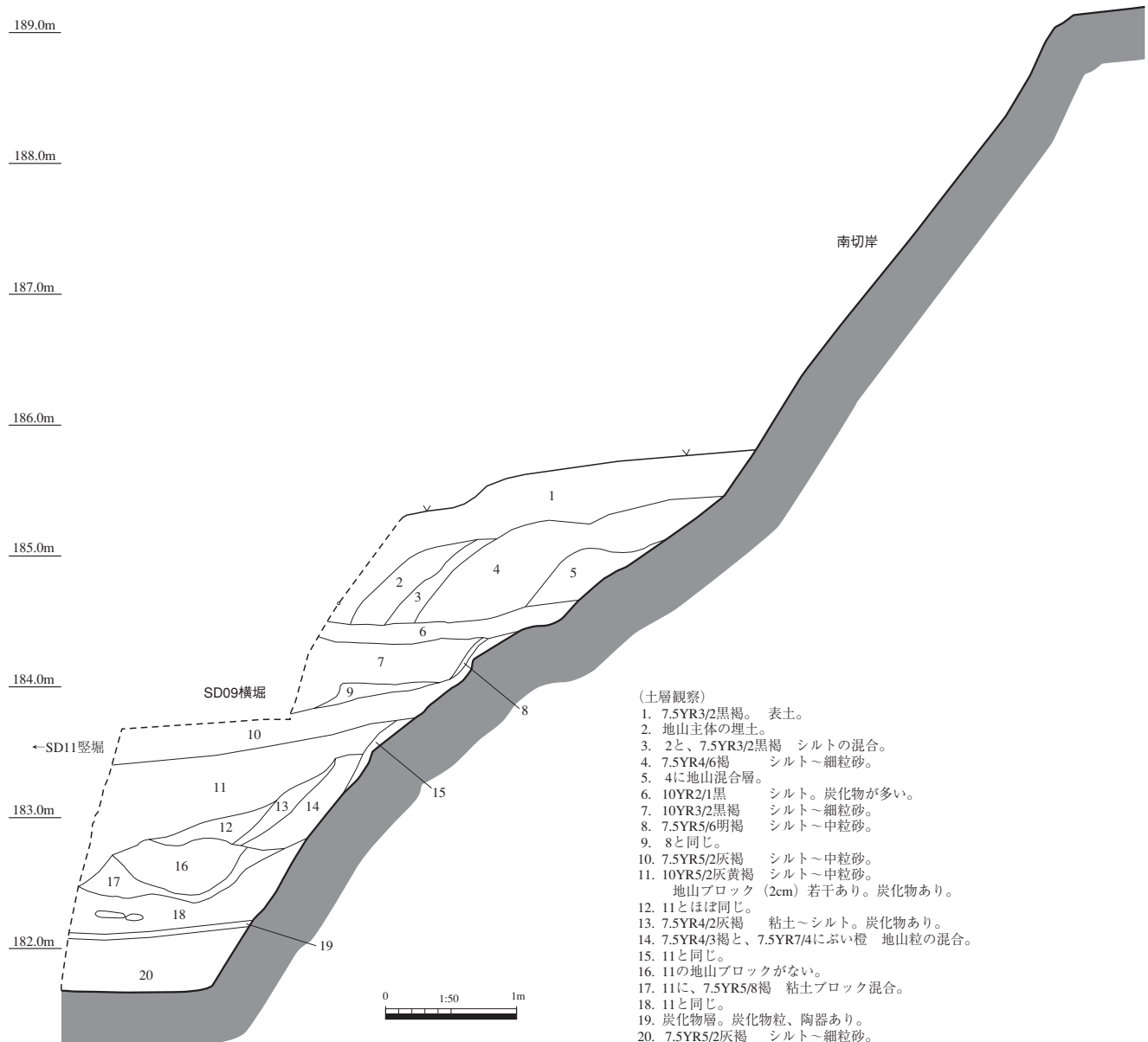


図 71 01B 区 SD09 (J ライン) 土層断面図

が同様にして延びると想定される。土層は表土層より下は風化花崗岩粒主体の灰褐色砂層である。遺物は表土層で若干出土した。確認された横堀上端と平場群東側切岸下端との間には幅約 20cm の細い平場がある。犬走りとみられるが、横堀埋没後の耕作時に一部は広げられたと考えられる。

SD09 調査区南縁の帯曲輪状地形で確認された。東端は、SD08 と同様に東側の谷に抜けている。確認された長さは 42m である。地形に合わせて蛇行しながら西方へ延び、西半部では 3 本の縦堀が分岐する。西端は SX01 付近である。西端部は明瞭であり、尾根筋を越えて尾根西側斜面にのびていない可能性が高い。西端部から約 14m はより硬質な岩盤を掘削しており、この部分では上幅 1.2m 下幅 0.7m の断面 U 字形で深さ 45cm である。そこから少しずつ深さを増し縦堀 SD11 と交差する箇所から明瞭な薬研堀の形状である。その上幅は 2.8m 深さ 1.8m で底幅は 25cm しかない。

土層は、表土層下に風化花崗岩粒主体の灰褐色砂層が厚く堆積し、その下部に直径 10 ～ 15cm の礫が集まって出土したのが縦堀 SD11 および 12 との交差部の間である。またその箇所から SD11 との交差部

から東約2mまでの範囲で厚さ1～2cmの炭化物が堆積する層が確認された。炭化物層中からは戦国時代後半の土器・陶器7点が出土した。炭化物中には植物種実が認められたのでこのサンプルをフローテーション処理して粒数を計測したところ大麦・小麦を中心とする穀類の存在が確認できた(第6章第2節)。陶器の時期や炭化物の集積という状況から、この炭化物層が、横堀が機能していた最終末期の状態を示していると考えられる。なお、炭化物層下には厚さ40～50cmの風化花崗岩粒の堆積があったが、これは横堀機能時の側壁崩落などによる自然堆積であろう。

土層断面の観察により平場4南西側切岸の半ばにあった小平場は横堀埋没後につくられたことがわかった。また、野壺(SK159～161)の付近も切岸を大幅に切り崩した可能性が高い。Eラインのように横堀と切岸の境界ともいえる犬走りは幅30cm前後であったとみられる。

(7) II期の遺構(竪堀)

竪堀はいずれもSD09から分岐するもので、調査区内ではその分岐地点が確認されたにすぎない。下方の斜面での形状については全く不明である。堆積土層から横堀最終段階に機能していたことは確実で、おそらく横堀とセットでつくられたものであろう。横堀SD08・09の東端も斜面に抜けた先に竪堀としていたであろう。

SD11 一番東端にあたる竪堀である。分岐地点での幅2.5m、深さ2.3mの断面が逆三角形である。

SD12 真ん中の竪堀である。この分岐地点あたりが地山地質が変化し、表土下で硬い岩盤が露出する。分岐地点での幅1.6m、深さ0.7mで断面はU字形である。

SD13 西端の竪堀である。分岐地点での幅1.4m、深さ0.8mで断面はU字形である。

(7) II期の遺構(溝)

SD10 横堀SD09西端から南西約10mに位置する。付近は比較的最近の削平によってできた平場で横堀のある帯曲輪状の平場との高低差は1.6mある。SD10は尾根筋から西側斜面にかけて4mが確認された。その東端は明瞭な立ち上がりである。確認面からの深さ40cmで、上幅2.7m底面幅2.3mである。断面形だけみると通路SX01やSX03に似ているが、土層からは底面にほとんど自然堆積がないのでここが通

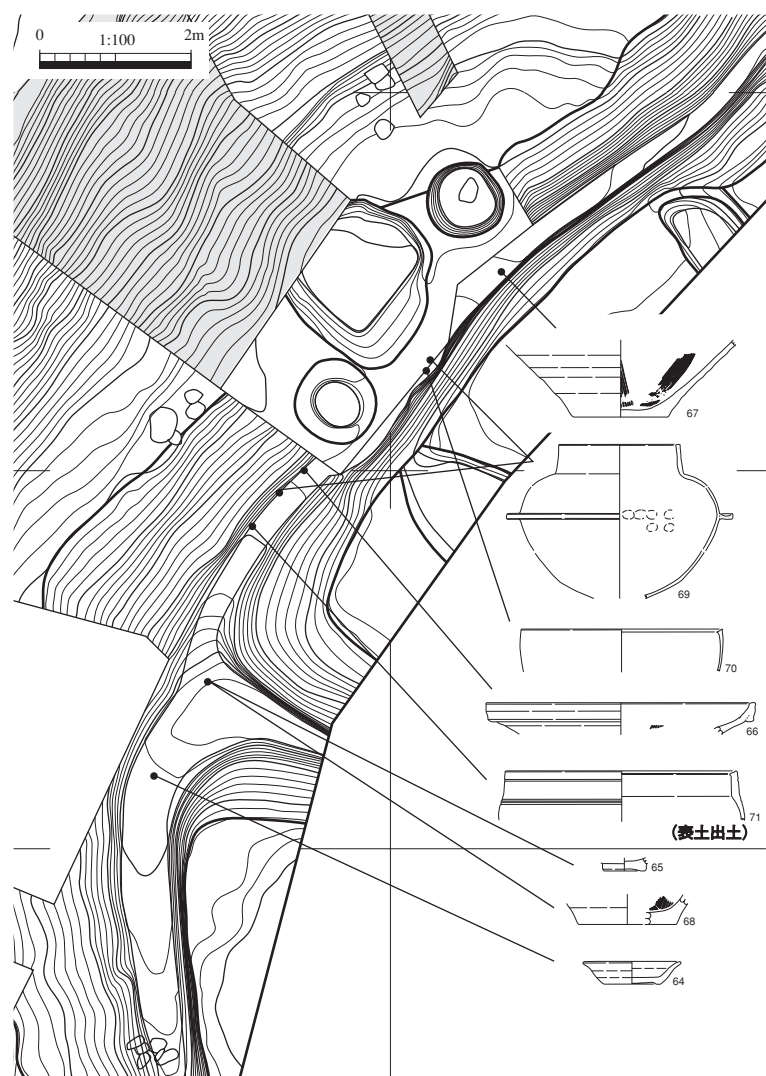


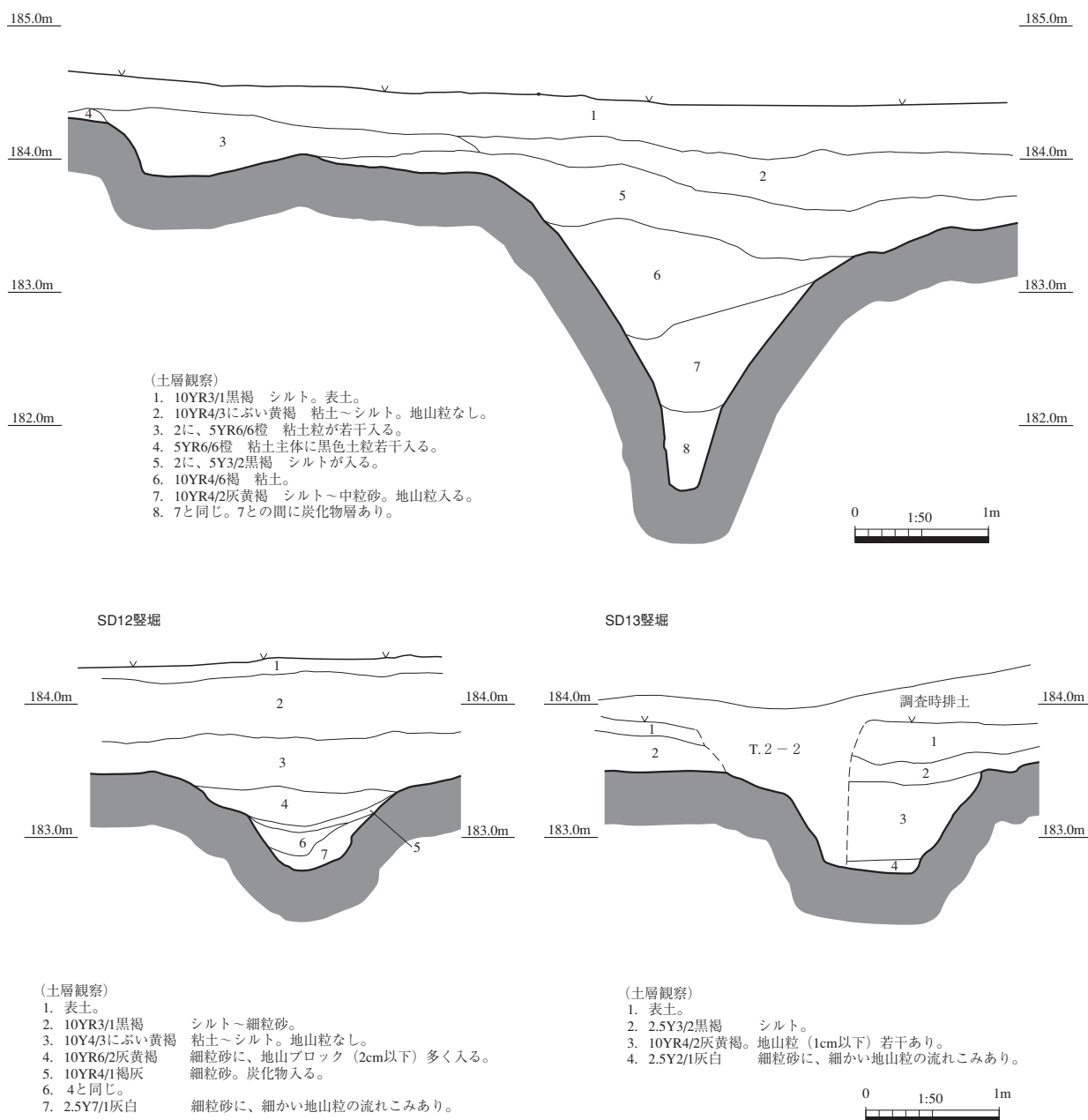
図72 01BSD09とSD13の交差部と遺物出土地点図

路として機能した可能性は低いであろう。埋め戻しの層（3層）からは遺物が出土せず、この遺構の時期を特定するに至らない。

（8）Ⅱ期の遺構（竪穴状施設）

SX02・08 平場1で確認された、竪穴状遺構である。当初SX02として図74に示した範囲で掘削を始めたが、そのうち2箇所深く掘り下がる事が判明し、これらを別個の竪穴状遺構として認識した。南西側がSX02、北東側がSX08である。

SX02は、平面形が東西方向に長軸をもつやや崩れた楕円形である。長軸2.8m、短軸1.5mで、確認面での面積は約9.8㎡である。底部は明瞭な底面を持たず、緩やかなカーブで立ち上がる。最深部での深さは15cmである。また底部でピットは確認されなかった。遺物は土師器の小片が若干出土したのみで、時期を特定するものはなかった。



SX08は、平面形が東西方向に長軸をもつ崩れた隅丸長方形である。長軸2.4m、短軸1.5mで、確認面での面積は3.5㎡である。北壁は比較的急角度で立ち上がるが、南辺は緩やかに立ち上がる。底部では4つのピットが確認された。ほぼ正方形に配置される。直径は25～35cmで、深さは5～12cmである。深さが浅いため掘立柱ではないと判断されるが、上屋構造の柱が据えられた位置であると考えられる。遺物は、覆土の上方で大窯3期の瀬戸美濃産播鉢の小片が出土した。

SX05 平場4のほぼ中央で確認された、竪穴状遺構である。南西から北東方向に長軸をもつ崩れた円形である。長軸3.3m短軸2.7m、深さ18cmである。底面は緩く船底状である。柱穴はないがほぼ中央に長軸110cm深さ60cmの土坑がある。しかし覆土が共通しないので直接の関わりはないとみられる。遺物は1層から陶器小片がわずかに出土したが時期は特定できない。

SX06 SX06の東側で確認された、竪穴状遺構である。平面形は、南西から北東方向に長軸をもつやや崩れた隅丸長方形である。長軸3.7m、短軸2.0mで、確認面での面積は約7.4㎡である。SX08と同じく北壁は急角度で立ち上がるが、南壁は緩やかな立ち上がりである。底面にピットはない。

土層は大きく3層に分かれる。上層（1層）は粘質の強い暗褐色土である。遺物はほとんど出土しなかった。下層（2・3層）は、炭化物粒や遺物が多くみられる。とくに下層（4層）との境界付近に炭化物が集中しており、下層の堆積後の窪みが廃棄坑として利用されたと考えられる。下層（4・5層）は炭化物がなく、遺物の出土もほとんどみられなかった。中層からは古瀬戸後Ⅳ期新の瀬戸美濃産灰釉端反皿2点のほか、土師皿小片や鉄滓が出土した。

SX10 SX06の東側で確認された、竪穴状遺構である。平面形は、北西から南東方向に長軸をもつやや崩れた隅丸長方形である。長軸2.6m、短軸1.6mで、確認面での面積は約4.2㎡である。SX08、06と同じく北壁が急角度で立ち上がるが、南壁は緩やかに立ち上がる。底部でピットは確認されなかった。土層はおおむねSX06下層と同じで、炭化物・遺物はほとんどみられなかった。

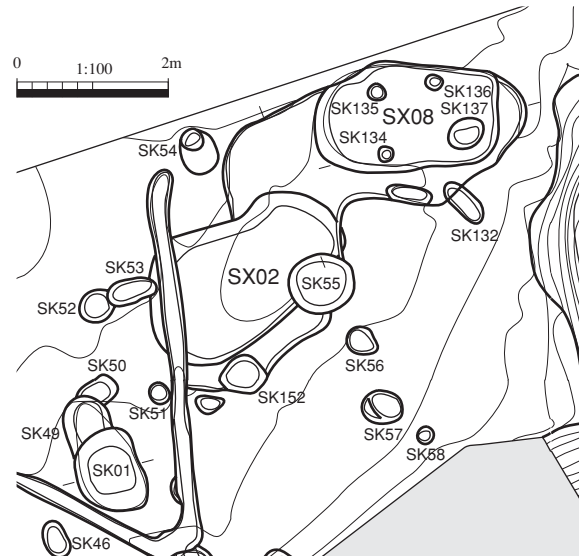
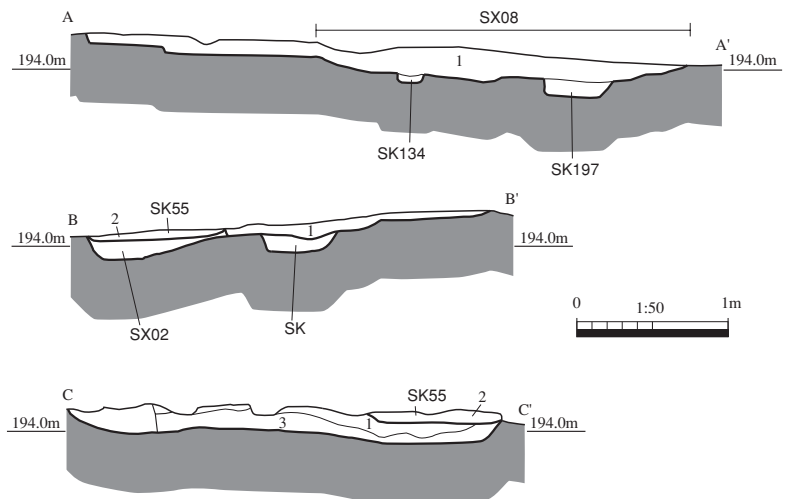


図74 01B区 SX02・08 平面図



(土層観察)

1. 10YR3/3暗褐 粘土～シルト。白色小破石入る。炭化物若干あり。
一部に炭化物が集中する箇所あり。遺物あり。しまり強い。
2. 10YR3/2黒褐 粘土～シルト。SK55。
3. 10YR4/6褐 粘土～シルト。白色小破石入る。地山との区別が明瞭でない。しまり強い。

図75 01B区 SX02・08 土層断面図

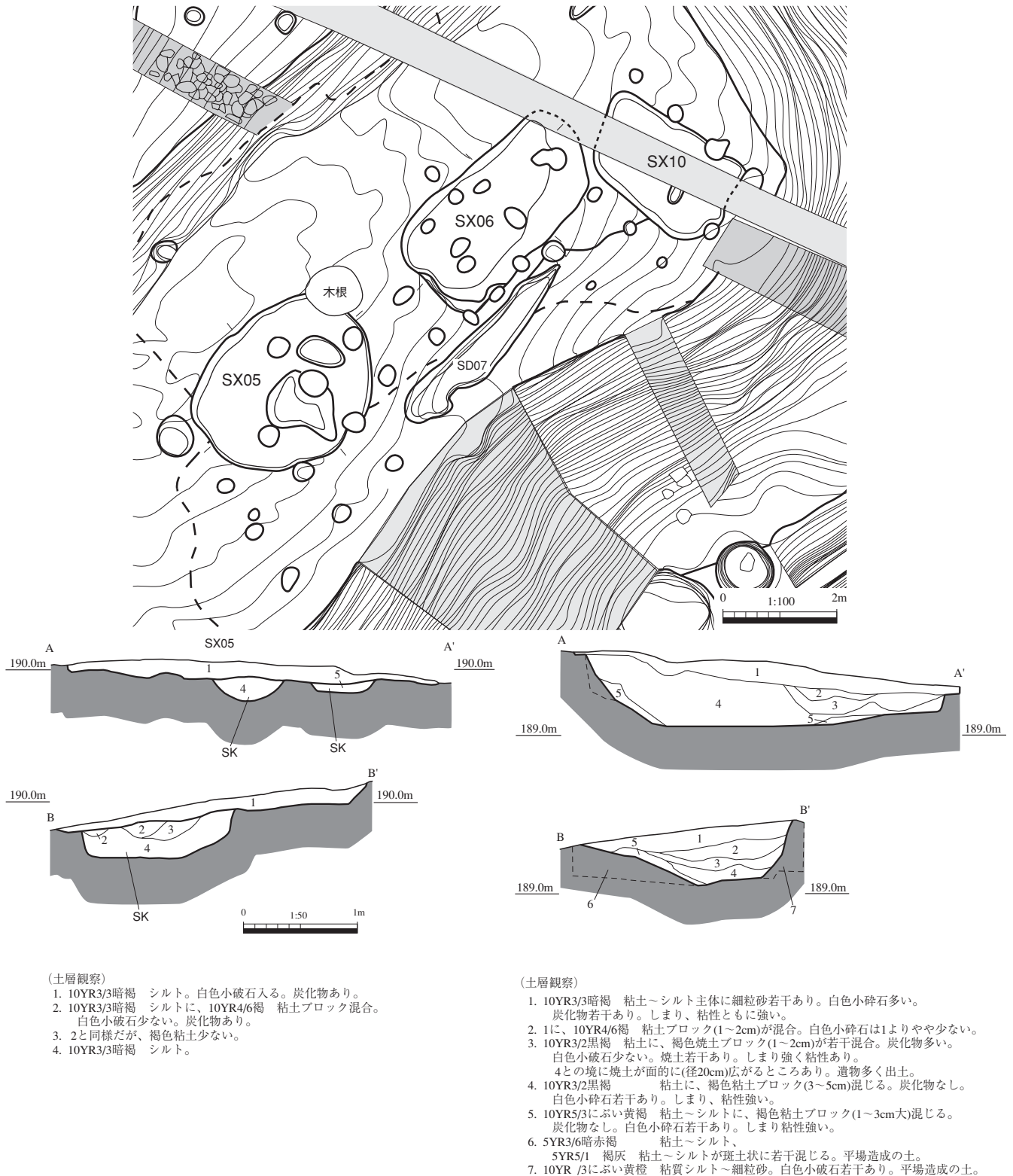


図 76 01B 区 SX05・06・10 平面および土層断面図（平面図 1:100、断面図 1:50）

（9）Ⅱ期（一部Ⅰ期）の遺構（掘立柱建物）

SB01 平場 1～2 で確認された 1 間×2 間の掘立柱建物である。SB02 と重複関係にあり、こちらが先になる。西辺の軸方向はグリッド北に対して N-10° -W である。柱間間隔は西辺で南から 3.1m、2.8m である。ピットは直径 25～50cm で、深さは 10～40cm である。

SB02 平場1～2で確認された1間×2間の掘立柱建物である。SB01と重複関係にあり、こちらが後になる。SB01とはほぼ同一規模である。西辺の軸方向はN-15°-Wである。柱間隔は西辺で南から2.1m、2.7mである。ピットは直径7～42cmで、深さは8～33cmである。

当該建物に関しては、Ⅱ期の通路 SX03をちょうど見下ろす位置にあり、その関係を重視するならば、Ⅱ期に含めておくべきであろう。ただし出土遺物がなく時期の判断は流動的であることを断っておく。

(10) Ⅱ期の遺構（柵）

SA01 平場1～2で確認された柵の遺構である。南西から北東方向へのびる4間分が確認された。SB01、02と重複関係にあるが、ピットの重複がないため前後関係は不明である。方向はN-35°-Eである。柱間隔は1.4mである。ピットは直径10cmで、深さは5～20cmである。

(11) Ⅱ期の遺構（礎石建物）

平場3・4で確認された深さが極めて浅いピットからなる建物は礎石建物の可能性が考えられる。いずれも一部のピットがSX05、06、10の竪穴状遺構の埋土上で確認されており、竪穴状遺構が廃絶した段階での施設であることがわかる。礎石はピットに据えられた状態では出土せず、切岸直下で直径約40cm厚さ

15cmの円盤状の円礫が1点出土した他、第4章で提示する角礫（S3）がその可能性が考えられる程度である。

SB03 平場3の東端で確認された2間×3間の総柱建物である。柱間隔は南東辺で西から1.1m、1.1mで、南西辺で南から0.9m、0.9m、1.0mである。柱位置を示すピットは、直径が20～30cmであるが、深さは2～6cmで浅い。ピットは礎石を抜き取った痕跡と考えられる。抜き取り穴の覆土は、表土と同じ土である。

SB04 平場4のほぼ中央、SX05に一部重なる位置で確認された、2間×3間の総柱建物である。柱間隔は東辺で南から1.0m、0.9m、0.9mで、南辺で西から1.4m、1.2mである。柱位置を示すピットは、直径が20～35cmであるが、

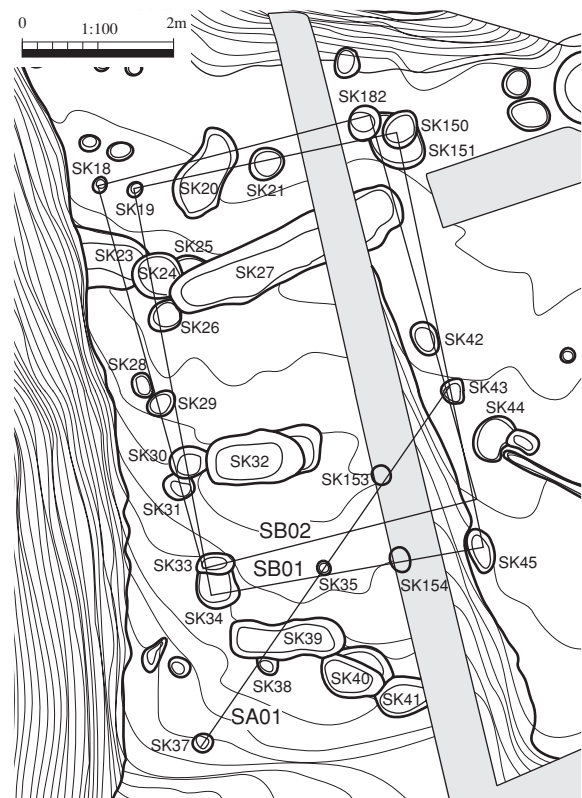


図 77 SB01・02 平面図

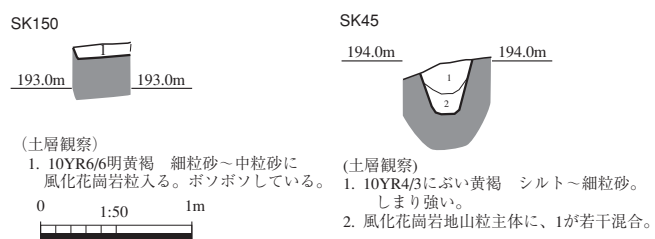


図 78 01B区 SK150・45 土層断面図

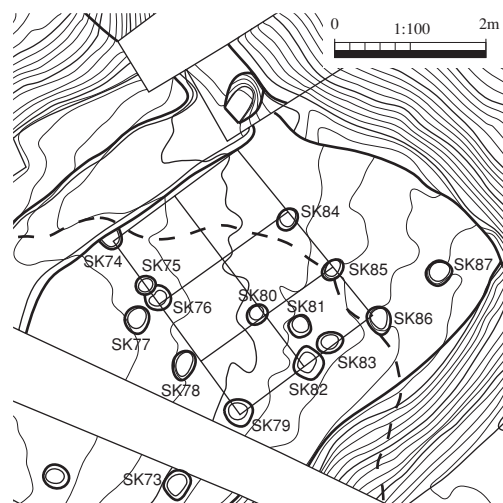


図 79 01B区 SB03 平面図

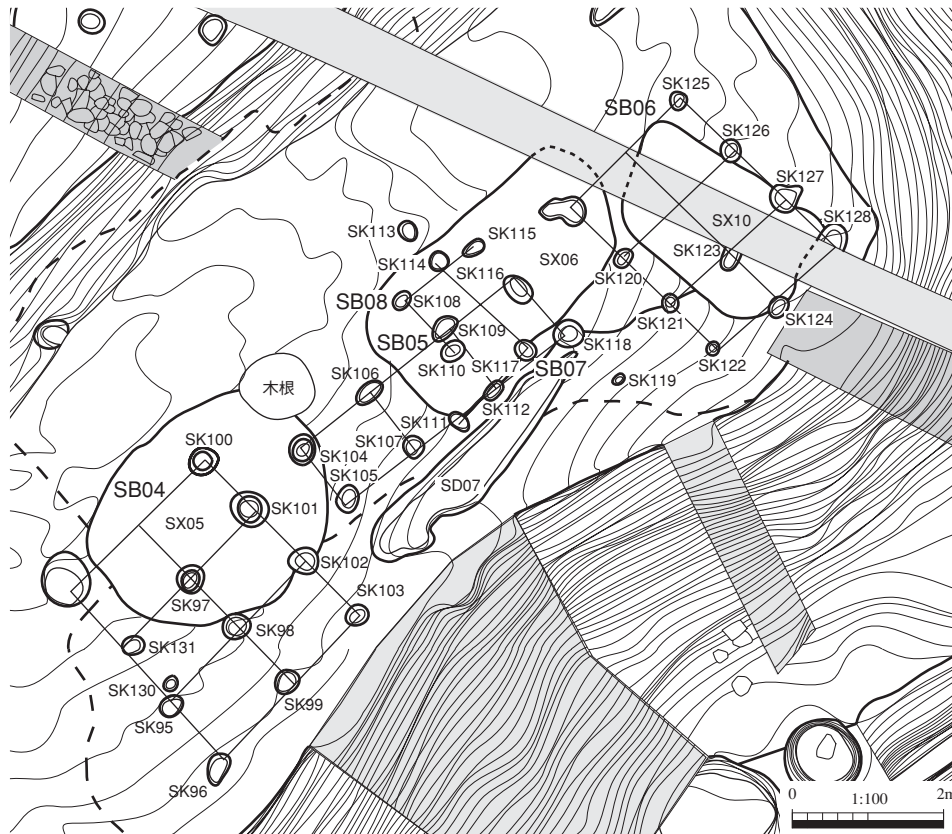


図 80 01B 区 SB04 ～ 08 平面図

深さはいずれも 3～5cm で浅い。ピットは礎石を抜き取った痕跡と考えられる。抜き取り穴の覆土は、表土と同じ土である。

SB05 SB04 の東側で確認された、1 間×3 間の総柱建物である。SX05、06 の埋土上に一部ピットが確認された。なお SB04 とは重複関係がない。柱間隔はほぼ 1.2m 等間である。ピットは深さ 3cm～5cm で浅い。SB04 に比べて、建物南北方向軸が若干東方向へ振れる、N-51° -E である。

SB06 SB05 の東隣で確認された、2 間×3 間の総柱の可能性のある建物である。SB05 とは約 1.3m 離れている。一部ピットは SX10 埋土上で確認された。柱間隔は南東辺で 1.1m 間隔、北東辺で 1.0m 間隔である。柱位置を示すピットは直径 15～38cm であるが、深さはいずれも 2～6cm で浅い。

SB07 SB05 と重複して、一部（北東辺と南東辺）が確認された建物である。規模は 1 間以上×1 間以上である。柱間隔はその心々間距離が北東辺で 1.7m、南東辺で 1.3m である。柱位置を示すピットは、直径が 20～30cm で、深さはいずれも 3～5cm と浅い。

SB08 SB05 と重複して、一部（北西辺と南西辺）が確認された建物である。規模は 1 間以上×1 間以上である。柱間隔はその心々間距離が北西辺で 1.2m、南西辺で 0.9m である。柱位置を示すピットは、直径が 20～25cm で、深さはいずれも 3～5cm と浅い。

(12) 土坑

SK01 平場 1 の中央部、竪穴状施設 SX02 の南西 1m の位置で確認された直径 75cm の円形の土坑である。深さ 70cm まで掘削したが下方の 6・7 層は SX03 の埋土であった。したがって深さは 30cm である。覆土中からは土器・陶器の小片が少量出土したが、近世にまで時期が下るものはなく、戦国時代に限定

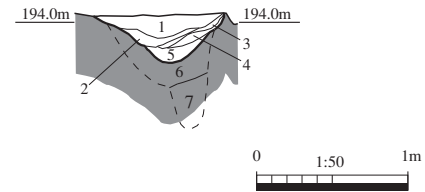
されるとみられる。掘立柱建物の柱穴以外で時期が限定できる土坑の数少ない例であるが、性格を特定するには至らない。

(12) 野壺（埋甕）

調査区内では5基の野壺があり、そのうち3基は地表面で確認できた。ここでは表土除去後に確認できたものを示す。

SK156 平場0の南側斜面直下にある、直径0.9m、深さ22cmの正円に近い平面形の土坑である。西半分は地山を掘削しているが、残りはSX03の埋土である粘質土を掘削している。底は平らで、直径75cmの結桶底部が据えられた状態で出土したがきわめて劣化しており取り上げることはできなかった。結桶内は粘質土が堆積し、そこに甕を据えるための土坑を掘り込んでいるのが確認された。甕は底部が据えられた状態で出土した。ただし胴部から上方は破碎されており廃棄された状況がうかがえる。

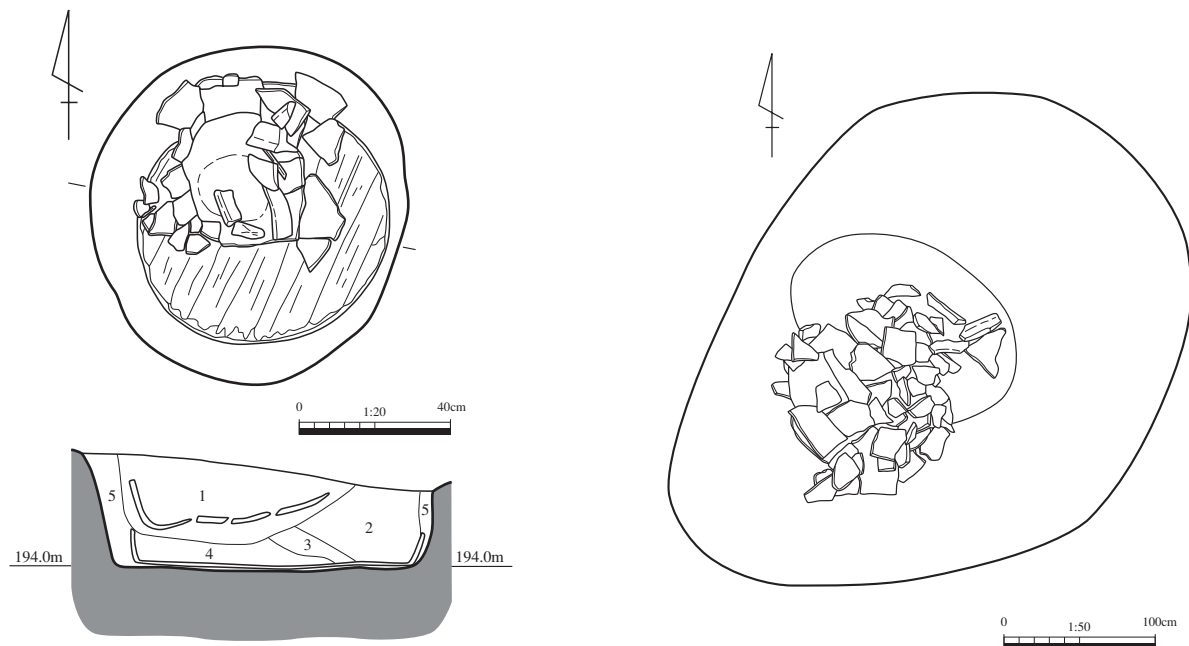
SK157 SK156の北東に位置する、長軸3.8m、短軸2.9m、深さ38cmの楕円状の土坑である。破碎された常滑産甕が出土した。土坑が甕の胴部最大径よりはるかに大きく底部が据えられた状態でなかったため、甕を抜いて破碎し廃棄したものと考えられる。



(土層観察)

1. 7.5YR4/2灰褐 シルト～細粒砂。
白色小破石あり。しまり強い。
2. 1に、7.5Y5/6明褐 粘土ブロック(2mm以下)混合。
白色小破石あり。
3. 2と4の混合。
4. 10YR3/2黒褐 シルト～細粒砂。白色小破石あり。
ややボソボソしている。
5. 10YR5/6黄褐 粘土と、10YR4/2灰黄褐 シルトの混合。
白色小破石若干あり。
6. 10YR5/6黄褐 粘土～シルト (SX03埋土)。
7. 6に、地山(風化花崗岩)粒入る (SX03埋土)。

図81 01B区SK01土層断面図(1:50)



(土層観察)

1. 10YR4/2灰黄褐 シルト～細粒砂。N8/ 灰白
粘土ブロックや黒土ブロック若干混じる(上面で確認)。
粘性あり。しまりやや欠け。
2. 2.5GY5/1オリーブ灰 細粒砂。炭化物粒若干あり。
3. 2.5Y7/3浅黄 粘土～シルト。
4. 2と同じ。
5. 2.5GY6/1オリーブ灰 粘土～シルト。2.5Y8/3浅淡黄
粘土ブロック若干あり。

図82 01B区SK156平面および土層断面図(左)・01BSK157平面図(右)

第4章 発掘調査の成果（2） 遺物

第1節 概観

2年度にわたる発掘調査で出土した遺物はP-27コンテナに換算して約50箱分になる。総重量は算出していないが、その主体は近世以降の野壺に使用された甕である。次いで表土中から出土した各時代の遺物であり、遺構内から出土したものは少数である。

本章では出土遺物を提示するにあたって、まず材質（土製または陶製・石製・金属製・鍛冶関連・ガラス製）で大別した。そして土製または陶製遺物については、その年代特定が課題となる山城に関わると判断される遺構内出土のものを重要視した。しかし、堀切のようなあまりに巨大な遺構出土遺物のうち、出土層位を考慮すると表土と同じ扱いをすべきと判断される一群については除外した。

遺物のうち陶磁器の年代は藤澤良佑氏による窯業地における瀬戸美濃産陶器編年に基づいた記述をおこなった。その暦年代との対応は表1のとおりである。また土師器鍋の分類は鈴木正貴による西三河型の設定（鈴木1996）にもとづく。

第2節 山城の遺構から出土した陶磁器

（1）00A区（1）

SD01 堀切の最下層底面近くから出土した唯一の遺物である。瀬戸美濃産鉄釉播鉢で、大窯1期である。堀切埋没時期の上限を示す資料である。

（2）00B区（2～7）

SD01 横堀の表土および上層からは戦国時代～近代の遺物が出土したが、下層からは美濃産志野丸皿（2）1点がその東端にて出土したのみである。連房式登窯第1～2小期（17世紀初め）である。上層からは瀬戸産御室碗（3）と土師器皿が出土した。3は連房式登窯第7小期で江戸時代中期である。

SK06・20・76 SK06出土の土師器内耳鍋（5）は西三河E1類で16世紀後半。SK20からは瀬戸美濃産天目茶碗の小片（6）。大窯1期である。SK76からは土師器皿が出土した。底部回転糸切痕がある。

（3）01A区（8～63）

SD07 通路の可能性のある横堀状の溝からは、古瀬戸後期、新～大窯1期の陶器（8・12・15）が出土した。しかし9は瀬戸美濃産梅紋皿で連房式登窯第8～9小期である。

SD10 16は景德鎮産の白磁皿である。20は大窯1期の播鉢、17・21・22は大窯2期後半から3期である。当該遺構の埋没時期の下限時期と考えられる。土師器内耳鍋（23）は西三河内耳鍋A3類ではほぼ陶器と併行する時期と考えられる。

SX01 平場1の竪穴状遺構出土はほとんどが陶器で、28・29は大窯1期の播鉢、30は古瀬戸後期、新、31・34は大窯2～3期でこの遺構の年代下限となっている。

SX02・03 平場2の竪穴状遺構出土遺物の組成もSX01に類似するが、こちらは古瀬戸後期末～大窯1期が中心である。ただ一部は大窯2期の可能性がある。42は竜泉窯系の青磁碗。48・49は青磁盤である。43は景德鎮産白磁皿で同じものがSD10でも出土している。53・54は土師器内耳鍋で、西三河E1類

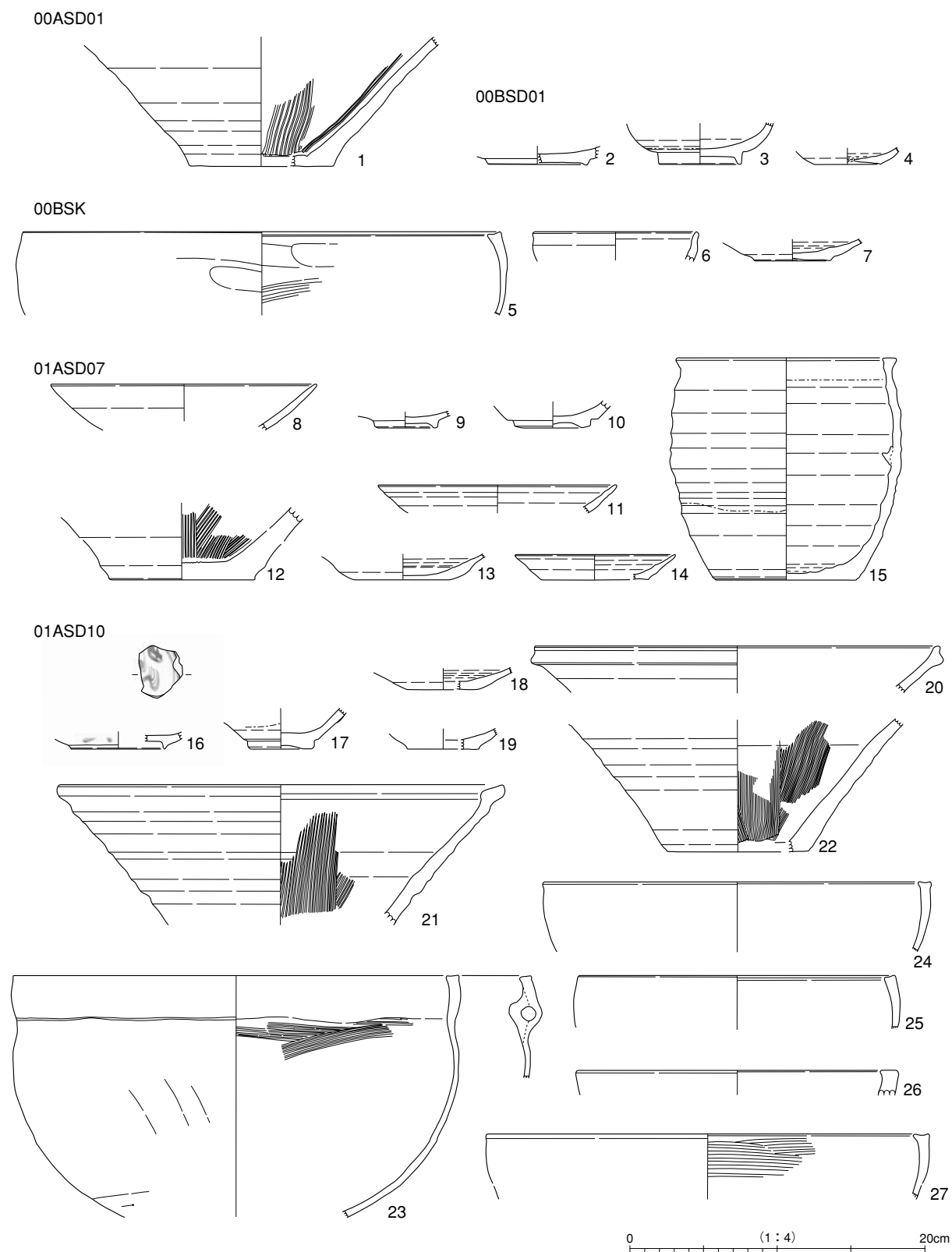
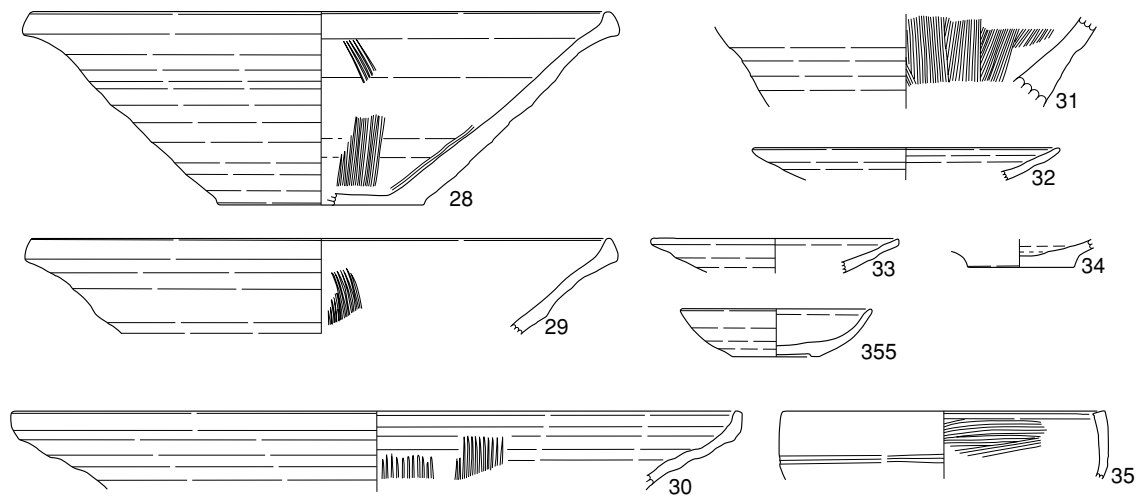


図 83 山城遺構（00A・00B・01A 区）出土土器・陶磁器実測図

01ASX01



01ASX02・03

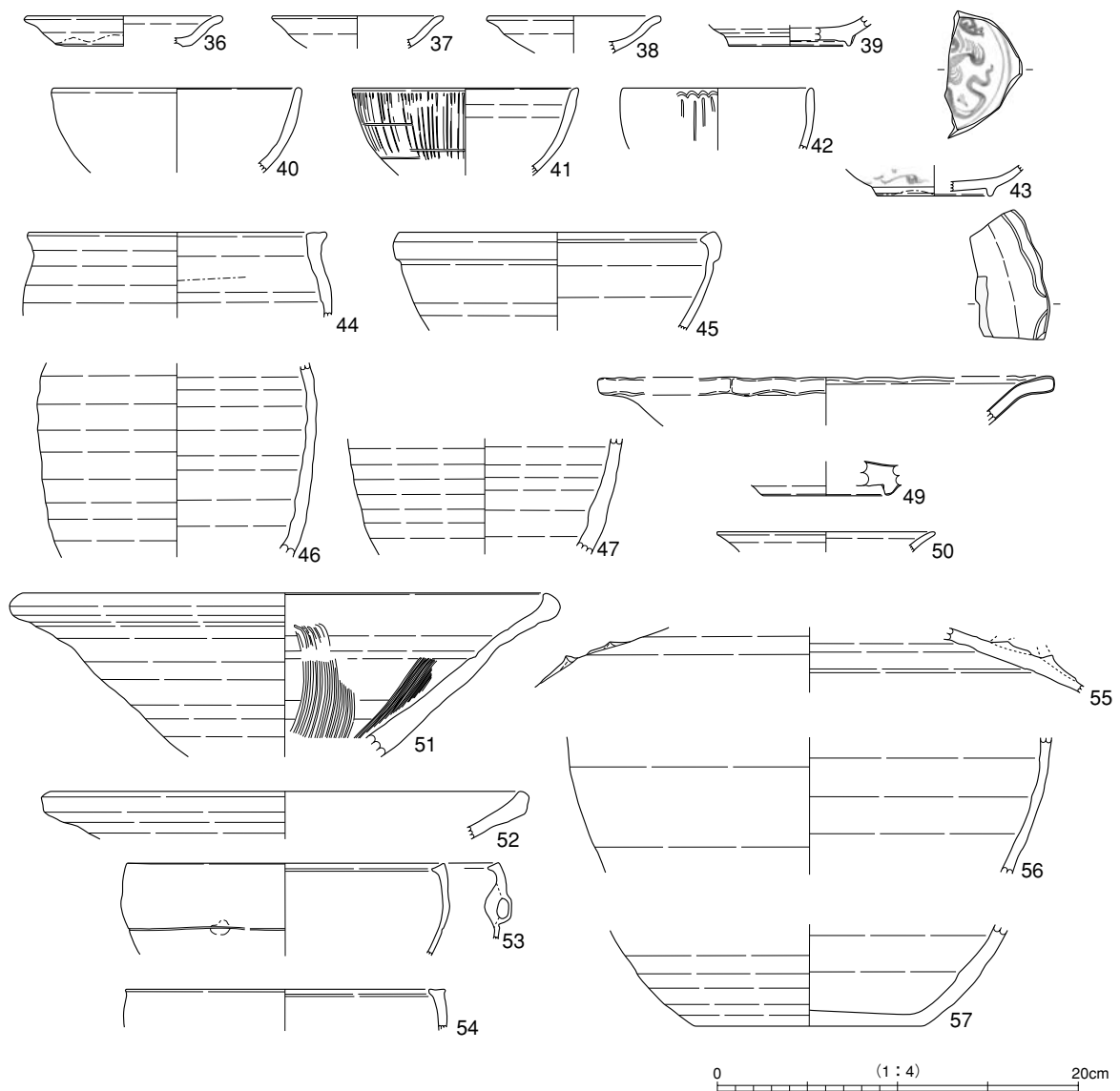
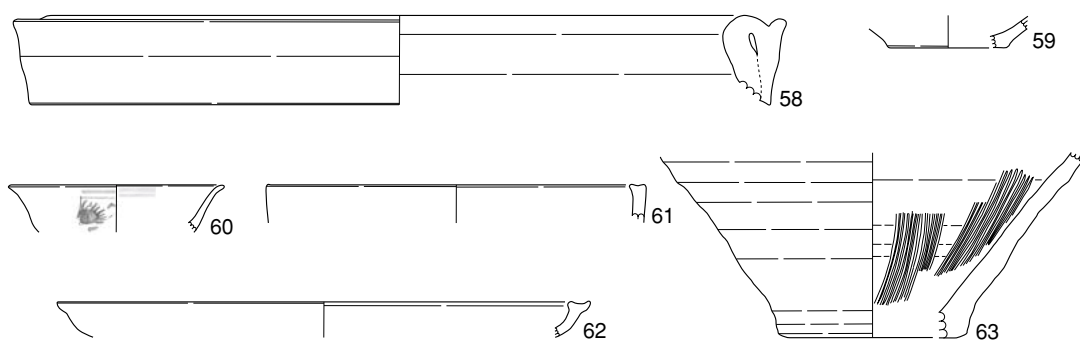
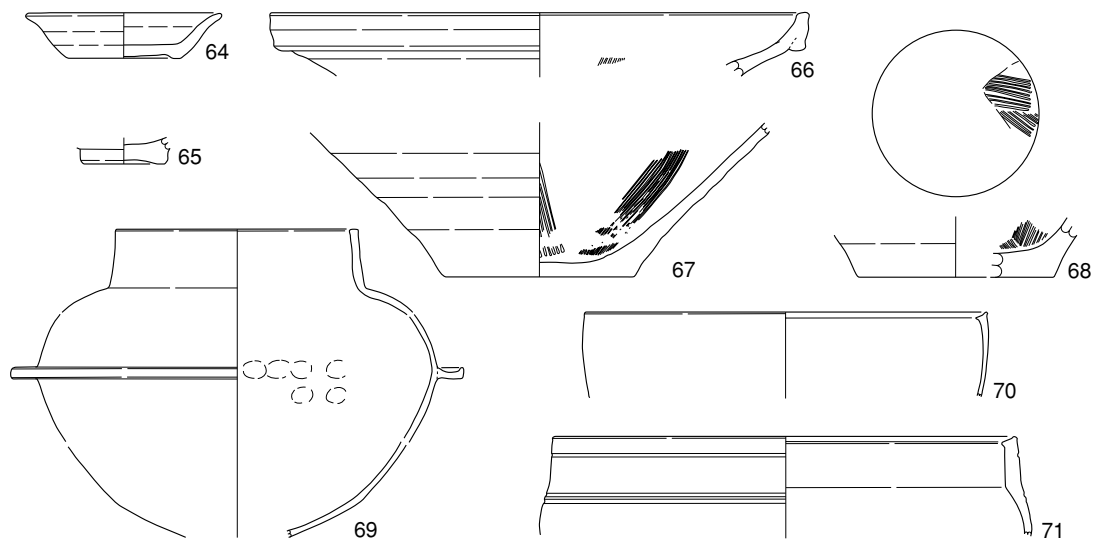


図 84 山城遺構（01A区）出土土器・陶磁器実測図

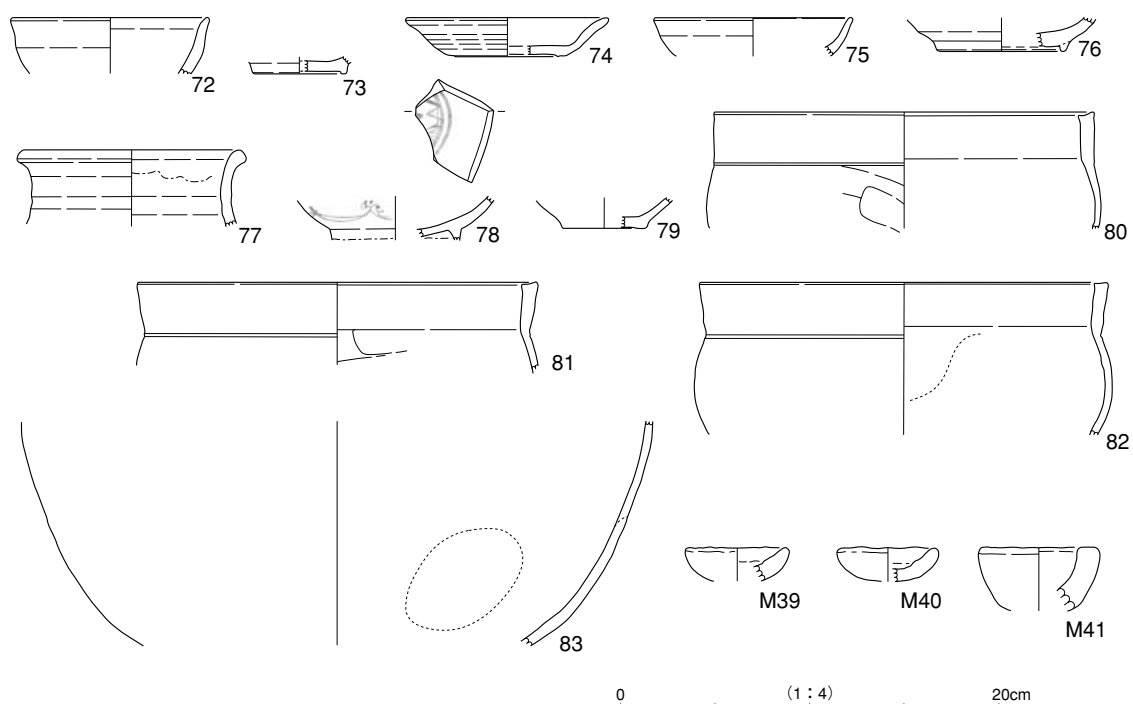
01ASD・SK



01BSD09



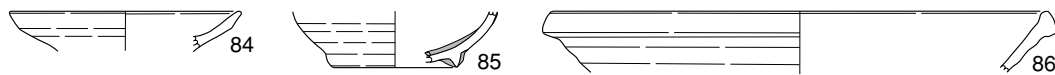
01BSX03



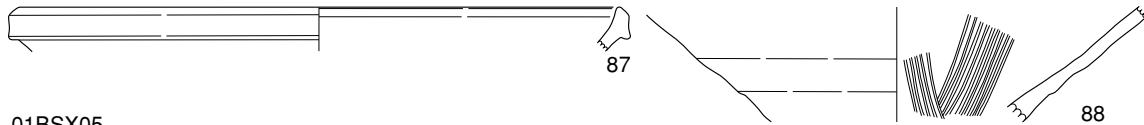
0 (1:4) 20cm

図85 山城遺構（01A・01B区）出土土器・陶磁器実測図

01BSX01



01BSX02.08

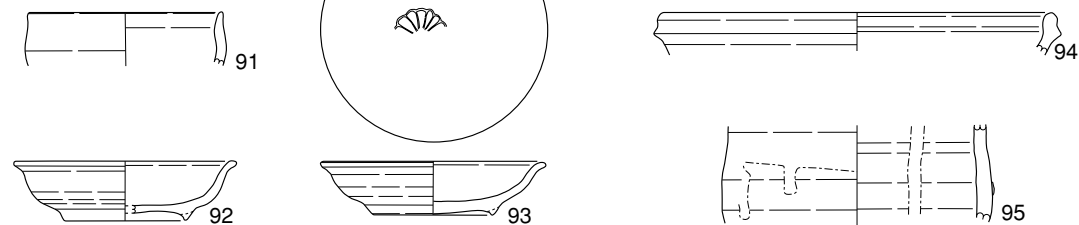


01BSX05



0 1 : 4 20cm

01BSX06



01BSD・SK



図 86 山城遺構（01B 区）出土土器・陶磁器実測図

で 16 世紀後半。55～57 は縦耳の祖母懷壺で大窯 1～2 期である。

その他の遺構 58 (SK02) は常滑産甕で 15 世紀後半。60 (SK160) は景德鎮産白磁碗。63 (SK133) は古瀬戸後期Ⅳ新の搦鉢である。

（４）01B 区（64～97）

SD09 提示した遺物のうち 71 は上層で、それ以外は堀底近くの炭化物層から出土した。64 は、瀬戸美濃産稜皿で大窯 3 期前半。65 は天目茶碗で大窯 3 期。66 は搦鉢で大窯 3 期後半。67 も搦鉢だがこちらは大窯 1 期。内面が全体に熱を受けたことで器面の剥離が進んでいる。68 は搦鉢で大窯 2～3 期。069 は羽付鍋西三河 1 類である。70 は内耳鍋西三河 E1 類、71 は同 A1 類で SX03 にかかわるか。

SX03 いずれも平場 3 の造成土のうち礫層より上層で出土した。72・73 は大窯 1 期。74・75 は大窯 2 期。77 は古瀬戸後期ⅢもしくはⅣ期の灰釉瓶子である。78 は景德鎮産の白磁碗である。土師器は皿 (79) と鍋 (80～83)。鍋は西三河 A1 類で 15 世紀後半～16 世紀前半である。なお、土製のとりべ（埴塙）は鍛冶関連遺物の節で提示する。

SX01 いずれも 2～6 層の埋め戻し土層中からの出土であるが、86 のみは通路の硬化面と考えられる 10 層の上面に位置する。84 は瀬戸美濃産丸碗で 17 世紀前半、85 は大窯 1 期灰釉丸碗、86 は古瀬戸後期Ⅳ新の搦鉢である。

SX02・08 いずれも SX08 覆土中からの出土である。いずれも搦鉢で、87 は大窯 3 期前半、088 は大窯

2～3期である。

SX05 ごく小片が出土した。089は蓮弁のある灰釉椀、090は端反皿で、両者ものに大窯1期である。

SX06 092・093は細かく破碎された状態で出土した。091は天目茶碗、092・093は端反皿、094は播鉢、095は口広有耳壺の胴部である。095が古瀬戸後期、期新段階～大窯1期である以外は、全て大窯1期である。

その他の遺構 096 (SD13)・097 (SK152) とともに土師器内耳鍋西三河 E1 類で16世紀後半ある。

第3節 遺構外出土の土器・陶磁器

概観 前節で提示した以外にも、表土やそれとほぼ同義の遺構上層から出土した土器・陶磁器は27ℓ入りコンテナで24箱分になる。近世・近代のものが主体的ではあるが、戦国時代のものも少なからず含まれ、本来ならば後者は前節で提示した山城にかかわるものと考えられる。しかし遺跡が斜面地に位置している点と、近代に多くなされたであろう耕作地化による削平を考慮すると、全体的に自然堆積がほとんどなく、攪乱によって各時期の遺物が地表面付近で容易に移動し混在する状況にあったことは想像に難くない。したがって、城跡遺跡の資料として前節提示資料と同等に扱うことはできない。なお、本節では古代の土器ならびに近代の常滑甕を除いた土器・陶磁器を提示する。

00A区SD01 横堀の表土～上層からは戦国時代～現代の土器・陶磁器が出土した。そのうち戦国時代のは少数で、青磁碗(105)、土師器皿(117～123)、同鍋(124)程度であるが、土師器皿は江戸時代の可能性もある。そして102は大窯4期～連房第1小期の丸碗、103は志野丸皿で連房第1小期、98は連房第2小期天目茶碗、101は美濃産で連房第5～7小期で、江戸時代中期までとなるが、これら以外は連房第8小期以降、いわゆる幕末～明治時代の所産である。107は本業焼の植木鉢。鍋(109～112)、土瓶(114・115)といった台所用品は遺跡の中でもここだけで出土しており、まとまった状態でここに投棄された可能性がある。

00A区表土 SD01と同様の時期構成である。128は古瀬戸後期Ⅳ新、129は美濃産連房第8～9小期、130も美濃産ひょうそくで、連房第9小期以降である。133は瀬戸産で連房第5小期の鬚盥(びんだらい)である。135は瀬戸産第9小期播鉢、136は常滑産播鉢である。土師器(138～145)は戦国～江戸時代とみておく。146は第11小期の梅紋湯呑で幕末のものである。

00B区表土 この調査区でも表土からの出土がほとんどで、その時期構成も戦国時代～現代であるが、00A区と異なるのは戦国時代の土師器が一定量存在していることである。腰曲輪があったこととかかわるとみられるが、器種構成をみると土師器鍋(172～178)が目立っており、土師器皿も8点あって多いことは確かだが、前者が主体的に使用された空間であったといえる。また掘立柱建物(SB01)の柱掘形からも鍋が出土(5)していることも留意しておきたい。171の土師器皿の中心孔は焼成後に穿たれたものである。

大窯期の陶器は大窯1期(150)、大窯2期(154・156・160)があり、そこから古い時期になる古瀬戸中期Ⅰ～Ⅱの折縁皿(159)、古瀬戸後期Ⅳ新の可能性のある錆釉の釜(162)、14～15世紀の常滑産甕(163)が出土している。連房期のものは江戸時代前期となる第1小期(148)、江戸時代中期となる

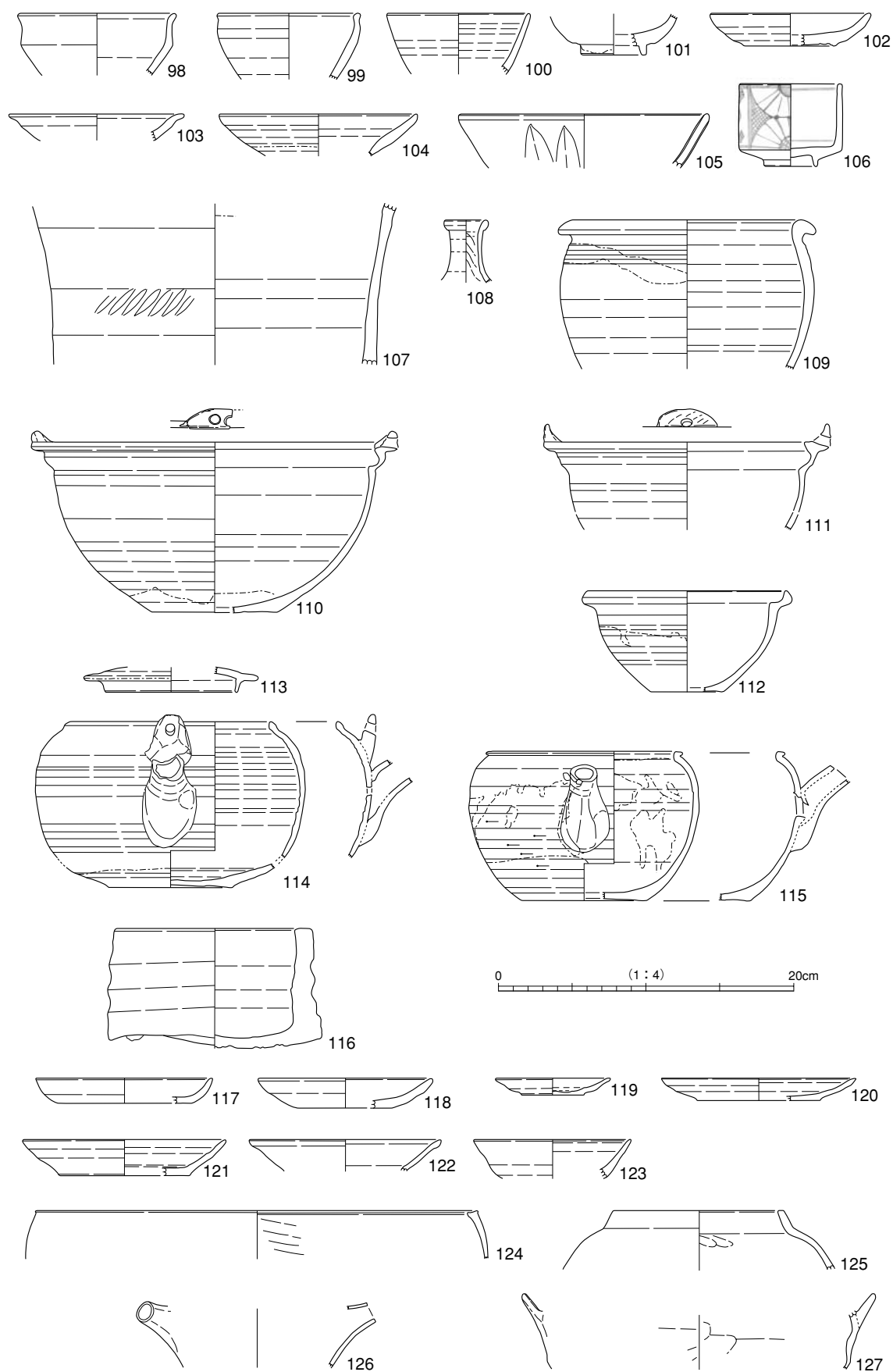


図 87 00A 区 SD01 出土土器・陶磁器実測図

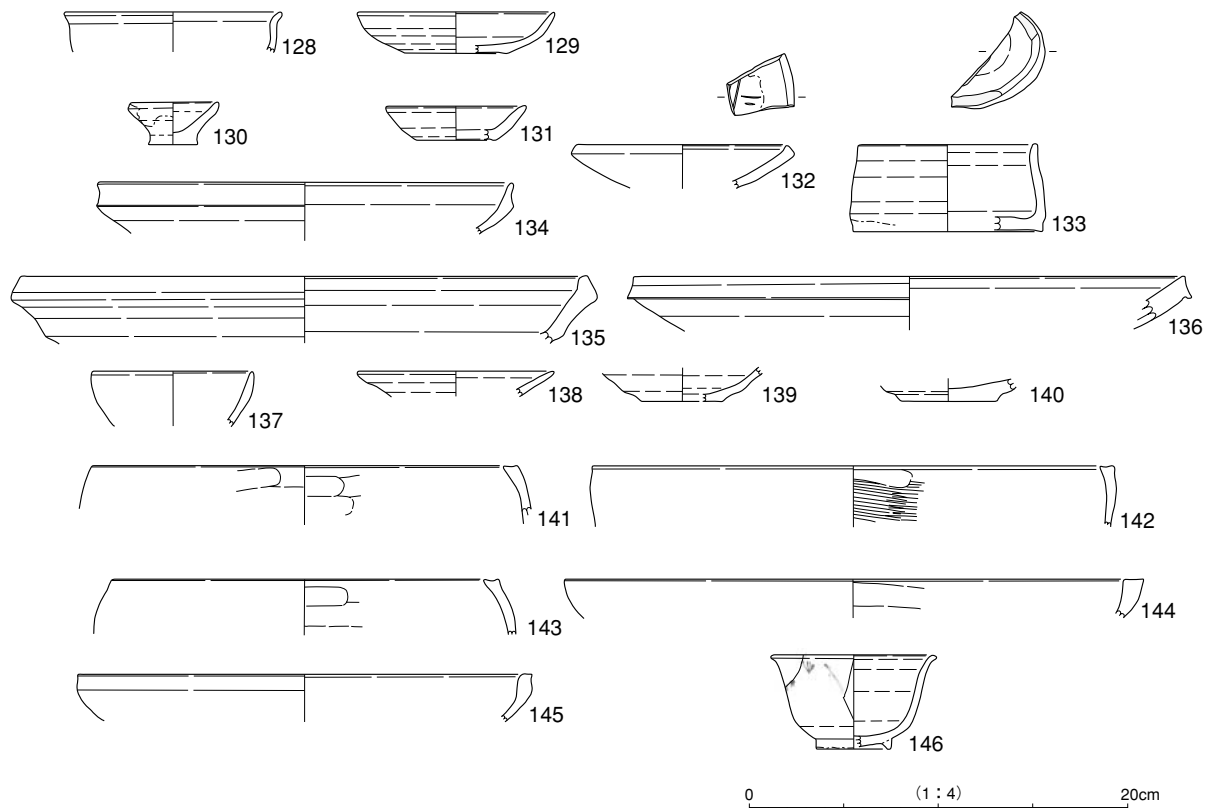


図 88 00A 区表土出土土器・陶磁器実測図

第5～6小期（147・153・161）、第7小期（158：瀬戸産輪禿皿）、江戸時代後期から明治時代となる第8小期以降（152・182）、第10～11小期（157：美濃産灯明皿・181：鍔鉢）と分散傾向にある。ちなみに179は瀬戸産片口鉢の底部に墨書「ヨリ□（キまたは干か）」とある。180は焼塩壺。184は瀬戸産江戸後期の戸車である。185～187は現代（昭和時代）の磁器猪口である。

01A区表土 時期構成は戦国時代～現代である。近世以降のものを除けばその器種構成および时期的な構成は竪穴状遺構（SX01～03）出土のものに近く、大窯1～2期が中心である。さらに古瀬戸後期Ⅳ段階を遡るものはないことから、本調査区を設定した尾根筋が城郭の一部として使われ始めた時期と想定してもよいだろう。224・225は祖母懷壺。235の搦鉢は大窯1期であるが、横方向筋目はまれにあるタイプである。

01B区SD01 堀切の表土～上層ではわずかながら土器・陶器が出土した。294は大窯3期前半の天目茶碗、297は大窯2期の搦鉢、298は連房式登窯第6小期、295・296は瀬戸産連房式登窯第8小期と分散傾向にある。

01B区表土 調査直前まで耕作地となっていたためか、表土中の遺物は小破片で量も多くはない。戦国時代のものは、古瀬戸後期Ⅳ新（302・306）、大窯1～3期前半（300・303・304・307・308）で整地層（SX03）から横堀（SD09）までの時期とほぼ同じである。土師器鍋（309・310）は概ね16世紀後半であろう。江戸時代以降は瀬戸産第5～6小期（301：天目茶碗）、第8小期以降（311～316）がある。311は鉢とみられるが底部外面に花押ふうの墨書がある。とくに312・316は幕末～明治時代である。

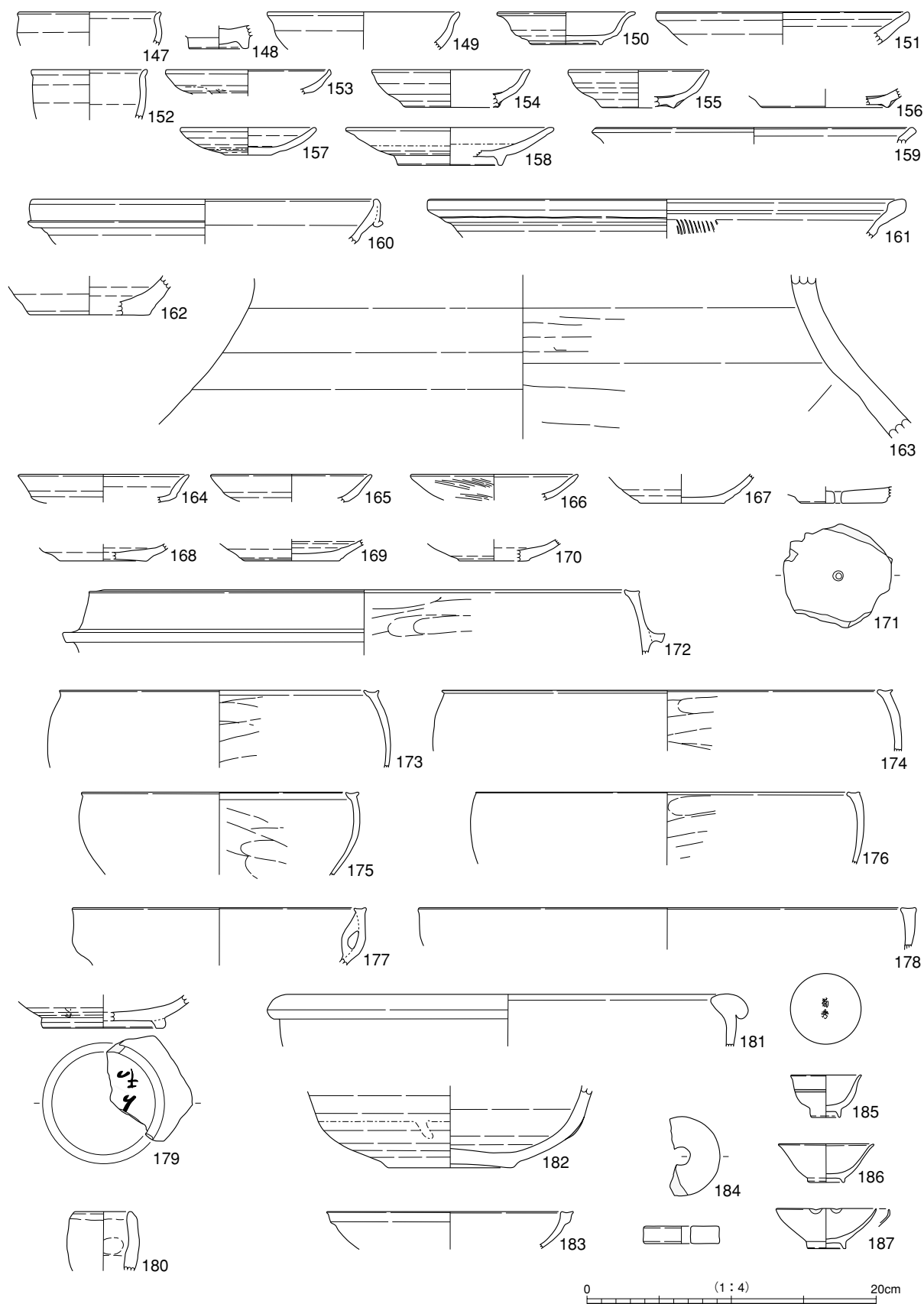


図 89 00B 区表土出土土器・陶磁器実測図

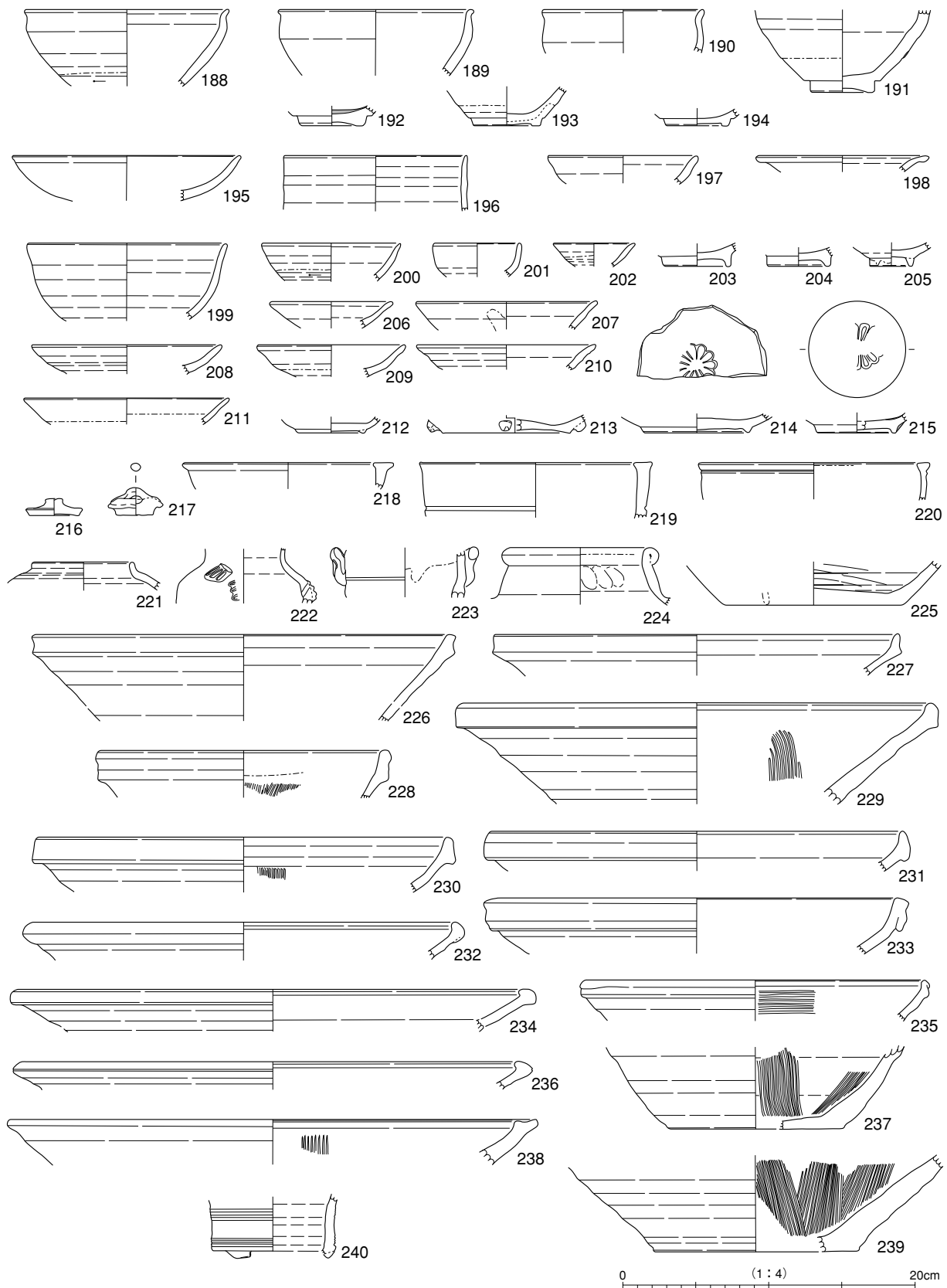


図90 01A区表土出土土器・陶磁器実測図その1(1:4)

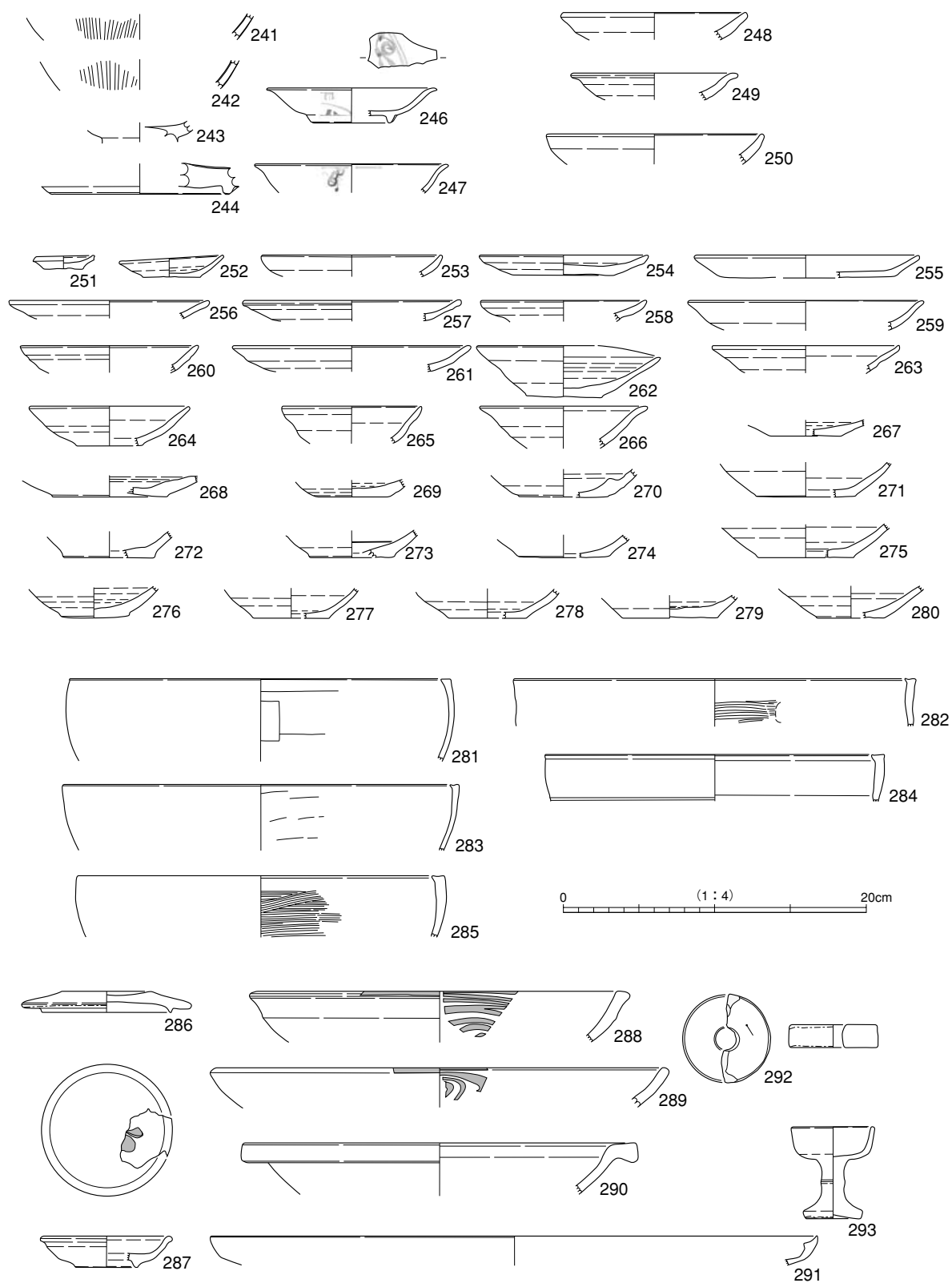
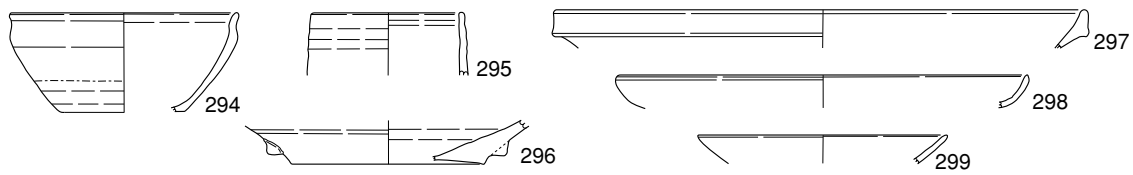


図 91 01A 区表土出土土器・陶磁器実測図その 2(1:4)

01BSD01



01B区表土

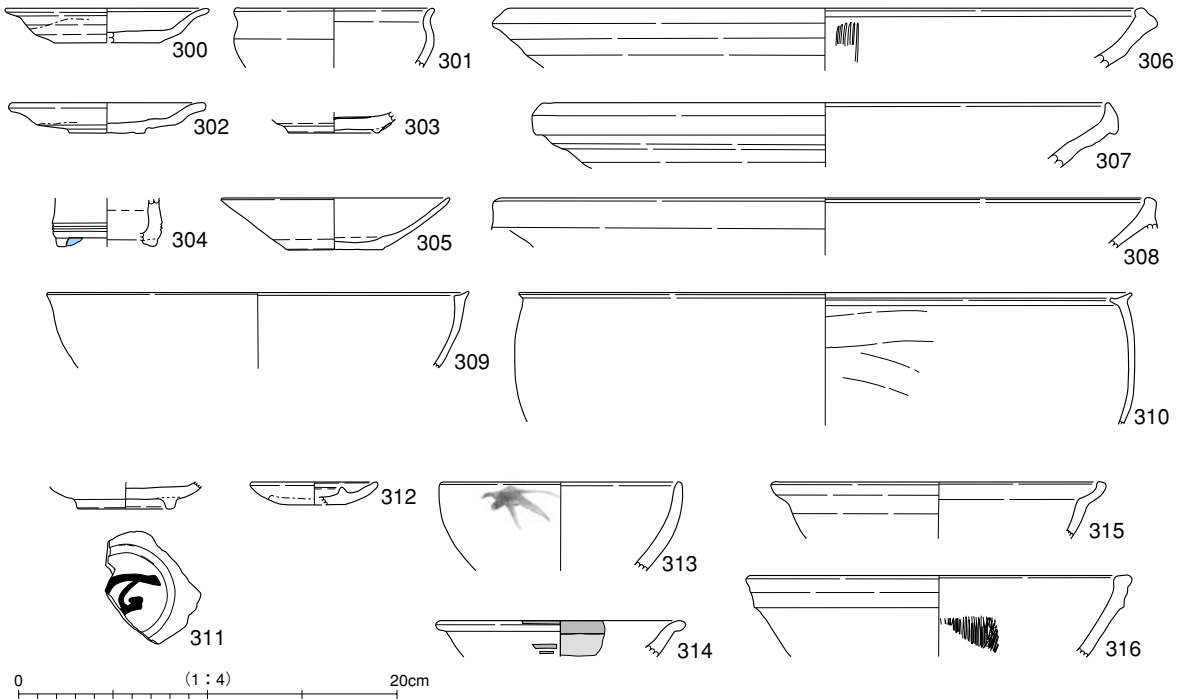


図 92 01B 区 SD01・表土出土土器・陶磁器実測図

第 4 節 野 壺 (317 ～ 326)

城山城跡およびその周辺の山地内において、赤物と呼ばれる常滑産を中心とする陶製大甕を埋設した野壺が多数確認されている。野壺は内容物によって肥溜と水溜に区分される。調査区内で出土したもののうちいくつかについてはその埋設状態を第3章で述べた。

00A 区 317 ～ 321 は 00A 区 SD01 の表土～上層で出土した。それぞれ第3章での呼称は埋甕 A ～ E である。317 (埋甕 A) は旧高浜町 (現・愛知県高浜市) で生産された甕である。口縁上面に「三河高濱 間宮製造」と刻印がなされている。底径は 20cm で他の常滑産甕とほぼ同規模であるが、器高が 48cm と低く、胴回りの最大径がほぼ半ばにあるのが特徴である。したがって全体の印象は近世常滑産甕のそれであるが、断面の四角い口縁が大正～昭和戦前期の所産であることを示している。

さて刻印にあった間宮製造とは、旧高浜町 (現・高浜市) で明治時代末～太平洋戦争中に営業した業者で、創業者は間宮松太郎である。彼はもともと知多半島で赤物製造を営んでいたが、明治時代の終わり頃 (正確な年代は不明) その技術を携えて衣浦湾を渡り、高浜において開業した。高浜における赤物生産の開始である。その後松太郎は土器生産組合の理事長という要職にあって、20 世紀前半の高浜の土器生産をリードした (高浜市史編纂委員会 1971)。しかし太平洋戦争中の 1944 (昭和 19) 年に起きた三河地震によって工場が倒壊し、廃業したという (註)。したがって 317 は 20 世紀前半の所産と限定でき

る。

318（埋甕B）は形は井戸筒である。口縁断面形状や器高が317とほぼ同じで、器面に薄く化粧土を塗布する点が類似する。刻印はないがこちらも間宮製造製の可能性がある。

319（埋甕C）は常滑産である。底径20cmに対し器高は65cm以上ある。ただし口縁が残存していな

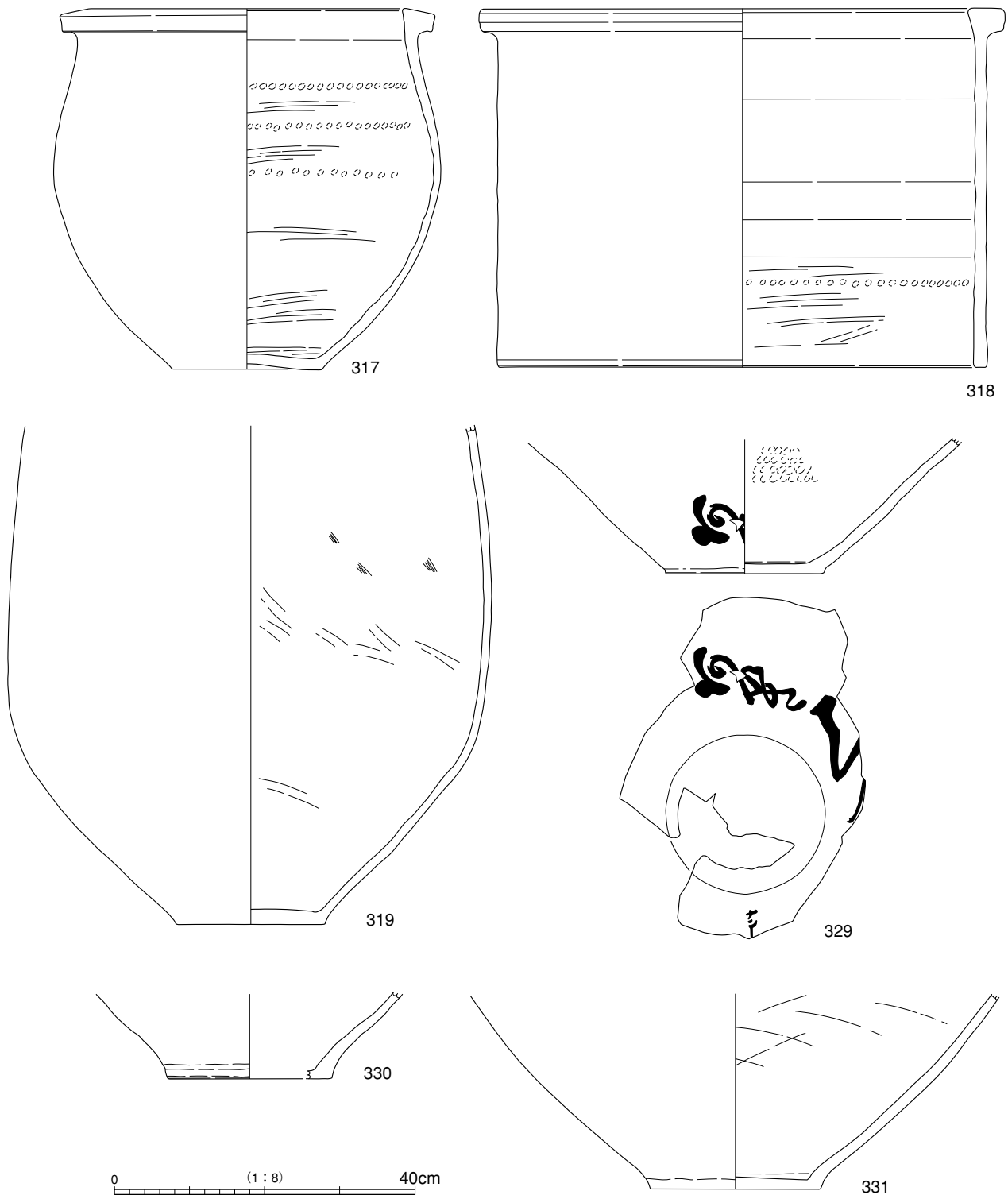


図 93 城山城跡出土の野壺（陶製大甕）実測図(1:8)

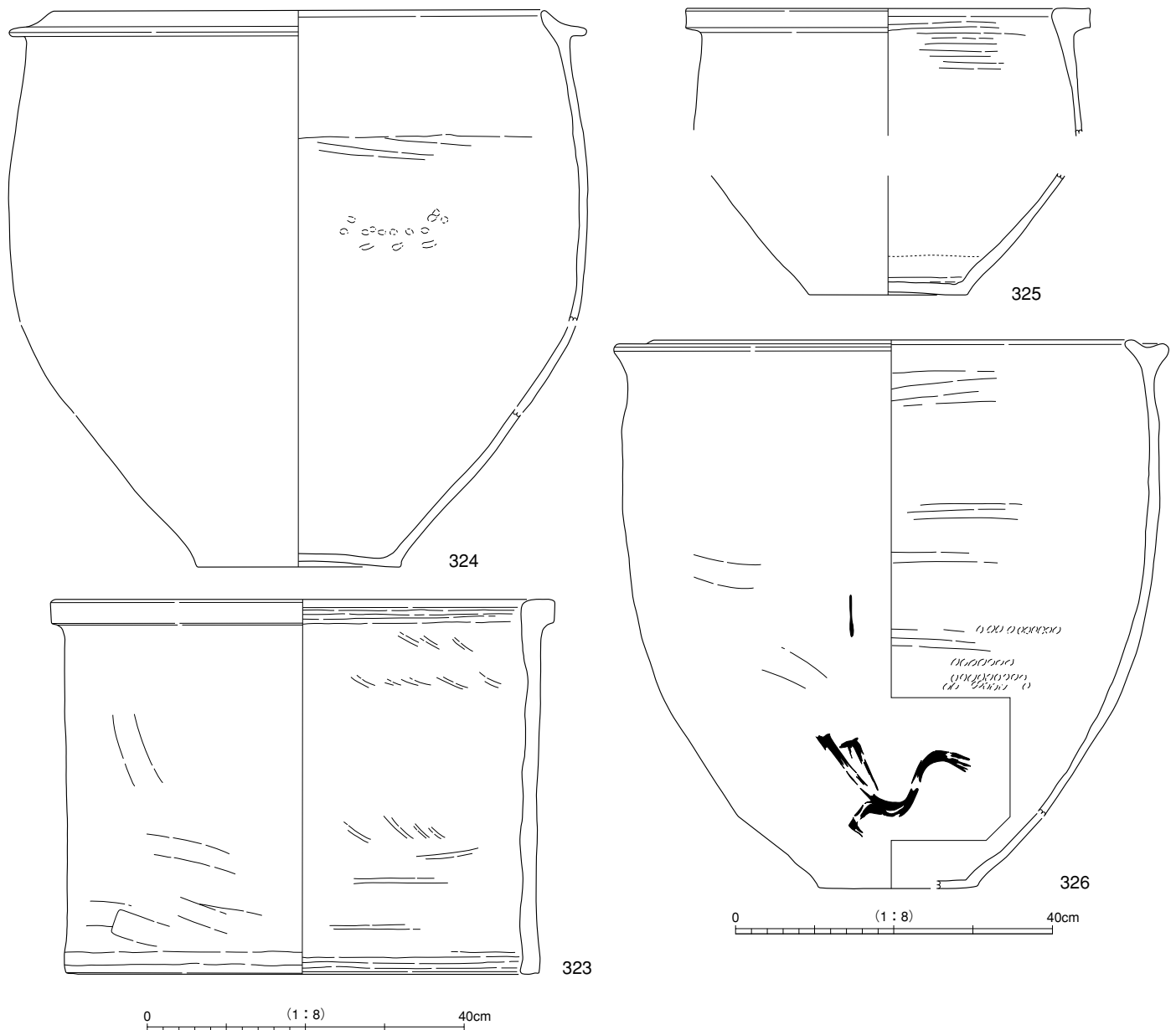


図 94 城山城跡出土の野壺（陶製大甕）実測図(1:8)

いので時期判定の決め手に欠ける。320 も同様であるが、こちらは底部近くの胴部外面に墨書がなされる。横位で大書されたものは「阿□□」でその対称位置に逆位で「ナン□」とある。

01A区 323 は井戸筒で 318 とほぼ同時期。平場隅で出土したが埋設されていたというより投棄された状態であった。324 は SD10 西方トレンチ出土。口縁形状から 19 世紀代とみられる。

01B区 325 は 317 に似た口縁。肥溜として使用。326 は口縁形状によって 18 世紀末～19 世紀前半と判断される。胴部下半にややかすれた筆致で記号めいた墨書がなされる。水溜として使用された。

（註）間宮克子さんの御教示による。

第 5 節 玩具（340～354）

各調査区の表土からは、土製および陶製の玩具や瓦を加工した円盤が出土した。340～343 は型押し

で作られた土製人形。346は菓子「グリコ」のおまけ。将棋駒（347）はおそらく瀬戸産であろう。345～347のような陶製玩具は戦前～戦時中につくられたものであろう。瓦を加工した円盤は6点出土した。00A区が最も多い4点である。いずれも近世以降のいぶし瓦を加工したものである。最大径が4～6cmである。瓦以外にも陶磁器を円盤状に加工したものもいくつかみられた。例えば図89—171などがそれである。

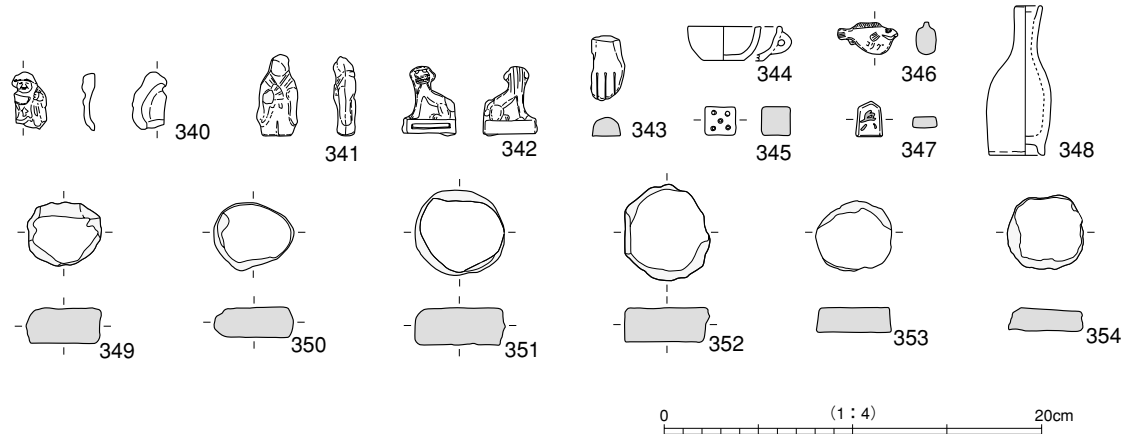


図 95 城山城跡出土の焼物玩具・加工円盤実測図

第 6 節 古代の土器（327～339）

城山城跡からは戦国時代以前の陶磁器として中世の灰釉系陶器碗が若干出土したが、それより遡って奈良～平安時代の土師器・須恵器が10数点出土した。出土調査区は01B区以外の各調査区で、01A区が最も多い。01A区では平場3付近の表土から比較的集中しており、当該期の遺構は確認できなかったが、この近辺に古代の居住地があったことが推察される。城山城跡付近では石橋遺跡を始めとする古代の遺跡があり、それら遺跡群の一部が市街地から約50m上ったこの地点にも展開していたことを示している（永井2005）。時期は概ね窯跡出土須恵器編年で折戸10号窯式期～井ヶ谷78号窯式期である。灰釉陶器碗（334）もある。337と338は三河型土師器甕（北村2001）だが、後者が8世紀末～9世紀初頭、前者は「清郷型」とも称される10世紀代のものである。特に器種の偏りはなく、斜面地も8世紀末～10世紀代にかけて居住地となっていた可能性が高いといえる。

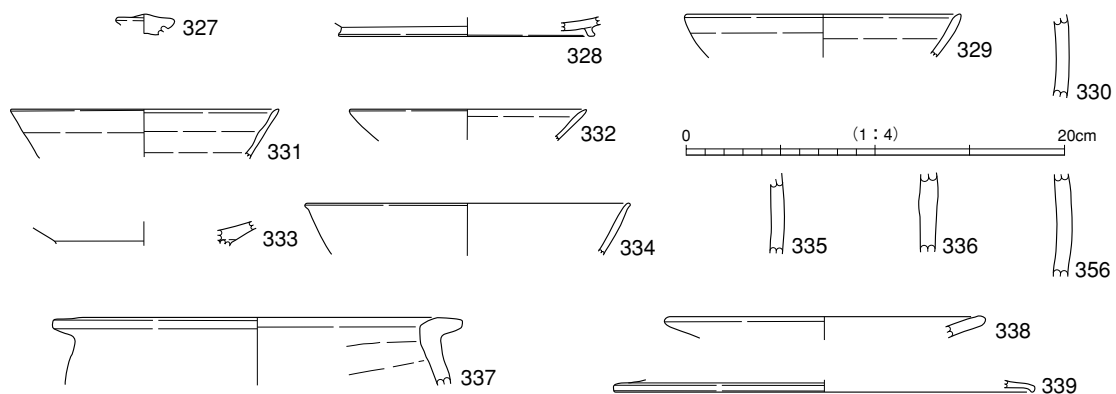


図 96 城山城跡出土の古代の土器実測図

第7節 金属製品

(1) 概観

金属製品は表土中から出土した近代以降の廃棄物が相当量含まれており、例えば和釘の場合、どこまでが山城に関わるものかどうか判別がつかない。そこで時期は不問としたうえで建築に関わるもの、武器・武具の類、廃城後の耕作などに関わるもの、その他に大別した。最も点数が多いのは和釘である。

(2) 各説

建築に関わるもの 主体は和釘で各調査区で出土した。その大部分を図化した。ただしM15は鉄鏝の可能性もある。大方は一辺0.5cmの方形断面であるがM7は全長17.6cmの特大型である。M6・10のように屈曲したものもあり、出土地点の近くで部材から引き抜くなどの解体作業がおこなわれた痕跡でもある。M3は鏝である。

武器・武具 M26～28は鉄鏝である。M27は実戦用で棒状の断面をもつ。M26・28は偏平で幅広い先端部をもつ。M29は鎧を構成する小札片である。横幅はもう少しあるようである。

廃城後のもの M32・33は00B区表土中から採取された草刈用の鉄鎌である。M34～37は煙管の雁首と吸口である。こういったものは耕作時に持ち込まれたものであろう。

その他 M30は銅製部品である。銅板を丸めたものである。M31は01A区平場1表土出土の銅製錘である。形状は六角形の石塔である。

頂部に吊り下げ用の穴がある。底部は鋳込みのバリが削りきれずにやや盛り上がって残っている。重量は94.3gである。こうした秤用の錘は戦国時代に各種形状のものがつくられており該期のものと判断される(宮本1999)。M47は01A区SX02出土の火打金である。両脇が欠損し廃棄されたのであろう。01A区からは鉄鏝・銅錘・火打金など多様な金属製品が出土しているのが特徴である。

(3) 銭貨

各調査区から20世紀前半までの銭貨が出土した(表3)。表土中からの出土した寛永通寶が主体であり、戦国時代以前と考えられるものはごく一部である。M50は銅製の模造銭で周縁が厚くつくられる。銅板からつくられたと考えられる。

表3 城山城跡出土古銭一覧

登録番号	種類	鑄造年 (鑄造初年)	残存状態	直径 (cm)	重量 (g)	厚さ (cm)	調査区	遺構・層位	平場・ グリッド
M-048	? (銅銭)		完形	2.45	3.1	0.1	00Aa	SD01	VB19k
M-049	一銭	昭和十年	完形	2.3	3.7	0.15	00Aa	表土	A-3
M-050	? (銅銭)	模造銭	ほぼ完形	2.2	2.7	0.15	00Ab	SD01上層	VB18j
M-051	五円	昭和二十四年	完形	2.2	3.6	0.15	00Ab	SD01上層	VB19j
M-052	政和通寶	(西暦1111年)	完形	2.4	2.1	0.1	00Ab	SD01上層	VB19j
M-053	文久永宝	(文久元年)	ほぼ完形	2.7	2.5	0.1	00Ab	SD01埋藏C内	
M-054	一銭	大正十年	完形	2.3	3.6	0.1	00Ab	SD01上層	
M-055	寛永通寶	(寛永13年)	完形	2.35	2.3	0.1	00Ab	SD01表土	
M-056	五銭	大正十一年	完形	1.9	2.5	0.1	00Ab	表土	A-1
M-057	一銭	大正十一年	完形	2.3	3.5	0.1	00Bc	表土	Bc4区下段
M-058	寛永通寶	(寛永13年)	完形	2.25	2.5	0.1	01A	平場1表土	平場1-E
M-059	? (鉄銭?)		1/2	2.4	残1.8	0.1	01A	平場1表土	平場1-E
M-060	? (鉄銭?)		完形	2.35	2.7	0.1	01A	平場2表土	平場2-SE
M-061	寛永通寶	(寛永13年)	完形	2.25	2.6	0.1	01A	平場2表土	平場2-SE
M-062	寛永通寶	(寛永13年)	1/3	—	残1.3	0.1	01A	平場2表土	平場2-SE
M-063	寛永通寶	(寛永13年)	完形	2.15	1.7	0.05	01A	平場2表土	平場2-SW
M-064	一銭銅貨	昭和十二年	完形	2.3	3.7	0.15	01A	平場2表土	平場2-NE
M-065	寛永通寶	(寛永13年)	完形	2.3	3.0	0.1	01A	平場3表土	平場3-SW
M-066	大□□□		1/4	—	残1.0	0.1	01A	T.1-1	
M-067	? (銅銭?)		完形	2.3	2.3	0.1	01A	T.3-2E(排土)	
M-068	寛永通寶	(寛永13年)	完形	2.55	3.6	0.1	01A	表土中(排土山)	
M-069	半銭	明治十五年	完形	2.2	3.5	0.1	01A	表土	
M-070	? (鉄銭?)		1/2	2.55	残1.9	0.1	01A	平場2表土	平場2-SE
M-071	? (鉄銭?)		3/4	2.4	残2.6	0.1	01A	平場2表土	平場2-SE
M-072	寛永通寶	(寛永13年)	完形	2.4	2.5	0.1	01B	平場0表土	平場0
M-073	1円硬貨(アルミ)	昭和六十二年	完形	2.0	1.0	0.15	01B	平場2表土	平場2
M-074	熙寧元寶	(西暦1068年)	3/4	2.3	残1.5	0.1	01B	T.2-2(拡張)	
M-075	? (鉄銭?)		完形	2.4	3.5	0.1	01B	T.3-2-E	

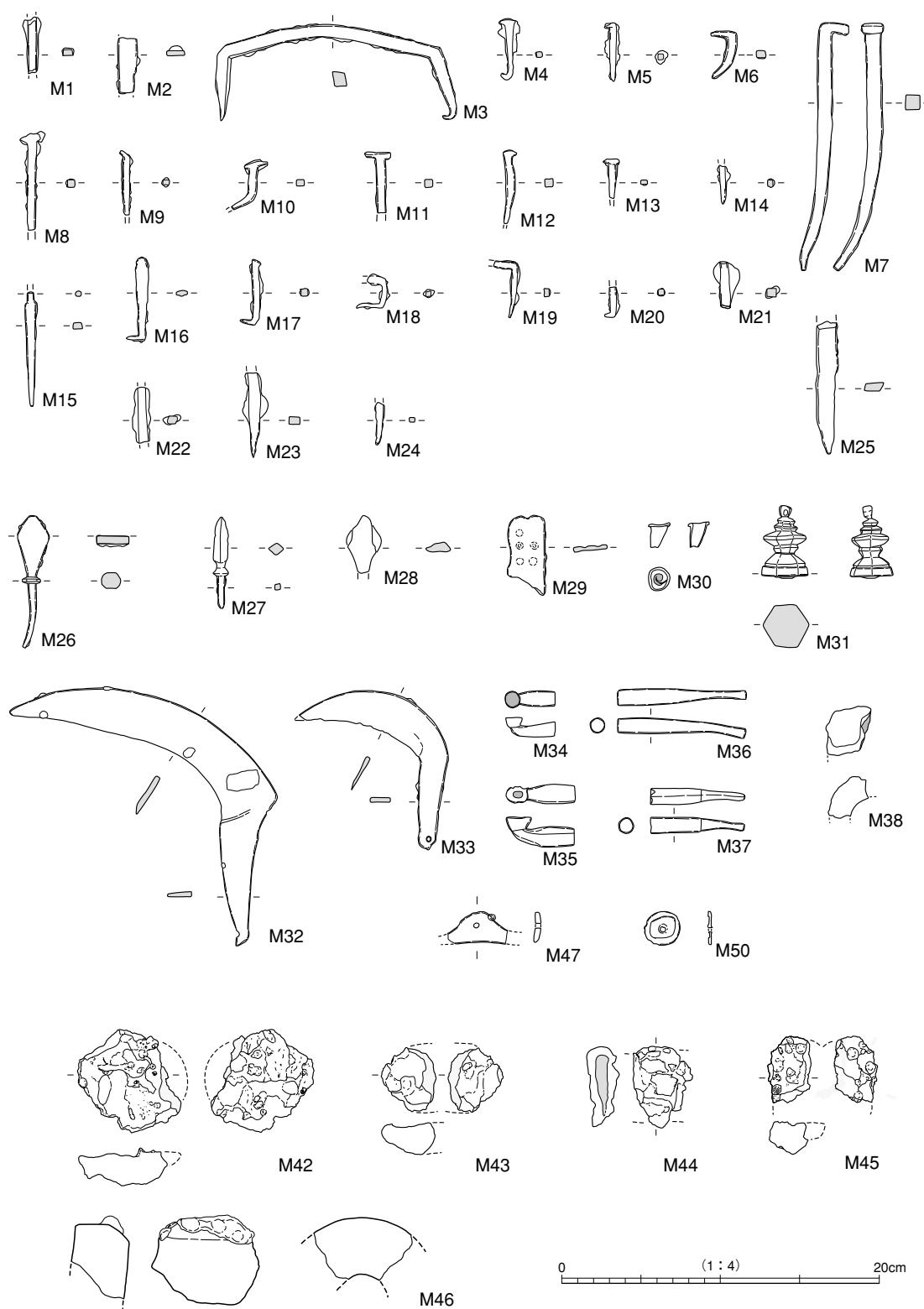


図 97 城山城跡出土金属・鍛冶関連遺物実測図

(4) 金属加工関連の遺物

椀型鉄滓 12 点、流動鉄滓 2 点、鉄塊 1 点、鉄塊系遺物 1 点、鉄製品 1 点、鞆の羽口 2 点、トリベ 3 点がある。鍛冶関連遺物では、M42 は白い石材を数点かみ込んだ 2 分の 1 分割椀型滓で、M43・M45 は鉄のメタル分を含む椀型滓で、M43 の上面は盛り上がりが見られる。M38 は鞆の羽口で、送風孔の径 2.0cm ～ 3.0cm 前後で先端部分が溶けて滓化している。鑄造関連遺物では、鉄器鑄造に伴うトリベが 3 点あり、内面の口縁部を中心に鉄滓が付着している。M41 は口径 10.0cm ～ 11.0cm、M39 と M40 は口径 5.0cm 前後の土師質の小皿である（図 84）。M44 は刀状の断面形態をもつ鉄製品と思われる。（蔭山誠一）

表 4 城山城跡出土鉄滓観察一覧

										メタル	残欠	発泡	小石	植物	木炭	炉材	ガラス	備考
	01A	SD07 上層	鉄塊	礫状	42.5	2.5	2.4	2	3	○	欠	×	×	×	×	×	×	大きい破片?
	01A	T1-1	1/8 含鉄椀型滓		14	3.1	1.8	1.8	3	○	欠	○	×	×	×	×	1	
M45	01A	T7-4	1/2 含鉄椀型滓		26.6	4.4	2.7	1.6	3	○	欠	○	×	○	○	×	1	
	01A	平湯 3-NW 検出	1/8 椀型滓		16.2	2.2	2.2	1.8	2	×	欠	○	×	×	×	×	1	
	01A	平湯 3-NW 検出	椀型滓		32.2	3.9	3.2	2	3	×	完	○	×	×	×	×	1	上盛
M43	01A	平湯 1-E (表土)	1/2 含鉄椀型滓		34.1	3.9	3.2	2.2	3	○	完	○	×	×	×	×	1	上盛
	01A	平湯 1-E (表土)	1/8 以下椀型滓		3.5	1.8	1.5	1.3	1	×	欠	○	×	×	×	×	1	
	01A	平湯 2-SW (表土)	含鉄流動滓 A	礫状	12.8	3.8	2.2	1.6	2	○	完	○	×	×	×	×	1	
	01A	平湯 2-SW (表土)	流動滓 A	礫状	7.1	2.5	1.9	1.3	1	×	欠	○	×	×	×	×	1	
	01B	SX06 No.1	1/8 椀型滓		10.4	2.9	1.6	1.6	2	×	欠	○	×	○	×	×	1	
	01B	SX03 1層	鉄塊系遺物	礫状	22	2.4	2.2	1.8	2	○	欠	×	×	×	×	×	×	赤色粘土層出土
M42	01B	SX03 1層	1/2 椀型滓		95.3	6.5	5.1	2.2	2	×	欠	○	○	×	×	×	1	白い石
	01B	SX06 No.38	1/4 椀型滓		26	3.5	3.4	1.8	1	×	欠	○	×	×	×	×	1	
	01B	平湯 2 検出	1/8 以下椀型滓		5.2	2.7	2	1	1	×	欠	○	×	×	×	×	2	下面白色付着物
	01B	SX09	1/8 以下椀型滓		3.8	1.6	1.5	1.3	1	×	欠	○	×	×	×	×	1	
	01B	平湯 3 No.1	流動滓 A	扁平	6.8	2.5	2.1	1	1	×	欠	○	×	×	×	×	1	赤色粘土検出面
	01B	SX12 黒褐色土層	1/4 椀型滓		15.5	2.5	2.2	2	2	×	欠	○	×	×	×	×	1	
M44	01B	平湯 2 検出	鉄製品(不明)	扁平	33.4	5.3	3.5	2	2	○	欠	×	×	×	×	×	×	刃物の可能性有
M39	01B	SX03 1層 ベルト東	トリベ		13	3.7	2.5	1.4	0	×	欠	×	×	×	×	×	2	内面に流動鉄滓付着
M40	01B	SX03 2層 (暗褐色粘土)	トリベ		5.2	3.6	2.4	0.9	0	×	欠	×	×	×	×	×	2	内面に流動鉄滓付着
M41	01B	SX03 1層	トリベ		7.3	3.9	2.8	0.7	0	×	欠	○	×	×	×	×	2	内面に流動鉄滓付着
M38	01A	表探	フィゴの羽口		23.3	4	4	1.8	0	×	欠	○	×	×	×	×	2	外面に流動鉄滓付着

第 8 節 石製品

石製品の主体は砥石で、他に若干数の石臼・硯・碁石がある。

砥石 砥石は各調査区から多数出土したが年代の決め手になるものがない。近代以降も耕作時などに持ち込まれる道具であり、それらと山城で使用されたものの峻別は難しい。形状は角棒状のもの（S7・9・12～14）と板状のものに大別される。石材は泥岩と凝灰岩である。あまり使い込んだ印象のないものが大方だが、S14 のように歪な形状になるまで使い込んだものもある。これらは 01A 区に多い傾向がある。

硯 江戸時代以降に廃棄された可能性も充分にあるが山城に関わるものと考えた。S15～17 は 01A 区出土である。S15 は全長 8.0cm の小型品で、よく使い込まれている。

碁石 石材は不明ながら、白色の碁石 3 点が出土した。江戸時代以降のものの可能性もある。

石臼 上臼が 2 点あるがいずれも 01A 区である。S1 は一辺 1.6cm の方形の中心孔で摺面はわずかに曲面である。使い込まれて溝は不明瞭である。S2 は中心孔は細い円形になるとみられる。枝状に分岐する溝が特徴である。全面に焼けた痕がある。平場 2 西側で人頭大の礫が積み上げられた地点で出土した。

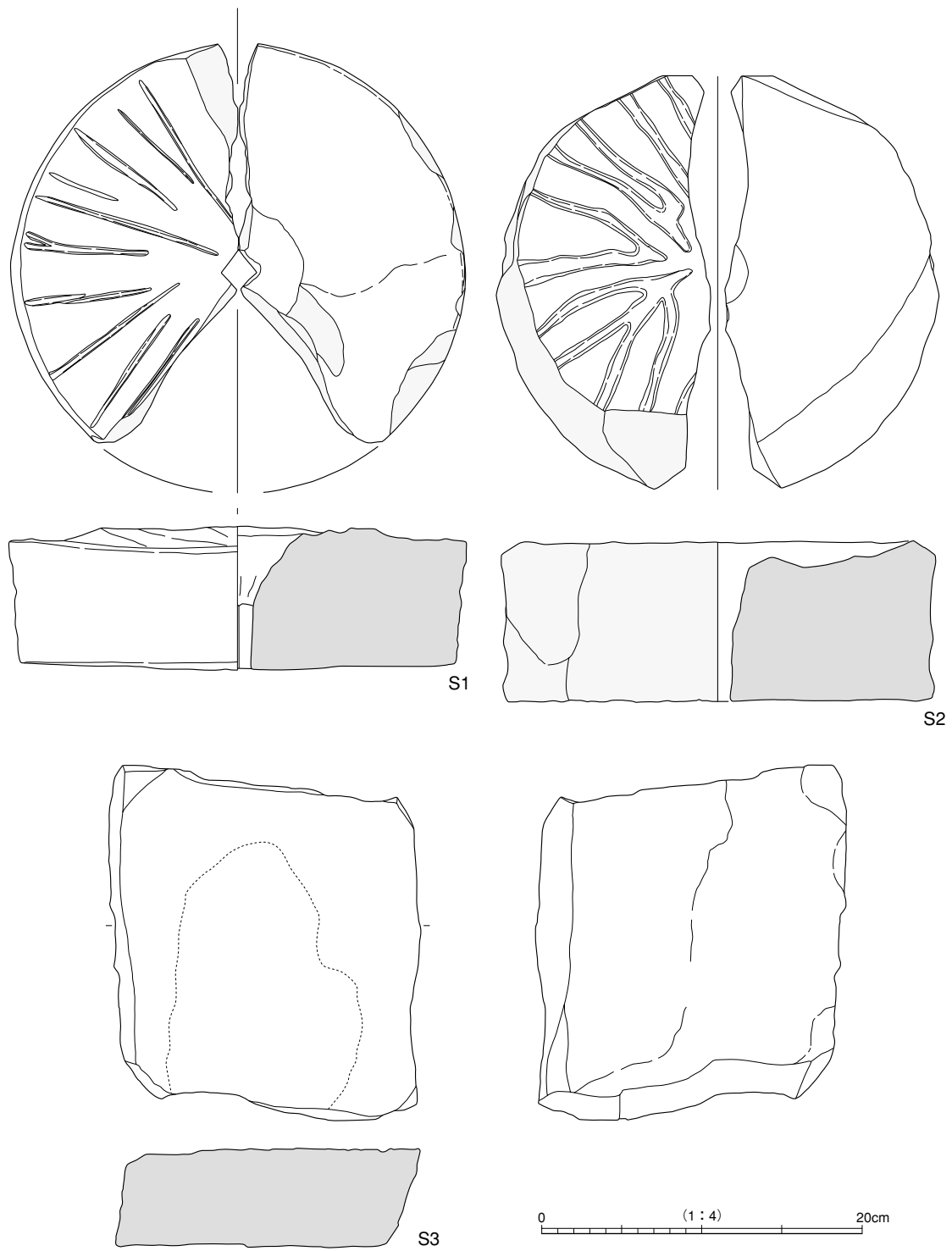
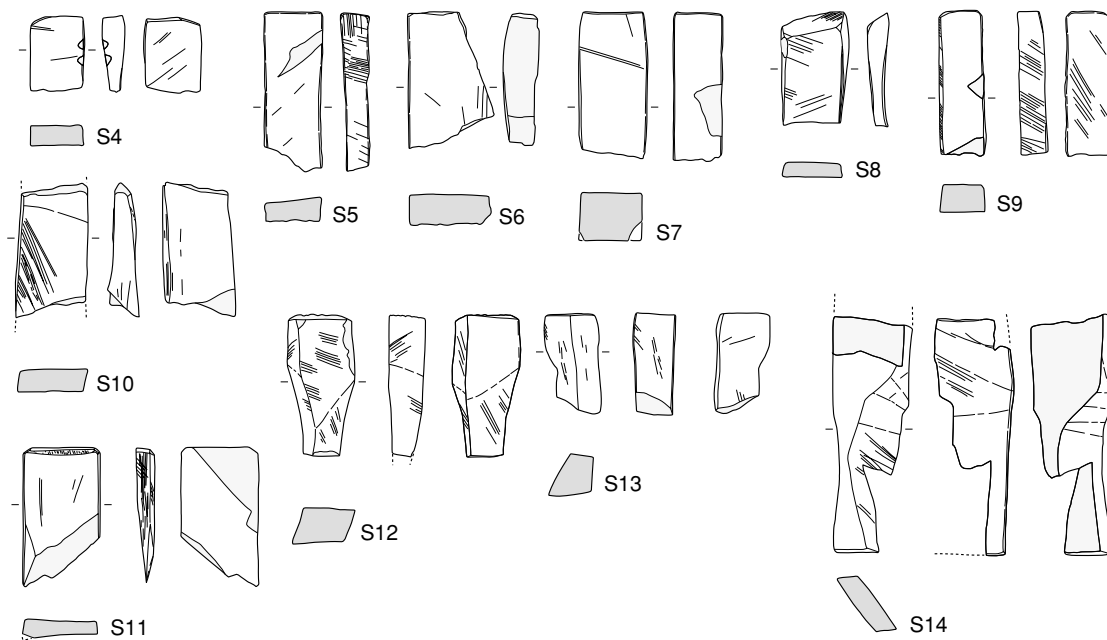
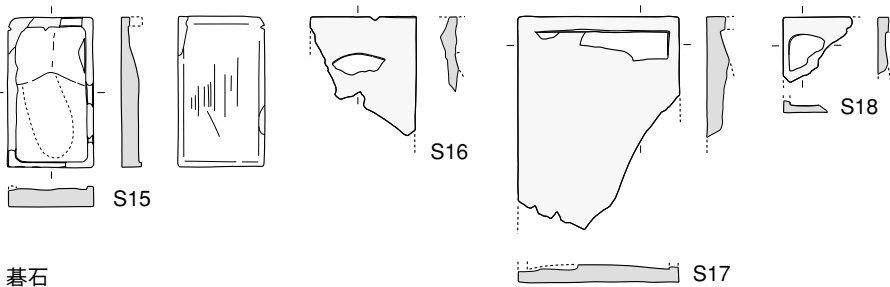


図 98 城山城跡出土石臼・礎石実測図

砥石



硯



碁石



図99 城山城跡出土砥石・硯・碁石実測図

砥石 01B区SD09横堀で出土した角礫はほぼ直方体を呈し、柱痕ともみられる変色部分がある。これ以外にも01B区平場南側下方で直径約50cm厚さ約15cmの厚い円盤状の礫が出土しており、砥石の可能性を考えておきたい。

第9節 ガラス製品

20世紀前半の遺物である。X1は小瓶だが、型で成形時に横書きで「目薬」その下に縦書きで「ハツキリ」、その対面に同様に「大阪」「浪花薬館」とある。X3も小瓶だが青色で断面は八角形である。縦書きで「彌水」とあり化粧水の瓶とみられる。このように容器にあらかじめ品名や販売者名を入れるようになるのは江戸時代以降、例えば焼塩壺などがその走り、日本における文字と器の関係史上比較的最近のことである。

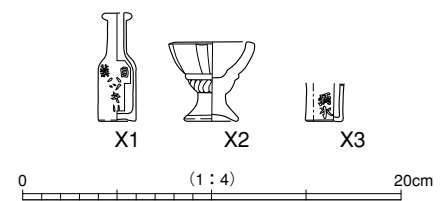


図100 城山城跡出土ガラス製品実測図

第5章 発掘調査のまとめ

第1節 山城遺構の変遷

(1) 00A区

00A区SD01は、その西方で山城に関わる遺構が全く検出されずそのままおせん川へと急斜面が続くことから、山城の西端を画する堀であることはあきらかである。しかしこの堀の掘削時期を特定できる資料は得られていない。箱堀という形状を考慮すると城山城築城時の可能性が考えられる。堀底から出土した播鉢から16世紀後半以降に堀としての機能低下～埋没と想定することができる。

(2) 00B区

00B区で確認された山城に関わる遺構は横堀・切岸・掘立柱建物・柵である。このうち、掘立柱建物については、前述したようにほぼ同じ場所で、SB03→SB01→SB02→SB04の変遷があきらかとなった。これを平面規模で示すと小→大→大→小となる。このうち、平坦面いっぱいに建てているSB01・02が、山城が機能していた間で最も本格的な建物が必要とされていた時期であると考えするのが自然であろう。そしてその前後の建物は、これに比べてより仮設的なものであったと考えられよう。SB01・02の時期は、SB01の掘形と考えられるSK06から西三河型E1類とみられる土師器内耳鍋が出土しており、概ね16世紀後半と想定される。そしてSB04は横堀から出土した志野皿が横堀機能の低下～埋没の時期を示すと評価してそれが17世紀初頭であることから、山城関連の最終末期の建物としてその少し前の時期を想定しておきたい。

建物南方の柵は目隠しだけでなくより高い防御のために造られたと考えたとするとSB01・02に伴うものと判断される。出土遺物はないが、建物方位との関係でSB01とSA01、SB02とSA02の対応が考えられる。この柵の有効性については難しいが、建物・柵ともに山城が遭遇した最も高い軍事的緊張のなかで造られたと考えられる。

横堀の掘削は地業を伴う行為であり、これら建物に先行したと想定されるが、掘削時期を特定する素材はない。少なくとも埋土によってその機能がほぼ失われるの17世紀初頭と考えられる。

(3) 01A区

調査区南端の堀切(SD10)は箱堀状であり、高い切岸を伴うなど00A区の横堀と共通する。掘削時期を特定する出土遺物には恵まれないが、その形状がV字形の薬研堀(01B区SD09など)に先行するものと考えれば、山城の施設中でもより古い時期に位置づけられるであろう。なお、その埋没時期は出土した土器・陶磁器から16世紀後半以降と考えられ、城山城廃城まで機能し続けたと考えられる。

2つある竪穴状施設からはいずれも16世紀前半を中心とする遺物が出土している。これら施設の埋没時期は堀切の埋没より先行するであろう。

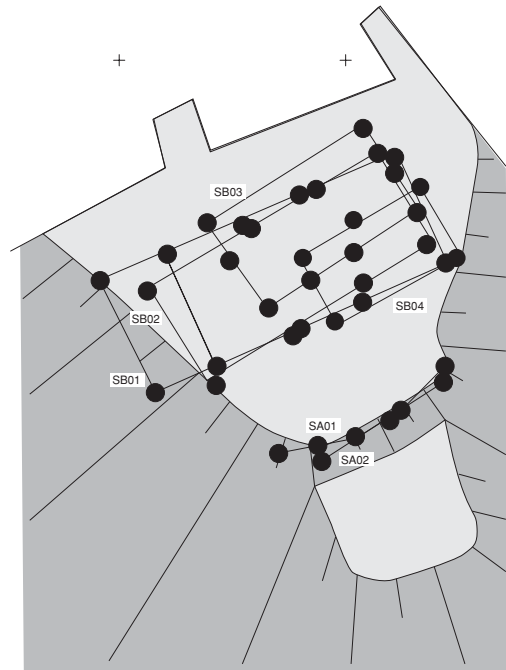


図101 00B区掘立柱建物概略図

（４）01B区

この調査区では、掘割状通路の時期（Ⅰ期）と曲輪の時期（Ⅱ期）に大別され、Ⅱ期はさらに、平坦面に竪穴状施設が設置される時期（Ⅱa期）と、それらが埋められて礎石建物が設置される時期（Ⅱb期）に分けられる。

Ⅰ期は、掘り割り状通路(SX03)が主体となるが、それが機能していた時期は特定できない。ただ、人為的な埋め戻し以前の自然堆積がほとんどないことを考えると、比較的短期間に機能していたことが想定できる。したがって、山城に関わらない山道という想定は難しい。問題はこの時期に属する他の防御施設である。まず、横堀(SD09)は重複関係からあきらかにⅡ期になる。次に堀切(SD01)であるが、通路との重複関係はないが、その断面形状は横堀(SD09)に近い。しかし、通路がこの堀切を前にして階段で斜面を上る形になっている点や、SD01堆積層の一

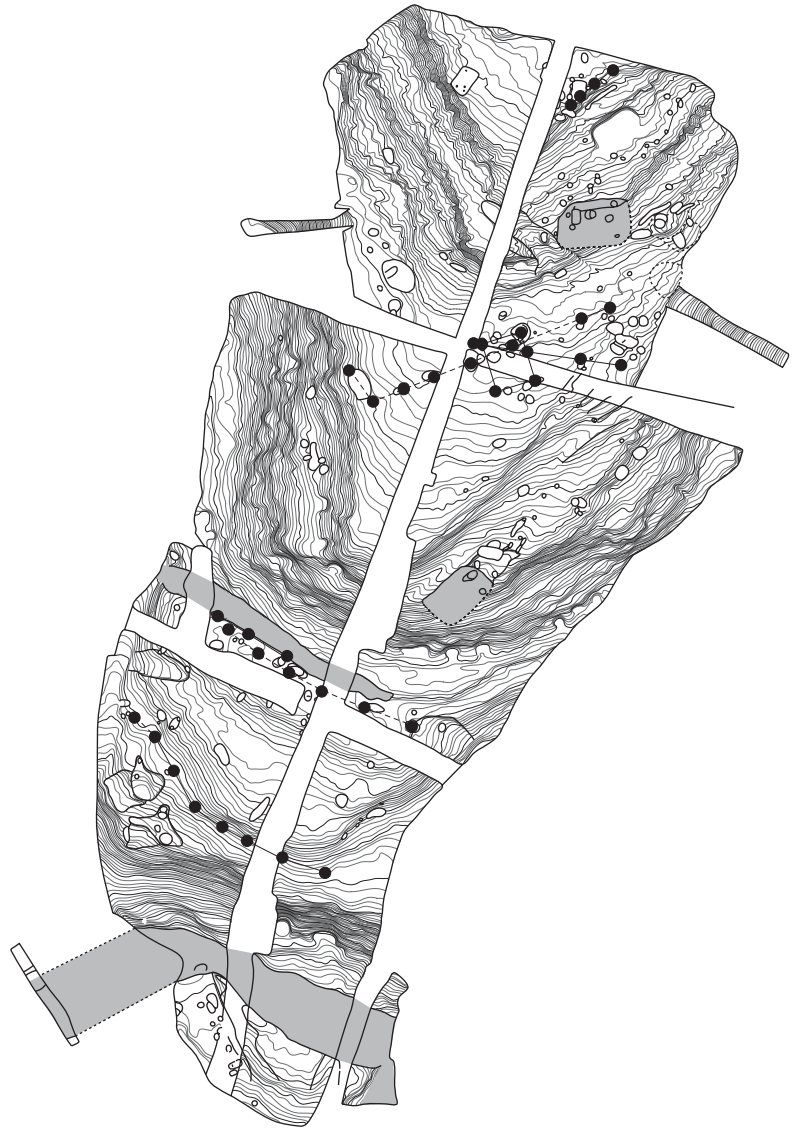


図 102 01A区主要遺構配置図

部にSX03を埋める灰色粘質土と共通するものある点から、SD01の場所に堀切もしくは切岸が存在した可能性は十分考えられる。SD01の上部については、調査時所見では耕作による削平によると考えたが、Ⅰ期段階における造作の可能性も視野に入れておく必要はある。

Ⅰ期からⅡ期へと景観が大きく変化する。しかしこれは単なる通路の埋め立てにとどまらない。すなわち埋め立てが平場群への改変、すなわち当該地点の城内における機能・役割の変更を目的とした造作の一環であったと考えられるからである。

（５）各遺構の併行関係

各調査区における山城遺構の変遷は以上のとおりである。当然ながら、防御に関わる施設（山城遺構）の組み合わせで山城が構成されるのであり、その組み合わせ（遺構の時期的併行関係）が問題になってくる。ここでは調査区内で時期区分が可能であった01B区の変遷を軸に、それ以外の調査区との比較から遺構からみた城山城の変遷を考えてみる。

01B区Ⅰ期 掘割状通路の時期を特定する遺物はない。他の調査区（尾根筋）ではこの通路に匹敵する防御を視野に入れた通路はつくられた形跡がなく、当該遺構が城山城の「大手道」的な通路であった可

能性が考えられる。01B区平場2で確認された掘立柱建物SB01・02はこの通路の出入口に関わる空間を見下ろす位置にあり、同時存在していた可能性がある。その場合番小屋のような施設であったと考えられる。

他の調査区（尾根）では尾根筋を遮断する堀がつくられるが、ここで00A区と01A区で確認された箱堀状の堀切が注目される。両者はその形状や尾根を完全に遮断しようとしたその意図の他、標高180～185mに位置するという点が共通する。多分に状況証拠的ではあるが、これら施設の構築が城山城の初期段階であったと仮定しておきたい。また可能性は低いがこの時期、01B区堀切SD01に先行する堀切（おそらく箱堀でつくられたと考えられる）が通路途中に防御線として設けられたかもしれない。

01B区Ⅱa期 通路を埋め平場を造成した上に竪穴建物がつくられる。通路埋土の最上層からは大窯2期段階の陶器が出土している。したがって01B区ではこれ以降に竪穴建物がつくられたことになる。この竪穴建物跡からは廃絶時に捨てられたとみられる土器・陶器が出土し、それが示す廃絶時期は大窯2期以降であるため、長期間の使用でなかった可能性がある。ただ同様な竪穴建物2棟が確認された01A区では、その廃絶時期はやや遡り、SX01では古瀬戸後期～大窯1期と判断されている。両調査区（尾根）間の竪穴建物の建設から廃絶には時期的なずれがあることを想定しておきたい。

そしてこの時期、城山城にとって最も重要な造作が行われた。それは横堀の掘削である。横堀は01B区で確認されたものが平場防御という目的から平場群とセットで造られたと考えられる。同様の横堀は00B区にもあり、形状および標高185m等高線前後で揃うという点からこれも一連の造作のひとつであったと想定する。したがってその上方平場の造成および掘立柱建物・柵の建設も同じ時期だったことになろう。ところで、01B区堀切SD01が断面V字形で完成した時期は遺物からは求められないが、可能性として横堀群が造られたこの時期に含めるのはいかがであろうか。

01B区Ⅱb期 埋められた竪穴建物の跡に小規模な礎石建物がつくられる。遺物はおろか据置状態にある礎石さえも確認されていない状況であるので問題は残るが、礎石建物の規模や配置は平場を逸脱するものでなく、城山城に関わる施設であった可能性はある。また、竪穴建物廃絶（大窯2期）から

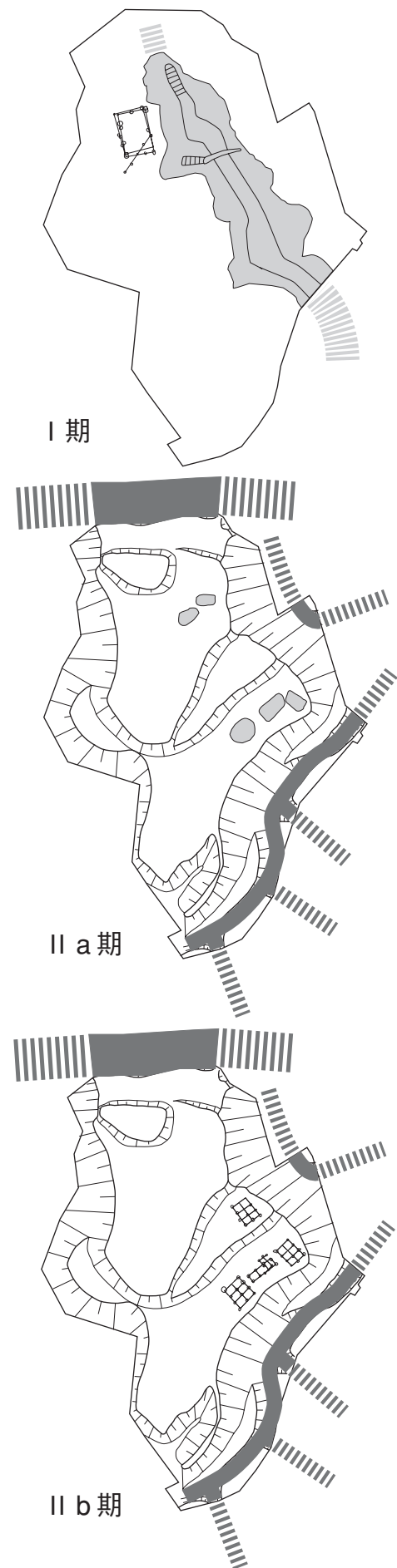


図 103 01B区主要遺構変遷図

横堀への土器・陶器の廃棄（大窯4期）までの間の平場利用方法として、これら礎石建物群は充分あり得るものとする。そして横堀への廃棄行為が城山城の終末であったとするならば、他の山城関連の施設全てでそれまでに廃絶したことになる。例えば00B区の掘立柱建物は幾度かの建て替えを経て、城の廃絶とともに建て替えが中断されたとみることができよう。

第2節 遺物の組成

土器・陶磁器 城山城跡で出土した土器・陶磁器は、廃城後のものも多数混入しており、特に時期を特定しにくい土師器皿は、山城機能時に該当するものがどれだけあるのか判断しづらい。そこで表5で01A区と01B区の各平場出土土器・陶磁器の総破片点数を比較してみた。この数字には遺構出土の破片点数は含まれていないが、調査区どうしの比較はこれで可能である。それによると、総量において01A区の方が圧倒的であることが明らかであるが、特に播鉢などの調理器具が目立っており01B区での出土量をはるかにしのいでいる。01A区では古瀬戸後期段階、01B区では大窯2～3期という時期差がある点を考慮すると、古瀬戸後期段階では平地の集落と変わらない日常が01A区の尾根を中心に営まれていた可能性が考えられる。それに対して大窯2～3期が主体となる01B区では全体に少なく、常滑甕のような貯蔵具が大きく欠けるなどの偏差が目立つ。16世紀代の軍事的緊張のなか、山城で使用される土器・陶磁器の様相をうかがうことができよう。

16世紀代の軍事的緊張のなか、山城で使用される土器・陶磁器の様相をうかがうことができよう。

金属・石製品 金属製品については武器に調査区ごとの特徴が表れている。01A区では鉄鏃1点があるが、01B区ではやや不明瞭なものも含めて鉄鏃が2点、小札1点がある。同区では椀形鉄滓の他に「とりべ」がSX03整地層中から出土しており、武器加工や補修のための場所となっていたとも考えられる。一方01A区で出土した鍾は武器より日常的な道具であり、非軍事的な作業空間であったかもしれない。このような想定は石臼や硯などの石製品の出土傾向とも符合しており、先述した土器・陶磁器の組成と合わせて考えると、16世紀前半まで日常的な作業を中心に展開した01A区と16世紀後半に軍事的作業に特化していった01B区が対称的にみることができよう。

表5 出土遺物の総破片点数

01A区					
産地	器種	平場1	平場2	平場3	平場4
瀬戸美濃	灰釉皿	3	16	18	5
瀬戸美濃	播鉢	25	29	34	4
瀬戸美濃	鉄釉	8	26	20	0
瀬戸美濃	祖母懷壺	1	7	16	2
瀬戸美濃	天目茶椀	18	20	41	6
中国磁器		2	4	1	0
常滑	甕	0	2	10	0
土師器	皿	125	108	135	15
土師器	鍋・釜	114	125	130	21
01B区					
産地	器種	平場1・2	平場3	平場4	SX03埋土
瀬戸美濃	灰釉皿	0	0	5	15
瀬戸美濃	播鉢	0	3	5	8
瀬戸美濃	鉄釉	0	0	5	3
瀬戸美濃	祖母懷壺	0	0	0	0
瀬戸美濃	天目茶椀	0	1	7	7
中国磁器		0	0	0	1
常滑	甕	0	0	0	0
土師器	皿	0	0	12	47
土師器	鍋・釜	0	3	26	86

第6章 炭素年代測定と地中電気探査

第1節 炭素年代測定の成果

山形 秀樹（株式会社パレオ・ラボ）

(1) はじめに

城山城跡より検出された炭化物の加速器質量分析法（AMS法）、および有機質土のガス比例計数管法（GPC法）による放射性炭素年代測定（測定A）と炭化胚乳のAMS法による放射性炭素年代測定（測定B）を実施した。

(2) 測定A

試料と方法 試料は、SX07から採取した炭化物1点、SX03から採取した炭化物1点、SX06から採取した炭化物1点、SD01から採取した有機質土1点、SX01から採取した炭化物2点の併せて6点である。

炭化物試料については、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。また有機質土試料は、酸処理を施して不純物を除去し、アセチレンに調整した後、ガス比例計数管（GPC）にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

結果 表1に、試料の同位体分別効果の補正值（基準値-25.0‰）、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。 ^{14}C 年代値(yrBP)の算出は、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

表6 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 σ 暦年代範囲
PLD-1603 (AMS)	炭化物① SX07	-26.7	475 $\pm$ 25	cal AD 1435	cal AD 1425 - 1440 (100%)
PLD-1604 (AMS)	炭化物② SX03 炭化物層	-28.1	390 $\pm$ 25	cal AD 1475	cal AD 1445 - 1490 (89.7%) cal AD 1600 - 1610 (10.3%)
PLD-1605 (AMS)	炭化物③ SX06	-24.6	470 $\pm$ 25	cal AD 1435	cal AD 1425 - 1445 (100%)
PLD-1606 (GPC)	有機質土④ SD09 ベルト②東 炭化物層	-26.3	-360 $\pm$ 90	Modern	*****
PLD-1607 (AMS)	炭化物⑤ SX01 西セクション 炭化物層上	-25.2	505 $\pm$ 25	cal AD 1425	cal AD 1415 - 1435 (100%)
PLD-1608 (AMS)	炭化物⑥ SX01 西セクション 炭化物層下	-25.2	565 $\pm$ 25	cal AD 1335 cal AD 1400	cal AD 1325 - 1345 (51.0%) cal AD 1395 - 1410 (49.0%)

なお、暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年)を較正し、より正確な年代を求めるために、 ^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を算出する。

^{14}C 年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3(CALIB 3.0のバージョンアップ版)を使用した。なお、暦年代較正值は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

暦年代較正は約二万年前からAD1,950年までが有効であり、該当しないものについては ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を***** または Modern と表記した。

考察 各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

(3) 測定B

はじめに 測定Aでは、01B区SD09ベルト西炭化物層より採取した炭化胚乳(オオムギ、第2節参照)の測定値について異常値が示されたことから、再び同様の手順によって測定を試みることとなった。

試料と方法 試料は、01B区SD09ベルト西炭化物層より採取した炭化胚乳(オオムギ)1点である。試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。

結果 表2に、試料の同位体分別効果の補正值(基準値-25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した ^{14}C 年代、 ^{14}C 年代を暦年代に較正した年代を示す。

^{14}C 年代値(yrBP)の算出は、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

表7 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$ (‰)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1σ 暦年代範囲
PLD-2225 (AMS)	炭化胚乳 (オオムギ) 01B区 SD09 ベルト西 炭化物層	-25.8	345 ± 25	cal AD 1515 cal AD 1595 cal AD 1620	cal AD 1490 - 1525 (34.5%) cal AD 1565 - 1630 (65.5%)

考察 試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、01B区, SD09, ベルト西, 炭化物層より採取した炭化胚乳（オオムギ）の年代はcal AD 1565 - 1630 年が、より確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の 14C 年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 14C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, F. G., v. d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

（註）本節は2回にわたる山形秀樹氏の報告を永井が編集者の責任において再構成したものである。

第2節 炭化種実の計測

（1）はじめに

城山城跡 01A 区堅穴状遺構 SX03 の覆土および 01B 区横堀 SD09 炭化物層からは、発掘調査段階で炭化した植物種実が存在することが認められたので、01ASX03 から約 12.5kg、01BSD09 から約 25kg の土をサンプルとして採取し、フローテーションによって炭化種実の分離をおこない、種実を分類しながらその粒数を計測した。覆土あるいは炭化物層全体からするとごく一部にすぎないが、それぞれの構成を確認することを企図した。なお、この一連の作業は（株）パレオ・ラボが実施し、報告を受けた永井がそのデータをもとに記述する。

（2）結果と考察

計測結果は表 8・9 のとおりである。明らかに構成の違いが確認できた。01ASX03 はほぼ全てイネ胚乳で占められ、01BSD09 はオオムギ・コムギが主体であることがわかった。

01ASX03 での出土状況からは、即米粒が当該施設で保管されていたことを示す証左にはならないが、そうでなくとも施設廃絶時の意図的な廃棄を想定するしかない。一方、01BSD09 は炭化物層の形成に関わる。炭化物層が形成された一角は SD09 の中でも低い位置にあり、流れてきた雨水などが溜まりやすい。したがってこの地点での麦粒の廃棄ということにはならないが、炭化物層中には他に土器・陶器が伴っており、SD09 の他地点ではみられないことから、そう遠からぬ場所での廃棄として理解することはできよう。

表 8 01ASX03 出土の炭化種実一覧

分類	部位	数量（粒）
イネ	炭化胚乳	1148(112)
	炭化胚乳小塊	3

数字は個数、カッコ内は半分ないし破片の数

表 9 01BSD09 出土の炭化種実一覧

分類	部位	数量（粒）
サクラ属サクラ節	炭化核	1
イネ	炭化胚乳	1(2)
オオムギ	炭化胚乳	176(1) 3粒は年代測定用試料
コムギ	炭化胚乳	166
ムギ類	炭化胚乳	89(5)

数字は個数、カッコ内は半分ないし破片の数

第3節 地中レーダ探査と電気探査

平塚賢二郎（朝日航洋株式会社）

（1）地中レーダ探査

地中レーダ探査は、遺構の存在が予想される地盤状況を、地中レーダ画像（電波の反射波を並べて示したもの）で連続的に把握する目的で実施した。特に、地表下2～3m±までの遺構や地層の状況を詳細に捉えるために適用した。測線は、図1-2に示す8測線を設定した。測定は、この測線沿いの地表面が比較的平坦で立木等の障害が少ない範囲で実施できた。

探査数量 探査地点およびその長さは表10の通りである。

使用機器及び解析ソフト 地中レーダ探査機器一覧表（SIR-2000型）を表12に示す。

探査方法 地中レーダ探査の測定はプロファイル測定で行った。この測定方法の詳細は、地中レーダ探査の原理、データ処理方法、解釈方法と共に巻末資料に一括して示した。

探査結果 探査結果は、地中レーダ画像として得られる。その地中レーダ画像は、図105に示す電波の反射波形を並べたものである。

地中レーダ画像の縦軸は、本来は反射時間（ns）だが、比誘電率（電波が地中を伝わる速度を決める物理量）で換算した深度（m）で示した。この比誘電率は、

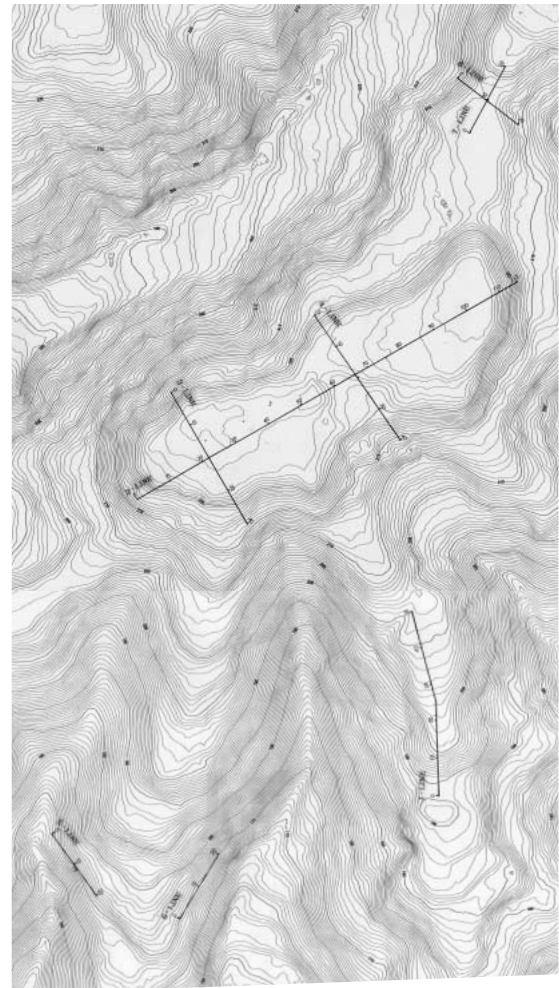


図104 探査測線配置図(1/2000)

表10 地中レーダ探査実施数量表

測線名	測線長 (m)	位 置
1-測線	50	小尾根部縦断方向
2-測線	100	山頂尾根部縦断方向
3-測線	24	山頂西側尾根部横断方向
4-測線	26	山頂東側尾根部横断方向
5-測線	18	谷壁斜面横断方向（西側）
6-測線	20	谷壁斜面横断方向（東側）
7-測線	20	尾根鞍部縦断方向
8-測線	6	尾根鞍部横断方向
計	264m	

表11 電気探査数量表

測線名	測線長 (m)	電極間隔 (m)	探査深度 (m)	測点数 (点)	位 置
1-測線	50	1	10	455	小尾根部縦断方向
2-測線	115	1	10	1105	山頂尾根部縦断方向
3-測線	40	1	10	355	山頂西側尾根部横断方向
4-測線	40	1	10	355	山頂東側尾根部横断方向
5-測線	20	1	10	155	谷壁斜面横断方向（西側）
6-測線	20	1	10	155	谷壁斜面横断方向（東側）
7-測線	20	1	10	155	尾根鞍部縦断方向
8-測線	20	1	10	155	尾根鞍部横断方向
計	325m			2890点	



地中レーダ探査装置 (SIR-2000 型)



測定状況

表 12 地中レーダ探査装置機器一覧 (SIR-200)

名称	仕様及び性能	台数	メーカ
制御装置 (DC-2A)	シングルチャンネル 液晶カラーディスプレイ ハードディスク(1.3GB)	1	GSSI 社
アンテナ	中心周波数 200MHz 30m ケーブル付き	1	
電源	12V バッテリ	1	GSSI 社
解析ソフト (RADAN)	濃淡・カラー表示、各種フィルタ 他	1	

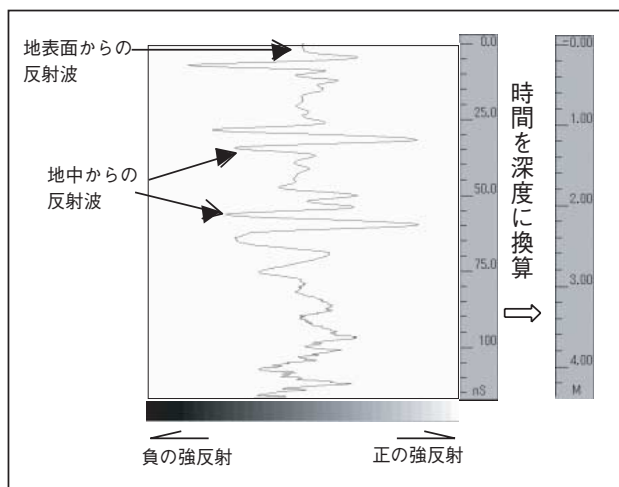


図 105 地中レーダ画像のグレー区分表示



表 13 電気探査機器一覧

機種	性能・型 状	台 数	製作所名
測定器 マックオーム 2115 型	分解能 20 μ V 50/60Hz ノイズリミット スキャニング機能	1 台	応用地質 ^④
デジタルオシ ロスコープ	2 ch	1 台	TEKTRONIX
切替えボード	120 ch	1 台	自 社 製
観 測 線	20 ch (3.5m 間隔) 最大電流 800mA 流電可能	6 巻	自 社 製
中 継 線	50m 用 100m 用	2 巻 2 巻	自 社 製
電 極	銅製アース棒 ステンレス丸棒 L=40~70 ϕ 20	120 本	_____
ポータブル 発電器	交流 100V (150,300A) 直流 12V	1 台	本田技研工業 ^④
そ の 他	遠電極用電線、トランシーバー、ノート型パソコン、ハンマー他		
解析ソフト 及び解析用 コンピューター	「比抵抗映像法プログラム」 SPARC station 10:デスクトップ型 ワークステーション Design Jet: A1 系列 絵・プロッタ		ジーアイエス ^④ SUN HEWLETT PACKARD

地中レーダ画像の反射パターンとボーリングバーによる貫入状況や電気探査の比抵抗分布との対比で求めた。その結果、探査地では、比誘電率＝8～10の範囲を示した。この比誘電率は、地盤状況によって変化するため、換算深度には誤差が生じることがある。この地中レーダ画像を、第4章の図4-1に電気探査結果等と共に示した。

この地中レーダ画像は、反射波の強弱や反射パターンの特徴から、一般に下記のように解釈される。

＜地中レーダ画像の一般的解釈＞

- ・ 強反射：地中の大きな変化を反映している。
（例）崩積土と岩盤との境界、遺構と地層との境界等
- ・ 弱反射：地中の均質状態、または、含水量の多い状態等を反映している。
（例）均質な岩盤や地下水面下等
- ・ 水平的反射パターン：連続性の高い部分は層理面、局部的なものは天盤が平らな遺構等を反映することが多い。
- ・ 凸状反射パターン：埋設管、空洞、遺構の角部等
- ・ 凹状反射パターン：堀跡等の埋没凹地形等

（2）電気探査（比抵抗映像法）

探査数量 探査地点およびその長さは表11の通りである。

使用機器 電気探査一覧表を表3-2に示す。

探査方法 探査方法は、比抵抗2次元探査の1手法である比抵抗映像法を適用した。この詳細については省略する。

探査結果 解析は、2次元の逆解析法で行った。この方法は、測定値に感度補正、遠電極補正及び地形補正をした後、リニアフィルタ法で比抵抗の初期モデルを作成し、この初期モデルの理論値と測定値の誤差が最小になるように、FEM解析で初期モデルを逐次修正して最適化する方法である。この解析結果を比抵抗断面図として、巻頭カラー図版4～6に地中レーダ探査結果と共に示した。

この解析で得た比抵抗値は、全体で100～3000 $\Omega \cdot m$ ±の幅広い範囲を示したが、比抵抗断面図では、比抵抗値を次の3区分で検討した。

- ・ 高比抵抗部：約700～3000 $\Omega \cdot m$ ±以上（赤色系）
- ・ 中比抵抗部：約250～700 $\Omega \cdot m$ ±（黄緑色系）
- ・ 低比抵抗部：約100～250 $\Omega \cdot m$ ±以下（青色系）

この各比抵抗部は、一般的な地質と比抵抗の関係（注）や比抵抗分布パターン、レーダ反射パターン、ボーリングバーによるロッド貫入状況等との対比から、次のように解釈される。

（注）一般的な地質と比抵抗値の関係

一般に地質と比抵抗値の関係は、鉱物組織・結晶度・間隙率などによって異なっている。代表的な造岩鉱物である石英や長石の結晶は絶縁部であるためこれらの絶縁物で構成される岩石の比抵抗は、鉱物

粒子間の結合物質や亀裂・間隙に存在している水分などによって低下する。すなわち、新鮮で緻密な岩石は高比抵抗であるが、風化し細粒化すると間隙水を含みやすくなるため低比抵抗になる。但し、その間隙が地表浅部で乾燥（水分→空気⇐空隙大）すればまた高比抵抗になり、同じ岩石でも幅広い比抵抗値を示す。また、未固結層でも同様の理由から粗粒物質からなる砂礫は高比抵抗を示し、細粒物質からなる粘土やシルトでは間隙水を多く含む（吸着水）ため低比抵抗を示す。

● 低比抵抗部（ $100 \sim 250 \Omega \cdot m$ ±以下）

分布：地表の浅、深部に局部的に分布する。

地質：主に強風化部やその盛（埋）土等に相当する。

低比抵抗は、風化や破碎により細粒（片）化した地質で、表面伝導率や含水量の増加した状況を反映している。岩質・土質は、軟質の場合が多い。

● 中比抵抗部（ $250 \sim 700 \Omega \cdot m$ ±）

分布：層状、レンズ状、塊状、漸移帯として分布する。

地質：強風化岩や盛土に相当し、岩質は低比抵抗部と比べ硬質部が多い。

比抵抗の漸移帯は、風化帯に対比される。この漸移帯で急激に変化する部分で比抵抗境界面を形成する。このうち比較的浅部で水平的なものは、風化ラインや盛土と風化岩との地層境界に対比される。また、深部で直線的かつ垂直的な比抵抗境界面は、断層等の地質構造を反映している可能性がある。

● 高比抵抗部（ $700 \sim 3000 \Omega \cdot m$ ±以上）

分布：地表浅部で、層状、深部で塊状に分布することが多い。

地質：地表浅部は、盛（埋）土や強風化岩に、深部では弱風化岩に対比される。

地表浅部の高比抵抗は、乾燥し空気間隙率の増大した状態を反映している。深部の高比抵抗は、岩質が新鮮かつ硬質で、間隙率も極めて小さく、含水量の少ない状態を反映している。

（３） まとめ

地中レーダ探査、電気探査及びボーリングバーによるロッド貫入状況を巻頭図版に併せて示す。これらの結果を統合的に解釈して、各地点の地形・地質及び地盤状況を推定し下記に示す。

小尾根部縦断（１測線） １測線は、発掘箇所北側縁辺部から小尾根部を縦断する方向で設定した。探査目的は、主に掘跡範囲（奥行き）の把握とした。

● 地形・地質：地形は、山頂（２測線）から、屈曲しながら南に延びる標高約 195 ～ 206m ±の小尾根に相当する。この尾根の屈曲は、西側の谷・尾根にも共通した自然地形の特徴である。この尾根の頂部は、幅約 15 ～ 25m ±で人工的に平坦化され、現在、耕地として利用されている。

地質は、一様に花崗岩であり、その風化土と縁辺部の盛土が、地表を覆う。１測線の 1 ～ 6 m 付近で確認された掘り跡は、深さ 3 ～ 4 m 以上で北側に落ち込んでおり、風化土と同質の土砂で、埋土されている。

● 地盤状況：地表下約 3m ±以浅の範囲に、レーダ反射と比抵抗境界が一致する層状の境界面が複数検出された。この境界面以深で塊状に広がる高比抵抗部は、弱風化花崗岩に対比される。また、測点 15m 付近の凹状の中比抵抗部は、前記した尾根の屈曲部に当たるため、断層等による地質の劣化部である可能

性が高い。これに対し、地表下3m以浅は低～高比抵抗部が層状～レンズ状に分布する。この低比抵抗部は軟質なのに対し、高比抵抗部は盛土部で軟質だが、その他は硬質となる。このため地表浅部では、低比抵抗部が保水性の高い細粒土、高比抵抗部が空隙の大きい礫質土あるいは風化残留岩塊等に対比される。測点6～15mの地表付近の盛土部は、低・高比抵抗部共に軟質である。この比抵抗値の違いは、急斜面ほど保水性が低く高比抵抗になりやすい地形的影響や、新・旧盛土の地質の違いを反映した可能性がある。この盛土直下の境界面は地形と調和的であり、凹状の落ち込みはない。このため、掘り跡は測点6m付近の盛土直下までで、最深部でも深度3m±以浅の中比抵抗部の範囲と推定される。

山頂尾根部縦横断（2・3・4測線） 2測線は山頂尾根部の縦断方向、3・4測線はその横断方向に設定した。また、4測線は馬蹄形の凹地（虎口？）にあたる。探査目的は、縁辺の盛土部や堀切及び凹地等での地盤状況の把握とした。

●**地形・地質：**南西～北東に延びる山頂尾根部は、中央鞍部の段差を境に南西側と北東側に2分され、共に山頂部は標高223m±を示す。この尾根部は、幅約20～25m±で平坦化されており、現況は植林地となっている。その縁辺部は、急斜面で、肩部の所々に高さ1m±の石垣が残る。

地質は一様に花崗岩であり、その風化土とその切・盛土が地表を覆っている。また、急斜面には、崩積土が分布する。

●**地盤状況：**深度2.5m±以浅に、レーダ反射と比抵抗に共通した境界面が検出された。この境界面以深は、塊状の高比抵抗部と中比抵抗部及びその漸移帯や垂直的な比抵抗境界面が分布する。高比抵抗部は弱風化岩、中比抵抗部は強風化岩、漸移帯は風化帯に対比される。また、直線的かつ垂直的な比抵抗境界面は、断層等の地質構造に対比される。深度2.5m±以浅の大部分は、中～低比抵抗が層状～レンズ状に分布して、その肩部や急斜面に高比抵抗部が分布する。この範囲は人工改変した可能性が高く、その解釈を各地点別に下記に示す。

＜肩部～縁辺の急斜面＞ 肩部～縁辺の急斜面には高比抵抗部が分布し、それが斜面下で厚くなる部分は新しい崩積土に対比される。逆に肩部で高比抵抗が厚くなる部分は、3測線6m付近に見られる石垣の裏込め等、盛土部を反映した可能性がある。

＜鞍部の段差（掘跡？）：2測線56m付近＞ 鞍部の段差直下で、レーダ反射・比抵抗ともに凹状パターンが検出された。その凹状パターンは、深度1m±と深度2.5m±の2つがある。深度1m±の浅い凹部は、軟質のため埋土の可能性が高い。それ以深は、硬質となるため、礫質の埋土または強風化岩と推定される。これに隣接した2測線48m付近にも、中比抵抗を示すロート状の凹状パターンが形成されている。この部分は、深度1.5m以上軟質のため埋土の可能性があるが、その底部が深度5m±とやや深いことから強風化岩の可能性もある。

＜凹地：4測線23～34m付近＞ 凹地直下に、レーダ反射・比抵抗に共通する境界面が深度0.5～1.5m±に検出されたほか、レーダ反射には深度0.8m±に規則的な小さな凸状反射パターンが4つ検出された。これらの境界面や凸状反射パターンは、旧地表面や遺物に反応した可能性がある。

＜台形状パターン：3測線15m、4測線12m付近＞ 台形状パターンが、3、4測線に1箇所ずつ検出された。この台形状パターンは、離れた場所と同サイズ（幅4m位）で検出されたことから、遺構である可能性がある。

谷壁斜面部横断（5・6測線） 5・6測線は、谷壁斜面を横断する方向で設定した。探査目的は、共に斜面上部で確認された掘跡の延長部の推定である。

●地形・地質：谷壁斜面はで小尾根部縦断の小項で記した尾根・谷の屈曲部に当たり $30 \sim 45^\circ$ 土の急斜面を示す。表層地質は主に崩積土であり、それを切・盛土して、狭小な平坦地を造っている。

●地盤状況：深度 2.5m 土以浅に、レーダ反射と比抵抗に共通した境界面が検出された。この境界面以深は、中～高比抵抗部が塊状に分布し、比抵抗値が高いほど、弱風化の硬質な部分と推定される。また、深部で直線的かつ垂直的な比抵抗境界面は断層等に対比される。深度 2.5m 以浅は、主に高比抵抗が地表を覆うパターンから崩積土に対比される。高比抵抗のレンズ状パターンが 5, 6 測線に共通して検出され、この範囲に凹状レーダ反射パターンも検出された。以上の検討から、掘跡の延長部は、深度 2.5m 以浅のレンズ高比抵抗パターン、あるいは、深度 1～2 m 土の凹状レーダ反射パターンに存在している可能性がある。

尾根鞍部縦横断（7・8 測線） 7・8 測線は、北東側の尾根鞍部を縦・横断する方向で設定した。探査目的は、この直下に予想される“土橋”の有無と範囲を推定することである。

●地形・地質：この付近の鞍部は、谷頭斜面に連続することから、もともと自然の鞍部と考えられる。但し、7・8 測線交点付近を境に 7 測線起点側は平坦地が広がるが、7 測線終点側は階段状の平坦地となっている。平坦部の表層地質は、風化土とそれと同質の盛土、谷頭斜面ではこれらの崩積土が分布する。

●地盤状況：深度 2.5m 土以浅に、レーダ反射と比抵抗に共通した境界面が検出された。この境界面以深は、中比抵抗が広がり、深部で高比抵抗に漸移する。この中～高比抵抗部は、強～弱風化岩に対比される。深度 2.5m 土以浅は、主に高比抵抗が地表を覆って分布するが、7 測線起点側では欠落する。この高比抵抗部は、7 測線（縦断型）の交点直下で凹状を示し、終点側の階段状部で厚くなり、8 測線（横断型）では尾根鞍部から谷頭斜面まで連続する。この凹状部は深度 1.5 m 以上軟質だが、階段状部では深度 0.4m より硬質となる。このため、凹状部は盛土、階段状部は盛土または強風化岩と推定される。この高比抵抗部が欠落する 7 測線起点側は、切土面の可能性が高い。また、凹状高比抵抗部は谷頭斜面まで連続するが、標高 215m 付近を境に上・下 2 分され、その上部側まで盛土の可能性が高い。この高比抵抗直下の中比抵抗部は、台形状を呈しており、“土橋”に当る可能性がある。

（註）本節は平塚賢二郎氏の報告をもとに編集者である永井がその責任において再構成したものである。また電気探査測定データは省略した。

第7章 考察

第1節 城山城の構造を考える

本節では、第5章でまとめた発掘調査で確認された遺構の変遷と、第6章および第7章で提示された科学分析と物理探査の成果を合わせて、城山城全体の構造を図上再現を試みる。

(1) 主郭部の様相

主郭部の現状 主郭部は平場4を抜けた里道を約100m上った所にあり、里道はそのまま主郭部脇から搦手推定地を通して山中に分け入る。ただこの先にも平場群は続き、近代は耕作地（現在は全て山林）であったとみられる。実地での境界は不明だが搦手推定地より奥は字深薄（ふかすけ）である。

さて主郭部は現状でその中央がややくびれ、そのくびれた箇所以南東方向へと下る傾斜がありそこが出入口になっている。この出入口の両脇は岩盤が露出しており開削の痕跡がうかがえる。そして主郭部へ上がると左手には肥溜（埋甕3基）があり以前は耕作地であったことがわかる。左手奥の平場はさらに約50cm高い位置にある。さらに主郭部の北西背後は谷に面し急傾斜となっている。この北西縁にそって高さ約80cmの石積みが見られるが、先の物理探査でこの石積みは表土層の上ののりようにして造られていることが判明した。したがって山城とは関わりのない比較的新しい時期の構造物でありここで注意しておきたい。またこの平場の西端には直径約2m高さ約50cmの石塚がある。雑な積み上げ方をしているが、地元の方の話によると毎年正月に供え物をするなど、一種の聖域としていたようである。それが20世紀前半のことだという。

主郭部の想定 物理探査の結果をもとに主郭の施設を想定する（図106）。まず中央のくびれ部では、隣接してV字形と逆台形の地質の変化が提示されている。V字形の凹みは上幅約7m深さ約6mあり、堀切の可能性が考えられる。一方逆台形の凹みは比較的浅い。こちらも堀切の可能性が考えられるが、薬研堀よりはるかに防御性が低く、また両者併存は考えにくいことから、箱堀から薬研堀へ改造された可能性を考えておこう。ここで堀切より西半分を主郭1、東半分を主郭2とする。

次に主郭1を検討する。主郭1は約8.5m×15mの平場で、その西から北辺にかけて下幅約4m、高さ約80cmの凸形の地質変化が認められる。幅からみて建物基部の可能性もあるが土塁基部と考えられよう。土塁は堀切までL字形にのび、全長約18mと推定される。そして土塁に囲まれた空間（約70㎡）には城の中核となる建物があったと推定される。

主郭2でも同じ規模の凸形地質変化があり、主郭1の土塁延長線上に位置していることからこちらも背面の土塁と想定される。そして堀切から東へ約10mの地点でわずかな凹みが看取される。この地点では南北方向にも探査しており、約13mにわたって緩い階段状の地質変化が提示された。このライン、すなわち現状で岩盤を掘り割ったスロープ地形の直下に主郭部への出入口通路があったものと想定される。この出入口通路は現状の里道とは直接つながらず、一旦鉤の手に曲がっていたとみられる。以上が物理探査の成果を基にした推定だが、主郭2は北東隅にむかって緩い上り傾斜になっている点に注意しておきたい。北東隅が主郭1と並んで最高地点であり、ここに櫓が建っていた可能性も考えておこう。

この他、物理探査は搦手でも実施した。ここでは上幅約4mの狭い土橋となっていたことが想定できた。現状では緩い上り傾斜でこの地点を里道が通過するが、復元すると城内から一旦下ったのち、城外は急な上りになっていたようで、いわば堀切の一部といった構造である。

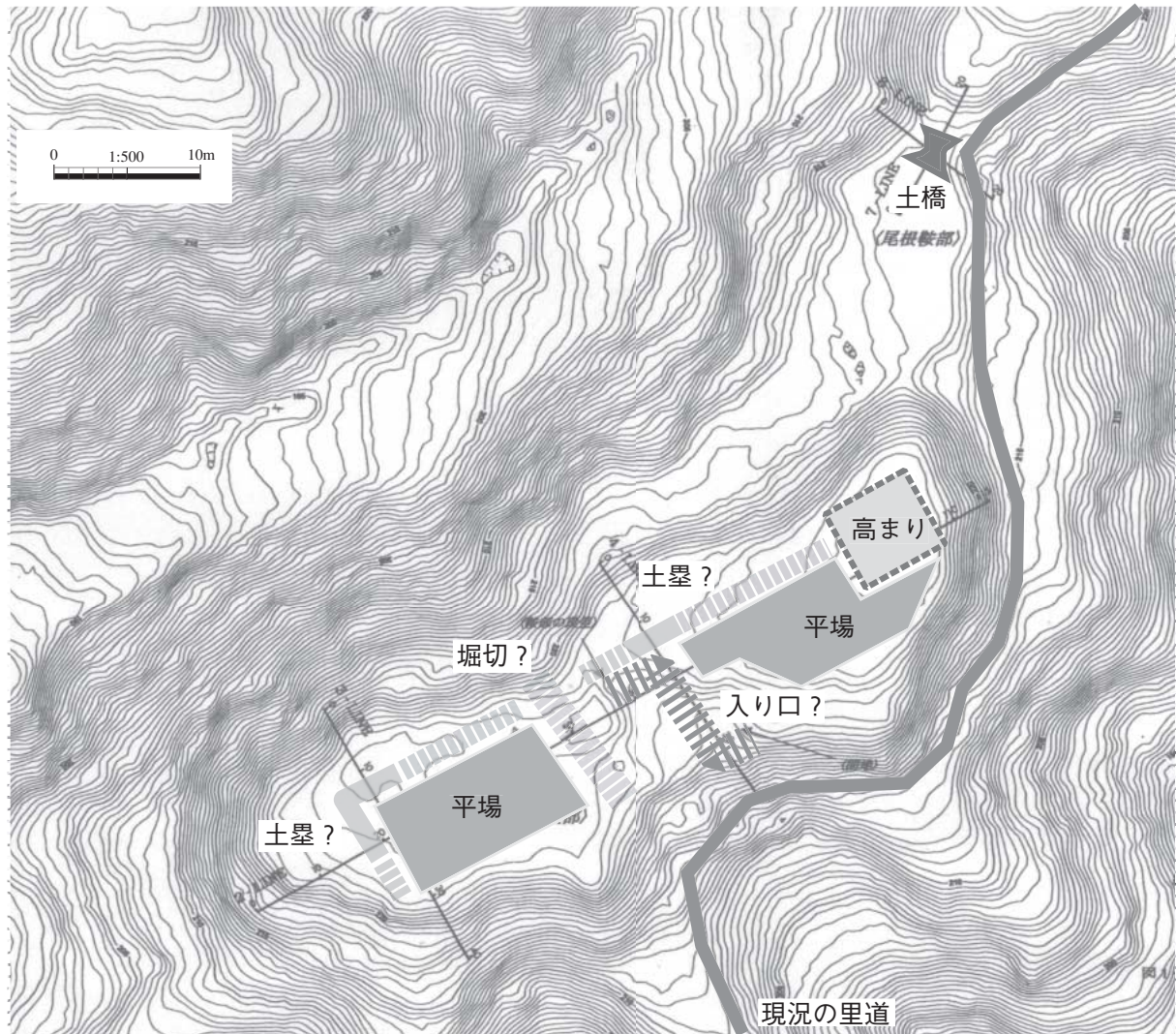


図 106 地下探査に基づく城山城主郭部の想定図(1:500)

(2) 山城縁辺部にみる城山城の主軸と横からみたその姿態

城山城の主軸 城山城では主郭部の長軸は尾根筋の方向に規制される。先にみた主郭1・2の土塁をその長軸方向とすると、それはグリッド北から東へ55°振れる。この方向を城山城の主軸とし、これと調査で確認された各種遺構の方向軸との関わりを検討する。

主郭部から南西にのびる尾根筋の続きにあたる「馬場」平場は主軸とはほぼ同じである。そして00A区堀切(SD01)はこれと直角に交差する。次に01A区とした尾根をみる。この尾根筋の方向はグリッド北から東へ20°振れる。堀切(SD10)は尾根に直角となるので主軸とは合わない。しかし平場1～3の南東縁はグリッド北から東へ50～65°の振れで、主軸に近い。

01B区では堀切(SD01)は尾根筋に直角で主軸とは合わない。一方平場の南東縁は01A区同様グリッド北から東へ40～50°振れており主軸に近い。また平場群を防御する横堀(SD08・09)もこれと同じ方向である。平場上の施設群も南東縁と方向を揃えてつくられている。

「みかけだおし」の城 以上のように、城山城では主軸を設定しそれに合わせて周辺部を造作することで、主軸に対し直角となる方向から眺めた場合、雛壇のように整然と連続するような曲輪群を誇示することができた。反対にその方向から見えない部分(北西側)については自然地形に対しほとんど手

を加えることはなかった。これは01A・B区の尾根筋から西半分ではほとんど遺構が確認できなかったことからうかがえる。ただこのような隙間部分を残しておくことは山城にとって実際の防御上致命的であり、いわば「みかけだおし」な造りであったといえる。

では城山城が偉容を示しておかねばならなかった方向とはどこか。それは今の足助市街地東の入口である。足助市街地のうち田町・本町（東町）・新町・西町は寛永6(1629)年の段階で200戸以上の人口集住があり、戦国時代もそれに近い規模の町になっていた可能性が高い。足助川にそって東から谷を下ってくると、市街地が見える前に今朝平遺跡のあたりで城山城跡が視界に入る。この地点で、今は樹木でやや影になるが当時なら両脇の山並と真弓山城の一部も視野に入ったことだろう。こうして城山城は、東側からの進軍に町の入口で対峙する格好になったと思われる。城山城の築城（もしくは改造）にあたってはこの効果を考慮したと考えられる。



図 107 発掘調査などの成果に基づく城山城の復元図(1:2500)

（３）城山城の変遷と廃城年代

城山城は第５章で述べたような遺構変遷をたどるが、この変遷は主郭部ではどのように対応するのだろうか。前項で想定した主郭部中央に位置する薬研堀の堀切が01B区堀切(SD01)や横堀(SD08・09)に対応すると考えられる。これら薬研堀の掘削は16世紀後半に実施されたとみられることから、前項で述べた城山城の「正面観」とも関わって、乱世激化の風潮のもと東方からの驚異増大に対する備えであったとみなせる。

これらの防御がどれだけ有効であったかを示す資料はない。全調査区とも火災の痕跡はないが、01B区横堀(SD09)の最下層では炭化した麦や炭化物の集積が認められた。この炭化物を採取し炭素年代測定を実施したところ(第６章)、暦年代にして1565～1630年という値が得られた。この炭化物層からは大窯3期後半の陶器や土師器鍋が出土しており、機能停止直前もしくは直後の横堀への廃棄行為と考えられる。すなわちこれらの遺物が提示する年代が城山城で最も発達した防御施設の廃絶年代であり、しいては城山城の廃城年代に最も近い年代とも考えられるのである。

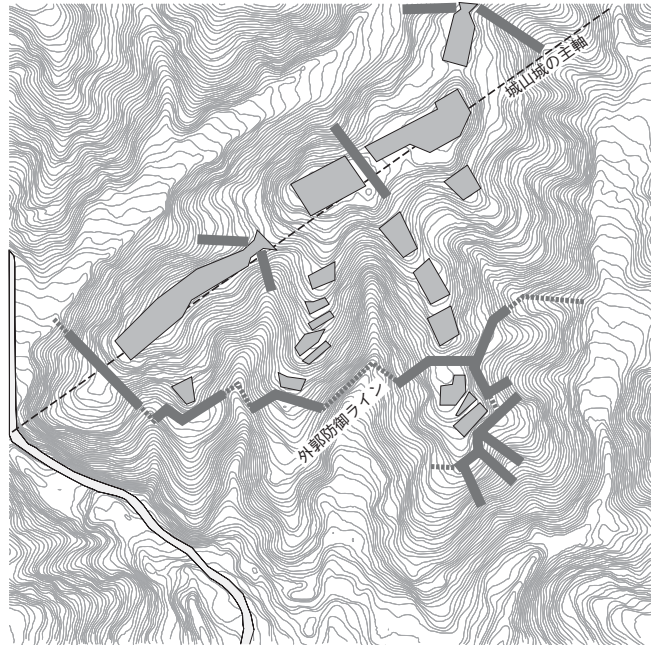


図108 城山城外郭防御ライン想定図

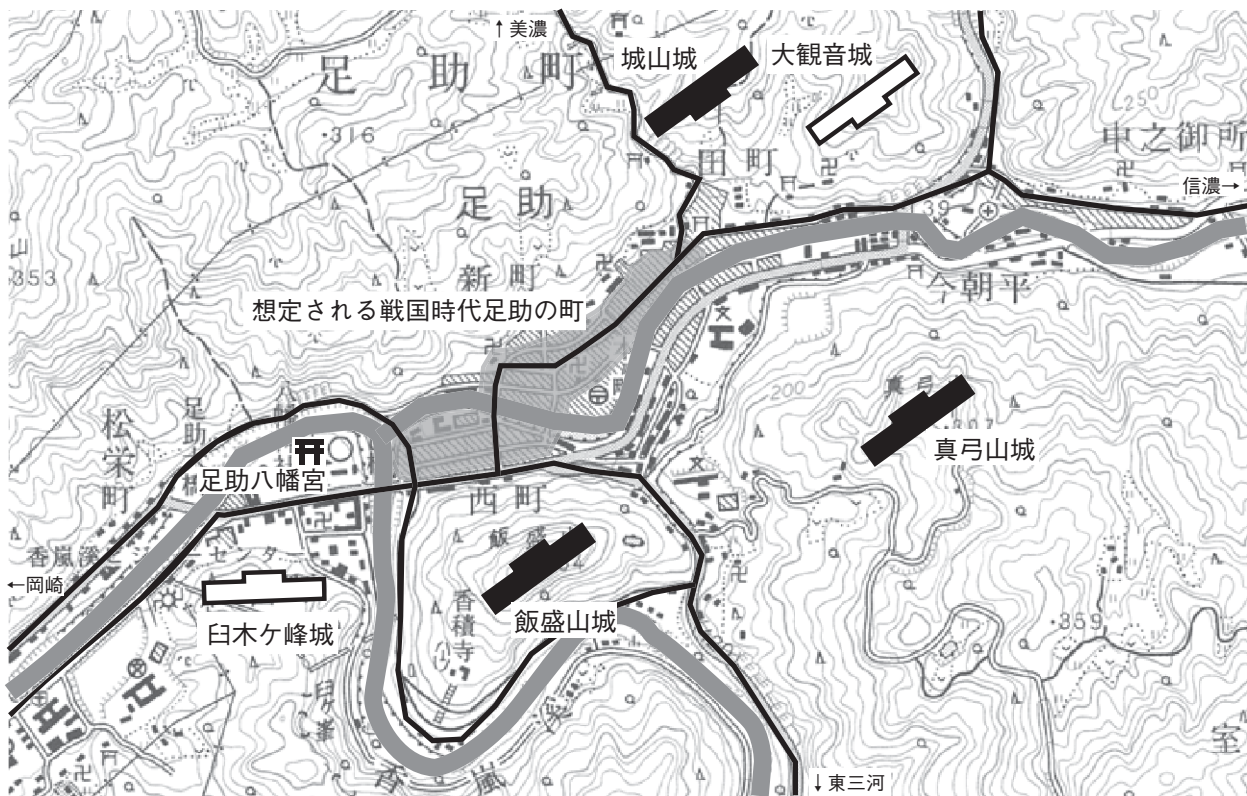


図109 想定される戦国時代足助の町と山城群の配置図（国土地理院発行1:25,000地図を改変）

第2節 城山城と足助の戦国時代

城山城跡がかつて機能していた頃の城名や城主は現在のところ不明である。したがって本書では遺跡名をそのまま仮の城名に充てることで記述を進めてきた。ところで戦国時代の足助に関わる文献史料は、一次史料を中心にいくつか所在する。それら史料からみた足助の戦国時代の様相を概観し、合わせて足助市街地、つまり戦国時代足助の町周辺に立地する山城との比較を通じて当該地域における城山城の位置づけをおこなっておきたい。

(1) 史料にみる足助の戦国時代

『足助町誌』や『愛知県史』などで提示されている足助の戦国時代に関わる史料を配列してつくった年表が下表である。これによると史料の偏りもあるが、16世紀前半は足助鈴木氏と岡崎松平氏との確執が当該地域の主要な政治的問題であったことがうかがえる。これが1560年代におよそ決着がついた後

表14 足助の戦国時代年表（15世紀末以降）

西暦	元号	出来事	史料
1484年	文明16年11月1日	佐々木郷上宮寺の門徒一覧に「足助岩崎 一箇所」とある。	如光弟子帳（『岡崎市史』史料古代中世194）
1525年	大永5年5月14日	松平清康、2000余騎で足助へ押し寄せる。鈴木重政降服、嫡子重直の妻に清康の姉を迎えることを承諾。	三州八代記古伝集
1552年	天文21年11月27日	今川家岡崎在番の指示で松平勢2500余騎が足助表へ押し寄せる。	東照軍鑑
1553年	天文22年4月21日	鈴木重直、岡崎方面に出陣、麦苗代を薙ぐ。	東照軍鑑
1554年	天文23年5月9日	今川家岡崎在番の馬場・掘越が3500余騎で足助表へ押し寄せる。	東照軍鑑
1561年	永禄4年7月9日	松平元康、鈴木重直の所領を安堵する。	松平元康書状 鈴木文書（『愛知県史』資料編織豊137）
1561年	永禄4年8月2日	松平元康、築瀬九郎左衛門家弘・原田小右衛門種久に、三河国折立・菅沼郷の替え地として、同国武節郷を与える。	松平元康朱印状写 譜牒余録巻二（『愛知県史』資料編織豊146）
1562年	永禄5年3月晦日	松平元康、3000余騎で足助表へ押し寄せ各地に放火。	東照軍鑑
1564年	永禄7年10月6日	松平元康、3000余騎で足助へ押し寄せる。これ以降足助重直は家康の家臣石川数正の組に配属される。	東照軍鑑
1571年	元亀2年4月26日	武田勝頼、越中国の杉浦紀伊守に、「三州足助城」などを攻略したことを伝える。	武田勝頼書状 遠山家文書（『愛知県史』資料編織豊756）
1571年	元亀2年4月30日	武田信玄の臣である山県昌景が孕石元泰に、鈴木重直・信重父子の降服、そして周辺の諸城（「浅賀井・阿須利・八桑・大沼・田代」）が「自落」したことなどを伝える。	山県昌景書状写 古案三州聞書（『愛知県史』資料編織豊757）
1572年	元亀3年8月10日	武田信玄が、遠江侵攻に際し軍令制定。山家三方衆（設楽郡田峯菅沼氏・長篠菅沼氏・作手奥平氏）に下条信氏の加勢を命じる。	武田信玄条書 古澤正臣氏所蔵文書（『愛知県史』資料編805）
1573年	元亀4年	武田信玄死去。松平信康、足助城と武節城を攻めて武田勢を駆逐。鈴木重直失地回復。	『足助町史』
1575年	天正3年3月	織田信忠、武田勝頼の三河国足助出陣（「三州之内あすけ口へ相働」）につき尾張衆を引き連れ参陣する。	信長記第八（『愛知県史』資料編織豊1076）
1575年	天正3年4月	武田勝頼、「足助表」へ出張、各所に放火後「作手筋」から「野田」へ侵攻。	当代記巻1（『愛知県史』資料編織豊1153）
1575年	天正3年	織田信忠・徳川家康、長篠合戦後、三河・美濃の武田勢掃討を実施。	菅沼家譜 菅沼家文書（『愛知県史』資料編織豊1158）
1575年	天正3年	作手の城番であった小幡又兵衛、長篠合戦敗戦により「あすけ」へ逃亡。	甲陽軍鑑 品第五二（『愛知県史』資料編織豊1182）
1579年	天正7年8月19日	松平家忠、足助に漆を買いに人を遣わす。	家忠日記 同日条（『愛知県史』資料編織豊1337）
1579年	天正7年8月19日	松平家忠、足助に漆・綿調べに人を遣わす。	家忠日記 同日条
1629年	寛永6年	足助に「西町・東町・新町・田町」があり200余戸の在住があると記録。	足助村御縄打屋敷帳

は、武田氏の三河侵攻が政治的軍事的問題となり、足助（鈴木氏）にとっての最大の驚異が西方から東方へと転換したことがわかる。そしてついに元龜2（1571）年にその驚異は現実のものとなった。

（2）武田信玄・勝頼の西三河侵攻と足助

史料によると元龜2年に西三河へ侵攻した武田氏の軍によって足助城（真弓山城のことか）他周辺の城は降服した。その後天正元年末に松平（徳川）家康の軍に駆逐されるまでの約3年間、足助は武田氏の先兵となった信濃伊那地方の下条信氏らの占領下にあった。その後天正3（1575）年に武田勝頼が三

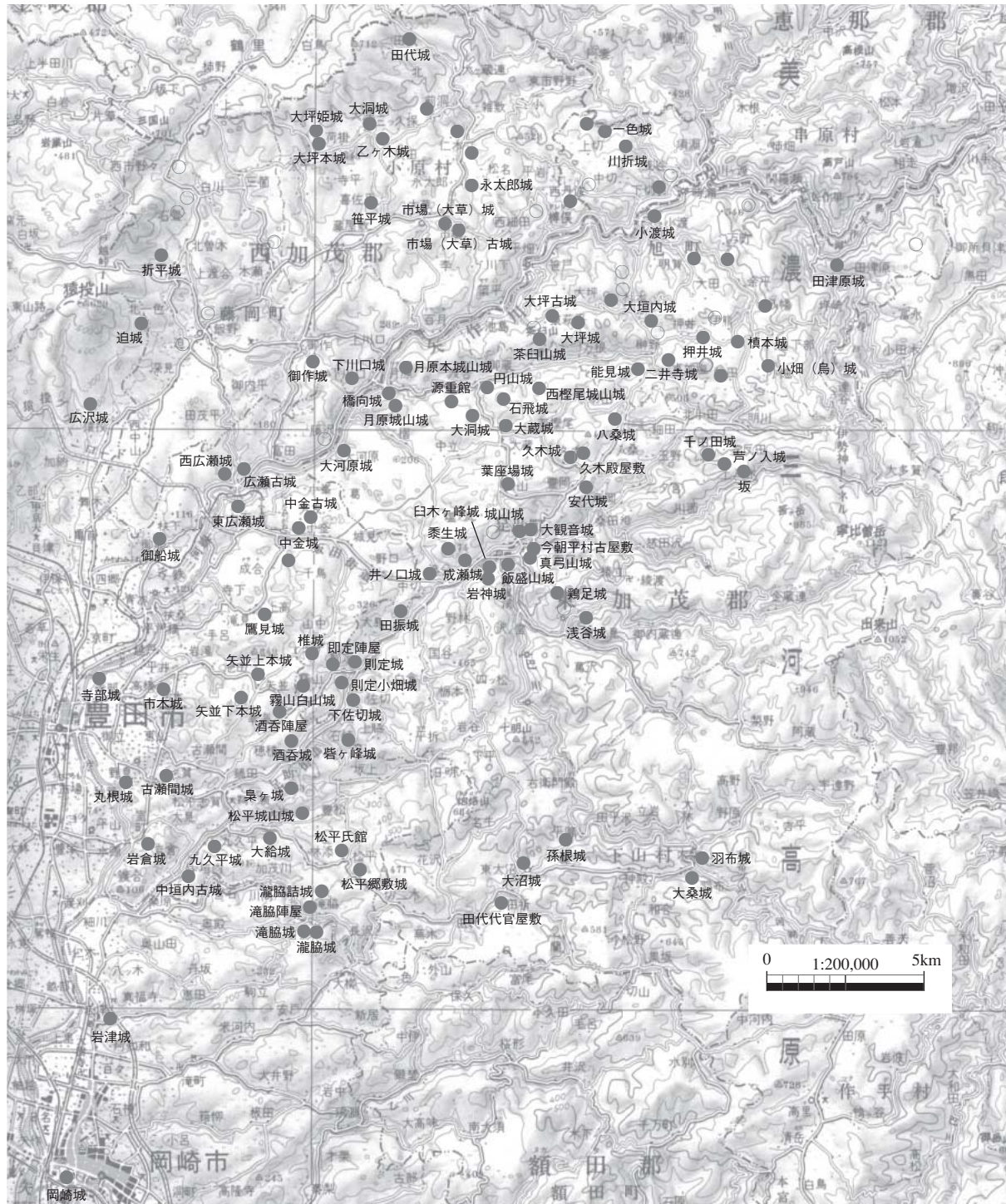


図110 旧賀茂郡東部地域を中心とする城郭分布図（国土地理院発行1:200,000豊橋を改変、旧藤岡・足助町と旧小原村は網羅し、それ以外は主要なものに限った）

河へ侵攻するが、これは著名な長篠合戦へ至る一連の軍事行動で、設楽郡などの東三河が主戦場であった。これを記す史料には「あすけ口」として足助の地名が登場するが、ここでいう「あすけ」と呼ばれた地域の範囲は中世に展開した足助庄域にほぼ重なる地域と考えられ、現在の豊田市足助町・稲武町・旭町などを含む広大な範囲を指す。したがってその「口」は足助の市街地からかなり離れた地点（長野県根羽村あたりか）と想定されよう。このことから1573年あるいは武田氏の驚異が後退した1575年以降、足助市街地は主要な戦場となることなく江戸時代に至ったものと思われる。

以上の文献史料にみる歴史的事件と、足助市街地の山城群との直接的な関連づけは城郭研究や足助の地域史研究を充分踏まえたうえで進めるべきであろう。ただ前節で述べた城山城の廃城年代は、およそ武田氏による三河侵攻から撤退にかけての時期に近く、むしろ全く無関係であったとすることはできないであろう。01B区における横堀などの整備は、前述したように東方からの脅威に備えたものと考えられるが、元亀2年侵攻前かそれとも撤退後に再度の侵攻に備えたものであったのか、なかなか難しい問題をはらんでいる。また侵攻後に城山城がどのように扱われたのかも不明であり、横堀への廃棄行為・横堀埋め戻しが侵攻直後なのかそれとも撤退後なのか関心のもたれるところである。

（3）足助の山城について

足助市街地山城群 足助市街地周辺に展開する山城群は城山城同様、市街地側に最も長い側面をみせる。そしてそれらが同時に存在した場合、その景観はあたかも連続する一体の城のように見えたかもしれない。前節で城山城が特に東方に対して防御を固めたことを述べたが、このような築城者（もしくは改修者）の意図を探るべく個別にいくつかの城跡を概観しておきたい。

足助には「足助七屋敷」「足助七城」と呼ばれる主要な山城がある。呼称そのものはさほど古いものとは思われないが、該当する山城の位置から前者（真弓山城・飯盛山城・城山城・大観音城・臼木ヶ峰城・黍生城・成瀬城）は市街地を囲む山城群、後者（真弓山城・円山城・八桑城・安代城・浅谷城・大沼城・田代城）は鈴木氏の本城たる真弓山城と、市街地から離れて街道沿いに展開する出城または支城的山城を指していることがわかる。「七屋敷」のうち黍生城は、鈴木氏以前の足助氏による南北朝期の築城とみられるが、いずれも街道や市街地に長い側面を見せる縄張と考えられている。

真弓山城 真弓山城は、1992年に足助町教育委員会（当時）によって発掘調査が実施され、その成果に基づき櫓などの建物を伴う「足助城」として整備され公開されている。主郭部は黍生城に次いで高く（標高301m）、足助市街地はもとより東方、西方の眺望にも優れている。主郭に対してそれに準ずる曲輪「西の丸」が取り付く形状は城山城の主郭部と「馬場」平場の組み合わせに類似する。これら主郭部とその周辺で出土した土器・陶磁器は15～16世紀代であるが、主郭（「本丸」「南物見台」）以外では15

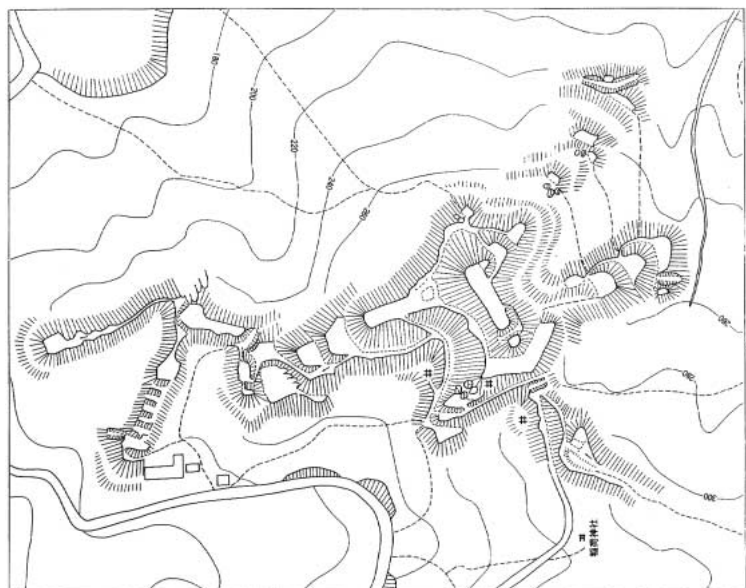


図111 真弓山城縄張図（愛知県教育委員会1995より転載）

世紀代のものは少ない。城山城跡01A区と同様、日常雑器が多い点が注目される。

飯盛山城は鱸氏や佐分氏の縄張図によると主郭の東西にそれに準ずる規模の曲輪が脇を固めるように取り付く。臼木ヶ峰城の縄張はまともにかけるが後述する大観音城のような展開を経た可能性も考えられる。成瀬城は小規模で破壊された部分が大いだが、広い主郭部をもっていたと推定される（鱸2001）。

このように街道や町に対して長側

面をとり、尾根筋に沿って明瞭な主郭部を集約的に配置する点が市街地山城群の特徴といえよう。

大観音城 ところが大観音城は城山城と同じ方向に長側面となるが、頂上に小さな主郭が1つあるだけである。城山城とは谷を一つ挟んだ東200mに近接している点も気にかかるが、主郭の背後に堀切があって城山城とは連続しないことは明らかである。この城で最も広い平場は主郭から下ったところ

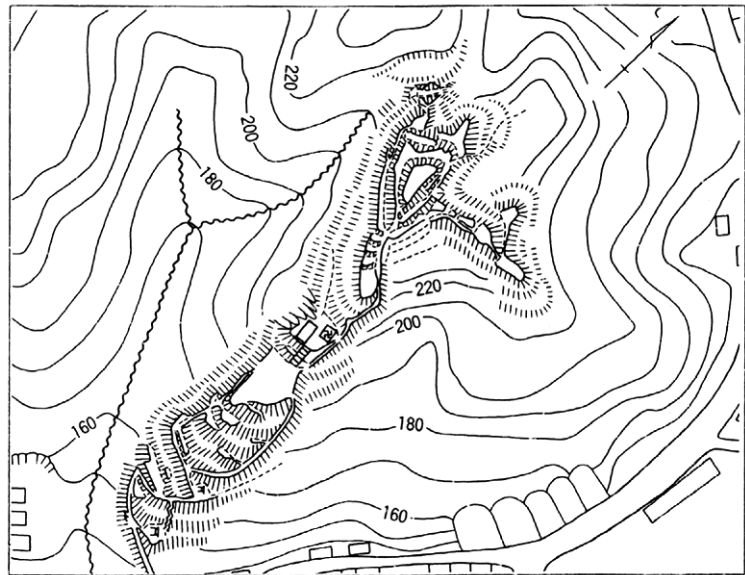


図112 大観音城縄張図（愛知県教育委員会1995より転載）

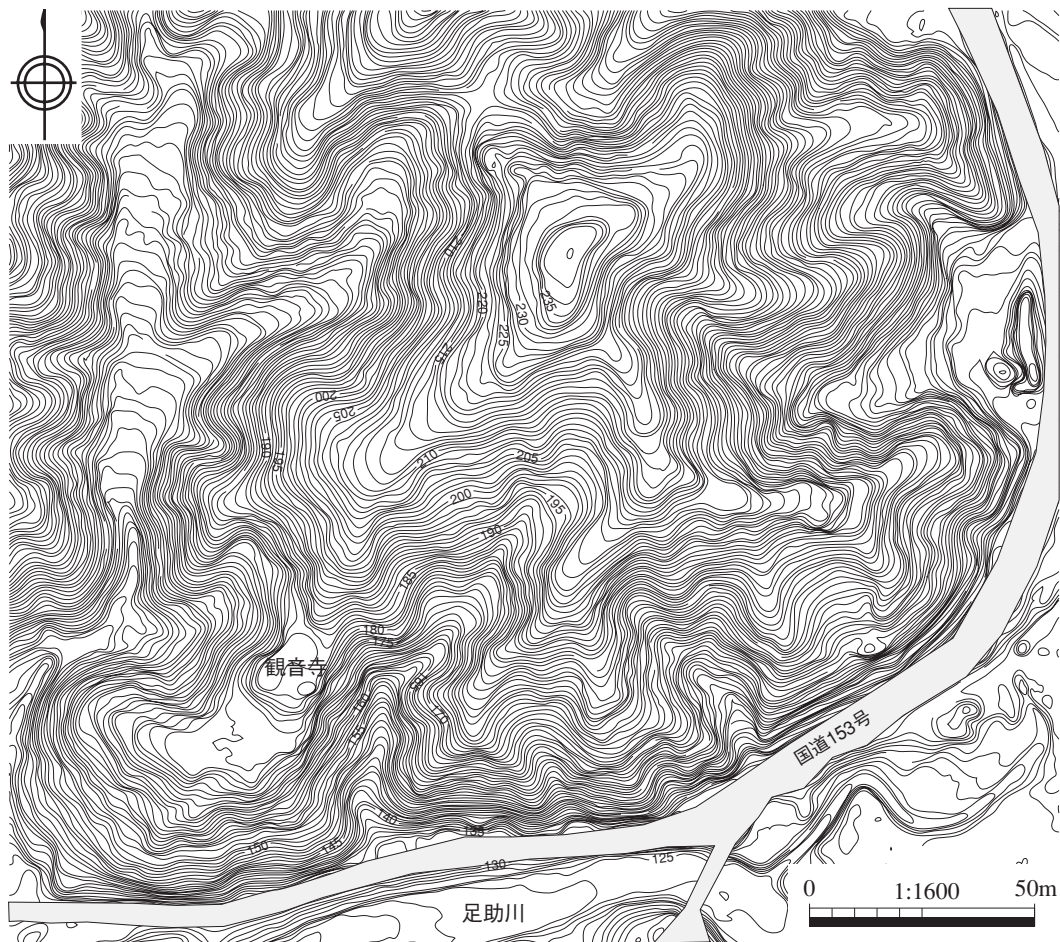


図113 大観音城および周辺の地形測量図

段で構成される。上段平場には現在観音寺があるが、文明16(1484)年「如光弟子帳」には「足助岩崎」に道場があると記し、当該地小字が「岩崎」であることから浄土真宗の道場があった可能性が指摘されている(鈴木1975)。この上段に道場があったとすると下段に居館の母屋的施設があったと考えられる。このような平場の構成は久木殿屋敷でもみられる(図114)。したがって大観音城の小規模な頂上主郭は「詰めの城」として位置づけられる。つまり遺跡としては市街地山城群の一角ではあるが、15世紀後半代までに鈴木氏とは別の在来の有力者によって営まれた山城と考えられる。飯盛山城の西に位置する臼木ヶ峰城でも小さな主郭部に対してやや低い位置に広めの平場があり、「普光寺」の伝承があるという(鱸2001)。この城も同様の経緯をたどったと推測される。これに対して真弓山城・飯盛山城・城山城も当初は「詰めの城」として単郭で成立した可能性も十分に考えられるが、その後16世紀代を通じて長側面に防御ラインを発達させ、町を取り囲む山城群の主体を成すに至ったと思われる。大観音城・臼木ヶ峰城の縄張からはここまでの改変は認めがたい。戦時に緊急的に利用されることはあったかもしれないが、平時の体制には組み込まれていなかった可能性が高い。このことから「足助七屋敷」の中でも鈴木氏の直接的な造作への関与があったのは真弓山城・飯盛山城・城山城であったと推測される。

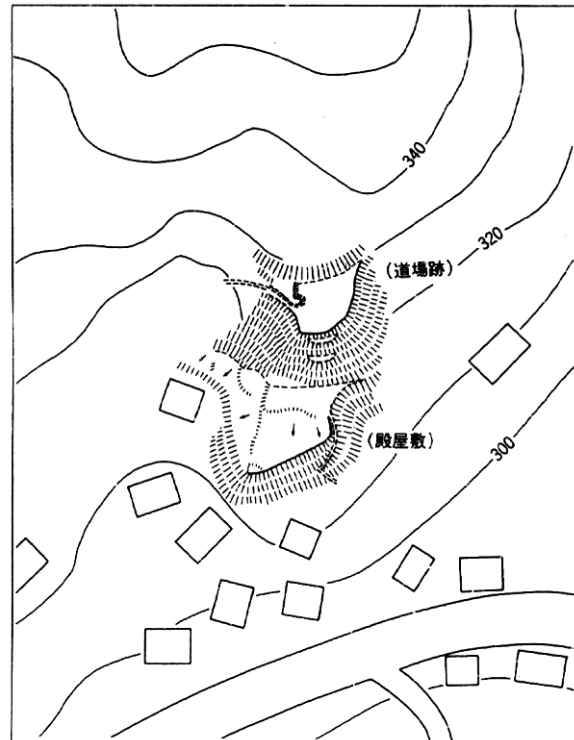


図114 久木殿屋敷縄張図(愛知県教育委員会
1995より転載)

第3節 古城跡の景観

『参州足助絵図』 城山城は廃城後どのような歴史をたどったのであろう。出土遺物の中には江戸時代以降のものも含まれており、城跡に人の出入りがあったことは明らかである。しかし城跡の土地利用としては、ほぼ全域で確認される肥溜で明らかのように19世紀後半～20世紀前半の耕作地化が本格的なもので、江戸時代の間はほとんど手つかず状態であった印象がある。

江戸時代足助の景観を伝える史料がある。『参州足助絵図』と呼ばれる絵図で、財団法人犬山城白帝文庫所蔵のものが良好な状態として紹介されており(註1)、足助町内にもほぼ同様の内容であるが断簡状態の絵図が存在する。その成立年代について紹介時には江戸時代末期とされているが、足助町鈴木昭彦氏の御教示によると、元禄年間～享保年間、すなわち17世紀末～18世紀初頭の可能性が高いという。ひとつは天和元(1681)年に成立した足助陣屋が描かれていること、次に寛文年間(1661～1673)に火災にあい享保年間に現在地に移転した宗恩寺が旧地(新町)に描かれていることが根拠となる。

さて、絵図中には街道沿いに展開した足助の町並みが描かれ、その周囲に山地が配される。その山地に注目すると飯盛山城跡、真弓山城跡とともに城山城跡が描かれているのがわかる。大観音城跡・臼木ヶ峰城跡などは絵図の範囲内に立地するが描かれていない。飯盛山城跡は樹木の生えた円錐形の整った

緑色の山となっているが、他の2城跡には樹木は全くなく黄色で地肌がやや複雑に描かれている（図115）。また真弓山城跡には「真弓城山」の注記があり、城山城跡には「古城跡」の注記がある。両者とも城跡という認識で共通している。しかし飯盛山城跡には注記がなく頂上に足助八幡宮の奥宮が描かれるなど、認識が異なっていたようである。この違いについて、戦国時代の絵図に描かれた城や城跡の研究によると（註2）、「城割り」のような政策によって廃城となったり、攻め滅ぼされたりした城は樹木のないはげ山の状態に描かれるという。本例をそれにあてはめてみると、城山・真弓山の2城は敗戦・降服によって廃城になったと考えるのも一案であろう。あるいは飯盛山城は戦国時代にあってはすでに城として機能せず鎌倉時代の足助氏以来の聖地となっていたとも考えられる。

城山城跡周辺 城跡の描かれ方の理由については本資料の詳細な研究を待ちたいが、城山城跡とその付近の景観について若干指摘しておきたい。ひとつは城跡のシルエットであるが、絵図の城跡はまさに南側から眺めた主郭と「馬場」平場とよく合致している（[巻頭カラー図版1](#)）。次に城跡の下方に描かれた1棟の建物がある。町から離れつつも城跡そのものに建てられたのではなさそうである。東側に谷を挟んで立地する「観音寺」に関わる建物の可能性が高い（註3）。3つめは城山城跡西側を通る道の「ミノ道」という注記である。足助から美濃国へと通じるルートであったこと示しており、城山城が足助の東（信濃方面）と北（美濃方面）の口にあたる場所に位置していたことがわかるのである。

（註1）『愛知県史』資料編近世4 西三河（愛知県2002）の巻頭カラー図版に掲載されている。本資料の転載にあたっては財団法人犬山城白帝文庫および愛知県史編さん室に許可をいただいた。

（註2）伊藤正義氏による一連の研究がある（藤木・伊藤2001など）。

（註3）現在も観音寺（曹洞宗）がある。城山城跡麓の一部は同寺所有地となっている。

図115 参州足助絵図（上：全体、下左：城山城跡部分、下中：真弓山城跡部分を天地逆転、下右：飯盛山城跡部分を天地逆転（財）犬山城白帝文庫所蔵、愛知県2003より転載）

参考・引用文献

- 愛知県教育委員会編 1994 『愛知県中世城館跡調査報告Ⅱ（西三河地区）』
- 愛知県史編纂委員会編 2002 『愛知県史 資料編 18 近世 4 西三河』 愛知県
- 愛知県史編纂委員会編 2002 『愛知県史 資料編 11 織豊 1』 愛知県
- 愛知中世城郭研究会編 1992 『豊田の中世城館』
- 愛知中世城郭研究会編 1993 『藤岡・小原・旭の中世城館』
- 足助城跡発掘調査会 1991 『「蘇る足助城」調査報告会』資料
- 天野暢保 1975 「原始」『足助町誌』 足助町誌編集委員会
- 石川浩治 1994 「三河の武田系城郭について」『愛城研報告』創刊号
- 奥田敏春 1994 「元亀2年三州加茂郡合戦と城郭」『愛城研報告』創刊号
- 北村和宏 2000 「古代『三河型甕』考」『研究紀要』2 愛知県埋蔵文化財センター
- 笹本正治 1997 『中公新書 武田信玄』 中央公論社
- 新行紀一監修 1991 『定本 西三河の城』 郷土出版社
- 鱸壁 2001 『足助の中世城館』 足助町教育委員会
- 鈴木茂夫 1975 「古代」『足助町誌』 足助町誌編集委員会
- 鈴木茂夫 1975 「中世」『足助町誌』 足助町誌編集委員会
- 杉浦茂治編 1971 『高浜市誌資料 11 三河土器のあゆみ』 高浜市誌編纂委員会編
- 高浜市誌編纂委員会編 1976 『高浜市誌 第2巻』 高浜市
- 『花筏「たかはまの婦人」昭和のあゆみ』 高浜市婦人活動推進会議
- 常滑市民俗資料館編 1995 『特別展 常滑の赤物展～もう一つの常滑焼～』 常滑市教育委員会
- 仲井 豊 1988 「第3章（2）1. 三河地域」山下昇他編『日本の地質5 中部地方Ⅱ』
- 永井邦仁 2001 「城山城跡」愛知県埋蔵文化財センター編『年報 平成12年度』
- 永井邦仁 2002 「城山城跡」愛知県埋蔵文化財センター編『年報 平成13年度』
- 永井邦仁 2002 「城山城跡」愛知県埋蔵文化財調査センター編『愛知県埋蔵文化財情報』17
- 永井邦仁 2003 「城山城跡」愛知県埋蔵文化財調査センター編『愛知県埋蔵文化財情報』18
- 永井邦仁 2005 「古代の足助」『愛知県埋蔵文化財センター研究紀要』6
- 中野晴久 1986 「近世常滑焼における甕の編年の研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要』Ⅱ
- 深津重貞 1993 『豊田加茂の地名 増強版』
- 藤木久志・伊藤正義編 2001 『城破りの考古学』吉川弘文館
- 藤沢良佑 1984 「“古瀬戸”概説」『美濃陶磁歴史館報』Ⅱ 土岐市
- 藤沢良佑 2002 「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『（財）瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第10輯
- 宮本佐知子 1999 「おもりの形態についての一考察」『郵政考古』35 郵政考古学会



雪の1月、01A区（平成13年度）



足助町立足助中学校生徒の見学（平成13年度）



遺跡現地説明会（平成13年度）

写真図版

遺構
遺物

写真図版 1 00 A区遺構写真 (1)



SD01 肥溜地表面での状況



SD01 肥溜埋設状況



SD01 肥溜 (甕 C) 出土状況



平場 A-5 完掘状況 (東から)



平場群完掘状況 (北東から)

写真図版 2 00 A区遺構写真（2）



土層Bライン断面（南東から）



平場 A3～A4 土層断面（北西から）

写真図版 3 00 A区遺構写真 (3)



土層 A ライン断面 (部分：南東から)



SD01 土層 C ライン断面 (南から)

写真図版 4 00 A区遺構写真（4）



SD01 土層 D ライン断面（西から）



SD01 土層 E ライン断面（北から）

写真図版 5 00 A区遺構写真 (5)



SD01 上方切岸南半部 (西から)



SD01 上方切岸南半部 (南から)

写真図版 6 00 A区遺構写真 (6)



SD01 土層Fライン断面 (南から)



SD01 底部掘鉢出土状況 (南から)



SD01 底部 (西から)



SD01 西側壁の階段状部分 (南から)



平場群完掘状況と背後に飯盛山城跡 (北から)

写真図版 7 00 A区遺構写真（7）



SD01 北半部完掘状況（南から）

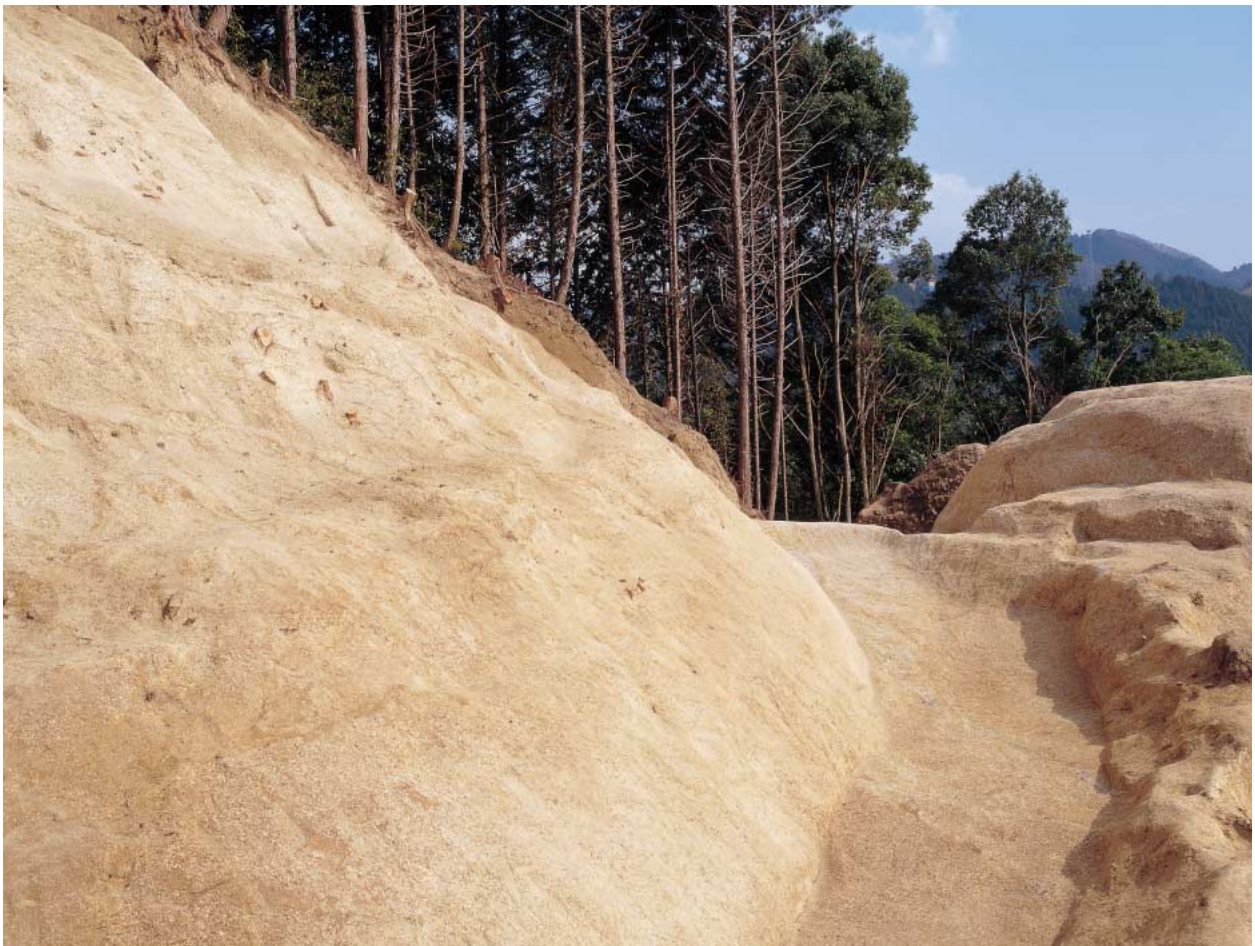


SD01 中央部完掘状況（北から）

写真図版 8 00 A区遺構写真 (8)



SD01・上方切岸完掘状況（南西から）



SD01・上方切岸完掘状況（北から）

写真図版 9 00 A区遺構写真 (9)



SD01 北ベルト土層断面 (南から)



SD01 南端縦堀移行部分 (南西から)

写真図版 10 00 B区遺構写真 (1)



横堀 SD01 西半部完掘状況 (西から)



横堀 SD01 西半部完掘状況 (東から)

写真図版 11 00 B区遺構写真 (2)



平場1土層断面 (南西から)



平場1土層断面 (西から)



平場1検出状況 (南から)



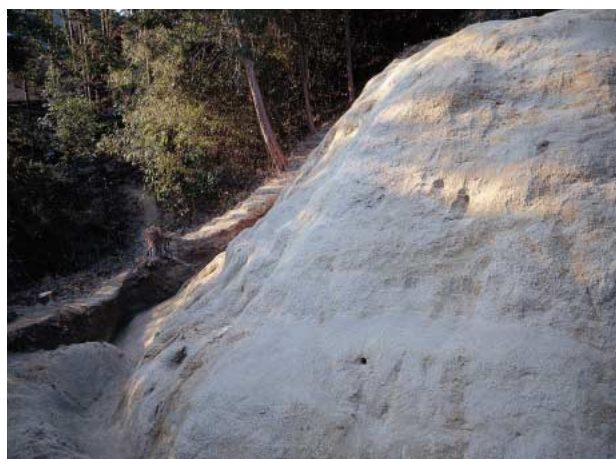
平場1掘立柱建物完掘状況 (北東から)



平場1完掘状況 (南から、人の位置に柱がある)



平場1掘立柱建物完掘状況 (北東から、人の脇に柱がある)



切岸 SX01 西半部検出状況 (南から)



切岸東半部半部検出状況 (西から)

写真図版 12 00 B区遺構写真 (3)



横堀 SD01 下方東半部検出状況 (東から)



横堀 SD01 西半部礫出土状況 (西から)



切岸西半部作業風景 (西から)



横堀 SD01 西端土層断面 (南から)



横堀 SD01 西端完掘状況 (北から)



横堀 SD01 西半部完掘状況 (北東、平場 1 から)



横堀 SD01 西端完掘状況 (東、平場 1 から)



平場 1 西半部土層断面 (南から)

写真図版 13 00 B区遺構写真 (4)



平場 1 ～横堀 SD01 完掘状況 (南から)



平場 1 ～横堀 SD01 東半部完掘状況 (西から)

写真図版 14 00 B区遺構写真 (5)



横堀 SD01A ライン土層断面 (西から)



横堀 SD01 下方傾斜面土層断面 (西から)

写真図版 15 01 A区遺構写真 (1)



横堀 SD10 完掘状況 (北から)



平場2 および飯盛山城遠景 (北から)



平場3 下方の切岸 (南から)



横堀 SD01 西半部完掘状況 (西から)



横堀 SD10 西方トレンチ (南から)

写真図版 16 01 A区遺構写真 (2)



平場2下方切岸検出状況 (南から)



平場3下方切岸土層Cライン断面 (西から)

写真図版 17 01 A区遺構写真 (3)



横堀 SD10 土層断面 (西から)



竪穴状施設 SX01 遺物出土状況 (西から)

写真図版 18 01 A区遺構写真 (4)



平場1 西方斜面 (南から)



竪穴状施設 SX02・03 完掘状況 (南から)



横堀 SD07 東半部完掘状況 (北から)



横堀 SD07 西半部完掘状況 (北から)



柵 SA01 (東から)



平場2 東半部完掘状況 (北から)



平場2 遺構完掘状況 (南西から)



平場2 土層Eライン東半部断面 (南から)

写真図版 19 01 A区遺構写真 (5)



平場3下方切岸検出状況（南西から）



平場3下方切岸西半部とその傾斜（西から）

写真図版 20 01 A区遺構写真 (6)



平場3下方斜面表土除去作業風景 (南西から)



平場2西方斜面礫・石臼出土状況 (南から)



平場2下方切岸西半部 (南から)



平場2下方切岸東半部 (南から)



竪穴状施設 SX02・03 確認状況 (西から)



竪穴状施設 SX02・03 完掘状況 (西から)



竪穴状施設 SX02・03 礫出土状況 (北西から)



竪穴状施設 SX02・03 遺物出土状況 (北東から)

写真図版 21 01 B区遺構写真 (1)



平場 1 竪穴状施設 SX02・08 完掘状況全景 (北から)



竪穴状施設 SX02 完掘状況 (北西から)

写真図版 22 01 B区遺構写真 (2)



竪穴状施設 SX05 (北西から)



竪穴状施設 SX06 (北東から)

写真図版 23 01 B区遺構写真 (3)



平場1・2建物ほか（北東から）



平場3・4 竪穴状施設・建物完掘状況（北から）

写真図版 24 01 B区遺構写真 (4)



平場3・4全景 (西から)



平場3・4全景 (北西から)

写真図版 25 01 B区遺構写真 (5)



竪穴状施設 SX05 完掘状況 (南西から)



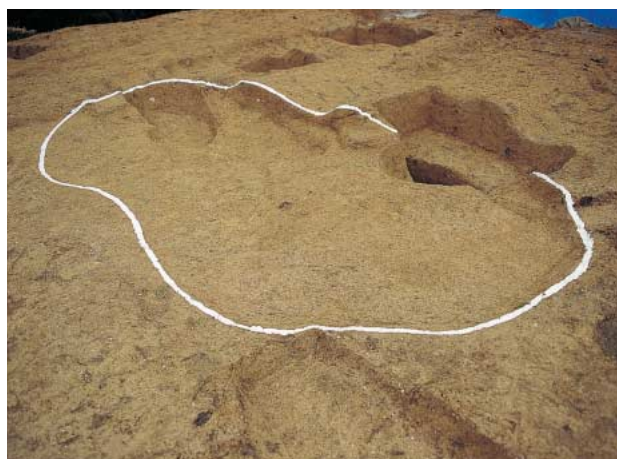
竪穴状施設 SX06 完掘状況 (西から)



竪穴状施設 SX06 遺物出土状況 (東から)



竪穴状施設 SX02 完掘状況 (南から)



竪穴状施設 SX08 完掘状況 (南東から)



平場4通路 SX01 完掘状況 (北から)



土坑 SK01 土層断面 (南から)



土坑 SK01 完掘状況 (南から)

写真図版 26 01 B区遺構写真 (6)



I 期通路 SX03 土層 H ライン断面 (平場 3 地点、西から)



平場 4 通路土層断面 (東から)

写真図版 27 01 B区遺構写真 (7)



堀切 SD01 土層 A ライン断面 (東から)



堀切 SD01 土層 A ライン断面 (東から)

写真図版 28 01 B区遺構写真 (8)



肥溜 SK157 埋甕出土状況 (北西から)



肥溜 SK156 (右)・157 (左) (西から)



肥溜 SK156 土層断面 (南東から)



肥溜 SK156 埋甕・肥桶出土状況 (南東から)



肥溜 SK156 肥桶埋設状況 (南東から)



肥溜 SK156 完掘状況 (南西から)



肥溜 SK167 埋甕出土状況 (南から)



肥溜 SK168 完掘状況 (南から)

写真図版 29 01 B区遺構写真 (9)



堀切 SD01 と土橋および通路（北から）



堀切 SD01 とⅠ期通路上半部完掘状況（北から）

写真図版 30 01 B区遺構写真 (10)



平場群東側切岸および土層Eライン断面（南から）



横堀 SD08 完掘状況および土層断面（南から）

写真図版 31 01 B区遺構写真 (11)



I 期通路 SX03 土層 B ライン断面 (南西から)



I 期通路 SX03 出入口関連部分完掘状況 (北西から)

写真図版 32 01 B区遺構写真 (12)



溝 SD10 完掘状況 (南東から)



溝 SD10 完掘状況 (南西から)



溝 SD10 完掘状況 (南から)



溝 SD10 土層断面 (南西から)



横堀 SD09 東端土層断面 (西から)

写真図版 33 01 B区遺構写真 (13)



横堀 SD09 と縦堀 SD11 交差部土層 J ライン断面 (南東から)



横堀 SD09 と縦堀 SD11 交差部遺物出土状況 (東から)

写真図版 34 01 B区遺構写真 (14)



横堀 SD09 西半部完掘状況 (東から)



横堀 SD09 東半部完掘状況 (北西から)

写真図版 35 01 B区遺構写真 (15)



横堀 SD09・縦堀 SD11 交差部完掘状況 (西から)



横堀 SD09 完掘状況 (西から)



横堀 SD09 西半部完掘状況 (東から)



横堀 SD09 完掘状況 (西から)



縦堀 SD11 土層断面 (北から)



横堀 SD09・縦堀 SD12・13 交差部完掘状況 (北西から)

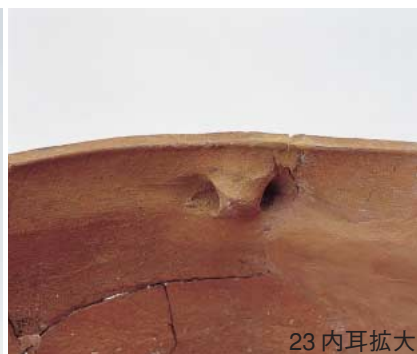


横堀 SD09 西端部完掘状況 (東から)



横堀 SD09 中央部完掘状況 (西から)

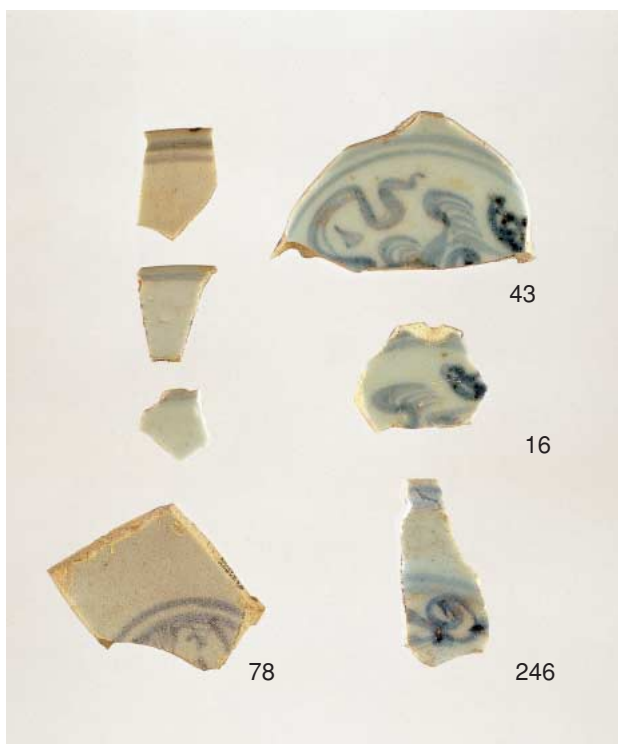
写真図版 36 遺物写真 1



写真図版 37 遺物写真 2



写真図版 38 遺物写真 3



写真図版 39 遺物写真 4



抄 録

ふりがな	しろやまじょうあと
書名	城山城跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第122集
編集者名	永井邦仁、宮腰健司、鈴木正貴、蔭山誠一、山形秀樹、平塚賢二郎
編集機関	愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田野方 8 0 2 - 2 4 TEL 0567-67-4161
発行年月日	西暦 2 0 0 5 年 8 月 3 1 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
しろやまじょうあと 城山城跡	あいちけん とよたし あ 愛知県豊田市足 すけちよひろやま ひきじん 助町城山・引陣	23211	67110	35度	137度	1999.7.7	4,400	国道153号足助 バイパス
				8分	19分	）		
				17秒	20秒	2002.3.27		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
	集落	平安時代	なし	須恵器・土師器	平安時代前～中期の集落
城山城跡	城郭	戦国時代	堀割状通路、堀切、横堀、平場、切岸、 竪穴状施設、掘立柱建物、礎石建物など	瀬戸美濃産陶器、中国産青磁・白磁、土師器、石製品、金属製品、鍛冶遺物など	戦国時代の山城縁辺部の防御施設
		明治～昭和時代	野壺	常滑産赤甕、ガラス製品、瀬戸美濃産陶器	19世紀後半～20世紀前半の耕作地

文書番号	発掘届出（11埋セ第109号・1999.5.14、12埋セ135-1号・2000.9.22、13埋セ76-1号・2001.8.28）
	通知（11教文第61-18号・1999.6.3、12教生216-29号・2000.10.18、13教生36-9号・2001.9.4）
	終了届・保管証・発見届（11埋セ第163・164号・1999.8.20、12埋セ228号・2001.3.30、13埋セ188号・2002.4.4）
	鑑査結果通知（11教文第61-18号・1999.10.28、12教生216-29号・2001.5.28、13教生36-9・2002.6.3）

要約	これまで縄張図以外の情報が全くなかった城山城跡について、その範囲を中心に新知見を得た。山城の範囲は考えられていたよりやや広く標高185m前後に外郭防御ラインが設定されていたことが判明した。また山城の築城時期は、主郭部分は不明であるが、出土遺物から古瀬戸末期を遡る可能性が高い。01B区では主郭へ上る堀割状通路の時期、それを埋めて平場を造成した時期に大別される。後者は大窯2期と判断され、横堀出土遺物から大窯4期には山城機能が停止したとみられる。山城廃絶後は明治時代に耕作地化が進み、多数の野壺が埋設される。加えて平安時代の須恵器は当該期に集落が斜面地に営まれた可能性を示している。
----	--

報告書抄録

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第122集

城山城跡

2005年8月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社